岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第479集

大西（おおにし）遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（八重畑地区）関連調査

2006

岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第479集
大西遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤	正
3	14	C-Ⅲ層と地山との間の漸移層か	C-Ⅲ層と地山(**C-Ⅴ層**)との間の漸移層か
60	9	附加**状**縄文	附加**条**縄文
98	第44図	A側空断面の底面から壁面にかけての線が途中で切れている	線をつなげる
117	16	いくつの傾向	いくつ**か**の傾向

大西遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（八重畑地区）関連調査

大西遺跡　全景（南上空から・矢印が調査地点）

A区・B区　全景（左が北）

C区　全景（上が北）

B・C区境界付近における土層堆積状況（北西から）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業八重畑地区に関連して平成16年度に発掘調査された石鳥谷町大西遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代の陥し穴状遺構や土坑、弥生時代の遺物包含層、平安時代の竪穴住居跡が見つかったことから、当時の狩猟の場及び集落の一部という、時期及び性格の複合した遺跡であることが明らかになりました。本県の北上川左岸流域における調査例は近年増加しており、新知見も多く発表されてきておりますが、今回の調査においても地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室、石鳥谷町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年２月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　　言

1　本書は岩手県稗貫郡石鳥谷町字八重畑第15地割21-１ほかに所在する大西遺跡の調査成果を収録したものである。

2　岩手県遺跡台帳における本遺跡の登録番号はME06-2345、調査略号はON-04である。

3　本遺跡の発掘調査は、経営体育成基盤整備事業八重畑地区に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

4　野外調査を実施した期間／調査面積／調査担当者は下記のとおりである。

　　平成16年４月９日～８月18日／5,300m²／村上　拓・戸根貴之

5　室内整理の期間／担当者は下記のとおりである。

　　平成16年11月１日～平成17年３月31日／村上　拓・戸根貴之

6　本文の執筆は村上・戸根が分担して行った。執筆は以下のとおりとし、共同で執筆した部分については担当を文末に記した。Ⅰについては花巻地方振興局農林部農村整備室にお願いした。編集は村上と協議のうえ、戸根が担当した。

　　Ⅰ　花巻地方振興局農林部農村整備室

　　Ⅱ　戸根

　　Ⅲ　戸根

　　Ⅳ　１…戸根　２…村上・戸根　３・４…村上　５…戸根

　　Ⅴ　１（１）…村上　（２）・（３）…戸根　２…村上　３…戸根

　　Ⅵ　戸根

7　本書中に示した平面座標値は平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）を用いている。

8　野外調査では、岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室・石鳥谷町教育委員会・花巻市立博物館ならびに遺跡周辺住民の方々より多大なるご協力を得た。

9　各種分析・鑑定・保存処理は下記の方々・機関に委託した。（敬称略）

　　炭化種実同定：パリノ・サーヴェイ株式会社

　　放射性炭素年代測定：（株）加速器分析研究所

　　石質鑑定：花崗岩研究会

　　炭化材同定：阿部利吉（木炭協会）

　　鉄製品保存処理及び蛍光Ｘ線分析：岩手県立博物館

10　人骨・陶磁器については実見のうえ、下記の方から御指導頂いた。（敬称略）

　　人骨の同定：奈良貴史（国際医療福祉大学リハビリテーション学部）

　　灰釉陶器・青磁：井上喜久男、森　達也（愛知県陶磁資料館）

11　野外調査では、以下の方々のご指導・ご協力をいただいた。（五十音順・敬称略）

　　酒井宗孝（花巻市立博物館）、中村良幸（大迫町教育委員会）

12　本遺跡出土遺物及び諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

Ⅰ　調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ　立地と環境 …… 1
1　遺跡の位置と立地 …… 1
2　遺跡周辺の地形 …… 1
3　基本層序 …… 2
4　周辺の遺跡 …… 4
5　過去の調査 …… 4

Ⅲ　野外調査と室内整理 …… 7
1　野外調査 …… 7
（1）調査区 …… 7
（2）調査経過 …… 7
（3）グリッドの設定と基準点 …… 9
（4）試掘・表土除去 …… 11
（5）遺構検出・精査 …… 11
（6）遺構の名称 …… 11
（7）実測 …… 12
（8）土層断面の分層と注記 …… 12
（9）写真撮影 …… 12
（10）広報活動 …… 13
2　室内整理 …… 13
（1）作業手順 …… 13
（2）遺構 …… 13
（3）遺物 …… 13

Ⅳ　検出遺構と出土遺物 …… 15
1　調査の概要 …… 15
2　A区 …… 19
（1）竪穴住居跡 …… 19
（2）土坑 …… 27
（3）方形周溝 …… 28
（4）溝跡 …… 30
（5）遺構外出土遺物 …… 30
3　B区上位面の調査 …… 53
（1）竪穴住居跡 …… 53
（2）土坑 …… 53
（3）溝跡 …… 54
（4）遺構外出土遺物 …… 57
4　B区下位面の調査 …… 57
（1）調査範囲の設定と調査方法 …… 57
（2）弥生時代後期の遺物分布域 …… 57
（3）出土遺物 …… 60
5　C区 …… 69
（1）土坑 …… 69
（2）陥し穴状遺構 …… 75
（3）その他の遺構 …… 86
（4）遺構外出土遺物 …… 87

Ⅴ　考察 …… 113
1　A区 …… 113
（1）遺構について …… 113
（2）灰釉陶器について …… 114
（3）鉄製品について …… 114
2　B区 …… 115
（1）下位面出土の弥生土器について …… 115
（2）弥生時代後期土器に伴う石器について 116
3　C区 …… 117
（1）陥し穴状遺構について …… 117
（2）亀形土製品について …… 119

Ⅵ　まとめ …… 121

引用・参照文献 …… 122
附編 …… 123
1　大西遺跡の炭化種実同定 …… 123
2　大西遺跡出土土器および小刀残存赤色系色材料の自然科学的調査結果 126
3　放射性炭素年代測定の結果 …… 129
抄録 …… 179

表　目　次

第１表　各区における土層堆積と時期の関係 ････ 2
第２表　大西遺跡周辺の遺跡一覧 ･････････････ 5
第３表　基準点・補点一覧 ･････････････････ 11
第４表　A区　出土土器一覧 ･････････････････ 50
第５表　A区　出土鉄製品一覧 ･･････････････ 51
第６表　A区　住居跡５出土棒状礫一覧 ･････････ 52
第７表　B区　出土土器一覧 ･････････････････ 67
第８表　B区　出土石器一覧 ･････････････････ 67
第９表　B区下位面　出土遺物グリッド別重量分布　68
第10表　C区　陥し穴状遺構一覧 ･･･････････････ 88
第11～12表　C区　出土土器観察表（１）～（２）109～110
第13表　C区　出土陶磁器観察表 ･･･････････････ 110
第14表　C区　出土石器・礫観察表 ･･････････････ 111
第15表　C区　出土石製品観察表 ･･･････････････ 112
第16表　C区　出土土製品観察表 ･･･････････････ 112

図 版 目 次

第１図　遺跡位置図 ･･････････････････････ 1
第２図　大西遺跡における基本層序 ･････････････ 3
第３図　調査遺跡周辺の地形と遺跡分布 ･････････ 6
第４図　調査区・大グリッド配置・ほ場整備工事計画　8
第５図　各区小グリッド配置図 ･･････････････ 10
第６図　A区・B区　遺構配置図 ･･････････････ 17
第７図　C区　遺構配置図 ･･････････････････ 18
第８～17図　A区　住居跡１～６ ･････････････ 31～40
第18図　A区　土坑 ･･････････････････････ 41
第19図　A区　方形周溝 ･･････････････････ 42
第20図　A区　溝跡１ ･････････････････････ 43
第21～23図　A区　出土土器（１）～（３）･････ 44～46
第24～26図　A区　出土鉄製品（１）～（３）･･･ 47～49
第27図　B区上位面　住居跡・土坑 ･･････････････ 55
第28図　B区上位面　検出遺構・出土遺物 ･･････ 56
第29図　B区下位面　遺物出土状況図 ･･････････ 58
第30図　B区下位面　出土土器 ･･････････････ 62
第31～34図　B区下位面　出土石器（１）～（４）63～66
第35～38図　C区　土坑（１）～（４）･････････ 89～92
第39～48図　C区　陥し穴状遺構（１）～(10) 93～102
第49図　C区　陥し穴状遺構（11）・
　　住居状遺構（１）･････････････････ 103
第50図　C区　住居状遺構（２）・掘立柱建物跡　104
第51～52図　C区　出土土器（１）～（２）･･･ 105～106
第53図　C区　出土石器（１）･･････････････････ 107
第54図　C区　出土石器（２）、石製品、土製品･･ 108
第55図　大西遺跡B区出土弥生土器の地文 ･･････ 116
第56図　陥し穴状遺構の形態分類模式図 ･･････ 119

写真図版目次

写真図版１～２　空中写真（１）～（２）････133～134
写真図版３～４　調査着手時の状況（1）～（2）135～136
写真図版５　基本層序 ･･････････････････････ 137
写真図版６～10　A区　住居跡１～６ ･･････ 138～142
写真図版11　A区　土坑 ･･････････････････ 143
写真図版12　A区　方形周溝 ･･････････････ 144
写真図版13　A区　溝跡 ･･････････････････ 145
写真図版14～15　A区　出土土器（１）～（２）146～147
写真図版16～17　A区　出土鉄製品（1）～（2）148～149
写真図版18　A区　出土鉄製品（３）・
　　住居跡５出土棒状礫 ･･････････････ 150
写真図版19　B区上位面　住居跡１ ･･････････ 151
写真図版20　B区上位面　土坑・溝跡 ･･････････ 152
写真図版21　B区上位面　全景・下位面（１）････ 153
写真図版22　B区下位面（２）･･････････････ 154
写真図版23　B区上位面　出土遺物・
　　B区下位面　出土土器（１）･･････ 155
写真図版24　B区下位面　出土土器（２）･･････ 156
写真図版25～26　B区下位面　出土石器（1）～（2）157～158
写真図版27～31　C区　土坑（１）～（５）･･･ 159～163
写真図版32～40　C区　陥し穴状遺構（1）～（9）164～172
写真図版41　C区　その他の遺構 ･･････････････ 173
写真図版42　C区　出土土器（１）･･････････････ 174
写真図版43　C区　出土土器（２）、石製品、土製品 175
写真図版44～46　C区　出土石器・礫（1）～（3）176～178

Ⅰ　調査にいたる経過

大西遺跡は、ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）八重畑地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから、発掘調査を実施することになったものである。

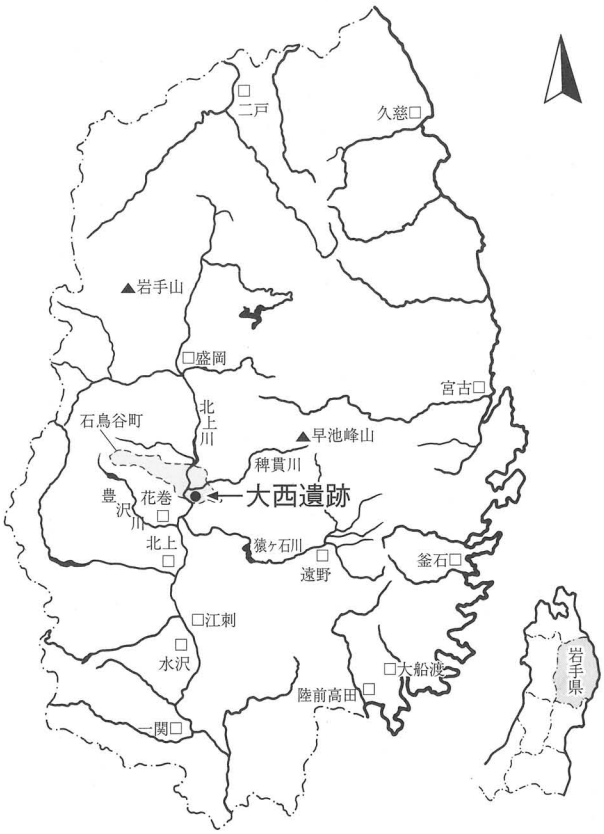
本事業は、石鳥谷町南東部に位置し平成９年度より進められている、区画整理面積369haを行う事業であり、大区画１haを造成し大型機械による低コスト農業を目指すことはもとより、農地流動化を図り担い手農家を育成し、地域全体として高生産性農業と安定経営を目的としている。

（花巻地方振興局農林部農村整備室）

Ⅱ　立 地 と 環 境

１　遺跡の位置と立地（第１・３図）

大西遺跡は岩手県稗貫郡石鳥谷町八重畑に所在する遺跡である。石鳥谷町は、岩手県のほぼ中央部に位置し（第１図）、北は紫波郡紫波町、東は稗貫郡大迫町、南は花巻市・和賀郡東和町、西は岩手郡雫石町の１市４町に接している。東西約49.5km、南北約17.5km、総面積118.57km²を測り、人口約16,300人（平成17年１月末現在）を有する町である。遺跡は、JR東北本線花巻空港駅の東及び花巻空港の北東約２kmのところに位置し（第４図）、南西側は花巻市に接する。北上川左岸の沖積地に形成された段丘状の微高地上に立地する。国土地理院発行の25,000分の１地形図「石鳥谷」NJ-54-13-16-1（盛岡16号-１）の図幅に含まれ、北緯39度26分32秒、東経141度９分付近にあたる。標高は約80～81m、現河道との比高は８～９mを測る。調査開始前の状況は水田及び転作が行われている旧水田である。



第１図　遺跡位置図

２　遺跡周辺の地形

地形的に見ると、遺跡の所在する石鳥谷町付近は東方の北上山地と西方の奥羽山脈に挟まれた北上平野のほぼ中央に位置し、町域の大半は北上川とその支流による沖積面およびこれらの河川によって形成された段丘面で構成されている。町域中央のやや東寄りを緩やかに蛇行しながら南流する北上川は、本遺跡が所在する石鳥谷町八重畑付近で急激に屈曲して東方に流れを変え、石鳥谷町五大堂の添市川

合流点付近に接した後、再び屈曲して南西へと向きを変える。2つの屈曲点の間を東流する北上川のラインは石鳥谷町と花巻市との境界をなしている。

急峻で起伏の大きな奥羽山脈から急勾配で下る河川が合流する北上川右岸においては、段丘は扇状地性の台地として発達している。少なくとも新旧の異なる3段以上に区分され、特に中位・低位の段丘が広面積によく残されている。

一方、北上川の左岸では、北上山地に源流を持つ数本の河川が、山地・丘陵地からの出口付近にやや顕著な段丘を形成しており、特に稗貫川・添市川の両岸にその発達が認められる。こうしたやや大きな河川の出口付近に発達する段丘はそのほとんどが平坦な低位の段丘であり、小規模ながら比較的広範囲に分布する。中位段丘はそのまま河岸段丘面として断片的に分布し、山側では麓屑面などの緩傾斜地となっている場合がある。北上川左岸の段丘は小規模な河岸段丘面として残されたものであり、一般にその発達は不良である。北上川右岸に広く発達する段丘との対称性はあまり認められない。

なお、周辺地形の詳細については、『北上山系開発地域土地分類基本調査　花巻』（岩手県　1976）を参照願いたい。

3　基　本　層　序（第2図、第1表、写真図版5）

野外調査では、遺跡内に堆積する土層の新旧関係及び各層の時期を把握するよう努めた。第2図は大西遺跡の基本層序模式図である。

各区の土層は次のとおりである。

＜A区＞

A-Ⅰa層･･･10YR2/3　黒褐色シルト。草根やや多く含む。（現耕作土）

A-Ⅰb層･･･A-Ⅱ～Ⅵ層土ブロックの混合層。（現水田造成時盛土）

A-Ⅱ層･･･10YR3/3～3/4　暗褐色シルト。（盛土前の旧表土）

A-Ⅲ層･･･10YR3/3　暗褐色シルト。A-Ⅱよりわずかに暗い。A区西端部にのみ残存。（古代遺構埋土主体土）

A-Ⅳa層･･･10YR4/4　褐色シルト。A区西端部にのみ残存。（A-Ⅲ～Ⅳbの漸移層。上面が古代遺構検出面）

第1表　各区における土層堆積と時期の関係

	A区	B区	C区
現表土	A-Ⅰa	B-Ⅰ	C-Ⅰa
盛土	A-Ⅰb		なし
漸移層	なし	なし	C-Ⅰb
旧表土	A-Ⅱ	B-Ⅱ	C-Ⅱ
暗褐色土（平安時代）	A-Ⅲ		削平
漸移層	A-Ⅳa	なし	
黄褐色土（洪水堆積層）	A-Ⅳb	B-Ⅳ	
暗褐色土（弥生時代）	A-Ⅴ	B-Ⅴ	C-Ⅲ
黒褐色土（縄文時代）		B-Ⅵa	
漸移層		B-Ⅵb	C-Ⅳ
黄褐色土・砂礫層（地山構成層）	A-Ⅵ	B-Ⅶ	C-Ⅴ

A-Ⅳb層･･･10YR4/6　褐色～10YR5/6　黄褐色シルト。地点により粘土質または砂質を帯びる。（洪水堆積層）

A-Ⅴ層･･･10YR2/2　黒褐色粘土質シルト。上・下面付近で砂質を帯び明るくなる。上部に縄文土器（主に晩期）を含む。

A-Ⅵ層･･･10YR5/6　黄褐色砂質シルト。締まっている。

＜B区＞

B-Ⅰ層･･･10YR2/3　黒褐色シルト。締まり密。粘性なし。草根やや多い。（現耕作土）

B-Ⅱ層･･･10YR3/3　暗褐色シルト。締まり密。粘性なし。細分されて上部が旧耕作土となる可能性があるが、観察地点では不明である。A区古代遺構の埋土によく似る。

B-Ⅲ層･･･10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや密。粘性なし。褐色細砂を全体に斑状に含み、黄味・砂質強い。炭粒（径５㎜程度）極微量含む。A・C区では見られない層である。

B-Ⅳ層･･･10YR5/6　黄褐色シルト。締まりやや密。粘性ややあり。（洪水堆積層。古代遺構検出面）

B-Ⅴ層･･･10YR2/3　黒褐色粘土質シルト。締まり密。粘性あり。上部に炭粒目立つ。縄文土器片（主に晩期）を希薄に包含する。

B-Ⅵ層･･･10YR2/2　黒褐色粘土質シルト。締まり中。粘性あり。水分多く含み、乾くとクラックが入る。下部に向かって明るくなる。遺物・炭化物は入らない。

＜C区＞

C-Ⅰａ層･･･10YR2/3　黒褐色シルト。締まり弱。粘性なし。（現耕作土）

C-Ⅰｂ層･･･10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性なし。

C-Ⅱ層･･･10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あまりなし。（旧表土）

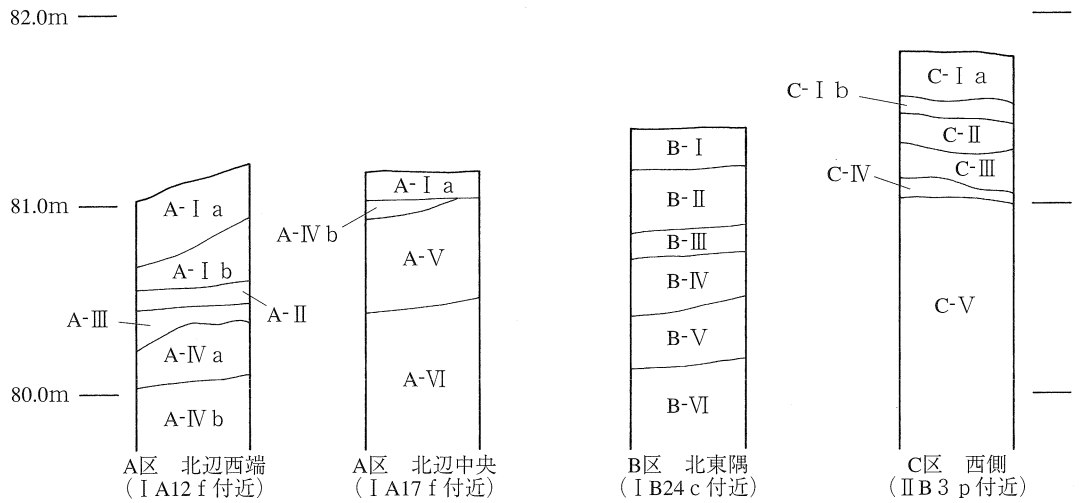
C-Ⅲ層･･･10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。（縄文遺物包含層）

C-Ⅳ層･･･10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。C-Ⅲ層と地山との間の漸移層か。

大西遺跡における基本層序の構成は、黒褐色土（現代の耕作土）、暗褐色土（平安時代）、黄褐色シルト（洪水堆積層）、黒褐色～暗褐色土（縄文～弥生時代）、地山構成層（粘土及び砂礫層）の５つに大きく分けられる。上述の層序を各区に当てはめると、対応は表１のようになる。

なお、B区とC区の境界付近に露出していた断面では、東から西へ下って傾斜する縄文・弥生時代の黒褐色土・暗褐色土の上を洪水で堆積した黄褐色シルトが覆っている様子が観察される（巻頭カラー写真２下）。B区からA区に向かうにつれ、洪水堆積の黄褐色シルトは厚くなる。洪水堆積層の上面には平安時代の遺構確認面が存在することから、弥生時代後期から平安時代までの間に北上川で発生した洪水が大量の土砂を供給し、大西遺跡周辺の原地形を一変させたことがうかがえる。

一方平安時代の暗褐色土及びに洪水堆積層である黄褐色シルトがC区では確認できない。後世の人類の活動によって削平を受けたことにより、確認できなかったものと考えられる。



第２図　大西遺跡における基本層序（S＝１/40）

4　周辺の遺跡（第3図、第2表）

岩手県教育委員会のまとめによると、平成16年３月末現在で、岩手県内には11,786ヶ所の遺跡が確認されている。そのうち、石鳥谷町内には、188ヶ所の遺跡が、また、大西遺跡の所在する八重畑地区に隣接する花巻市では、310ヶ所の遺跡が登録されている。大西遺跡周辺を概観すると、縄文時代・古代ともに北上川左岸に沿った段丘上や北上川に注ぐ各支流の両岸に迫る丘陵上にまとまった分布が認められる。大西遺跡周辺の主な遺跡の位置及び一覧表が第２表、第３図である。

なお、大西遺跡の所属する主な時期が縄文時代及び平安時代であることから、今回掲載したものは縄文時代・古代が関係する遺跡のみに限定している。

このうち、大明神遺跡（遺跡番号24）では、昭和49年に東北新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、弥生時代の遺物包含層及び平安時代の竪穴住居跡などが見つかっている。

大明神遺跡の南に隣接する貝の淵Ⅰ遺跡（遺跡番号27）では、平成14年に一般国道456号地域活性化支援道路整備事業に伴う発掘調査が行われ、縄文時代の陥し穴状遺構、平安時代の竪穴住居跡、灰釉陶器の長頸瓶などが出土している。

大西遺跡の南東1.5～３㎞のところに位置する稲荷遺跡（遺跡番号34）、宿遺跡（遺跡番号39）、蛇蜒蛆（じゃのめり）遺跡（遺跡番号40）、高畑遺跡（遺跡番号41）の発掘調査は、八重畑地区のほ場整備に伴う一連の調査であり、平成13～14年にかけて実施されている。

稲荷、宿の両遺跡では平安時代の竪穴住居跡が、高畑遺跡では縄文時代前期～中期の竪穴住居跡が見つかっており、それぞれ当該期の集落跡と考えられる。また、宿遺跡は、中世稗貫氏の執権であった八重幡氏の居館である宿館の東隣に位置しており、その関係においても注目される。

蛇蜒蛆（じゃのめり）遺跡では非黒色処理系土師器が多く見つかっている。これらは11世紀代のものかと推定されており、岩手県内では数少ない11世紀代にかかる調査例の１つである。

大西遺跡の対岸に位置し、官衙・駅家の可能性を指摘されている方八丁遺跡（遺跡番号44）では、今までに４度の調査が行われており、平安時代の堀跡や集落跡が見つかっている。

5　過去の調査

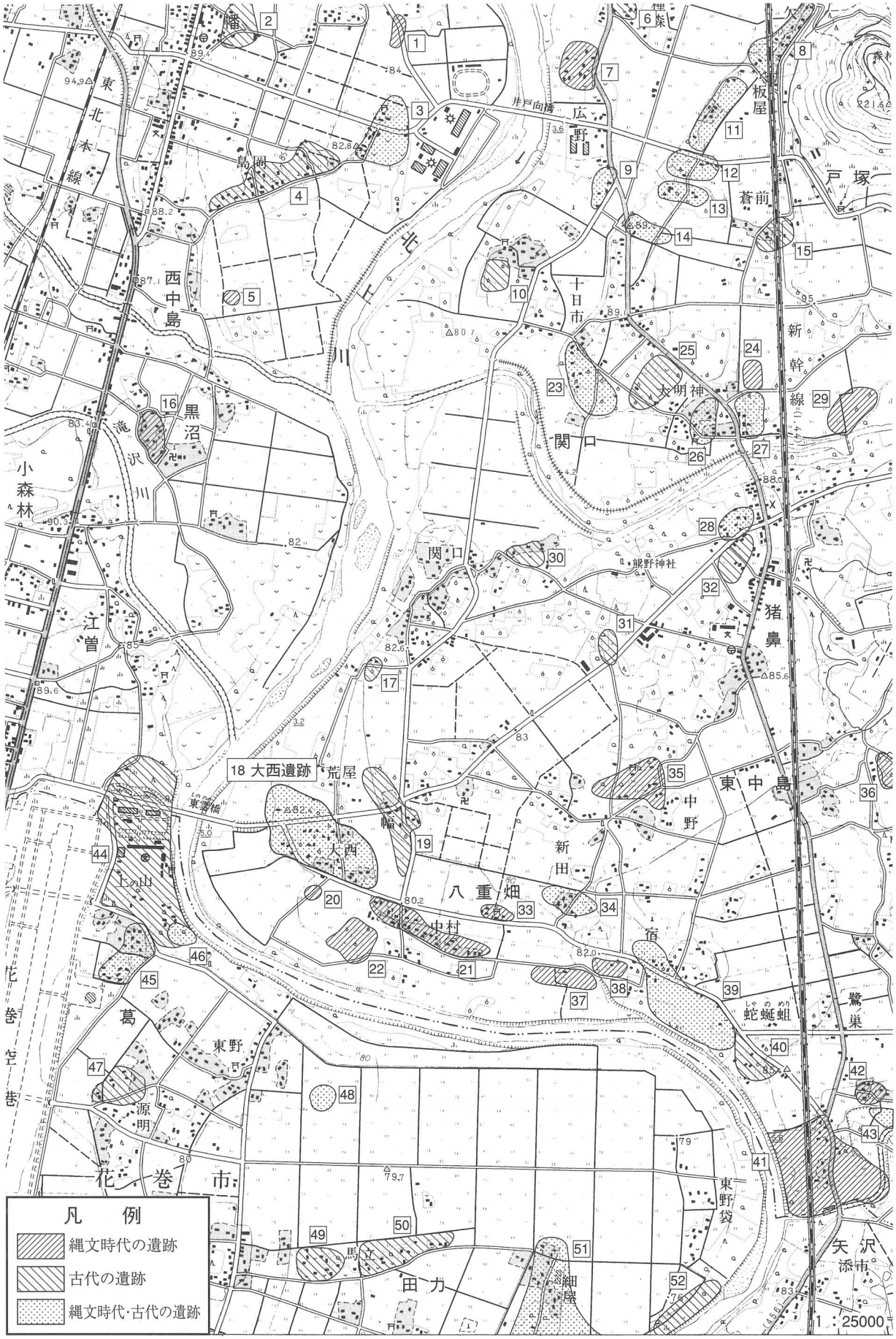
大西遺跡では、岩手県教育委員会が平成12年に、花巻空港整備事業に伴い、県道羽黒堂二枚橋線、県道八重畑小山田線の交差点周辺の470㎡を対象として、緊急発掘調査を実施している。今回の調査におけるC区の南で時期不明の土坑１基を確認し、縄文土器、土師器が出土した。

この調査の成果は、平成13年に『岩手県文化財調査報告書第112集　岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成12年度）』として、刊行されている。

第２表　大西遺跡周辺の遺跡一覧

No.	市町村名	遺跡名	よみがな	種別	時代	所在地	調査歴･備考
1	石鳥谷町	島岡Ⅲ	しまおかⅢ	散布地	縄文	字八幡	
2	石鳥谷町	番屋	ばんや	散布地	古代	字八幡	
3	石鳥谷町	島岡Ⅰ	しまおかⅠ	散布地	縄文・古代	字八幡	
4	石鳥谷町	島岡Ⅱ	しまおかⅡ	集落跡	古代	字八幡	H13県埋
5	石鳥谷町	西中島	にしなかしま	散布地	縄文	字八幡	
6	石鳥谷町	種森	たねもり	散布地	平安	字新堀	
7	石鳥谷町	広野	ひろの	散布地	縄文	字新堀	
8	石鳥谷町	幅	はば	散布地	縄文・平安	字新堀	S49県教
9	石鳥谷町	百目木	どうめき	散布地	縄文・平安	字新堀	
10	石鳥谷町	上十日市	かみとおかいち	散布地	平安	字関口	
11	石鳥谷町	幅欠	はばかけ	散布地	縄文・平安	字戸塚	
12	石鳥谷町	野沢川Ⅰ	のざわがわⅠ	散布地	縄文・平安	字新堀	
13	石鳥谷町	野沢川Ⅱ	のざわがわⅡ	散布地	縄文・平安	字戸塚	
14	石鳥谷町	上野々	うえのの	散布地	縄文・平安	字新堀	
15	石鳥谷町	大曲	おおまがり	集落跡	平安	字戸塚	S49県教
16	石鳥谷町	江曽	えそ	散布地	縄文	字江曽	
17	石鳥谷町	関口	せきぐち	散布地	古代	字関口	
18	**石鳥谷町**	**大西**	**おおにし**	**集落跡**	**縄文･弥生･平安**	**字八重畑**	**H12県教**
19	石鳥谷町	荒野	あらの	散布地	古代	字八重畑	
20	石鳥谷町	大西Ⅱ	おおにしⅡ	散布地	縄文	字八重畑	
21	石鳥谷町	馬場田Ⅱ	ばばたⅡ	散布地	縄文	字八重畑	
22	石鳥谷町	中村	なかむら	散布地	縄文	字八重畑	
23	石鳥谷町	塚の森Ⅰ	つかのもりⅠ	散布地	縄文・平安	字関口	
24	石鳥谷町	大明神	だいみょうじん	集落跡	縄文、弥生、平安	字関口	S49県教
25	石鳥谷町	塚の森Ⅱ	つかのもりⅡ	散布地	平安	字関口	
26	石鳥谷町	七ツ森	ななつもり	散布地	縄文・古代	字関口	
27	石鳥谷町	貝の淵Ⅰ	かいのふちⅠ	集落跡	縄文・平安	字関口	H14県埋
28	石鳥谷町	猪鼻	いのはな	散布地	縄文・古代	字関口	
29	石鳥谷町	貝の淵Ⅱ	かいのふちⅡ	散布地	縄文	字八重畑	
30	石鳥谷町	下館Ⅱ	しもだてⅡ	散布地	古代	字関口	
31	石鳥谷町	関口	せきぐち	散布地	古代	字八重畑	
32	石鳥谷町	猪鼻Ⅱ	いのはなⅡ	散布地	古代	字八重畑	
33	石鳥谷町	馬場田	ばばた	散布地	縄文	字八重畑	
34	石鳥谷町	稲荷	いなり	集落跡	縄文･平安	字八重畑	H13県埋
35	石鳥谷町	新田	しんでん	散布地	縄文	字八重畑	
36	石鳥谷町	反町	そりまち	古墳群・祭祀跡	縄文・古墳	字八重畑	
37	石鳥谷町	大西橋Ⅱ	おおにしばしⅡ	散布地	縄文	字八重畑	
38	石鳥谷町	大西橋	おおにしばし	散布地	縄文	字八重畑	
39	石鳥谷町	宿	しゅく	集落跡	縄文・古代･中世	字八重畑	H14、H16県埋
40	石鳥谷町	蛇蜒蛆	じゃのめり	散布地	平安	字五大堂	H16県埋
41	石鳥谷町	高畑	たかばたけ	集落跡	縄文･中世	字五大堂	S49県教。H14県埋
42	石鳥谷町	安堵屋敷Ⅱ	あんどやしきⅡ	散布地	縄文	字五大堂	
43	石鳥谷町	安堵屋敷	あんどやしき	集落跡	縄文・古代	字五大堂	S55県埋
44	花巻市	方八丁	ほうはっちょう	城館跡	平安	葛第1地割	S31,S41岩大。S42県教。H13県埋。H15花教。旧宮野目方八丁。
45	花巻市	上ノ山	うえのやま	散布地	縄文・古代	葛第2地割	
46	花巻市	上ノ山館	うえのやまだて	城館跡・散布地	縄文・古代～中世	葛第1地割	
47	花巻市	源明Ⅰ	げんめいⅠ	散布地	平安	葛第6地割	
48	花巻市	葛	くず	散布地	縄文・古代	葛第13地割	
49	花巻市	馬立Ⅰ	まだてⅠ	集落跡	古代	田力第4地割	H8県教
50	花巻市	馬立Ⅱ	まだてⅡ	散布地	古代	葛第11地割	
51	花巻市	庫理	くり	集落跡	縄文・古代	田力第７地割	H8県教。H9県埋。H10花教。
52	花巻市	東野袋	とのふくろ	散布地	古代	田力第8地割	

※調査歴の略号　S･･･昭和　H・・・平成　県埋･･･岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　県教・・・岩手県教育委員会
花教・・・花巻市教育委員会　岩大･･･岩手大学学芸学部　(2004年３月刊行の岩手県遺跡基本図を一部加筆･修正)



第3図　調査遺跡周辺の地形と遺跡分布

Ⅲ　野外調査と室内整理

1　野　外　調　査

（1）調　査　区（第４図①）

大西遺跡は、北西から南東に向かって長軸が延びた不整楕円形状の形をした範囲をもつ遺跡である。長軸660m、短軸340m、面積にして約14万㎡に及ぶ広大なものである。今回の調査では、経営体育成基盤整備事業によって削平を受ける範囲のうち、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による試掘調査の結果から本調査を要すると判断された3,800㎡が当初対象となった。県道羽黒堂・二枚橋線及び県道八重畑・小山田線の交差点の北側がこれに当たる。調査前の現況は、水田及び転作が行われている旧水田である。ほ場整備に伴う土の盛り切りの関係で、調査区は３地点に分かれていることから、北西から南東に向かってA区・B区・C区とした。

（2）調　査　経　過（第４図②）

今回の発掘調査は、平成16年１月16日付け教生第1667号文書に基づいて、期間は平成16年４月９日（金）から８月18日（水）までの予定で開始した。その後、調査の進展に伴う指導や協議等により、最終的に5,300㎡を調査対象とすることとなった（面積については試掘調査のみの部分を除く）。

指導・協議及び面積変更の経過については下記のとおりである。

なお、田面標高や構造物の位置により、精査を実施した部分、確認調査にとどめた部分があるため、当該区域における工事計画図も付した（第４図②）。

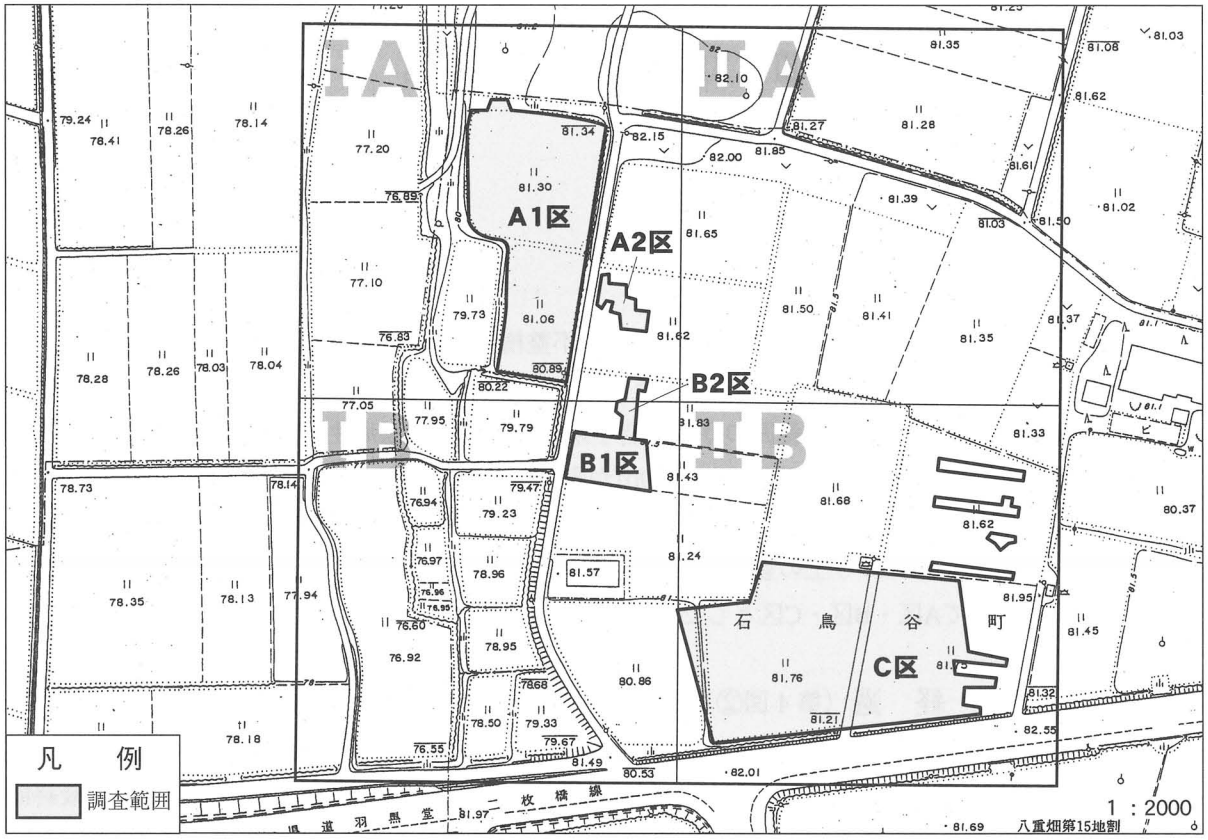
A区（当初予定面積1,920㎡、最終調査面積2,070㎡）

調査開始直後の４月14日に平安時代の遺構面の下に縄文時代の遺構面の存在が判明した。この結果を踏まえて、生涯学習文化課より「切土による掘削が及ばない範囲については調査不要」との指導を受けた。A区の縄文時代遺構面は標高80m以下にあるが、工事計画標高が81.0mであり、保護層分となる20㎝を差し引いた標高80.8mよりも遺構確認面が低いため、平安時代遺構面のみの調査となった。

７月に入り、A区で確認された溝跡が当初調査区の東側に延びることが判明した。このため、７月13日の部分終了確認の際に取り扱いが協議され、翌14日に溝跡を追跡するための試掘調査を実施したところ、溝跡の延長が確認された。その結果を踏まえて、生涯学習文化課より「溝跡が確認された部分について、田面部分は本調査、道路部分は確認調査とする」旨の指導を受けた。これにより、当初面積より150㎡対象面積が増え2,070㎡の調査となった。本文では当初調査区をＡ１区、追加になった調査区をＡ２区とした。

B区（当初対象面積310㎡、最終調査面積380㎡）

A区と同様に、調査開始直後の４月14日に平安時代の遺構面の下に縄文時代の遺構面の存在が判明した。この結果を踏まえて、生涯学習文化課より「切土による掘削が及ばない範囲については調査不要」との指導を受けた。B区の縄文時代遺構面は80.3m付近にあるが、工事計画標高が80.5mと80.0mの部分がある。保護層分となる20㎝を差し引いた標高80.3m及び79.8mよりも北側は遺構確認面が低いが、南側は高くなってしまうことから、北側部分については平安時代遺構面のみの調査、南側部分については縄文時代遺構面まで調査を行うこととなった。



①調査区・大グリッド配置図

②ほ場整備工事計画・調査経過

第4図　調査区・大グリッド配置・ほ場整備工事計画

７月に入り、B区で確認された溝跡が当初調査区の北側に延びることが判明した。このため、A区で前述した部分終了確認の際に取り扱いが協議され、翌14日に溝跡を追跡するための試掘調査を実施したところ、溝跡の延長が確認された。その結果を踏まえて、生涯学習文化課より「溝跡が確認された部分について、田面部分は本調査、道路部分は確認調査とする」旨の指導を受けた。これにより、当初面積より70㎡対象面積が増え380㎡の調査となった。本文では当初調査区をＢ１区、追加になった調査区をＢ２区とした。

C区（当初対象面積1,570㎡、最終調査面積2,850㎡）

５月６日に陥し穴状遺構13が当初調査区の東端で確認され、遺構が東側隣接水田２面（約2,600㎡）へ広がる可能性が出てきた。これら田面は工事計画標高81.6mよりも現標高が高く、掘削の対象にあたることから、当センターと生涯学習文化課で協議のうえ、６月24日に試掘調査を実施した。対象区域内に７本のトレンチを設定し、Ｔ２、Ｔ５の東端で溝状の陥し穴状遺構を１基ずつ確認した。

地山の標高は、南側田面（Ｔ１～Ｔ４）比べて北側田面（Ｔ５～Ｔ７）が低くなっている。このことは地盤が北に向かうにつれて下がっていることを示している。さらにＴ６で地盤が北に向かって一気に下ってゆく様子が確認された。Ｔ７の表土の下はグライ化しており、湿地状の様相を呈していた。試掘調査で遺物は出土しなかった。

この結果を踏まえ、６月29日に生涯学習文化課・委託者・当センターによる協議を現地で実施した。協議の結果、当該部分の工事計画標高が81.6mのため、保護層の20㎝分を差し引いた81.4mよりも遺構検出標高が高い範囲及び水路部分は本調査を行うこととなった。ただし、水路部分にかかる陥し穴状遺構20、陥し穴状遺構21の西半分は水路から外れることから、確認調査にとどめ、精査は行わないこととなった。調査期間は延長せず、当初予定どおりで行うこととなった。

上述の面積変更については、６月29日および７月13日の現地協議を踏まえ、８月４日付け教生第667号文書として生涯学習文化課から通知があった。

終了確認については、委託者の事業進行の関係で、Ａ１区西端部とC区最東端の水路部分について７月13日に行い、８月５日に調査対象範囲全域の終了確認を受けた。

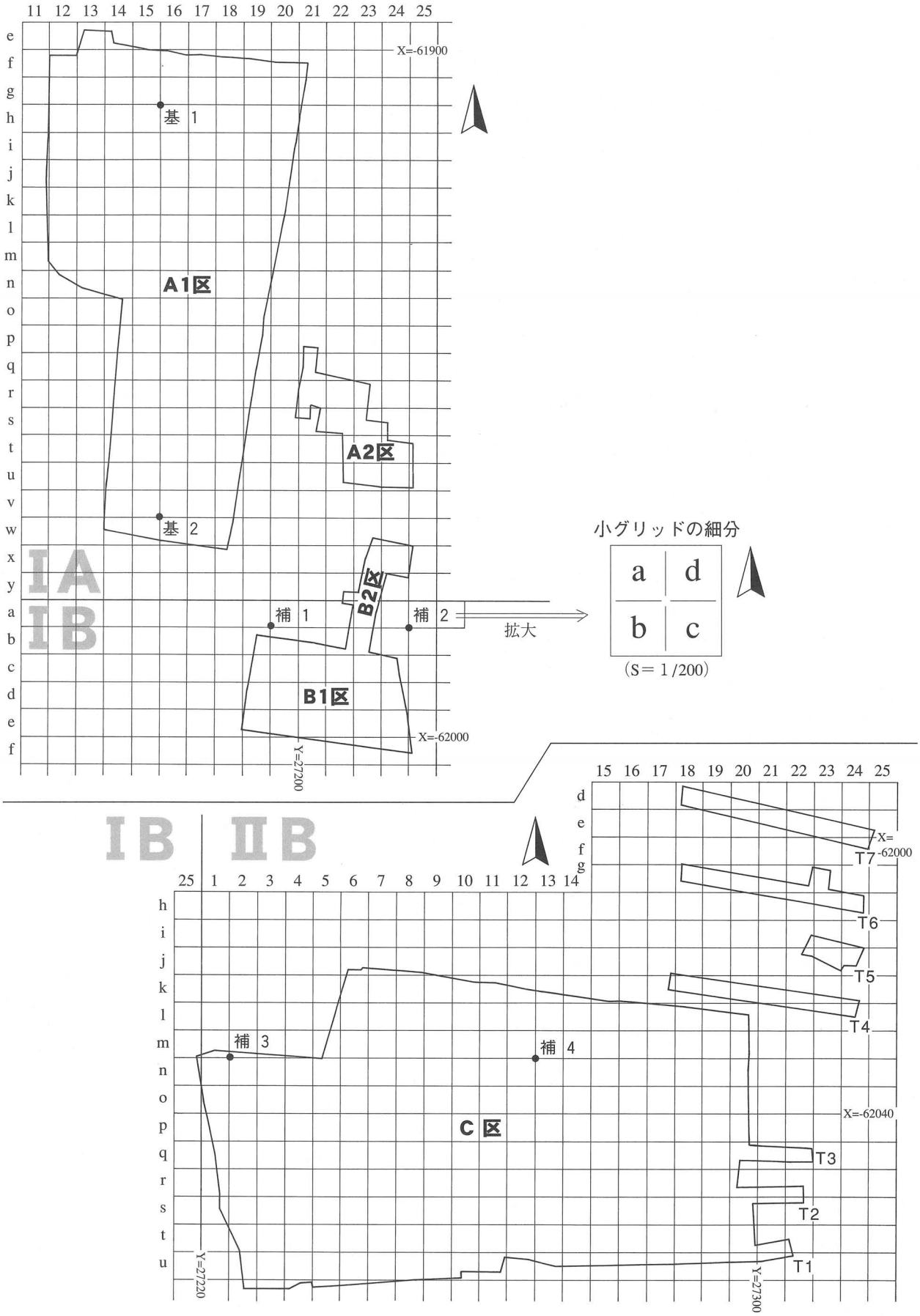
８月18日に野外における全ての調査を終了し、撤収した。

（３）グリッドの設定と基準点（第４図①、第５図、第３表）

検出される各種遺構・遺物の詳細な座標値を記録するため、調査区を覆う碁盤目状のグリッドを設定した。

今回の調査区は広大な遺跡範囲の中に点在している。そのため、各調査区の位置関係を明確に示し、かつ調査区で大グリッドを跨がないように、また、本遺跡範囲において将来同様の調査が行われる際にそのまま用いることができるように配慮して、今回の調査区全域を網羅するグリッドを配置した。

グリッドの設定は、平面直角座標（第X系）【世界測地系】に従い、基準点を２点、補助点を４点設定した。グリッドは、100m四方を単位にして等分した大グリッドを設定する。大グリッドは、X=－61880m、Y=－27120mを基準とする。西から東へⅠ、Ⅱ･･･、北から南へA、B、C･･･とし、数字と英字の組み合わせによって名称を付与する（第４図①）。その後、大グリッドを４m単位で等分し、西から東へ１～25までの名称を、北から南へａ～ｙまでの名称を付与し、小グリッドを設定した。グリッドの基準は北西隅に置くこととする（第５図）。すなわち、基準点のグリッド名称は、ＩＡ１ａとなる。現地では各小グリッドの北西隅に位置する杭にその小グリッドの名称を表記して用いた。本書中のグ



第５図　各区小グリッド配置図（S＝１/800）

リッド表記では、原則として、小グリッドの北西隅に位置する杭を表記している。しかし、遺構平面の位置が小グリッドの杭から著しく離れている場合があるため、この場合、小グリッドの北西隅をａとし、時計の反対周りでｂ、ｃ、ｄとさらに細分し、ⅡB13n-dのように名称を付している場合がある。すなわち北西隅が小グリッド名で対応できる場合は、小グリッドを細分した名称については表記していない。上記のグリッドを実際に調査区に割り付けるため、現地には基準杭とこれを補う区画割付杭を打設した。

第３表　基準点・補点一覧（世界測地系による）

	対応グリッド杭	X	Y	H
基準点１	＜ⅠA16ｈ＞	-61908.000	27180.000	81.220
基準点２	＜ⅠA16ｗ＞	-61968.000	27180.000	80.635
補　点１	＜ⅠB20ｂ＞	-61984.000	27196.000	81.561
補　点２	＜ⅠB25ｂ＞	-61984.000	27216.000	81.497
補　点３	＜ⅡB２ｎ＞	-62032.000	27224.000	80.818
補　点４	＜ⅡB13ｎ＞	-62032.000	27268.000	81.561

基準点測量業務は慶長測量設計（株）に委託した。基準杭及び区画割付杭の第X系座標値（X、Y）と標高値（H）、及び対応するグリッド杭名は第３表のとおりである。

（４）試掘・表土除去

調査は、調査区をA、B、Cの３区に分け、試掘トレンチを設定し、土層の堆積状況を確認後、A、C、B区の順で表土を重機で除去した。岩手県教育委員会が実施した試掘調査の際の深掘りトレンチ等で基本層序の確認を行うとともに、人力による遺構検出を行った。

調査では、まず対象区域に任意のトレンチを設定し、人力掘削によって土層の堆積状況と遺構の存否を把握した。試掘により遺構・遺物が確認されなかった範囲については、これをもって調査終了とし、一方、遺物包含層や遺構が確認された場合は、その上面を面的に広げるように土層を除去した。この際、バックホー・キャリアダンプ等の重機を積極的に用いたが、検出面までの土層が薄い場合や遺物が集中的に出土する場合など、重機の使用が適当でないと判断した区域では、人力による掘削を行った。

（５）遺構検出・精査

表土除去の後、鋤簾（じょれん）・両刃草削り・移植ベラを用いて、遺構検出を行い、必要に応じてスプレー塗料による白線で遺構プランにマーキングを施した。

精査では遺構の規模に応じて２分法・４分法を使い分け、土層断面を観察しながら、埋土を除去した。検出時に遺構の重複が認められた場合、なるべく平面観察で新旧関係を把握するように努め、原則として新期のものから順に埋土の掘削を行った。この場合、両者を縦断する断面を設定し土層の堆積状況からも併せて新旧関係を検討した。また、平面プランの確定や埋土の解釈が困難な場合には、積極的にサブトレンチを活用して、これらの確認に努めた。これにより、完掘段階には平面プランの一部がサブトレンチで壊された状態になったものも多い。出土した遺物は、遺構名やグリッド名及び出土層位を記録して取り上げ、必要に応じて出土状況記録として実測・撮影を行った。

（６）遺構の名称

①野外調査中の仮名称

遺構名は、遺構の種類毎に、次のような記号を定め、数字をつけ、遺構名の前に調査区名を付して仮番号とした。

SK1、SK2、SK3、～　：土坑（陥し穴状遺構を含む）　　SD1、SD2、SD3、～　：溝・堀

SB1、SB2、SB3、～　：掘立柱建物跡　　SI1、SI2、SI3、～　：竪穴住居跡

SX1、SX2、SX3、～　：その他遺構

（例）A-SI1　A区の１号竪穴住居跡

以上の仮名称は、室内整理段階でも作業用遺構名としてそのまま使用した。

②本書中の掲載名称

遺構は掲載にあたって仮名称を変更し、調査区毎に調査区名・遺構種別を冠した１からの連番とした（A区住居跡１、C区土坑１など）。

（7）実　　測

遺構・出土状況等の平面実測は、小グリッドを再細分した１m方眼を基準に実測・作図する「簡易遣り方測量」で行った。縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて、1/10図を作成した。この他、平板・光波トランシットを用いて、トレンチ位置図・遺構配置図・現況地形図等の作成を行った。

断面図は水平に設定した水糸を基準にして実測・作図した。縮尺は1/20を基本とし、細部表現を要する場合には、1/10図も作成した。

（8）土層断面の分層と注記

遺構やトレンチなどの土層断面は慎重に観察し堆積状況を把握するように努めた。分層は堆積過程を表現するのに必要と思われた場合は細部にも配慮したが、薄層が連続的に互層をなす部分や、偶然の結果と思われる混入物の偏りなどは徒に細分せず、有意と思われるまとまりの境界を表現するように努めた。

この分層の根拠を示すため、各層の性状を記録した。土層は主体となる土「主体土」と混入された土（物）「混入土（物）」によって構成されるものと考え、色調・土性・混入物・粘性・締まりの程度等を記載した。また、解釈可能な場合は、その層の持つ性格を想定し付記した。

遺構埋土や捨て場堆積層の「主体土」には、認識可能な場合、その層が堆積した時点で周辺の表土を形成していたと思われる土（埋没開始時点における最新期の土）をあてた。例えば、地山土のブロックが大半を占める遺構の壁の崩落層であっても、当時の表土と思われる黒色土がわずかに含まれている場合は、後者を主体土とし、「地山が大量に混入している状態」と解釈している。主体土と基本土層の対比から、その層の堆積時期を推定することが可能だと考えたからである。

土色の表記は新版標準土色帳（農林水産省農林水産技術会議事務局）に準じたが、調査員が受ける層間の印象の差が土色名の違いとして反映されない場合も多くあった。このため、各層の記録には調査員個人の主観による相対的な層全体の印象（明暗や色味の差）も併記した。例えば、「○層よりも明るい」・「焼土含み全体に赤味」・「炭化物多く黒み強」・「地山含み黄味がかる」等の表現がこれにあたる。また、混入物の量について「極微」・「やや多」等の表記を行っている場合があるが、調査員の主観的基準を土色帳に示されているパーセント表記に置き換えれば、概ね下記のとおりとなる。

極微（１～２％）・微（３～５％）・少（５～10％）・やや多（15～20％）・多（30～50％）・大量（50％以上）

（9）写　真　撮　影

野外調査では、６×７㎝判カメラ（モノクロ）、35㎜判カメラ（カラーリバーサル・モノクロ）、デジタルカメラを用い、各種遺構の全景・土層断面・遺物出土状況等を撮影した。撮影に際しては、撮影状況を記したカードをその都度写し込み、現像後これを元に整理した。なお、一部の遺構ではい

ずれかのカットを省略した場合がある。また、不手際により必要なカットを撮影できなかったものも含まれる。また、これらとは別に、８月７日（土）にセスナ機による遺跡の空中写真撮影を行った。

(10) 広　報　活　動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として、平成16年８月７日に調査成果を公開する現地説明会を開催した（参加者数80名）。また、現場見学については、随時受け付けた。団体では、八重畑小学校６年生の現場見学を２回受け入れている（６月２日27名、７月28日13名）。

2　室　内　整　理

（1）作　業　手　順

出土遺物の洗浄と地点別の仕分け作業、土器を除く各遺物の分類は、野外調査と並行して現地で行った。野外調査終了の後、室内において土器の接合・復元作業を開始し、随時掲載資料の選別・登録を行った。その後写真撮影、実測図作成・拓影作成・トレースの順に作業を進めた。調査員はこれらの作業の統括と並行して図面合成・遺物観察表作成・原稿執筆を行った。

（2）遺　　構

各遺構は必要に応じて第２原図を作成し、これをもとにトレースの後図版を作成した。図中には縮尺を示すスケールを付し、また、方位マークにより座標北を示した。

（3）遺　　物

土器は出土地点・遺構別に分けた後、それぞれの集合の内容を代表させる資料を選抜し、実測等の作業対象資料とした。

石器は、いわゆる定形的な石器に加え、細部加工剥離または微細な剥離をもつ剥片類、及び遺構に伴う石核類に対しては全点に番号を付して登録し、実測等の作業対象資料とした。微細な剥離をもたない剥片類及び焼けた礫類等については番号を付して登録するものの、写真掲載のみとした。

土製品・石製品・陶磁器については、全点実測掲載とした。

全ての遺物には掲載番号・仮番号・出土地点・層位・計測値・その他観察事項等を記載した一覧表を作成した。本来であればあらゆる観察事項を網羅すべきではあるが、実測図から読みとれる属性については、時間的制約から記載を省略したものも多い。また、表中に項目を設けながらも未記入になってしまった部分もある。

実測図の縮尺は、土器・陶磁器1/3、石器・鉄製品・土製品・石製品1/2を原則とし、図版毎にスケールを付した。写真図版は土器・陶磁器・石器・鉄製品・土製品・石製品は実測図と同縮尺を原則としている。写真掲載のみのものがある石器剥片及び礫については、礫は1/3、石器剥片類は1/2を原則とした。ただし、法量の大小等により、原則の縮尺とは異なる場合は、遺物の脇に当該スケールを記している。

図表の表記方法については、次ページの凡例を参照願いたい。

凡　　例

1　本書に記載の遺構実測図に付した方位は平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）による座標北を示す。

2　土層注記は基本土層にローマ数字、遺構埋土にアラビア数字を用いた。

3　表中の法量について、反転実測により算出した推定値については（　）、破片実測のため推定値が出せないものについて、石器・鉄製品は残存値を示した。土器の器高については残存値よりも高くなるという意味合いで不等号を用いた。（3.0<　であれば、3.0cmよりも高いことを示す。）

4　石器・礫類の材質・産地・産出年代については以下の略号を使用した。

KO　頁岩・奥羽山脈産・新生代新第三紀、KK　頁岩・北上山地・古生代、SEK　閃緑岩・北上山地産・中生代白亜紀

AO4　安山岩・奥羽山脈産・新生代第四紀、AO3　安山岩・奥羽山脈産・新生代第三紀、

GZO　玉髄・奥羽山脈産・新生代第三紀、DO　デイサイト・奥羽山脈産・新生代第三紀

HK　ホルンフェルス・北上山地産・古生代堆積岩が中生代白亜紀に変成したもの、

GKO　凝灰岩・奥羽山脈産・新生代新第三紀、SGK　砂岩・北上山地産・古生代

5　挿図中に使用した網掛け、実測図の表現方法は以下のとおりである。

＜遺構＞

焼土　　焼土（強変部）

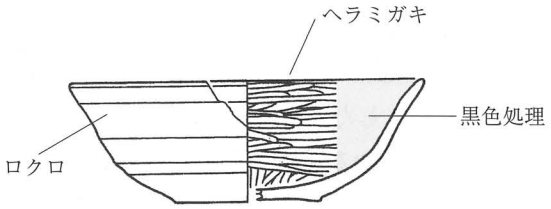
カヤ束状炭化材　　粉末状炭化物

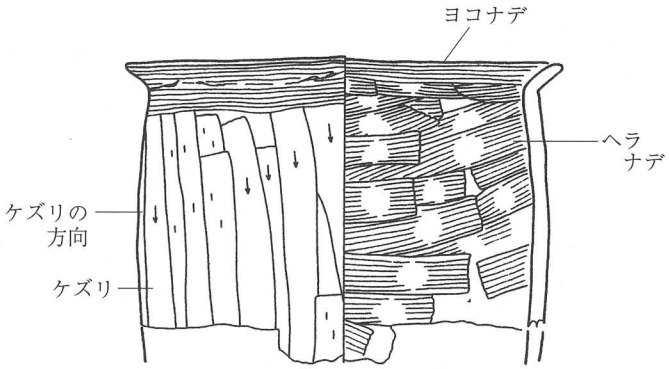
＜遺物＞

敲打痕

赤色塗彩

木質





Ⅳ　検出遺構と出土遺物

1　調査の概要

本遺跡は、面積にして約14万㎡に及び、岩手県遺跡台帳には縄文時代の遺物を包含する遺跡として登録されている。今回調査対象となった３地点（A～C区）は、広大な遺跡範囲のごく一部に過ぎない。しかし、今回の調査では、地点によって地形的環境や主体となる時期、遺構分布状況等に著しい差異があることが明らかになった。

A区（A１区・A２区）　地形は、表土の下に弥生時代～平安時代の間に北上川の氾濫等によって堆積した洪水堆積の黄褐色土があり、この下に縄文時代～弥生時代に堆積した黒褐色～暗褐色土で構成される。遺構の検出面は氾濫等によって堆積した黄褐色土が遺構検出面となる。後述するB区の成果を踏まえると黒褐色～暗褐色土でも遺構・遺物の出る可能性は高いが、ほ場整備の工事計画では掘削が及ばないので調査は行っていない。

遺構としては、平安時代の竪穴住居跡６棟、方形周溝５基、溝跡１条、土坑５基などを検出した。土師器大コンテナ（42×32×30cm）２箱分、鉄製品26点、灰釉陶器片３点などが遺物として出土している。

実測等の登録点数は、土器43点、灰釉陶器片３点、鉄製品26点である。土師器は甕・坏を主体とする。

A区で特記すべき点としては、①当時食器として一般的には土師器と須恵器が使用されていたが、大西遺跡では須恵器が全く見られない一方、現在の愛知県・岐阜県周辺でしか生産されていなかった灰釉陶器が出土していること、②一般的な集落では見られない多くの鉄製品が出土し、これらが出土した住居跡には煮炊きのカマドのほかに炉跡が認められること、③住居跡については、焼失したものが多いこと、④方形周溝は集落があった時期よりも少し後に造られたことが確認されており、居住域から墓域へ土地利用が変化していること、などがあげられる。

B区（B１区・B２区）　地形の構成はA区とほぼ同じである。ただし、B区の調査については、ほ場整備の工事計画により、北半分は洪水堆積による黄褐色土面（上位面）まででとどめ、南半分は洪水堆積による黄褐色土を掘り下げた縄文時代～弥生時代面（下位面）まで掘り下げて調査を行っている。

遺構は、上位面では住居跡１棟、溝跡１条、土坑１基を検出し、下位面では弥生時代後半の遺物包含層を検出している。上位面では土師器小コンテナ（42×32×10cm）0.5箱、下位面では弥生式土器を大コンテナ（42×32×30cm）１箱分、石器類を小コンテナ（42×32×10cm）１箱分が遺物として出土している。なお、この区では、９～10世紀頃の越州窯系の青磁の小碗または小杯が表採されている。

B区で特記すべき点としては、①A区で見つかっている溝とは方向を異にしており、A区の溝とB区の溝は別であること、②弥生式土器が分布する範囲は下位面の中でも若干高まりをもっていることなどがあげられる。

C区　地形の構成がA区・B区とは異なり、弥生時代から平安時代にかけての洪水堆積層が認められない。従って、表土除去によって確認することができる遺構は縄文時代の遺構が中心となる。遺構は洪水堆積に伴う黄褐色シルト堆積前の段丘崖から西へ向かう緩斜面上に多く検出されているが、段丘上の平坦面にも溝状の陥し穴状遺構を主体とする遺構が検出されている。

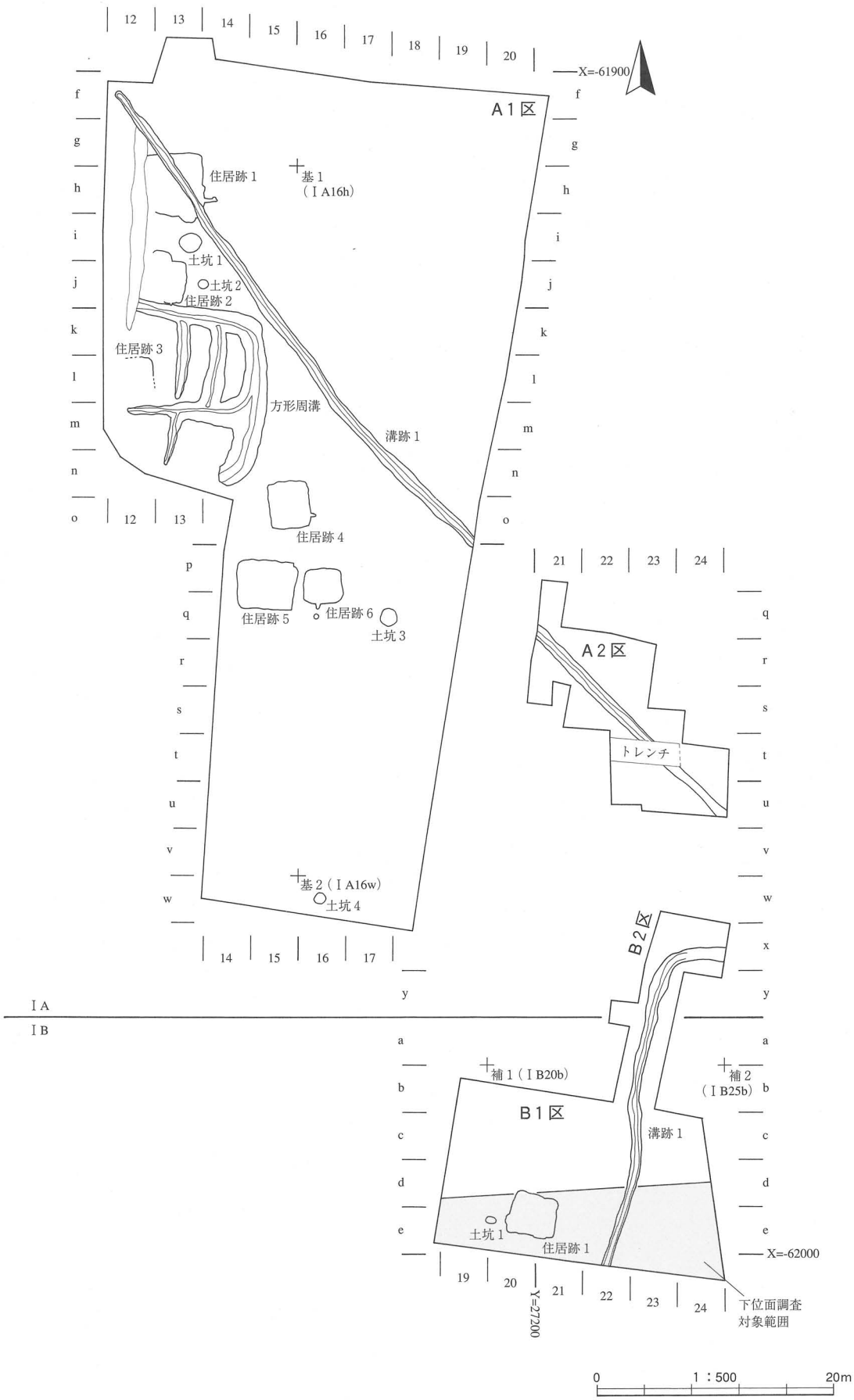
遺構は、土坑16基、陥し穴状遺構32基（内訳：溝状21基、円形状11基）などを検出し、縄文土器コンテナ中コンテナ（42×32×20cm）及び小コンテナ（42×32×10cm）各１箱分、石器類（剥片を含む）小コンテナ（42×32×10cm）0.5箱分、土製品１点、石製品４点、陶器片１点、焼礫などが出土している。実測等の登録点数は土器49点、陶磁器１点、石器・礫類30点（うち図化したもの10点）、土製品１点、石製品４点である。土器・陶磁器は破片のものがほとんどで、復元に至らないものが多い。土器は縄文時代前期及び晩期のものがほとんどである。

C区で特記すべき点としては、①土坑については、出土する遺物から縄文時代晩期中葉（大洞C１～C２式）のものが多く、周辺に集落跡の存在の可能性を示唆すること、②陥し穴状遺構は、円形・溝状の双方が見つかっており、円形が古く、溝状が新しいこと、さらに陥し穴状遺構２と陥し穴状遺構23を土坑１が切っていることから、陥し穴状遺構は縄文時代晩期中葉より古いことが確実であること、③円形の陥し穴状遺構は弥生時代～平安時代までに堆積した洪水堆積層が形成される前の緩斜面上に多く分布するが、溝状の陥し穴状遺構は緩斜面のさらに東側にも分布していること、等があげられる。

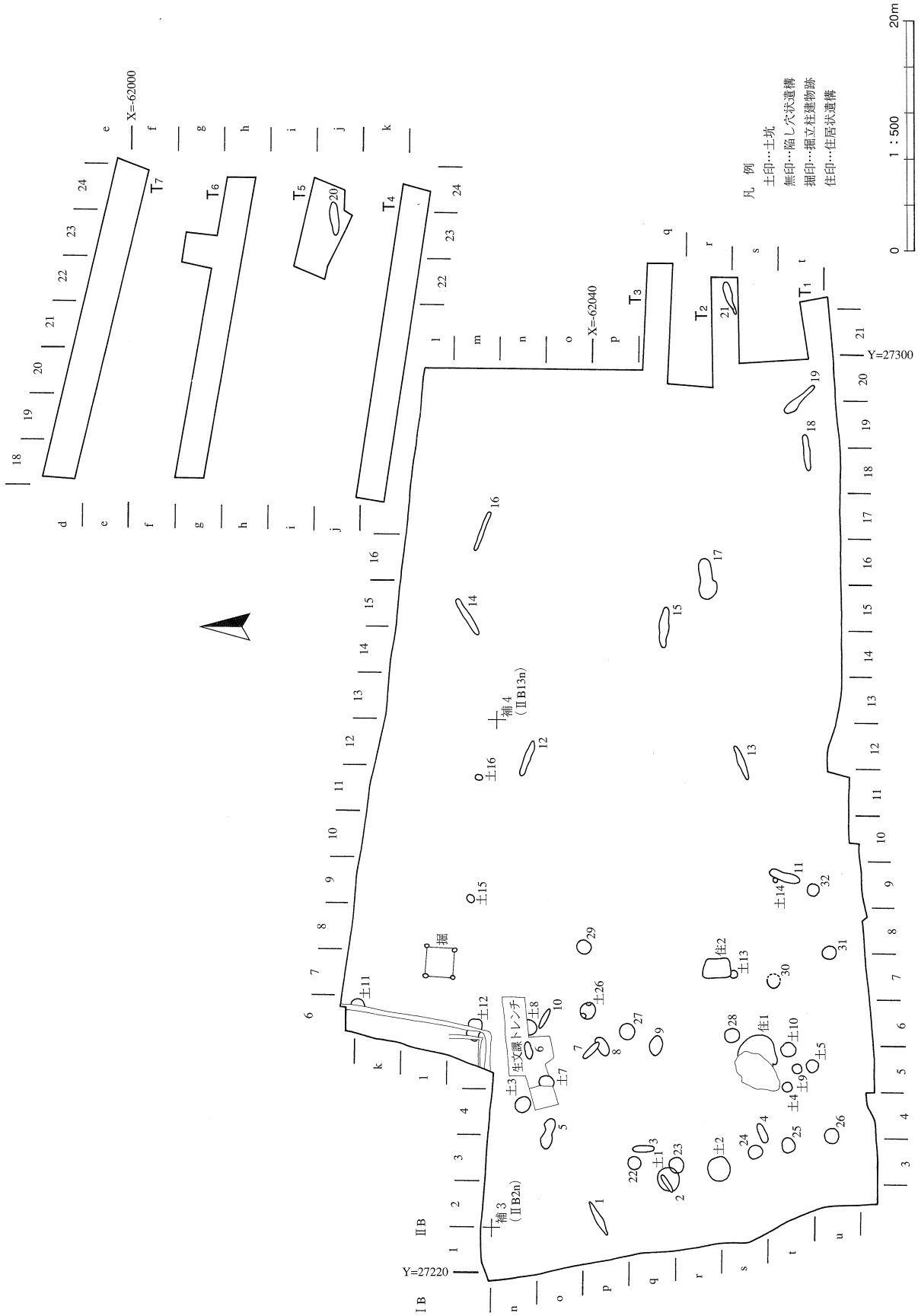
次節以下ではその内容について詳述する。

なお、計測値の（　）については、残存値を示す。攪乱によって計測できないものもあるが、一部掘り過ぎによって計測できなかったものもある。

（戸根）



第6図　A区・B区　遺構配置図


X=-62000
X=-62040
Y=27300
Y=27220
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
補4
(ⅡB13n)
補3
(ⅡB2n)
生文課トレンチ
掘
住1
住2
凡例
土印…土坑
無印…陥し穴状遺構
掘印…掘立柱建物跡
住印…住居状遺構
0
1：500
20m

第7図　C区　遺構配置図

2　A　　区

（1）竪穴住居跡

住居跡１（第８～10図、写真図版６）

【位置・検出状況】　Ａ１区北西部、ⅠA13hグリッド付近に位置する。調査区全体の表土除去に先立ち堆積状況の把握を目的としたトレンチを設定したところ、焼土・炭化物の集中する地点が確認された。観察の結果、住居跡に付属するカマドである可能性が高いと思われ、表土除去の後、この地点の周辺を重点的にクリーニングしたところ、A-Ⅳ層上面において、周囲よりわずかに暗く炭化物粒が希薄に分布する不整形な範囲として検出された。

【規模・形状】　平面形は5.5×4.5ｍの隅丸方形を呈するものと思われるが、西壁側が失われており原形・規模は不明である。検出面から床面までの残存深度は30㎝前後である。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土はA-Ⅲ層相当の暗褐色シルトだが、地山構成層A-Ⅳ層の再堆積土を多量に含むため、特に壁面の識別が困難であった。炭化物の混入がなくなり締まりが密になる点を識別の根拠とし、その後サブトレンチによる再確認を行った。

床面直上には大量の炭化物が集積している。上屋の部材と思われる棒状材、繊維方向の揃ったカヤ束状の炭化物のほか、半土壌化したモヤモヤした炭化物が広がっていた。炭化物は床面中央付近に最も集中し、南壁側及び東壁側に広がりを持つ（第10図）。壁際では炭化物層の上位に壁の崩落土が堆積しており、その後、順次自然の流入土によって埋没したものと思われる。

【壁・壁溝・床面・柱穴など】　検出面は西に向かって傾斜しており、四辺のうち斜面下方の西壁が失われている。他の残存する壁面はほぼ直立に近い立ち上がりをのこしているが、いずれの壁下でも壁溝は確認できなかった。床面は全体に平坦であるが、中央部に不整楕円形（1.6×1.3m）の浅い凹部が認められる。凹部の底面は周囲の床面より堅く締まっている。また西壁中央部付近では、開口部が隅丸方形～楕円形（2.0×1.6m）を呈する土坑が確認された。直立する壁と平坦な底面を有し、住居床面から土坑底面までの深さは約50㎝と深い。前者（凹部）の底面には住居床面に堆積している炭化物層が連続して流入していること、後者（土坑）には住居の埋土が連続して流入している状況が認められることから、両者とも住居廃絶の時点で開口し伴っていたものであることが理解される。柱穴状ピットは、住居中央部・南壁際・カマド付近などで検出されている。これらには杭穴状の小ピットも含まれ、南壁際や住居中央部を南北に横断するような列状の配置も看取されるが、上屋を支持するのに十分な柱配置を確認・復元するには至らなかった。

【カマド・炉跡】　カマドは東壁南部に設置されている。しかしながら、本住居跡に重複する溝跡１がちょうどカマド燃焼部を横断していたため大半が破壊され、極めて残存状態が悪かった。断面観察等から燃焼部焼土の規模はおよそ90×70㎝ほどであることがわかり、袖部も大半が失われているが北側袖部の一部で芯材とされた礫が確認された。煙道は登り勾配で東の壁外に約1.2ｍ延び、その先端部付近に煙出しピットをもつ。このピットは煙道の軸線上からは北側にずれて接しており、本来刳り貫き式の煙道であったことを示唆していると思われる。

床面からはカマドとは別に４箇所の焼土が見つかっている。このうち、前述の床面中央凹部の北東隅付近に形成された焼土（断面ｄ-ｄ’）と、カマドの南に隣接する焼土（断面ｅ-ｅ’）は、被熱の度合いが強いことから、住居内部に付属する炉跡であった可能性が高い。

前者の上面からは炭化したトチノキ種子（トチの実）が塊となって出土した。２分の１以上残存する個体47個を含む多くの破片個体からなり、重量は251.1ｇであった。可食部である胚ごと炭化してお

り、採集・保存されていたものが何らかの原因により火を受けたものとみられる。トチノキ種子と焼土上面との間には径1㎝に満たない細長い笹竹状の炭化物の広がりが認められたことから、これを素材とした何らかの容器もろともに保存場所であった炉の上部空間から転落し、そのまま炭化したものである可能性があろう。調理・加工を目的に炉内に入れられたものではなく、住居の焼失と同時に他の材と共に炭化したものとおもわれる。

【重　　複】　溝跡1に切られる。

【遺構の時期】　出土遺物等から平安時代（10世紀初頭）に帰属するものと思われる。

（村上）

【出土遺物】（第21図1～8・第24図51～56、写真図版14・16）

土師器（1～8）、鉄製品（51～56）が出土している。

1～4はロクロ成形の土師器の坏である。1・4は内面を黒色処理した上、ヘラミガキが施されている。1・2は底部まで残存しており、底部は回転糸切りである。いずれも口縁部は若干外反している。

5～8は甕である。いずれもロクロで成形したものである。口縁～体部の残存であり、底部は残っていない。5・8には体部の外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整が施されている。6は体部の内外面にヘラナデ、口縁部にヨコナデの調整が施されている。

51・52は刀子である。いずれも長さ20㎝前後、幅3㎝前後、厚さ2㎝のほぼ完形の状態で見つかっている。一部木質も残っている。木質は鞘の部分として使われていた可能性がある。

53・54は穂摘み具である。53はほぼ完形で残っているが、54は左端部が欠損している。穿孔部に木質状の痕跡がある。

55・56は棒状の製品である。55は外形が角型である。用途については不明である。

なお、当遺構では床面で材の形で残った炭化材が出土しており、樹種同定を行っている。樹種は1・2がクリ、3・5がナラ、4がホウノキである。

（戸根）

住居跡2（第11・12図、写真図版7）

【位置・検出状況】　A1区北西部、ⅠA13jグリッドに位置する。A-Ⅳ層上面において、周囲よりわずかに暗く炭化物粒の希薄な分布が認められる不整形な範囲として検出された。周囲の他の遺構の例から、竪穴住居跡の可能性が高いと判断し精査に着手した。

【規模・形状】　平面形は南北3.6m、東西3.0m以上の隅丸方形を呈するものと思われるが、西壁を失っており原形・規模は不明である。床面までの残存深は最大18㎝である。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土はA-Ⅲ層相当の暗褐色シルトである。地山を構成するA-Ⅳ層の再堆積土を多量に含むため、地山層と埋土の識別は難しい。炭化物の混入がなくなり土層の締まりがやや密になる点を壁面の識別根拠とし、にぶい黄橙色砂ブロックが広がる水平な硬化面を床面と判断した。

【壁・壁溝・床面・柱穴など】　立ち上がりをのこすのは東壁と北壁東半部のみで、方形周溝に隣接する南壁は緩斜面状を呈し、西壁は失われている。壁溝は、カマドの設置された南壁の西部に部分的に認められるほかは認識できなかった。床面は平坦で堅く締まり上面ににぶい黄橙色砂ブロックが広がるが、西半部は床面以下まで流失し西方に下る斜面となっている。北壁の西部には隅丸方形～楕円形土坑（1.8×1.5m）が重複している。地山ブロックを多く含みやや締まりを欠く埋土で、直立した壁とほぼ平坦な底面をもつ。土層断面の観察では土坑の埋土（3層）が住居跡埋土（1層）を切って

いると思われたが、他の住居で検出された同様の土坑がそれぞれの住居跡に付属するとみられることから、本住居の例も本来は住居付属の施設と考えたい。柱穴状ピットはこの土坑の底面で１個、南壁中央部（カマド右脇付近）で２個の計３個が検出されたのみである。

【カマド・炉跡】　カマドは南壁東部に設置されている。燃焼部には径約40㎝の円形の焼土が生成している。焼土の上面はやや硬化が認められるが、もとが砂質を帯びた土であり緻密さを欠く。カマドの内部からは、径10～40㎝の礫が燃焼部を覆うようにまとまって出土した（第12図・上）。カマドの上部（袖～天井部）構築材として用いられたものと思われ、被熱による赤色変化面を持つが、その向きはまちまちである。掘り方をもち袖部に据えられた状態をのこしている礫も一部に認められる。その一方、カマド構築土は完全に流失しており、袖部には高まりすら残存していなかった。煙道は燃焼部から南の壁外に向かいわずかに下りながら延び、燃焼部からおよそ40㎝のところで近接する方形周溝の北辺に切られている。

床面からはカマドとは別に１箇所の焼土が検出されている。平面形は40×20㎝の概ね楕円形であるが、中央にわずかなくびれをもち雪ダルマ形とも見える。他の住居跡からも雪ダルマ形～瓢箪形の平面形を呈する焼土が複数検出されておりそれらに類似するものである。カマド燃焼部に比して被熱の程度は弱く、ごく一時的な利用と推測される。鍛冶炉など、カマドとは異なる用途・性格が想定されるが、判断材料に乏しく詳細は不明と言わざるを得ない。

【重　　複】　方形周溝に切られている。

【遺構の時期】　出土遺物等から平安時代（10世紀初頭）に帰属するものと思われる。

（村上）

【出土遺物】（第21図９～13、写真図版14）

土師器（９～13）が出土している。

９～10はロクロ成形の土師器の坏である。いずれも底部は残存しており、底部は回転糸切りである。口縁部は若干外反している。

11・12はロクロ成形の埦である。いずれも底部は残存しており、回転糸切りである。12については中央部に窪みがあり、底部をさらに削りだしているようである。11は内面を黒色処理した上、ヘラミガキが施されている。

13は甕である。口縁～体部の残存であり、底部は残っていない。体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ、口縁部にヨコナデの調整が施されている。

（戸根）

住居跡３（第12図、写真図版７）

【位置・検出状況】　Ａ１区北西部、ⅠA12lグリッドに位置する。方形周溝―区画①内部のA-Ⅳ層上面において、２箇所の焼土生成範囲と礫や土器片を含む不整形な溝状掘り込みが近接して検出された。床面前後まで削平を受けた住居跡の残片と判断し精査に着手した。

【規模・形状】　住居跡の北東隅付近が残存したものと考えられるが、全体の形状や規模は不明である。溝状の掘り込みは長さ180㎝・幅25～70㎝・深さ20㎝ほどのもので、おそらく東壁側の壁溝とみられる。

【埋土と堆積状況】　床面あるいはそれ以下まで削平を受けているため、観察可能な堆積土は溝状掘り込みの内部と焼土付近に限られた。溝状掘り込みには土器片と礫を多量に含む砂質シルトが密に堆積していた。２箇所見つかっている焼土の上面には、炭化物と焼土粒を多く含む土層の堆積が認められる。この層は焼土周辺の床面にも観察され、カマドの崩壊に伴って住居内に散らばったものと推測

される。

【壁・壁溝・床面・柱穴など】　上述の通り、全体的な削平により壁面は残存せず、壁溝の一部と思われる溝状掘り込みが認められるのみである。床面とみられる硬化面は北側焼土の南側にわずかに認められるがこれより西側でははっきりしない。付近は西に下るように削られており南側焼土付近はすでに床面以下まで失われているようである。柱穴として認識できたものはないが、溝状掘り込みの北端部では遺物や礫が入らない径30cmほどの範囲が認められた。住居の北東隅部と推定される箇所でもあることから柱痕跡の可能性もあろう。

【カマド・炉跡】　焼土の生成範囲は２箇所確認されており、このうち北側のものがカマド燃焼部に相当すると考えられる。80×70cmの楕円形で赤変深度は最大14cm、上面はガリガリに硬化し明赤褐色を呈する。袖部や煙道部は確認できなかった。一方、南側の焼土は60×35cmほどの不整楕円形で赤変深度は６cmである。上面のレベルは北側焼土付近よりも低く硬化面も残存しないことから、上部を削平されている可能性が高い。他の住居跡でも検出されている屋内炉とみられる。

【重　　複】　他の遺構との重複はない。方形周溝―区画①の内部に位置し、人骨出土地点に近接している。

【遺構の時期】　出土遺物等から平安時代（10世紀初頭）に帰属するものと思われる。

（村上）

【出土遺物】（第22図14～17、写真図版14）

土師器（14～17）が出土している。

14・15はロクロ成形の土師器の坏である。底部は残存しており、底部は回転糸切りである。口縁部は若干外反している。内面は黒色処理の上、ヘラミガキが施されている。

16・17は甕である。口縁～体部の残存であり、底部は残っていない。16はロクロ成形である。体部外面にヘラケズリ調整が施されている。17は粘土紐による成形である。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整が施されている。

（戸根）

住居跡４（第13・14図、写真図版８）

【位置・検出状況】　Ａ１区中央部、ⅠA15ｎ～15ｏグリッド付近に位置する。A-Ⅳ層上面において、周囲よりわずかに暗く炭化物粒の希薄な分布が認められる不整形な範囲として検出された。この範囲をさらに下げたところ、炭化物の密度が若干増し、その範囲の外形が隅丸方形を呈するに至ったことから、竪穴住居跡の可能性が高いと判断し精査に着手した。

【規模・形状】　平面形は4.1×3.5mの隅丸方形、床面までの残存深は40cm前後である。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土となるのはA-Ⅲ層相当の暗褐色シルトであるが、地山を構成するA-Ⅳ層の再堆積土を多量に含むため、地山層と埋土の識別は難しかった。壁面は「炭化物の混入がなくなり土層の締まりがやや密になる」点を、床面は「炭化材分布面直下の水平にひろがる乳白色硬化面」を識別の根拠とした。床・壁面については、サブトレンチを設定して断面観察による再確認を行った。

床面直上には大量の炭化物が集積しており、上屋の部材と思われる棒状材に加え、繊維方向の揃ったカヤ束状の炭化物や半土壌化したモヤモヤした炭化物が広がっていた（第14図）。特に南・西壁寄りの床面に集中しており、上屋が概ね北東方向に向かって倒壊した様子を示している。炭化物層の上位には壁際に崩落土が堆積し、その後、漸次自然の流入土によって埋没したことが理解される。

【壁・壁溝・床面・柱穴など】　四方の壁面は、やや外傾するもののほぼ直立に近い立ち上がりをの

こしている。各壁直下には幅15㎝前後（７～18㎝）の壁溝が巡っている。壁溝は東壁中央部～カマド～南東隅の間で途切れている。これと対応するように東壁中央部にはテラス状の張り出しが認められ、この壁溝断絶部に他と異なる壁面構造を有していた可能性（出入口施設等の存在）を示唆している。

床面は地山ブロック土（７層）によって平坦に均され、上面は堅く締まっている。床面中央付近からは２基の柱穴状ピットが検出され、また、南・北および西壁際では壁溝の内縁に接して杭穴状小ピットが各１基確認されている。このほかに柱穴は検出されず、上屋を支持するのに十分な柱配置を確認・復元するには至らなかった。

【カマド・炉跡】　カマドは東壁南部に設置されている。燃焼部焼土は特に中央部の被熱変化が著しく、明赤褐色を呈してガリガリに硬化している。袖部は壁際に痕跡的に残存するのみでほぼ全体が失われている。燃焼部焼土上面を被覆する炭化物層が床面全体に広がるそれと連続していることから、カマドの上部構造部は住居の倒壊以前にすでに破壊・除去されていた可能性が高いと思われる。煙道は東壁外部に約30㎝延びているが、上部を大きく削平されているらしく痕跡的な残存である。煙出し部は確認出来なかった。

カマドとは別に、本住居跡では床面中央部に炉が設けられている。大小２つの円形焼土が結合したような、雪ダルマ状の平面形が特徴的である。径の大きい方の焼土の中央部が、カマド燃焼部と同様に明赤褐色に硬化していることから、この部分が主たる燃焼部であったことが理解される。鍛冶炉などの用途を想定できるが、出土遺物等に恵まれず性格は不明とせざるを得ない。

【重　　複】　他の遺構との重複はない。南側に住居跡５・６が近接して所在する。

【遺構の時期】　出土遺物等から平安時代（10世紀初頭）に帰属するものと思われる。

（村上）

【出土遺物】（第22図18～22・第24図57～58・第25図59～60、写真図版14・16）

灰釉陶器（18）、土師器（19～22）、鉄製品（57～60）が出土している。

18は灰釉陶器の碗の破片である。釉薬は漬け掛けによって施されている。口縁部は外反している。住居跡５、住居跡６で出土している灰釉陶器と同一個体の可能性がある。

19はロクロ成形の土師器の坏である。底部は残存しており、底部は回転糸切りである。口縁部はあまり外反していない。

20～22は土師器の甕である。20は口縁～体部にかけての残存である。口縁部にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整が施されている。21は体部～底部にかけての残存である。体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整が施されている。22はロクロによって成形されたものである。口縁～底部にかけての残存である。体部外面下部約3/4にヘラケズリ、内面下部約1/3にヘラナデの調整が施されている。底面は砂底である。なお、20は住居跡６で出土した破片と、22は住居跡６、住居跡５で出土した破片とそれぞれ遺構間接合している。

57は棒状製品である。用途については不明である。58は紡錘車である。59・60は銛である。59と60はセットになった状態で出土した。

なお、当遺構では床面から材の形で残った炭化材が出土しており、樹種同定を行っている。樹種は１がクリで、２がナラである。

（戸根）

住居跡５（第15・16図、写真図版９）

【位置・検出状況】　Ａ１区中央部、ⅠA15ｐ～15ｑグリッド付近に位置する。A-Ⅳ層上面において、周囲よりわずかに暗く炭化物粒の希薄な分布が認められる不整形な範囲として検出された。この範囲をさらに下げたところ、炭化物の密度が若干増し、その範囲の外形が隅丸方形を呈するに至ったことから、竪穴住居跡の可能性が高いと判断し精査に着手した。

【規模・形状】　平面形は5.1×4.1ｍの隅丸方形、床面までの残存深は最大38㎝である。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土となるのはA-Ⅲ層相当の暗褐色シルトであるが、地山を構成するA-Ⅳ層の再堆積土を多量に含み、地山層と埋土の識別は難しい。壁面は「炭化物の混入がなくなり土層の締まりがやや密になる」点を、床面は「炭化材分布面直下の水平にひろがる硬化面」を識別の根拠とした。床・壁面については、サブトレンチを設定して断面観察による再確認を行った。

床面直上には炭化材片を多く含む層が広がり、その上をA-Ⅳ層類似の褐色土層が厚く覆っていた。炭化物は埋土下部ほど多く上部に向かうにつれて減少し、検出面付近では見いだすのが難しいほどのわずかな量となる。埋土の堆積状況はほぼレンズ状を呈しており、焼失・倒壊後、漸次自然の流入土によって埋没したことが理解される。

【壁・壁溝・床面・柱穴など】　壁面の識別は難しく、図示のとおり、北東及び南東隅付近で壁を掘りすぎてしまったが、断面の観察からほぼ直立する壁面が確認できた。壁溝は検出されなかった。

床面は、断面ａ-ａ’のラインから東側では硬化面の広がりとして明瞭に確認される一方、西側では埋土との層界として認識されるのみで上面の硬化はみられず判然としない。

柱穴の可能性を持つ径30～40㎝大のピットは東壁際に２個、北壁際に１個が検出されているが、配置や埋土からみて本住居跡の主柱穴とするには躊躇がある。南壁～東壁際では径10㎝に満たない杭穴状の小ピットが並んでおり、このほかにも床面からは複数の杭穴状小ピットと小溝状の掘り込みが見つかっている。特に床面中央付近で検出された炉跡（後述）の周囲に集中する傾向がみられ、埋土は多量の炭片を含む点で共通している。

北西及び南西隅では本住居跡に付属すると思われる土坑が検出された。北西隅部の土坑は100×40㎝の楕円形を呈し、床面からの深度は22㎝である。椀形の断面形を呈し底面は平坦でなく丸底気味である。底面付近の埋土には炭化物をやや多く含み、径10㎝前後の礫がまとまって出土した。一方、南西隅部の土坑は200×150㎝の隅丸方形を呈し、直立する壁と平坦な底面を持つ。当初埋土上部下面に炭化材・礫の集中がみられたためこれを底面と誤認したが、その後の精査でさらに下部の埋土にも炭化材片を含むことが判明しこれらを完掘した。いずれの土坑においても、周囲の床面から連続して炭化物や礫が流入している状況が確認されたことから、住居跡に付属する施設であり廃絶時には開口していたことが理解される。

【カマド・炉跡】　カマドは北壁東部に設置されている。燃焼部には76×60㎝の楕円形の焼土が生成しており、特に中央部は明赤褐色を呈してガリガリに硬化している。燃焼部焼土の直上や周辺からは径10㎝強の礫複数と土師器甕が出土した。これらの礫はカマド上部の構築材であった可能性が高く、袖部には礫を据えた痕跡（抜石痕）と思しき掘り方が並んで確認されている。煙道部は北壁の外部へ延びていたものと考えられ検出に努めたが結局確認できなかった。浅い掘り込みであったならばすでに削平によって失われていた可能性もあろう。

本住居跡ではカマドのほかに床面中央部から炉跡１基が検出されている。径40㎝の円形焼土の東側外縁に径20㎝の円形焼土が連結し雪ダルマ状の平面形を呈する。径の大きい方の焼土の中央部は、カマド燃焼部と同様に明赤褐色に硬化しており、この部分が主たる燃焼部であったことが理解される。

上述したが、この炉跡付近の床面からは径10cmに満たない杭穴状ピットがまとまって分布している。このことはこの炉跡にの何らかの上部構造が存在したことを暗に示している可能性があろう。特にこれらのうち３つのピットは斜めに打ち込まれた杭状材の痕跡とみられ、炉の上部で先端が交わるような角度となっていることは興味深い。具体的な上部構造や炉跡の性格については、根拠に乏しく不明と言わざるを得ない。多量の鉄製品の出土を考慮に入れれば、簡便な屋内鍛冶炉などが想定されよう。

【棒状礫の集積】　南西隅部の隅丸方形土坑の東縁に接する床面から、長さ９～12cm・幅３～４cm程の細長い礫が多量に集められた状態で出土した。出土総数は75個で、基本的には５～６本が一束となって揃えられているようであり、各束それぞれがやや向きをずらしながらも全体的には東西方向に長軸を揃える傾向が看取された。上部は崩れて向きが乱れたり、土坑内部に転落したりしているが、床面に近い下部では整然と並べ置かれている様子がはっきりと確認でき、本来は俵積み（小口積み）のように幾段かに重ねられていたのであろう。これらの礫には被熱の痕跡を残すものも多く含まれているが、赤変部位は一様でなく被熱の度合いも個体間でムラがあることから、出土地点において恒常的に熱にさらされたとは考えにくい。火熱を伴う使用を示すものではなく、住居の焼失時に受けた被熱痕跡と考えるのが妥当であると思われる。用途としては漁網や編物の錘などが推測されるが、これを裏付ける根拠は精査からは得られていない。いずれにせよ、規格のそろった礫を収集し住居内部に保管していたことは明らかである。

【重　　複】　他の遺構との重複はない。北側に住居跡４、東に住居跡６が近接して所在する。

【遺構の時期】　出土遺物等から平安時代（10世紀初頭）に帰属するものと思われる。

（村上）

【出土遺物】（第22図23～28・第23図29・第25図61～62・第26図63～66、写真図版15・17）

灰釉陶器（23）、土師器（24～28・29）、鉄製品（61～62・63～67）が出土している。

23は灰釉陶器の碗の破片である。釉薬は漬け掛けによって施されている。口縁部はやや外反している。住居跡４、住居跡６で出土している灰釉陶器と同一個体の可能性がある。

24・25はロクロ成形の土師器の坏である。24の底部は残存しており、底部は回転糸切りである。口縁部はあまり外反していない。体部にやや明瞭な稜がある。25は口縁～体部の残存である。口縁部はやや外反している。

26・27は土師器の甕である。26は体部～底部にかけての残存である。ロクロによって調整されている。体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整が施されている。内面のヘラナデが施された部分は僅かである。底部には木葉痕がある。27は口縁～体部にかけての残存である。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整が施されている。

28は坏の高台部である。

61は短刀である。ほぼ完形である。柄の部分に一部赤色塗料の塗布されている状況が認められる。岩手県立博物館における分析の結果、酸化第二鉄（ベンガラ）と考えられる。62は袋状鉄斧である。ほぼ完形である。63・64は刀子である。65は不明鉄製品である。66は板状の鉄製品である。全体にやや湾曲気味である。67は鉄滓である。椀状の形をしたものである。67については実測図を省略し、写真のみ掲載している。

（戸根）

住居跡６（第17図、写真図版10）

【位置・検出状況】　Ａ１区中央部、ⅠA16ｐ～16ｑグリッド付近に位置する。A-Ⅳ層上面において、周囲よりわずかに暗く炭化物粒の希薄な分布が認められる隅丸方形の範囲として検出されたことから、

竪穴住居跡の可能性が高いと判断し精査に着手した。

【規模・形状】　平面形は3.3×3.0mの隅丸方形、床面までの残存深は30cm前後である。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土となるのはA-Ⅲ層相当の暗褐色シルトであるが、地山を構成するA-Ⅳ層の再堆積土を多量に含み、地山層と埋土の識別は難しい。壁面は「炭化物の混入がなくなり土層の締まりがやや密になる」点を、床面は「炭化材分布面直下の水平にひろがる明黄褐色粘土ブロックの広がる面」を識別の根拠とした。床・壁面については、サブトレンチを設定して断面観察による再確認を行っている。炭化物は床面直上付近に集中するが、上部に向かうにつれて減少し検出面付近では見いだすのが難しいほどのわずかな量となる。床面直上からは材の形状を部分的にのこす木炭片も出土していることから、本住居跡も焼失したものである可能性が高いと考えられる。埋土の堆積状況はほぼレンズ状を呈しており、焼失・倒壊後、漸次自然の流入土によって埋没したものと理解される。

【壁・壁溝・床面・柱穴など】　四方の壁面は、やや外傾するもののほぼ直立に近い立ち上がりをのこしている。壁溝は平面では把握できなかったが、断面c-c'（1層）で痕跡が確認された。床面は掘り方に生じた凹部を地山ブロック土（5層）で均すことにより平滑化され、上面は堅く締まっている。南壁中央部付近では、廃絶段階における床面の下位からカマド燃焼部と思われる焼土が検出された。このことは、この付近の床面が古いカマドを壊したあとに凹部に土を入れ平坦化されたものであることを示している。住居内からは柱穴は検出できなかった。

【カマド・炉跡】　カマドの燃焼部と思われる焼土は東壁南部付近で検出された。焼土は径40cmの円形で、中央部の被熱変化が著しく明赤褐色を呈してガリガリに硬化している。天井部～袖部として認識される高まりなどは全く残存しないが、焼土の南北両縁には、袖部の芯材として据えられた石の痕跡と思われる不整形で不明瞭な掘り込みが認められた。煙道および煙出し部は、削平により失われた可能性があり、繰り返し検出を試みたが結局確認できなかった。カマド付近からは2点の土師器甕が出土している。33は燃焼部焼土の西側に近接した床面で、34は南東隅の壁側からカマド内部側に向かって滑り落ちたような状態で出土した。

先にも触れたが、上述の東壁設置カマドとは別に、南壁中央部付近の床面下位では古期のカマド燃焼部と思われる焼土が検出された。焼土は径50～60cmの不整円形で、赤変深度は最大8cmである。本来の燃焼面はカマドの廃絶時に上方から攪乱を受けたものとみられ硬化面は残存しない。袖部の痕跡は確認できなかったが、南壁外に約60cm延びる煙道が検出され、さらに壁から115cmのところで径45cmの煙出しピットが検出された。燃焼部焼土と煙道の間はカマド移設に伴う壁面の改修により掘削を受け断絶している。

【重　　複】　他の遺構との重複はない。北側に住居跡4、西側に住居跡5が近接して所在する。

【遺構の時期】　出土遺物等から平安時代（10世紀初頭）に帰属するものと思われる。

（村上）

【出土遺物】（第23図30～34・第26図68～70、写真図版15・17・18）

灰釉陶器（30）、土師器（31～34）、鉄製品（68～70）が出土している。

30は灰釉陶器の碗の破片である。釉薬は漬け掛けによって施されている。口縁部はやや外反している。住居跡4、住居跡5で出土している灰釉陶器と同一個体の可能性がある。

31・32はロクロ成形の土師器の坏である。いずれも底部は回転糸切りである。32の底部付近の外面にヘラナデの調整がある。口縁部はやや外反している。住居跡5の破片と遺構間接合している。31は体部～底部の残存である。ヘラケズリ等の調整は認められない。

33・34は土師器の甕である。いずれも口縁～底部の残存である。33は粘土紐によって成形された後、ロクロによって調整されている。34は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデの調整が施されている。底面には網代痕がある。部分的に赤色塗料の塗布されている状況が認められる。岩手県立博物館における分析の結果、酸化第二鉄（ベンガラ）と考えられる。住居跡５、住居跡２の破片と遺構間接合している。

68は釘である。ほぼ完形である。L字型に曲がっている。69は不明鉄製品である。70は刀子である。上部が欠損している。

（戸根）

（２）土　　坑

土坑１（第18図、写真図版11）

【位置・検出状況】　Ａ１区北西部、ⅠA13ｉグリッドに位置する。A-Ⅳ層上面において、周囲よりわずかに暗く炭化物粒の希薄な分布が認められる不整な円形の範囲として検出された。

【規模・形状】　平面形は1.9×1.5ｍの楕円形で、開口部から底面までの残存深度は26㎝である。断面形は皿形を呈し壁は緩く内弯して立ち上がる。壁面に露出した地山層は砂質を帯びており、本来直立していた壁面が崩落によって現況を呈する至った可能性が高い。底面は全体として平坦であるが小規模な凹凸が目立ち硬化面は認められない。

【埋土と堆積状況】　付近に所在する住居跡の埋土上部に類似した褐色砂質土を埋土とする。繊維がやや明瞭にのこった炭化物片を含み、全体的に締まりを欠く。

【重　　複】　他遺構との重複はない。北側に住居跡１、南側に住居跡２及び土坑２が近接して所在する。

【出土遺物】　土師器細片数点（掲載資料なし）。

【遺構の時期】　埋土の様相が周辺の住居跡に類似し土師器細片を含むことから、平安時代に帰属するものである可能性が高いとおもわれる。

（村上）

土坑２（第18図、写真図版11）

【位置・検出状況】　Ａ１区北西部、ⅠA13ｊ～14ｊグリッドに位置する。A-Ⅳ層上面において、周囲よりわずかに暗く炭化物粒の希薄な分布が認められる円形範囲として検出された。

【規模・形状】　平面形は90×75㎝の楕円形で、開口部から底面までの残存深度は18㎝である。やや外傾して直線的に立ち上がる壁面と、平坦に整った底面を持つ。

【埋土と堆積状況】　埋土には拳大の礫と地山土の小ブロックを含む。地山土ブロックは埋土下部に多い。底面には灰白色を呈する面が水平に広がる。

【重　　複】　重複遺構はない。北側に土坑１、西側に住居跡２が近接する。

【遺構の時期】　出土遺物や埋土の様相から平安時代に帰属するものと思われる。

（村上）

【出土遺物】（第23図35・36、写真図版15）

土師器（35・36）が出土している。35・36ともロクロ成形の坏である。35は底部が残っている。回転糸切りである。36は口縁～体部の残存である。口縁はあまり外反していない。

（戸根）

土坑３（第18図、写真図版11）

【位置・検出状況】　Ａ１区中央東部、ⅠA17ｑグリッドに位置する。A-Ⅳ層上面でほぼ円形を呈する黒褐色土の広がりとして検出された

【規模・形状】　平面形は径1.4mの略円形で、開口部から底面までの残存深度は60cmである。壁は内弯しながら立ち上がる。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体は黒褐色シルトで下部ほど地山土ブロックを多く含む。埋土上部の１層は地山土をはじめとする数種のブロック層であり、人為的に埋め戻された土である可能性が高い。底面には基本土層A-Ⅳ層の下位に位置づけられる黒褐色粘土質シルト層があらわれている。半裁時に底面に露出した黒褐色粘土質シルトを埋土と誤認して掘りあげてしまい、このため東側半分の下端は不明となった。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし

【遺構の時期】　周囲の平安時代遺構と同一面で検出されたものであるが、帰属時期の詳細を決定づける根拠は見いだせなかった。

（村上）

土坑４（第18図、写真図版11）

【位置・検出状況】　Ａ１区南端部、ⅠA16ｗグリッドに位置する。A-Ⅳ層上面で土器片・炭化物を含む暗褐色土の円形範囲として検出された。

【規模・形状】　平面形は径1.0mの円形で、開口部から底面までの残存深度は20cmである。壁は内弯しながら立ち上がる。

【埋土と堆積状況】　埋土には土師器細片や炭化物・焼土粒子を含んでいる。底面直上には大きな木炭片が広がっている。概ねレンズ状の堆積状況を呈している。

【重　　複】　なし。

【遺構の時期】　出土遺物から平安時代に帰属するものと考えられる。

（村上）

【出土遺物】（第23図37、写真図版15）

ロクロ成形による土師器の高台のある坏（37）が出土している。内面に黒色処理の上、ヘラミガキの調整がある。

（戸根）

（３）方　形　周　溝（第19図、写真図版12）

【位置・検出状況】　Ａ１区中央部西端、ⅠA13ｋ～15ｎグリッドに位置する。A-Ⅳ層上面において、周囲よりやや暗くわずかに炭化物を含む数条の帯状の影が、平行または直交する状態で確認された。

【規模・形状】　溝跡が展開するのは14.6×11.8mの方形範囲で、この範囲の北辺・東辺及びその内部を格子状に区画している。これにより内部には５つの区画（区画①～⑤）が形成されている。

溝跡の横断面は外傾する壁とほぼ平坦な底面により概ね倒台形を呈し、上幅は150cm前後（60～210cm）、残存深度は60cm前後を測る。壁面上部がさらに外傾し立ち上がりに屈曲部が生じて薬研堀状となる箇所も認められるが、砂質の度合いが強い壁面上部が崩落した結果と思われる。

区画①～③では南辺溝―北辺溝の間（南北長）が7.5～8.6mを測り、各区画の東辺溝はいずれも北東・南東隅が隅丸状で、西側を解放したコ字状溝が連結したような形態となっている。一方、区画④・⑤

は分布範囲の南部に位置しており、南辺側が後世の削平で失われ残存するのは原形の一部とみられる。区画④・⑤は区画①東辺溝の延長上に位置する南北走行の溝により分断されている。区画⑤の東辺溝は南東隅が丸味を帯びる一方、北東隅は東辺がそのまま直線的に③の東辺溝へと連続していることから、北側を解放したコ字状を呈していたものと推測される。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体はA-Ⅲ層相当の暗褐色シルトだが、周辺の他の遺構と同様に、地山を構成するA-Ⅳ層の再堆積土を多量に含むため、地山層と埋土の識別は難しい。当初より、各区画は一定の時間差を持って繰り返し構築されたものだろうと考え、平面での新旧関係の把握を試みたが判然としなかった。断面観察箇所を計５箇所（a-a'～e-e'）設定して埋土の状態を観察したところ、区画①東辺溝（a-a'）を除く４箇所で１～２度の再掘削が行われていることが確認された。このことは各区画（区画を形成する溝）が同時的に構築されたものではなく、最終形態は数度の増築によって累積したものであることを示しているといえよう。しかしながら各区画の新旧関係については詳細な復元ができなかった。

【人骨出土地点】　区画①の内部から80×50㎝の不整楕円形の掘り込みが確認され、人骨頭部の一部が出土した。上部が削平を受けていたため検出面には頭骨の断面が環状に現れた。

掘り込みの埋土は周囲の地山土に酷似しプランの確定は困難であったが、周囲より若干締まりの度合いが疎になる範囲として点で識別した。検出面からの残存深度は10㎝に満たない。埋土の識別が困難なのは掘り上げた土をそのまま埋め戻しているためと思われ、埋葬された人骨であることを示唆している。

出土した人骨は、非常に脆弱であり取り上げの際に多くの部分を破損してしまったが、鑑定の結果、出土骨片は全て頭骨で右側頭骨外耳孔周辺の部位であること、骨片のほかに右下第一大臼歯、右下第三大臼歯が含まれること、が判明した。このことから、本人骨は頭部右側を下にした状態で埋没しており、その後の削平により左側頭部を失ったものと考えられる。大臼歯の摩耗の度合いから、壮年期の人物とみられるが性別は不明である。

埋葬施設とみられるこの掘り込みが方形周溝に伴うものと判断する明瞭な根拠は得られていないが、周溝内部に埋葬施設と思しき土坑をもつ類例が知られることから、区画①に葬られた被葬者である可能性があろう。

【重　　複】　区画①北辺溝が住居跡２を切り、同じく区画①内部の南部に住居跡３が位置している。

【遺構の時期】　10世紀初頭と思われる住居跡群より新しい時期に位置づけられるが、埋土の様相などから大きな時期差は無いと思われる。概ね平安時代～中世と考えたい。

（村上）

【出土遺物】（第23図38～40・第26図71、写真図版15・18）

土師器（38～40）、鉄製品（71）が出土している。

38はロクロ成形による坏である。体部～底部の残存である。底部は回転糸切りである。39は土師器坏または椀の高台である。40は甕である。体部～底部の残存である。体部外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデの調整がある。

71は鉄鍋の底部破片である。

（戸根）

（4）溝　　跡

溝跡１（第20図、写真図版13）

【位置・検出状況】　Ａ１区北西隅部～Ａ２区に位置する。A-Ⅳ層上面付近において、Ａ１区北西部から東部中央にかけて斜めに横断する帯状の暗いしみとして検出された。当遺構を当初予定調査範囲（Ａ１区）の東側に追跡するため、新たに拡張した範囲がＡ２区である。

【規模・形状】　Ａ１区北西隅部（ⅠA12ｆグリッド付近）から南東側に向かってほぼ直線的に走行し、Ｂ２区南東隅部に至る。両端はそれぞれ調査区外へと続くため全体の形状・規模は不明であるが、両調査区内に現れた部分の全長は80mを測る。開口部の幅は100㎝前後で、上半部は本来の開口部が崩落したためか緩やかな壁面となっているが、下半部は概ね倒台形の断面形を呈し急角度の壁面を持つ。底面標高は80.1～80.4mで、いずれか一方への傾斜は見られない。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土はA-Ⅲ層相当の暗褐色シルトで、埋土中部には壁崩落土とみられるA-Ⅳ層類似土層が厚く堆積する。南東部ではこの層の上部に径20㎝程度の礫が点在する。堆積状況から流水の痕跡は認められず、水路としての機能は想定されない。

【重　　複】　北西部で住居跡１を切る。

【遺構の時期】　10世紀初頭と思われる住居跡群より新しい時期に位置づけられるが、埋土の様相などから大きな時期差は無いと思われる。概ね平安時代～中世と考えたい。

（村上）

【出土遺物】（第23図41～44・第26図72、写真図版15・18）

土師器（41～42）、縄文土器（43～44）、鉄製品（72）が出土している。

41・42はロクロ成形の土師器の坏である。41は口縁～体部にかけての残存である。口縁はあまり外反していない。42は底部のみの残存である。回転糸切りである。

43・44は縄文土器の体部破片である。

72はS字状の棒状製品である。用途については不明である。

（戸根）

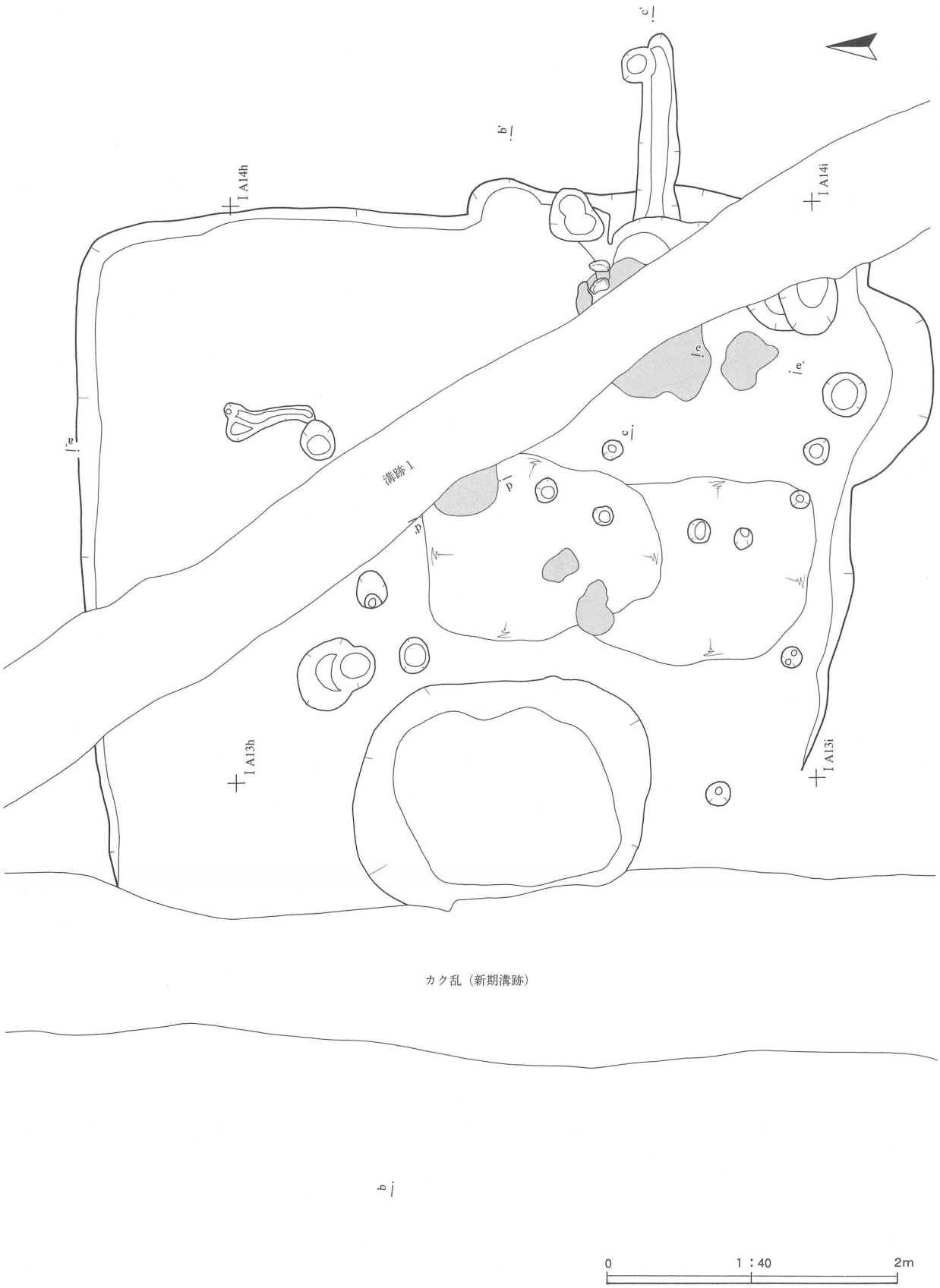
（5）遺構外出土遺物（第23図45～46・第26図73～76、写真図版15・18）

遺構外からは縄文土器（45～46）及び鉄製品（73～76）が出土している。

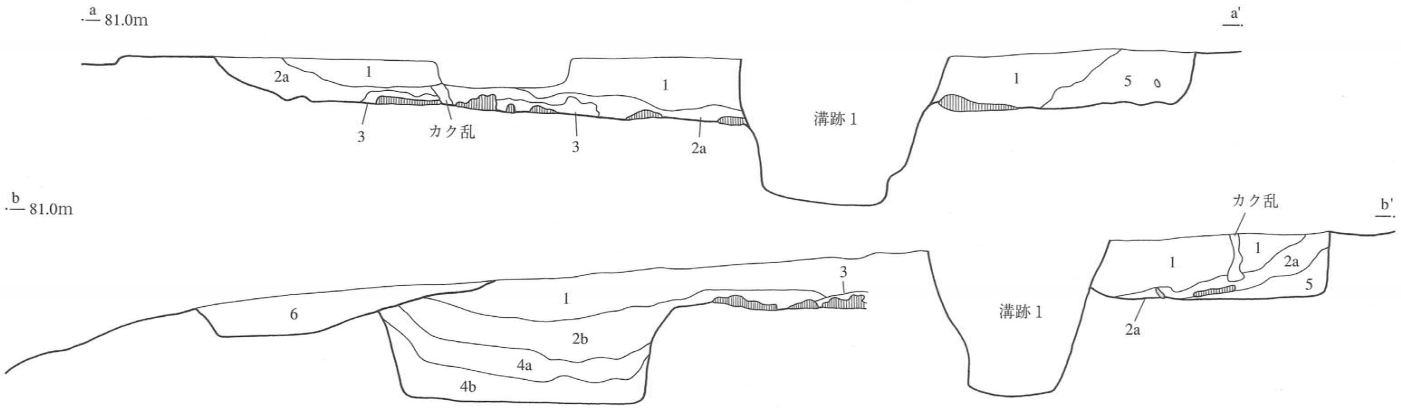
45は口縁～頸部が残存したものである。口縁部に刺突状の切込みがある。46は頸部が残存したものである。文様の構成等から、縄文時代晩期のものと考えられる。

73・74は釘である。ほぼ完形のものである。75は棒状の製品であるが、用途については不明である。76は刀子と考えられる鉄製品である。

（戸根）

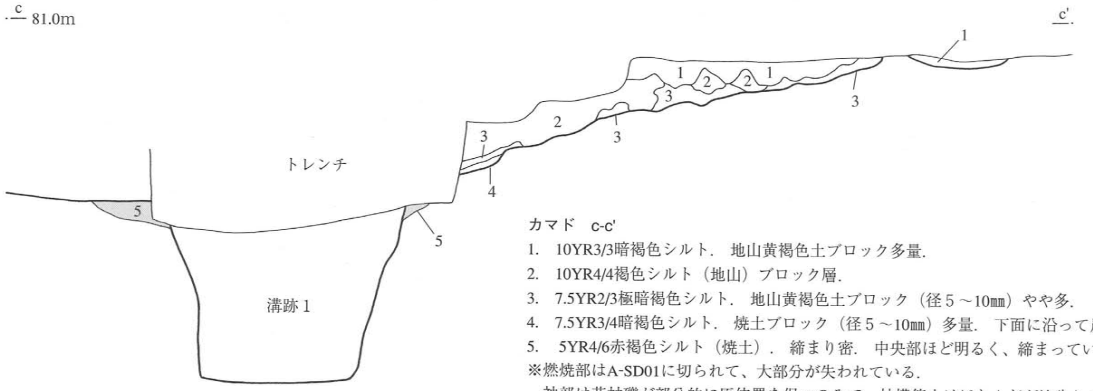


第8図　A区　住居跡1（1）



a-a', b-b'

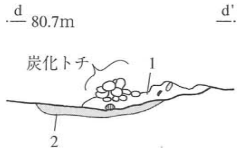
1. 10YR5/6黄褐色～10YR4/6褐色砂質シルト．炭粒極微．住居中央部ではやや暗くなる．
2a. 10YR3/4暗褐色砂質シルト．炭片少量．壁際に厚く堆積．床面上の炭化物を覆う層．
2b. 10YR4/4褐色砂質シルト．地山黄褐色砂ブロック（径５～10㎜）やや多．炭片（径５～20㎜）やや多．
3. 7.5YR3/2黒褐色シルト．炭化物大量に含む．「モヤモヤした炭化物層」としたもの．
4a. 10YR3/4暗褐色シルト．地山黄褐色シルトブロック（径２～10㎜）少．土坑埋土下半部．
4b. 10YR5/6黄褐色～10YR4/6褐色粘土質シルトブロック層．炭片（径５～20㎜）極微．土坑埋土最下部．
5. 10YR4/4～10YR4/6褐色シルト．炭粒極微．地山との区別不明瞭だか、締まりを欠きやや暗い．壁際にのみ堆積．
6. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色砂質シルト．地山黄褐色土小ブロック少量．［新期溝跡埋土］



カマド　c-c'

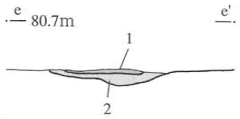
1. 10YR3/3暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック多量．
2. 10YR4/4褐色シルト（地山）ブロック層．
3. 7.5YR2/3極暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック（径５～10㎜）やや多．
4. 7.5YR3/4暗褐色シルト．焼土ブロック（径５～10㎜）多量．下面に沿って炭化物有り．
5. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．締まり密．中央部ほど明るく、締まっている．

※燃焼部はA-SD01に切られて、大部分が失われている．
袖部は芯材礫が部分的に原位置を保つのみで、袖構築土はほとんどが流失している．



炭化トチ　d-d'

1. 10YR2/2黒褐色シルト．地山ブロックやトチ・その他の炭化物層．
2. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．

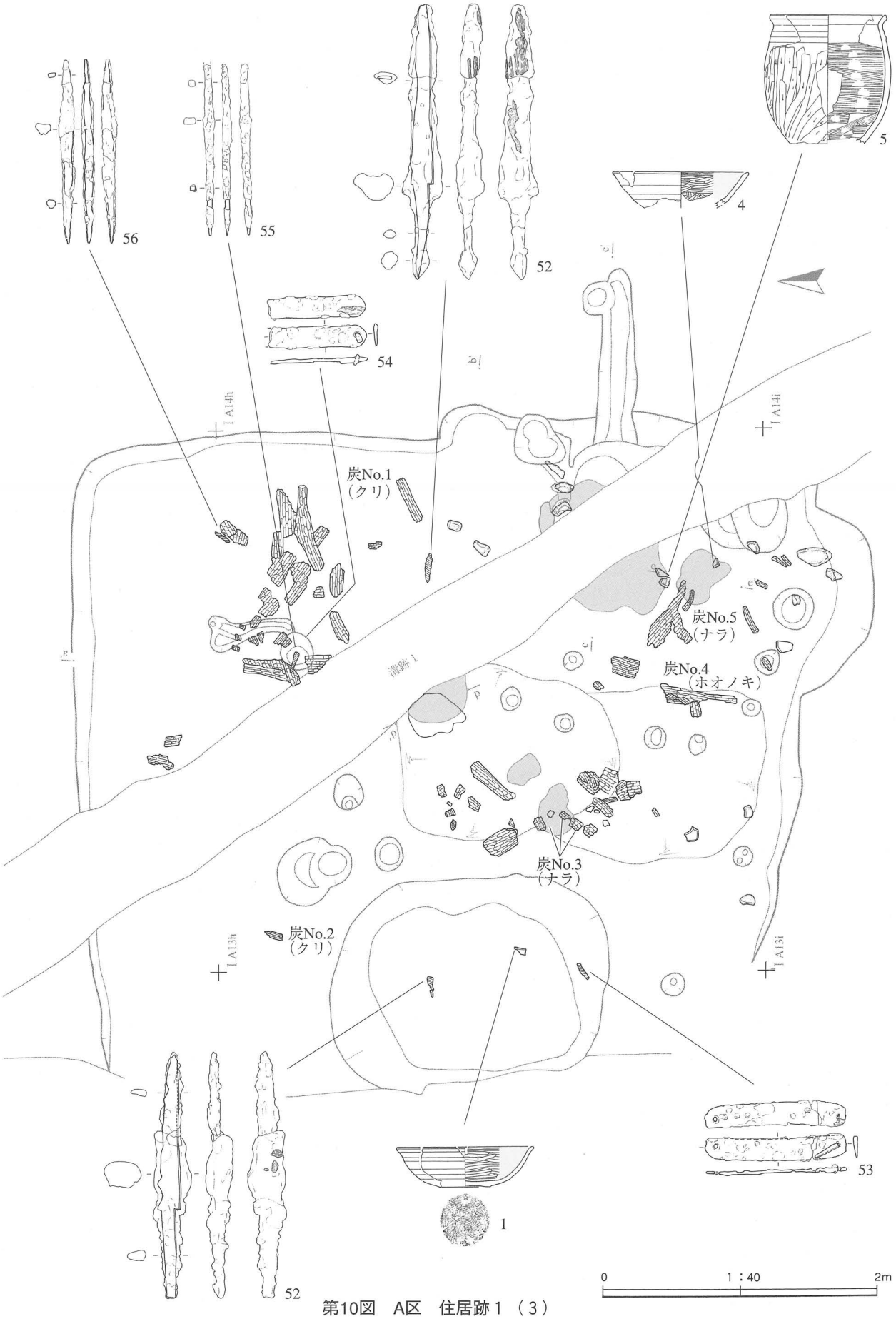


南東隅焼土　e-e'

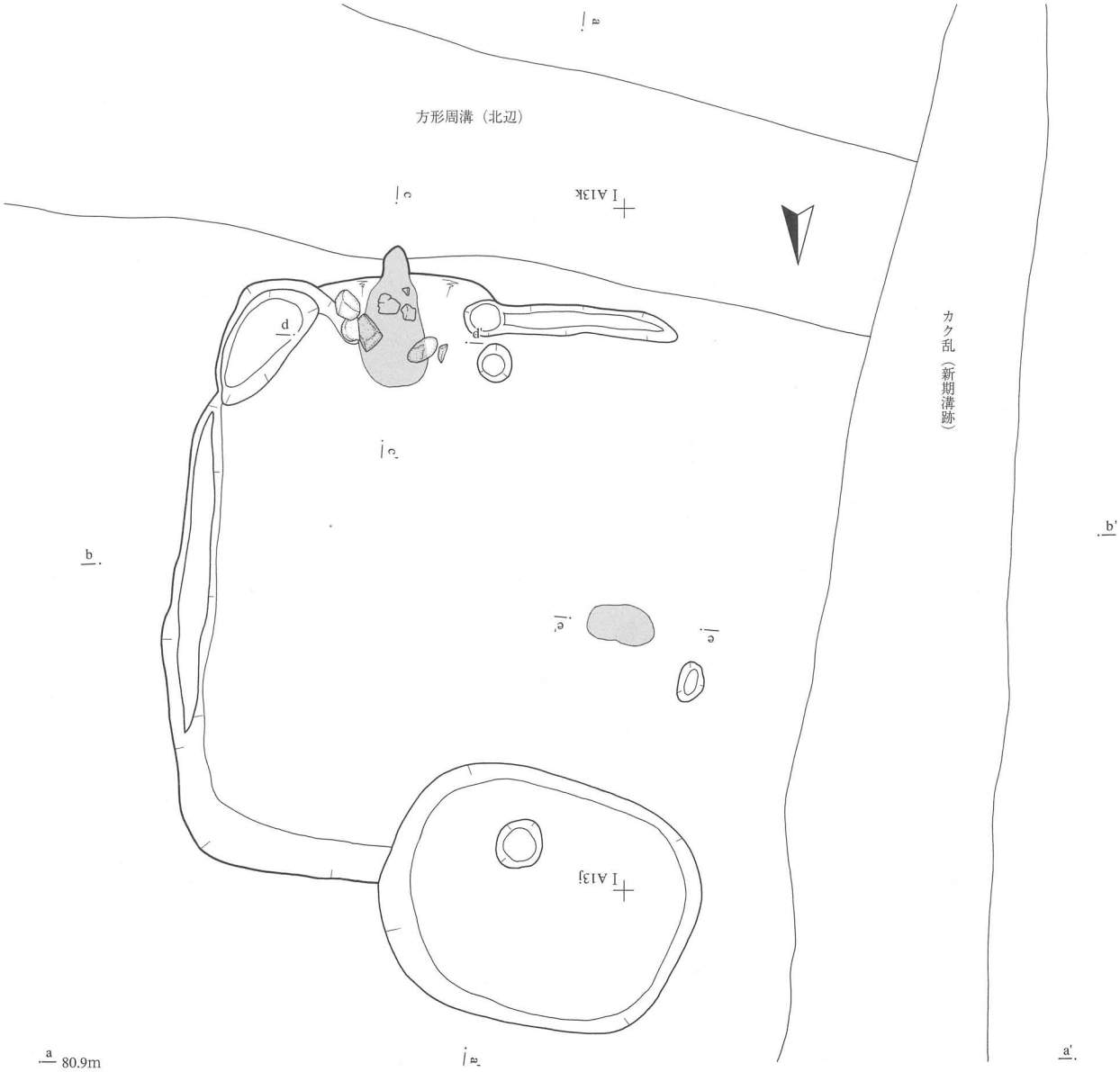
1. 5YR5/8明赤褐色シルト（強変焼土）．
2. 5YR4/6赤褐色シルト（弱変焼土）．

a・b　0　1：40　2m
c～e　0　1：20　1m

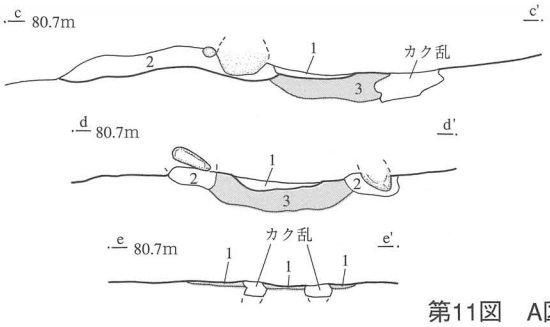
第９図　A区　住居跡１（２）



第10図　A区　住居跡１（３）



a-a', b-b'
1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト．締まり密．炭粒極微．
2. 10YR4/4褐色シルト．1より締まり欠き暗い．壁際に堆積．
3. 10YR4/4褐色～10YR3/4暗褐色砂質シルト．地山黄褐色土ブロックやや多．締まりやや疎．
4. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色砂質シルト．
5. 4層土に地山黄褐色土ブロックやや多．
※床面は10YR6/4にぶい黄褐色砂のブロックが広がる硬化面．



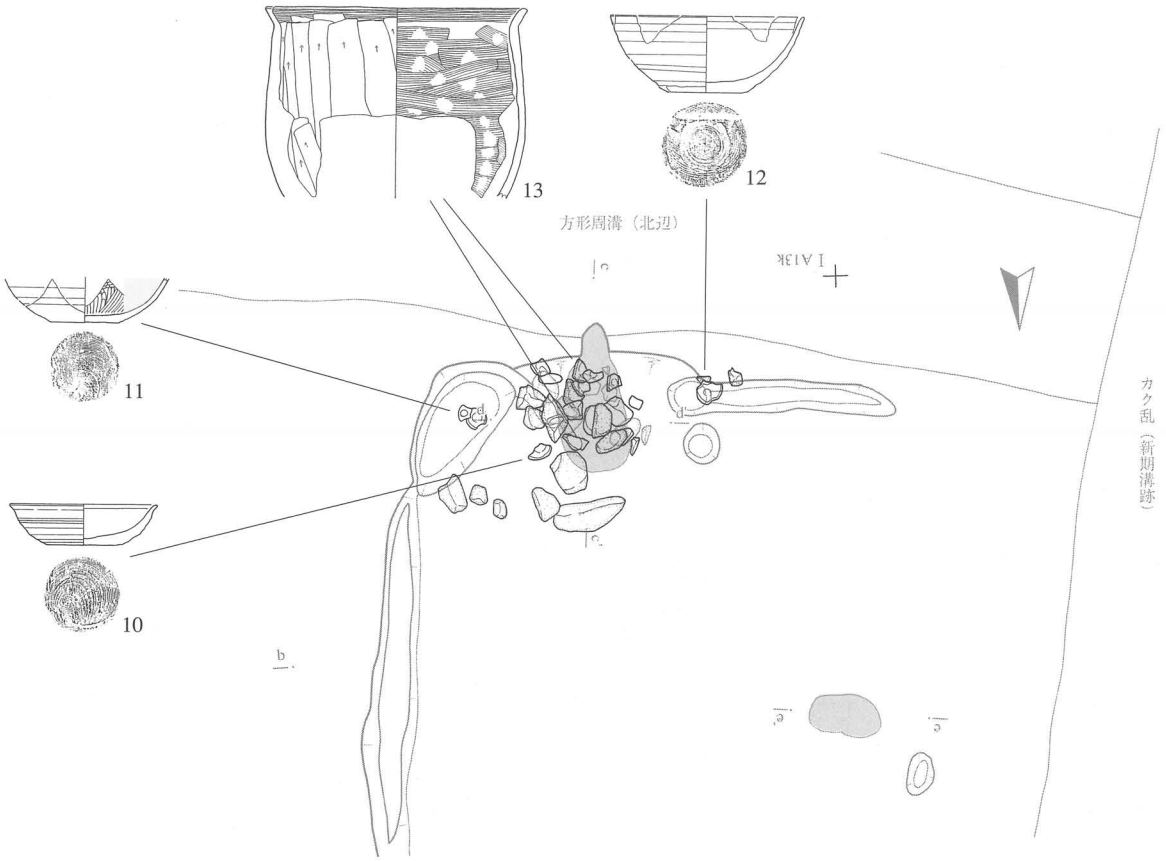
カマド（南北断面） c-c'
1. 東西断面1層に同じ．
2. 10YR3/4暗褐色シルト．
地山ブロックやや多（煙道部とおもわれるが焼土ブロック等入らない）．
3. 東西断面3層に同じ．

カマド（東西断面） d-d'
1. 10YR3/4暗褐色シルト．地山ブロック・焼土ブロック（各径5㎜）微量．
2. 10YR3/4暗褐色シルト．地山ブロック微．
3. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．

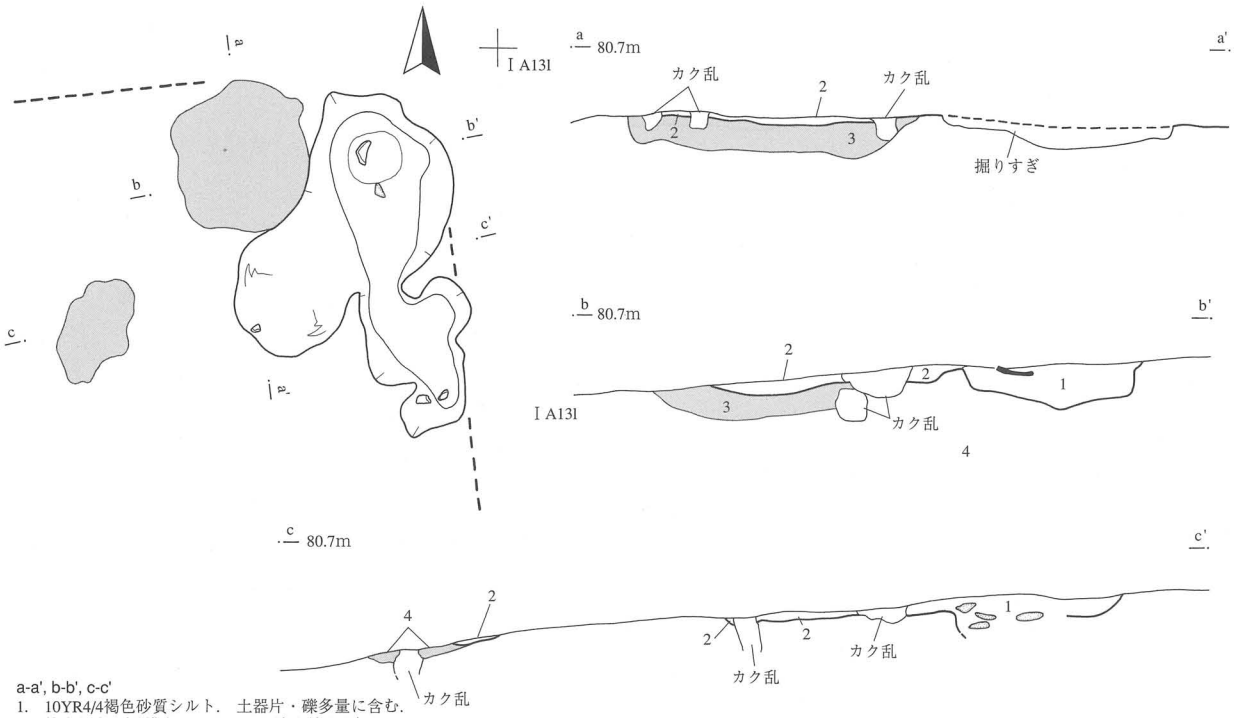
炉 e-e'
1. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．

a・b 0 1：40 2m
c～e 0 1：20 1m

第11図 A区 住居跡2（1）



住居跡２（２）［出土状況図］

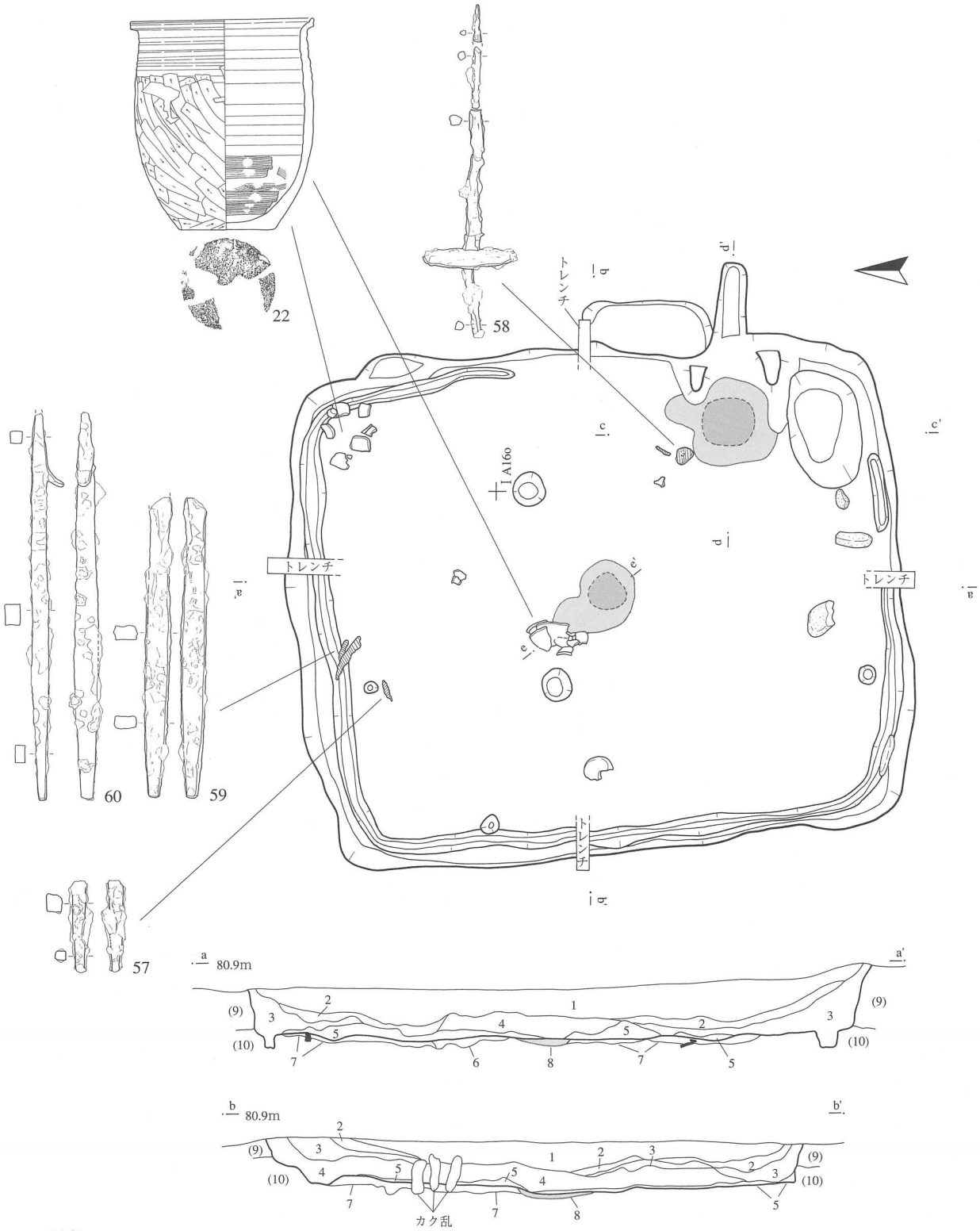


a-a', b-b', c-c'
1. 10YR4/4褐色砂質シルト．土器片・礫多量に含む．
締まり密．（壁溝あるいはカマド脇土坑か？）
2. 10YR3/4暗褐色シルト．炭粒・焼土粒多量．焼土直上あるいは床面状の黄褐色土平坦面の直上に堆積．
3. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．上面から約３㎝までは5YR5/8明赤褐色を呈し硬化している．
4. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．上部を削平され燃焼部上面は残存しない．
他の住居跡に見られる屋内炉の痕跡か？
※床面付近まで削平された住居跡であろう．北壁東寄りにカマドを持っていたものと推測される．

平面　0　1：40　2m
断面　0　1：20　1m

住居跡３

第12図　A区　住居跡２（２）・住居跡３



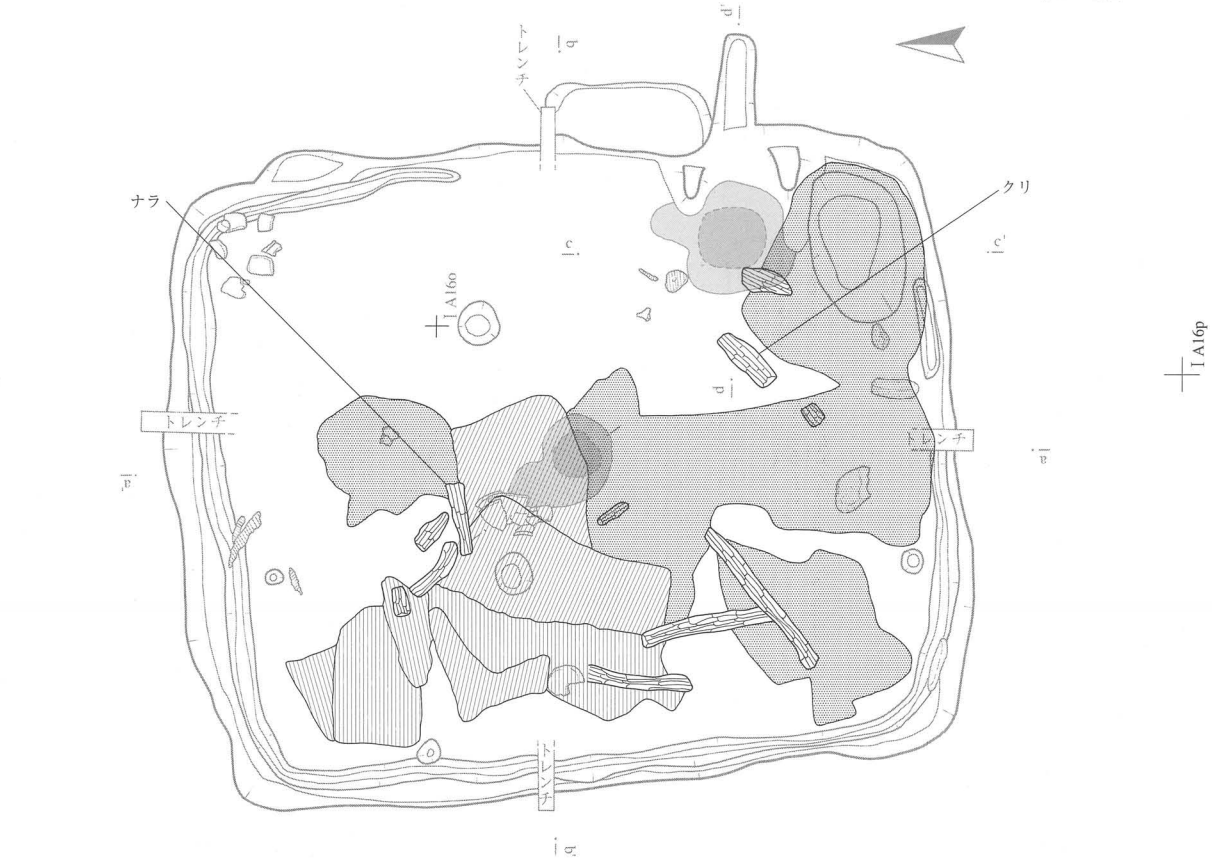
a-a', b-b'

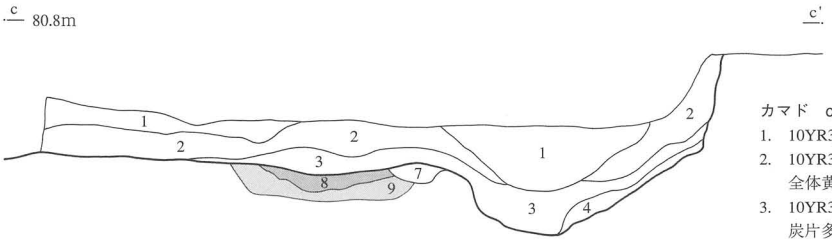
1. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色砂質シルト. 締まり密. 炭粒（径２～５㎜）極微.
2. 10YR5/6黄褐色シルトブロック層.
3. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト. １に似るが地山黄褐色土含み黄味帯びる. 炭粒（径５～20㎜）少量.
4. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト. 地山黄褐色土を多量に含み黄味強い. 炭化物の薄層数枚挟む.
5. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト. 炭化材（物）を大量に含む. 床面直上層.
6. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト. 炭化物・焼土ブロック多量含む. 床面に食い込んだ層.
7. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック層. 堅くしまっている.
8. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト. 床面上に形成された焼土層.

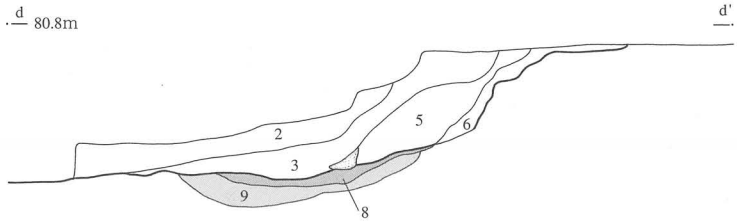
(9). 10YR5/6黄褐色シルト. 以下地山.
(10). 10YR4/4褐色粘土質シルト.
※1～5：埋土. 7：貼床・掘方埋土.

0 1：40 2m

第13図 A区 住居跡４（１）



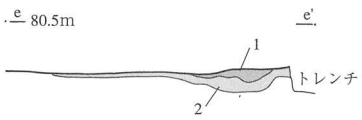




カマド　c-c', d-d'

1. 10YR3/3暗褐色シルト．炭粒微量．
2. 10YR3/3暗褐色シルト．黄褐色土ブロック大量．
   全体黄味強（ほぼ黄褐色土ブロック層）．
3. 10YR3/3暗褐色シルト．
   炭片多量（住居床面に分布する炭化物層に連続）．
4. 10YR4/6褐色シルトブロック層．
5. 10YR4/6褐色シルト．
6. 10YR3/3褐色シルト．
   5YR3/6暗赤褐色シルト（焼土）ブロック多量．
7. 10YR3/3暗褐色シルト．
   焼土ブロック・地山黄褐色土ブロック多量［カマド袖石痕？］．
8. 5YR5/8赤褐色シルト．強変焼土．
9. 5YR4/6赤褐色シルト．弱変焼土．

※カマド袖部はほぼ消滅しており、燃焼部直上面も住居全体の埋土から連続する黄褐色土ブロック層及び炭化物層に被覆されている．

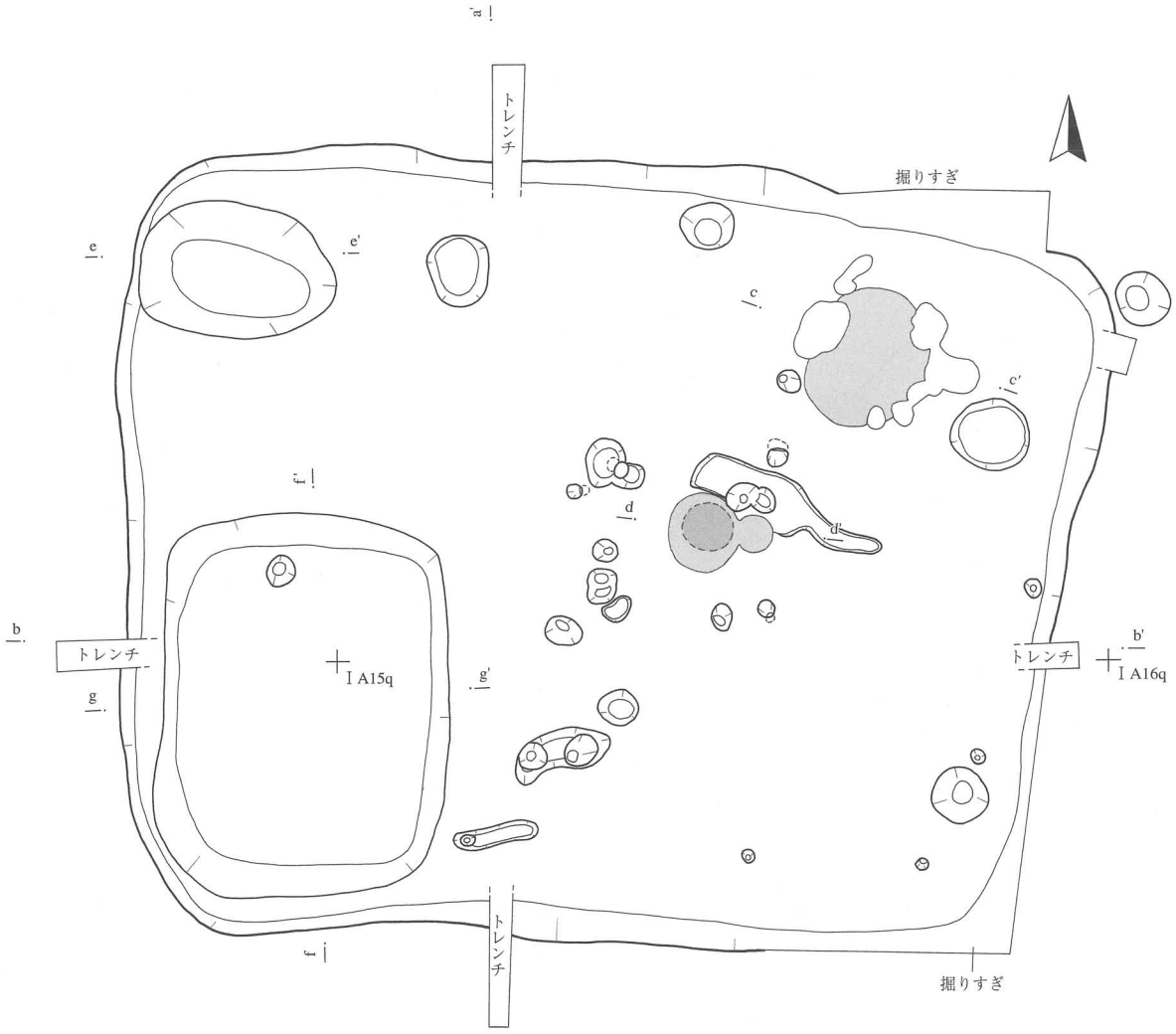


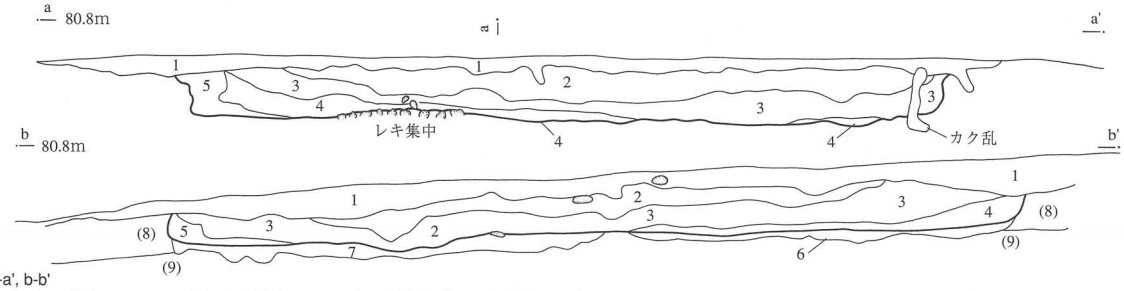
炉　e-e'

1. 5YR5/8明赤褐色シルト（強変焼土）．
2. 5YR4/6赤褐色シルト（弱変焼土）．

平面　0　1：40　2m
断面c～e　0　1：20　1m

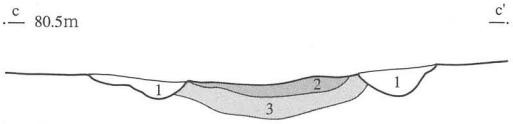
第14図　A区　住居跡４（２）





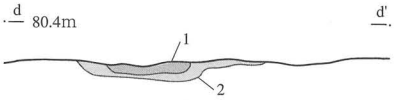
a-a', b-b'

1. 10YR3/4暗褐色シルト．やや砂質．地山黄褐色土ブロック少．炭粒極粒．[埋土上部の被攪乱部？]
2. 10YR3/4暗褐色シルト．1よりやや黄味帯びる．炭粒極粒．
3. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト．
全体黄味強く、地山土（(8)層）との識別困難．炭少量含む（1・2層より径大きい）．
4. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト．炭片大量．床面直上層．
5. 10YR3/4暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック少量．南西側壁際付近に堆積．
6. 10YR5/6黄褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混土層．上面に10YR5/6黄褐色砂質シルトブロックの薄層あり東半部で硬化面としての広がりを持つ（西半部には認められない）．
7. 10YR5/6黄褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混土層．部分的に大きな炭片入る．
(8)．10YR5/6黄褐色シルト．
(9)．10YR4/4褐色粘土質シルト．
※1～5：埋土．6：貼床．7：掘方埋土．



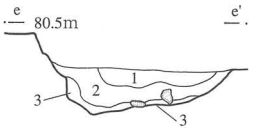
カマド c-c'

1. 7.5YR3/4暗褐色シルト．焼土ブロック多．炭粒やや多．カマド袖石の痕跡？
2. 7.5YR5/6明褐色シルト（焼土）．燃焼面中央部、強度の被熱部．
3. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．平面では2を中心に同心円状に分布．



炉 d-d'

1. 5YR5/8明赤褐色シルト（強変焼土）．
2. 5YR4/6赤褐色シルト（強弱焼土）．

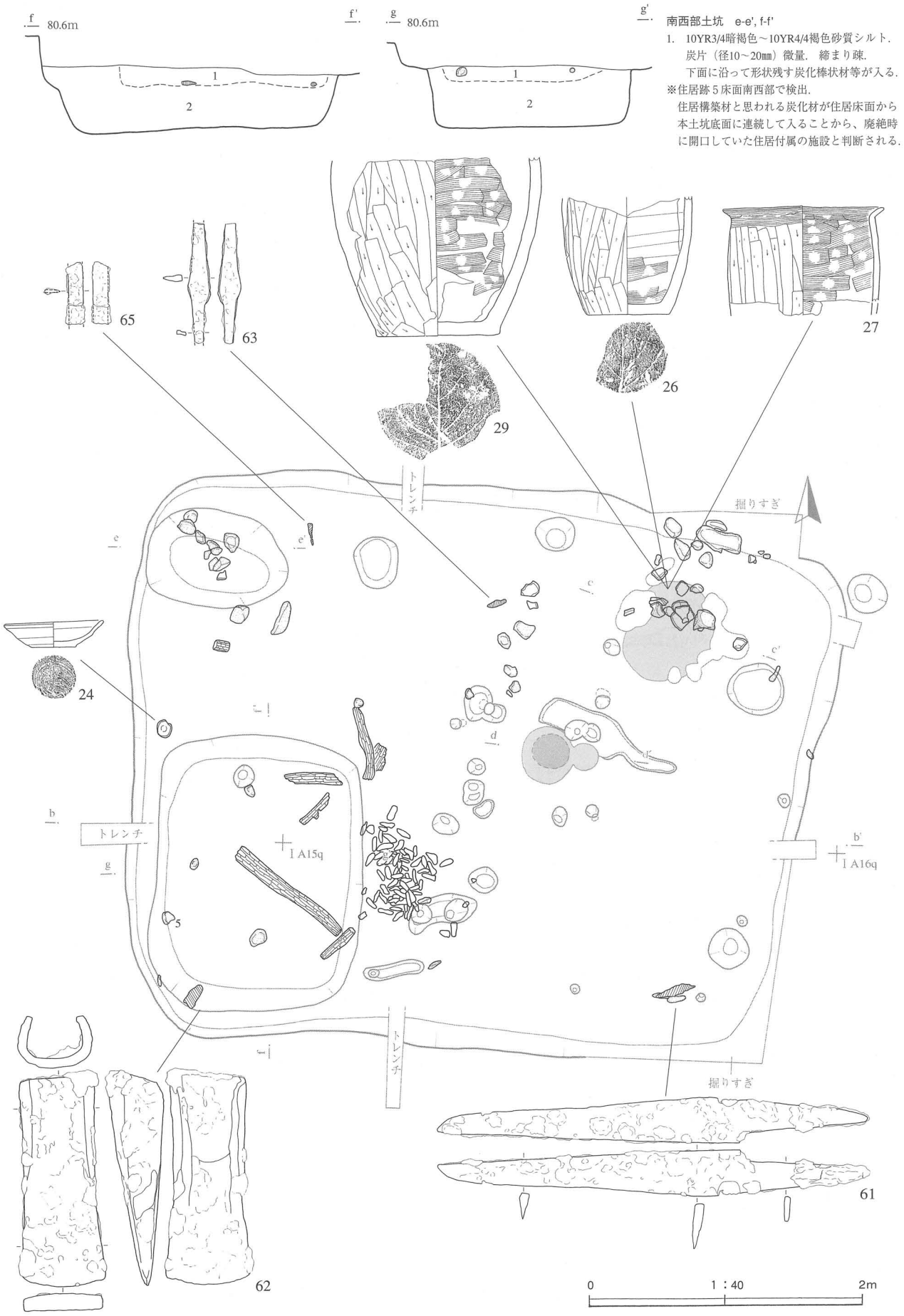


北西隅土坑 g-g'

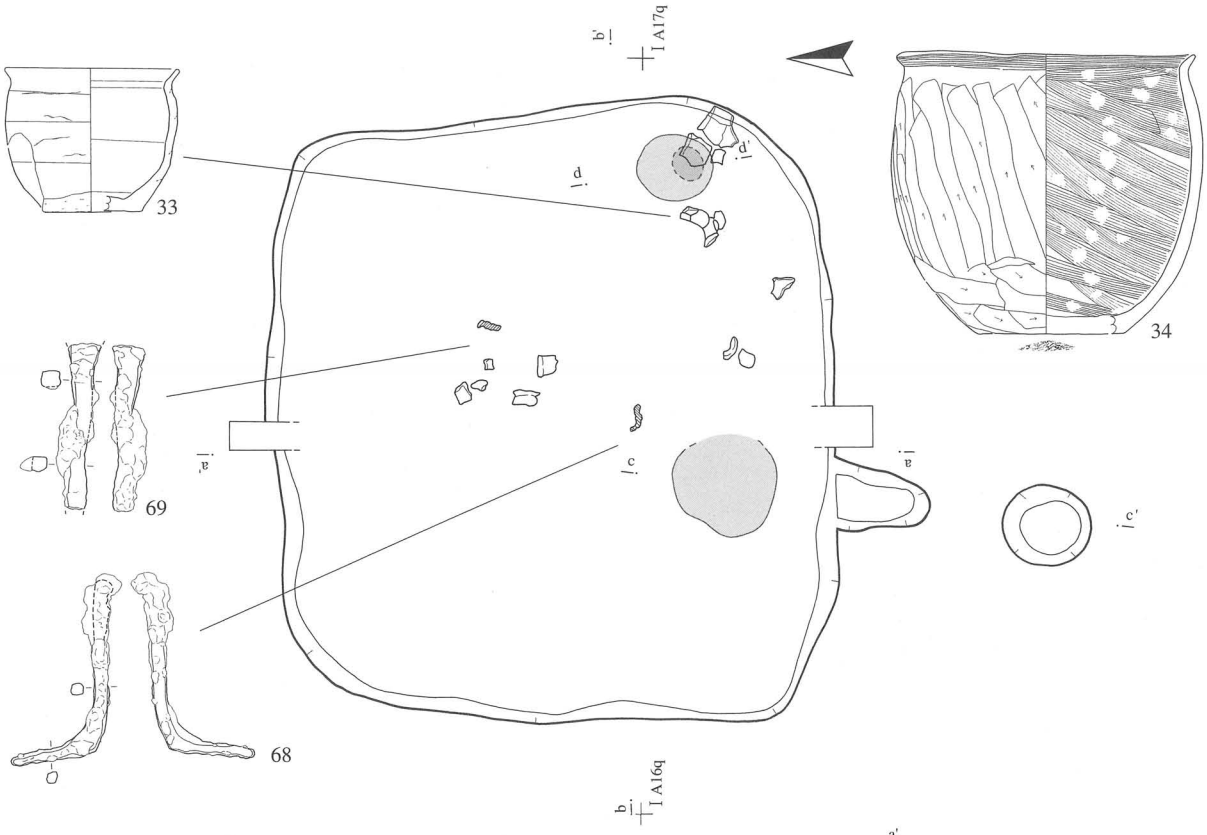
1. 10YR5/6黄褐色～10YR4/6褐色砂質シルト．炭片（径5～10㎜）微量．
2. 10YR3/3暗褐色シルト．炭片（径5～10㎜）微量．
3. 10YR3/3暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック少．炭片（径5～10㎜）少（2より多）．
※廃絶時には開口．径10㎝前後の礫まとまって出土．

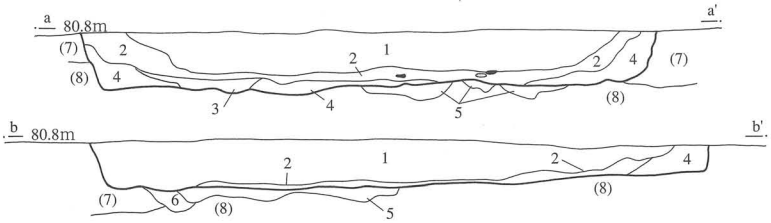
その他 0 1：40 2m
断面c～d 0 1：20 1m

第15図 A区 住居跡5（1）



第16図　A区　住居跡５（２）





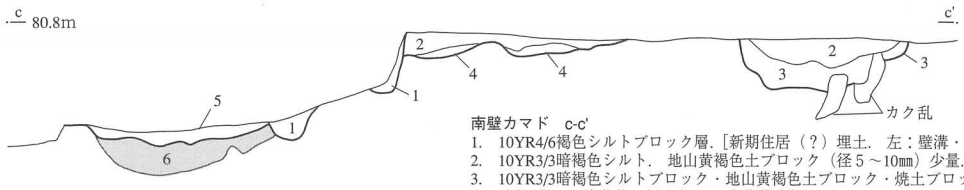
a-a', b-b'

1. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト．やや砂質．締まり密．炭粒（径２～５㎜）極微．地山黄褐色土（（7）層）より若干暗い程度であり層界（壁面）の識別困難．
2. 10YR3/4暗褐色シルト．1よりやや締まり欠き粘性に富む．炭粒微（1より多）．
3. 10YR3/4暗褐色シルト．10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック（（7）層相当）多．焼土ブロックやや多．［カマド付近の堆積土］
4. 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色シルト．1に似る．床面直上層であり壁際に厚い.下面に炭化物集中．
5. 10YR3/4暗褐色シルト．10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック多．炭微．上面に沿って明黄褐色粘土ブロックが部分的に広がる．［貼床面］
6. 10YR3/4暗褐色シルト．

(7)．10YR5/6黄褐色シルト．以下地山．

(8)．10YR4/4褐色粘土質シルト．炭粒極微．

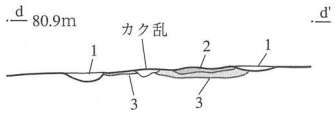
※1～4：埋土．5：貼床．6：掘方埋土．



南壁カマド c-c'

1. 10YR4/6褐色シルトブロック層．［新期住居（？）埋土．左：壁溝・右：壁面］
2. 10YR3/3暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック（径５～10㎜）少量．
3. 10YR3/3暗褐色シルトブロック・地山黄褐色土ブロック・焼土ブロックの混合層．炭粒微量．
4. 3層に似るが炭化物の混入なし．全体黄味強い．
5. 10YR4/6褐色シルトブロック層．
   （焼土の直上層だが下面層界は不明瞭．新期住居の貼床土の可能性高い）
6. 5YR4/6赤褐色シルト（カマド燃焼部焼土層）．

※古期床面に伴う旧カマド．炭化材のる新期床面の下位から検出．焼成面に硬化は認められず、斑状に攪乱されている．



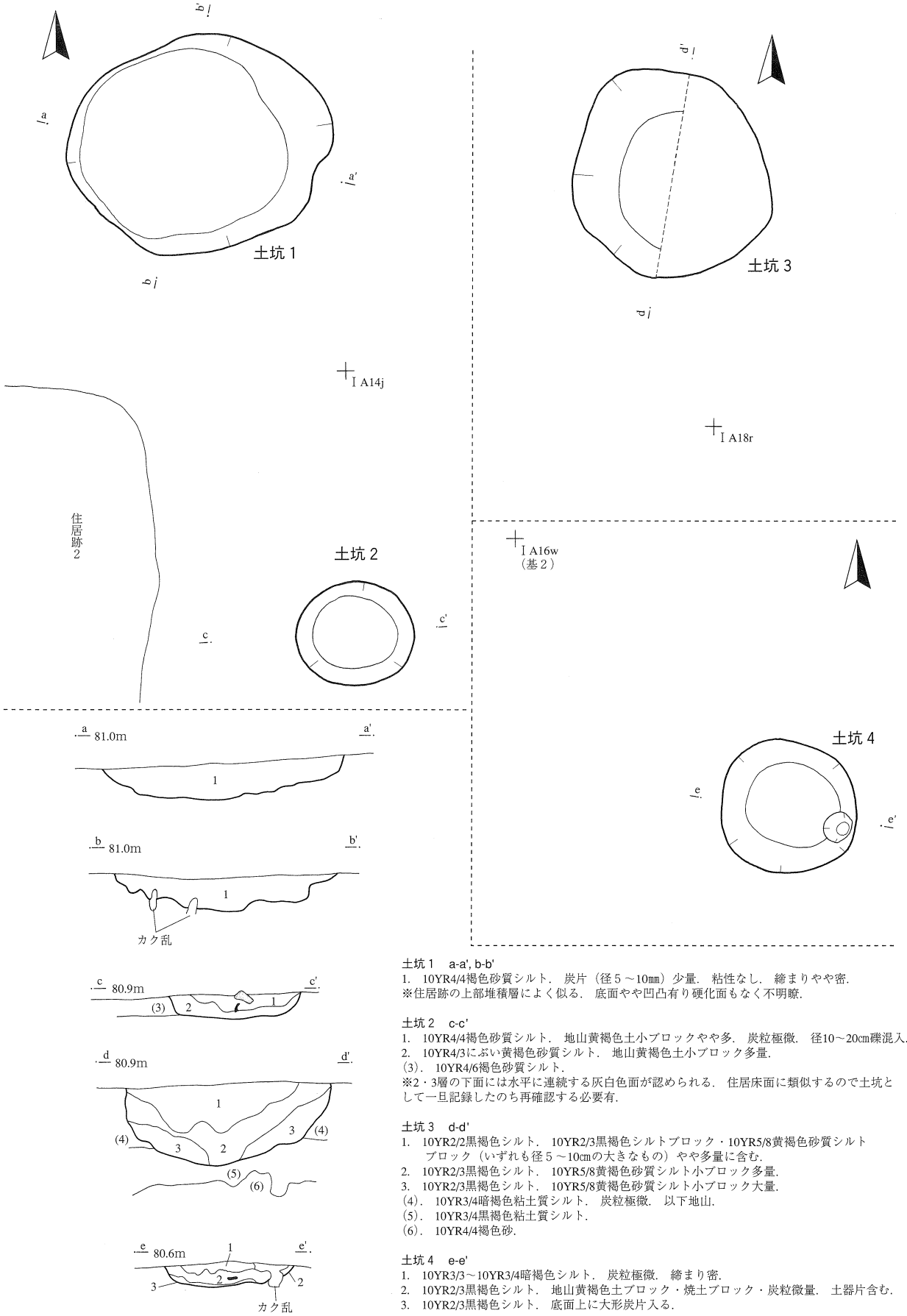
東壁焼土（新期カマド？） d-d'

1. 10YR3/3暗褐色シルト．炭粒・焼土粒やや多．カマド袖石の痕跡？
2. 7.5YR5/6明褐色シルト（焼土）．燃焼面中心部、強度の被熱部．
3. 5YR4/6赤褐色シルト（焼土）．平面では2を中心に同心円状に分布．

※住居跡６東壁際南寄り床面に生成した焼土（炉・カマド）である。煙道・煙出し穴等は未検出であり、他の住居跡との対比からこれらが削平によって失われた可能性は否定できない．南壁中央部のカマド焼土は炭化物層がのる床面のさらに下位から検出されたものであり、これを古期カマドと見れば、当該焼土は新期カマドのものである可能性が高いと判断される．

その他 0 1：40 2m
断面c・d 0 1：20 1m

第17図 A区 住居跡６



土坑１　a-a', b-b'
1.　10YR4/4褐色砂質シルト．炭片（径５～10㎜）少量．粘性なし．締まりやや密．
※住居跡の上部堆積層によく似る．底面やや凹凸有り硬化面もなく不明瞭．

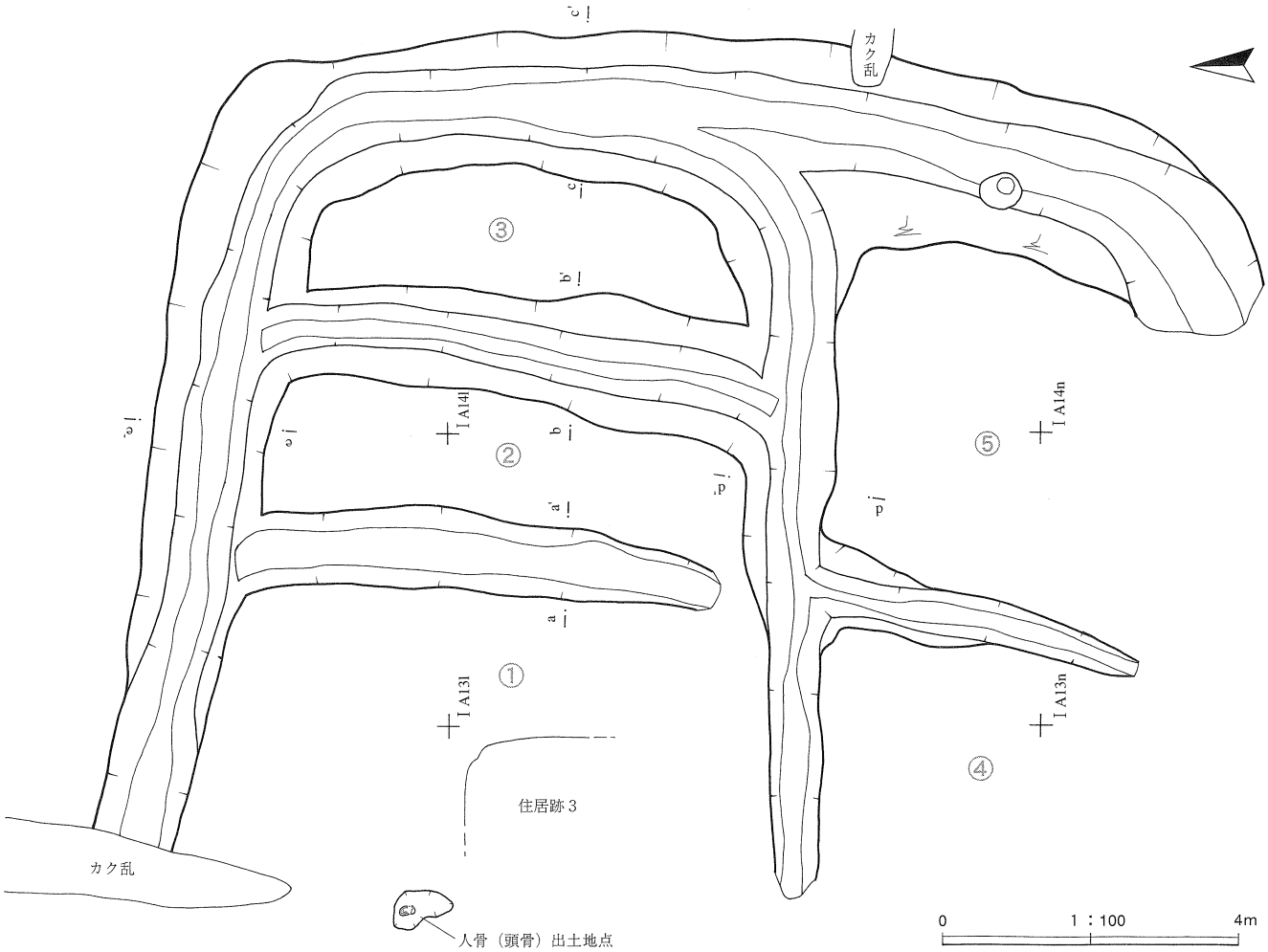
土坑２　c-c'
1.　10YR4/4褐色砂質シルト．地山黄褐色土小ブロックやや多．炭粒極微．径10～20㎝礫混入．
2.　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト．地山黄褐色土小ブロック多量．
(3)．10YR4/6褐色砂質シルト．
※2・3層の下面には水平に連続する灰白色面が認められる．住居床面に類似するので土坑として一旦記録したのち再確認する必要有．

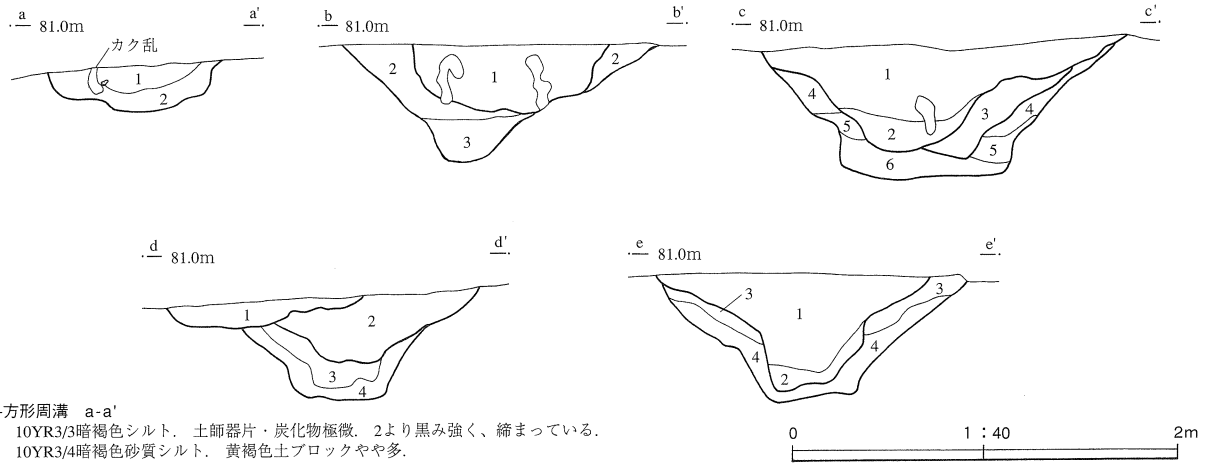
土坑３　d-d'
1.　10YR2/2黒褐色シルト．10YR2/3黒褐色シルトブロック・10YR5/8黄褐色砂質シルトブロック（いずれも径５～10㎝の大きなもの）やや多量に含む．
2.　10YR2/3黒褐色シルト．10YR5/8黄褐色砂質シルト小ブロック多量．
3.　10YR2/3黒褐色シルト．10YR5/8黄褐色砂質シルト小ブロック大量．
(4)．10YR3/4暗褐色粘土質シルト．炭粒極微．以下地山．
(5)．10YR3/4黒褐色粘土質シルト．
(6)．10YR4/4褐色砂．

土坑４　e-e'
1.　10YR3/3～10YR3/4暗褐色シルト．炭粒極微．締まり密．
2.　10YR2/3黒褐色シルト．地山黄褐色土ブロック・焼土ブロック・炭粒微量．土器片含む．
3.　10YR2/3黒褐色シルト．底面上に大形炭片入る．

0　1：40　2m

第18図　A区　土坑





A-方形周溝　a-a'
1. 10YR3/3暗褐色シルト．土師器片・炭化物極微．2より黒み強く、締まっている．
2. 10YR3/4暗褐色砂質シルト．黄褐色土ブロックやや多．

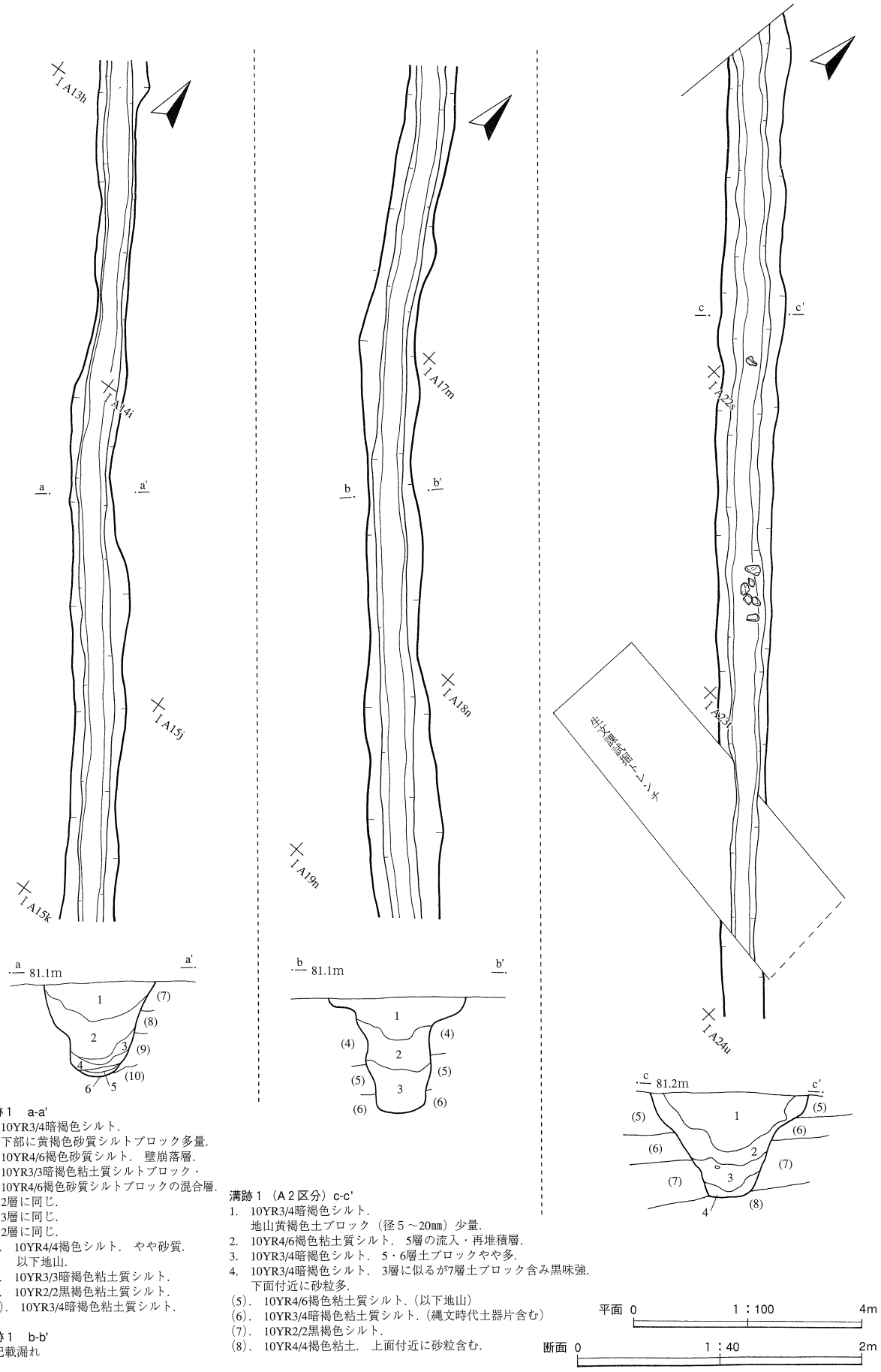
A-方形周溝　b-b'
1. 10YR3/3暗褐色シルト．締まり密．下位の2・3より黒味強く層界明瞭．
2. 10YR3/4暗褐色砂質シルト．全体に黄褐色土ブロックやや多．
3. 10YR3/4暗褐色シルト．黄褐色土小ブロック少量．炭化物粒極微．

A-方形周溝　c-c'
1. 10YR3/4暗褐色シルト．下面に沿って地山黄褐色土ブロック入る．
2. 10YR3/4暗褐色シルト．1より締まり密．
3. 10YR3/3暗褐色シルト．1・2より黒味強く、締まっている．
4. 10YR3/4暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック少．全体やや砂質．
5. 4に似るが、地山黄褐色土ブロック多量含む．
6. 10YR3/4暗褐色粘土質シルト．地山黄褐色土ブロック少．下部ややグライ化．

A-方形周溝　d-d'
1. 10YR3/4暗褐色シルト．（新期溝跡・近現代か）
2. 10YR3/4暗褐色シルト．締まり密．
3. 10YR3/3暗褐色シルト．2より黒味強く、締まり疎．
4. 10YR3/4暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロックやや多．全体やや砂質．

A-方形周溝　e-e'
1. 10YR3/3暗褐色シルト．締まり密．
2. 1に地山黄褐色土少量含む．締まり密．
3. 10YR3/4暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック少．全体やや砂質．
1・2より締まり疎．
4. 3に似るが地山黄褐色土多量含む．

第19図　A区　方形周溝

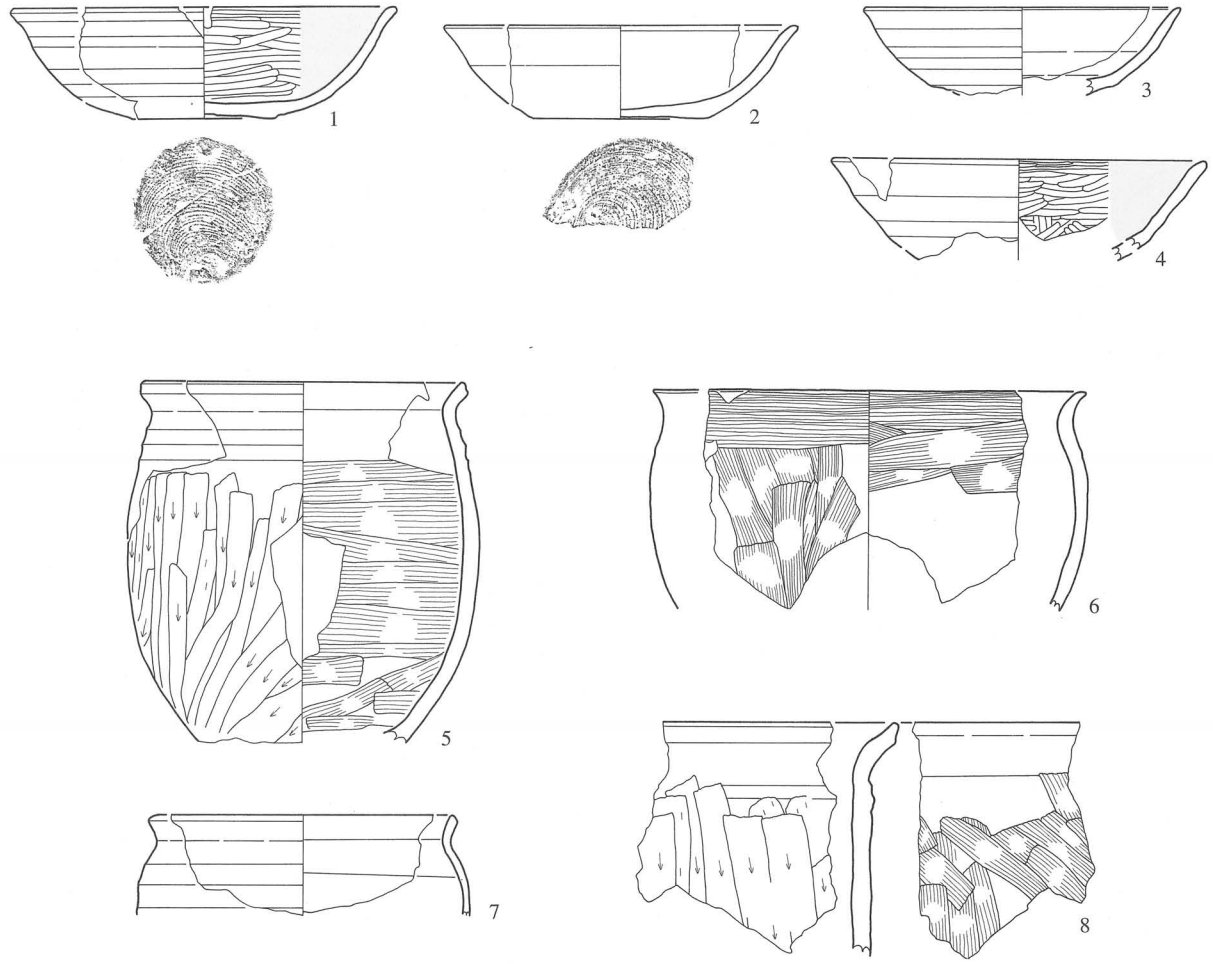


溝跡１　a-a'
1. 10YR3/4暗褐色シルト.
　下部に黄褐色砂質シルトブロック多量.
2. 10YR4/6褐色砂質シルト.　壁崩落層.
3. 10YR3/3暗褐色粘土質シルトブロック・
　10YR4/6褐色砂質シルトブロックの混合層.
4. 2層に同じ.
5. 3層に同じ.
6. 2層に同じ.
(7). 10YR4/4褐色シルト.　やや砂質.
　以下地山.
(8). 10YR3/3暗褐色粘土質シルト.
(9). 10YR2/2黒褐色粘土質シルト.
(10). 10YR3/4暗褐色粘土質シルト.

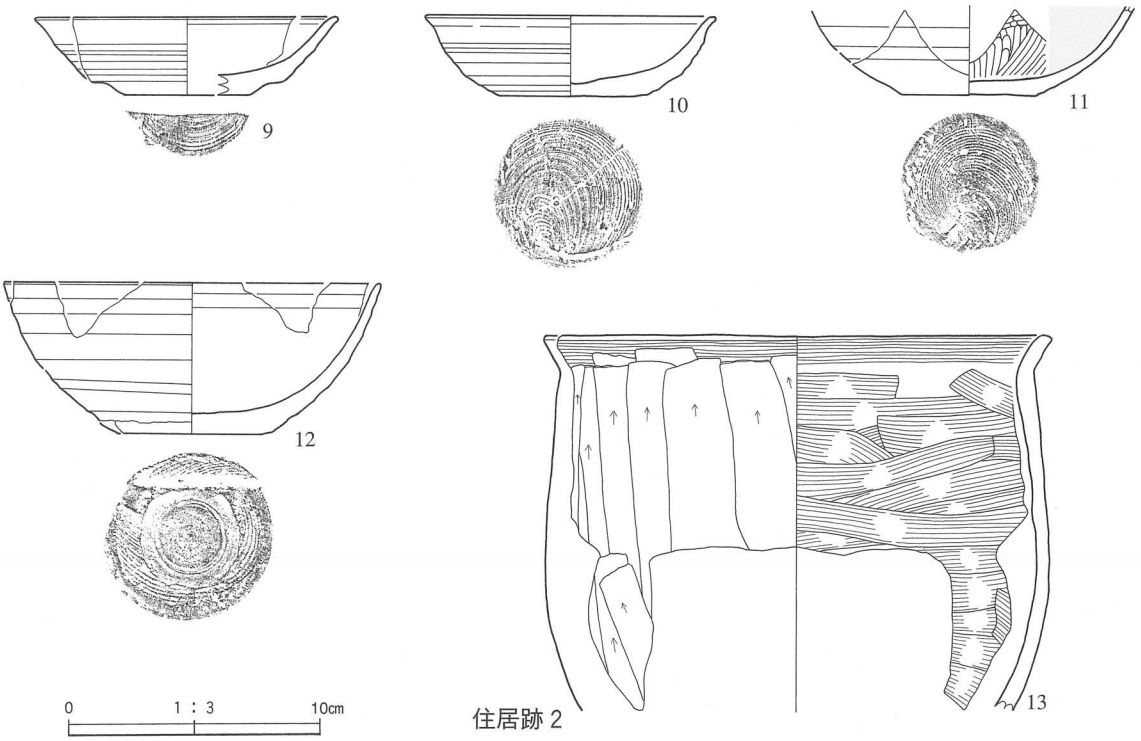
溝跡１　b-b'
※記載漏れ

溝跡１（Ａ２区分）c-c'
1. 10YR3/4暗褐色シルト.
　地山黄褐色土ブロック（径５～20㎜）少量.
2. 10YR4/6褐色粘土質シルト.　5層の流入・再堆積層.
3. 10YR3/4暗褐色シルト.　5・6層土ブロックやや多.
4. 10YR3/4暗褐色シルト.　3層に似るが7層土ブロック含み黒味強.
　下面付近に砂粒多.
(5). 10YR4/6褐色粘土質シルト.（以下地山）
(6). 10YR3/4暗褐色粘土質シルト.（縄文時代土器片含む）
(7). 10YR2/2黒褐色シルト.
(8). 10YR4/4褐色粘土.　上面付近に砂粒含む.

第20図　A区　溝跡１

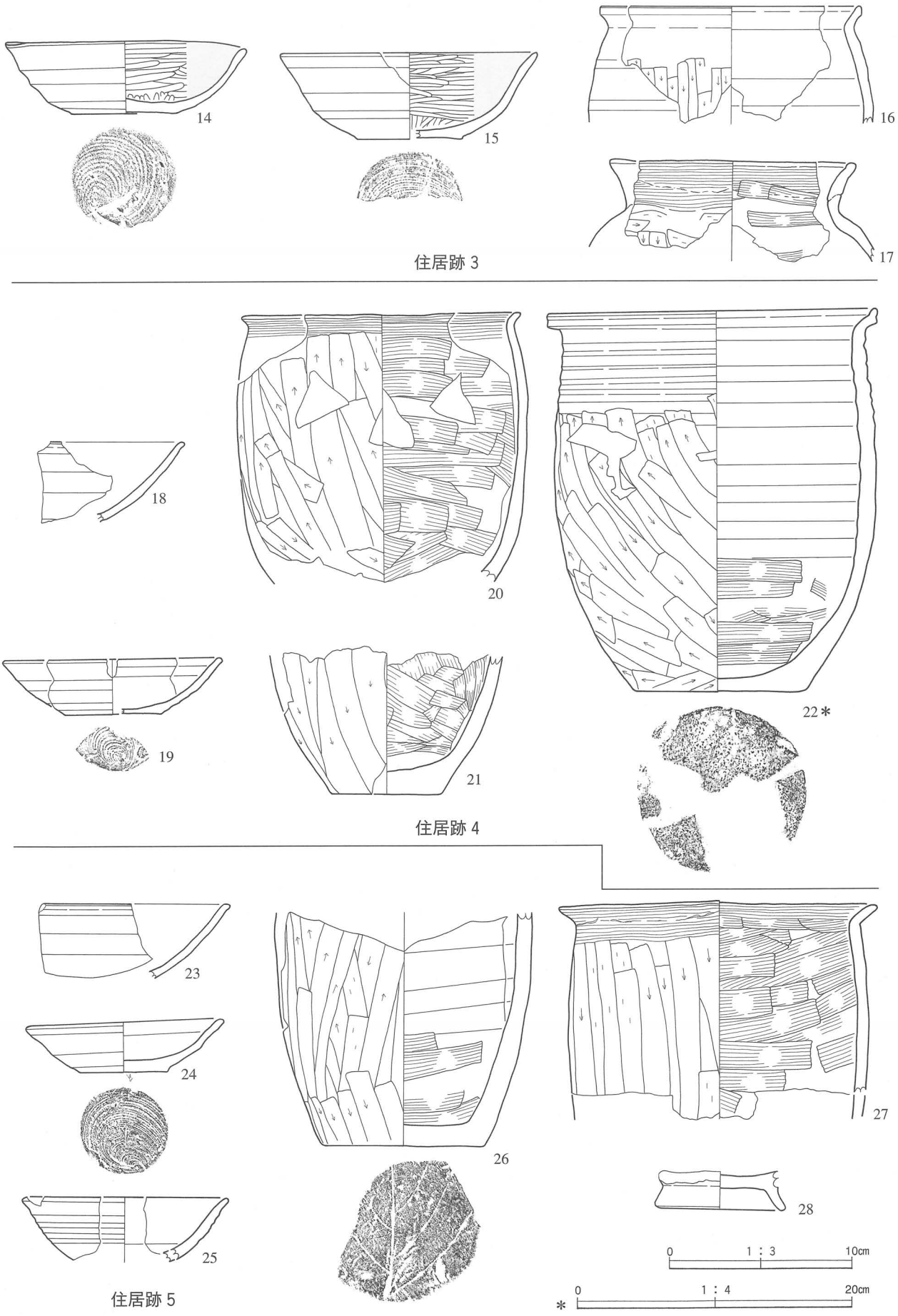


住居跡１

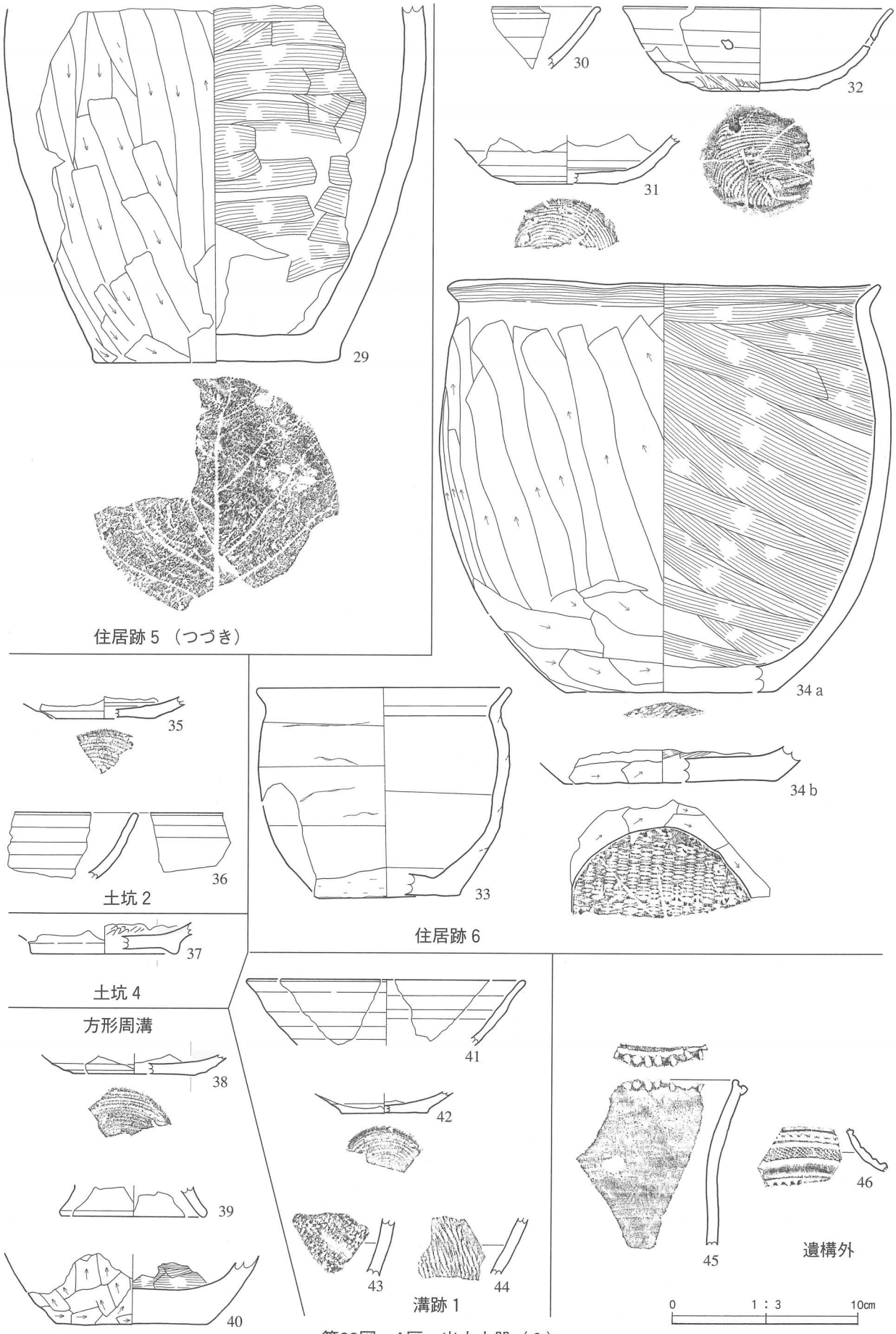


住居跡２

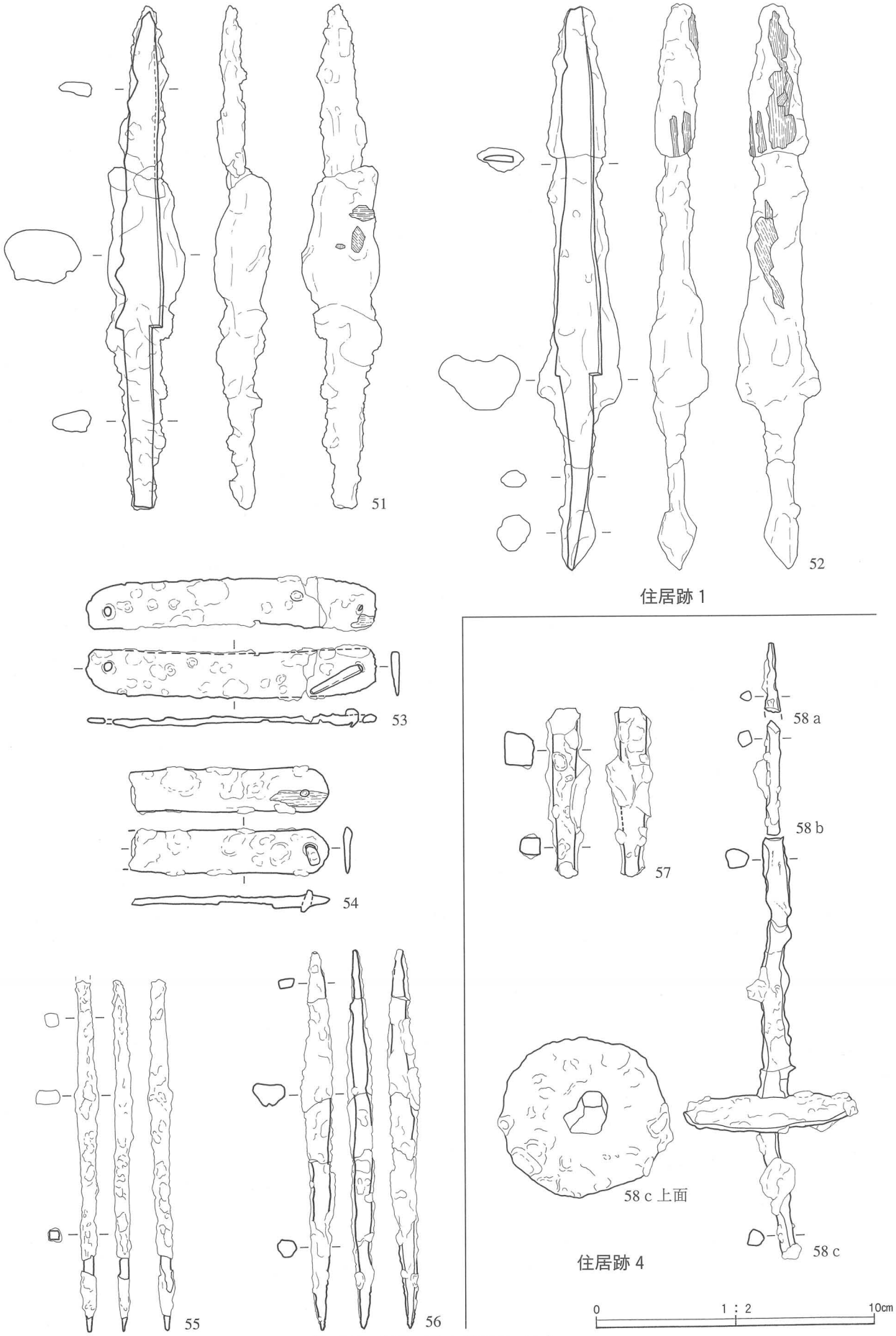
第21図　A区　出土土器（１）



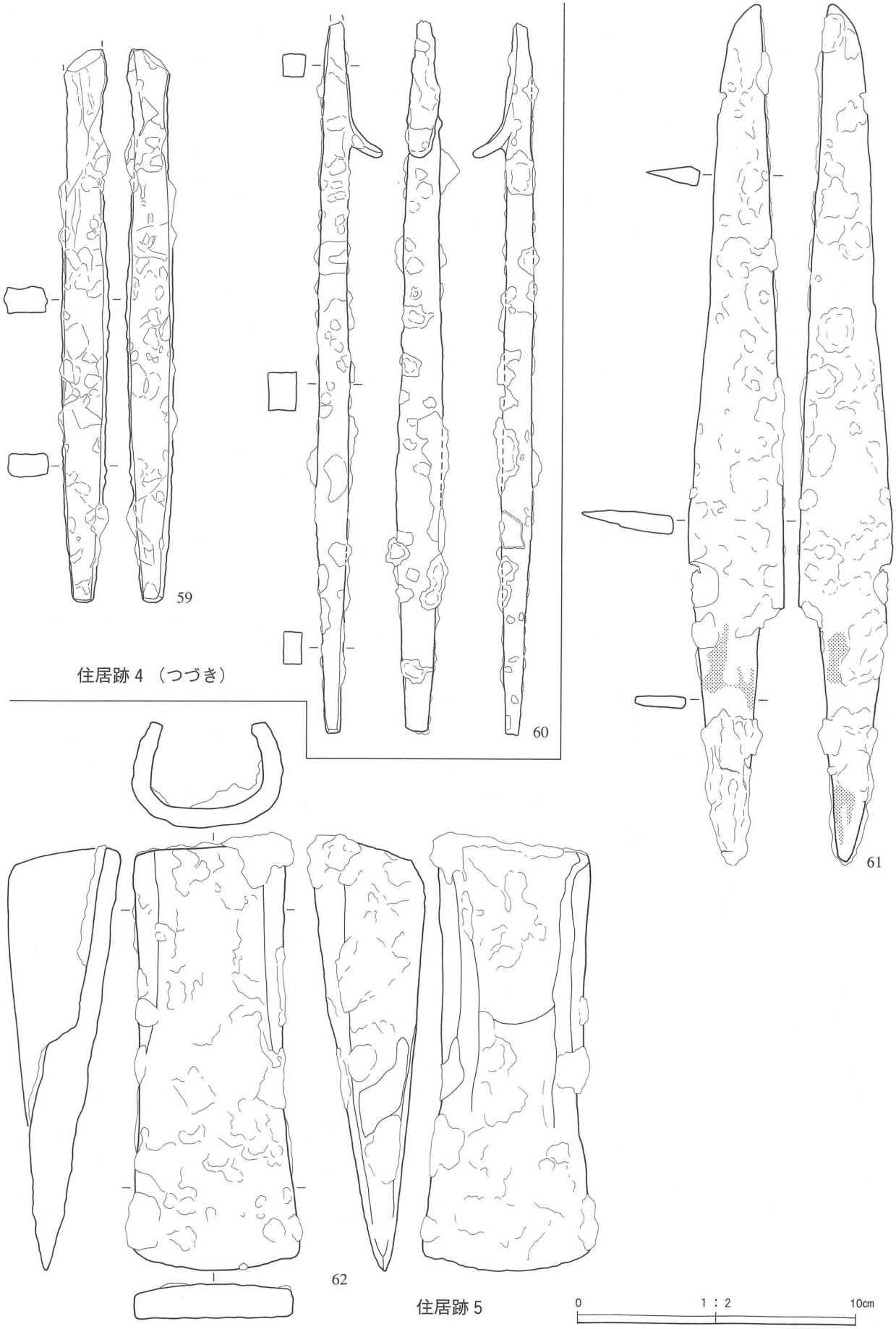
第22図　A区　出土土器（2）



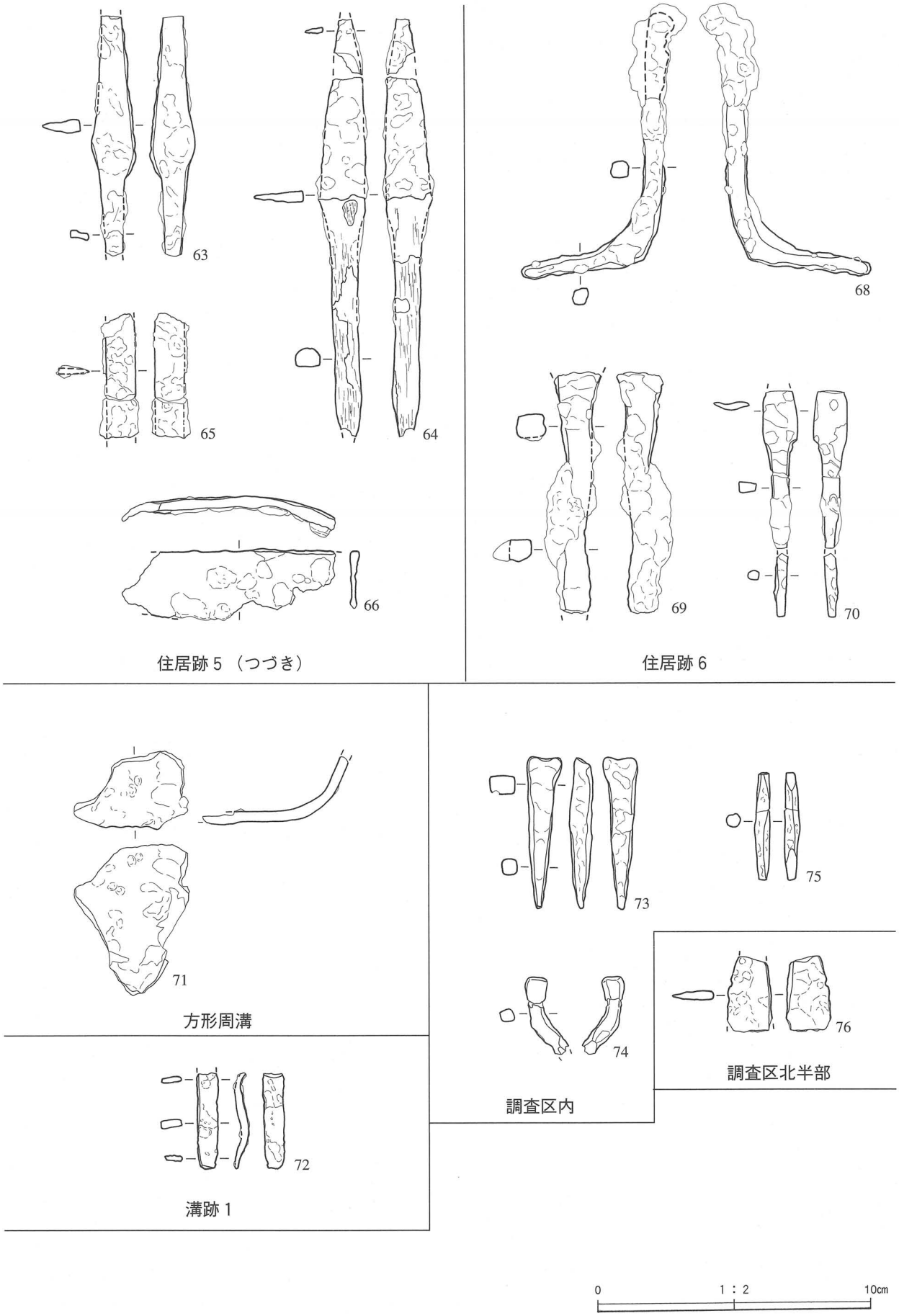
第23図　A区　出土土器（３）



第24図　A区　出土鉄製品（1）



第25図　A区　出土鉄製品（２）



第26図　A区　出土鉄製品（３）

第４表　A区　出土土器一覧

掲載番号	仮No.	出土地点（遺構名）・層位等	新遺構名	登録遺構	種別・器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	観察事項等	備　考	図版番号	写真図版番号
1	Ａ－２２	SI04カマド付近，SI04NO.1，SI04西部土坑埋土	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・坏	ロ～底	(15.2)	(5.6)	4.5	ロクロナデ　底部回転糸切り　内面黒色処理の上、ヘラミガキ		21	14
2	Ａ－１６	SI04カマド	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・坏	ロ～底	(14.0)	(7.0)	3.7	ロクロナデ		21	14
3	Ａ－１７	SI04埋土	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・坏	ロ～体	(12.5)	－	3.5<	ロクロナデ		21	14
4	Ａ－１５	SI04埋土，SI04NO.3，SI04カマド周辺，	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・坏	ロ～体	(14.8)	－	4.0<	ロクロナデ　底部回転糸切り　内面黒色処理の上、ヘラミガキ		21	14
5	Ａ－１８	SI04NO.4	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・甕	ロ～体	(12.6)	－	14.3<	ロクロナデ　体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		21	14
6	Ａ－１９	SI04カマド周辺	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・甕	ロ～体	(17.0)	－	8.7<	口縁部ヨコナデ　体部内外面ヘラナデ		21	14
7	Ａ－２１	SI04カマド周辺	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・甕	ロ～体	(11.8)	－	4.0<	ロクロナデ		21	14
8	Ａ－２０	SI04埋土	Ａ区住居跡１	SI04	土師器・甕	ロ～体	－	－	9.3<	ロクロナデ　体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		21	14
9	Ａ－２７	SI06カマド	Ａ区住居跡２	SI06	土師器・坏	ロ～底	(12.0)	(4.8)	3.1	ロクロナデ　底部回転糸切り		21	14
10	Ａ－３１	SI06カマドNO.5・NO.3	Ａ区住居跡２	SI06	土師器・坏	ロ～底	11.5	5.6	3.2	ロクロナデ　底部回転糸切り		21	14
11	Ａ－２９	SI06カマドNO.1，SI06カマド付近	Ａ区住居跡２	SI06	土師器・坏	体～底	－	5.5	3.6<	底部回転糸切り　内面黒色処理の上、ヘラミガキ		21	14
12	Ａ－２８	SI06カマドNO.6，SI06カマド付近	Ａ区住居跡２	SI06	土師器・高台坏	ロ～底	(15.0)	(6.2)	6.0<	ロクロナデ　底部回転糸切り　付高台　高台部剥落		21	14
13	Ａ－３０	SI06埋土，SI06カマドNO.4・N05	Ａ区住居跡２	SI06	土師器・甕	ロ～体	20.0	－	14.9<	口縁部ヨコナデ　体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		21	14
14	Ａ－２６	SI05カマドNO.2，SI05カマド	Ａ区住居跡３	SI05	土師器・坏	ロ～底	13.1	5.6	4.0	ロクロナデ　底部回転糸切り　内面黒色処理の上、ヘラミガキ		22	14
15	Ａ－２３	SI05カマド	Ａ区住居跡３	SI05	土師器・坏	ロ～底	(14.0)	(5.8)	4.8	ロクロナデ　底部回転糸切り　内面黒色処理の上、ヘラミガキ		22	14
16	Ａ－２４	SI05埋土	Ａ区住居跡３	SI05	土師器・甕	ロ～体	(14.2)	－	6.5<	ロクロナデ　体部外面ヘラケズリ		22	14
17	Ａ－２５	SI05埋土	Ａ区住居跡３	SI05	土師器・甕	ロ～体	(5.3)	－	6.0<	口縁部ヨコナデ　体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		22	14
18	Ａ－４４	SI01 陶器No.1	Ａ区住居跡４	SI01	灰釉陶器・碗	ロ～体	－	－	4.5<	釉薬は漬け掛け 東濃窯産（大原２号窯期）	23、30と同一個体の可能性あり。	22	14
19	Ａ－０４	SI01カマド付近	Ａ区住居跡４	SI01	土師器・坏	ロ～底	(12.0)	5.2	3.1	ロクロナデ　底部回転糸切り		22	14
20	Ａ－０２	SI01カマド付近，SI02床面直上	Ａ区住居跡４	SI01	土師器・甕	ロ～体	(15.0)	－	14.8<	口縁部ヨコナデ　体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	遺構間接合（住居跡４・住居跡６）	22	14
21	Ａ－０３	SI01カマド付近	Ａ区住居跡４	SI01	土師器・甕	体～底	－	6.0	7.6<	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		22	14
22	Ａ－０１	SI01カマド南側土坑，SI01埋土上部，SI01NO.1・NO.2，SI02NO.2，SI02カマド，SI03埋土	Ａ区住居跡４	SI01	土師器・甕	ロ～底	23.8	12.0	28.0	ロクロ　体部外面ヘラケズリ、内面下部ヘラナデ 底部砂底	遺構間接合（住居跡４・住居跡６・住居跡５）	22	14
23	Ａ－４６	SI03 陶器No.1	Ａ区住居跡５	SI03	灰釉陶器・碗	ロ～体	－	－	4.1<	釉薬は漬け掛け 東濃窯産（大原２号窯期）	18、30と同一個体の可能性あり。	22	15
24	Ａ－１２	SI03NO.4	Ａ区住居跡５	SI03	土師器・坏	ロ～底	10.8	4.8	2.8	ロクロナデ　底部回転糸切り		22	15
25	Ａ－１４	SI03NO.3，SI03北西隅土坑埋土	Ａ区住居跡５	SI03	土師器・坏	ロ～体	11.2	－	3.4<	ロクロナデ		22	15
26	Ａ－１３	SI03NO.1・NO.2	Ａ区住居跡５	SI03	土師器・甕	体～底	－	(9.0)	12.8<	ロクロ　体部外面ヘラケズリ、内面下部ヘラナデ 底部木葉痕		22	15
27	Ａ－１０	SI03NO.2，	Ａ区住居跡５	SI03	土師器・甕	ロ～底	17.4	－	12.0<	口縁部ヨコナデ　体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		22	15
28	Ａ－１１	SI03埋土	Ａ区住居跡５	SI03	土師器・高台坏	底（高台）	－	7.1	2.2<	ロクロ		22	15
29	Ａ－０９	SI03カマド周辺，SI03NO.2	Ａ区住居跡５	SI03	土師器・甕	体～底	－	13.2	19.4<	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ　底部木葉痕		23	15
30	Ａ－４５	SI02埋土	Ａ区住居跡６	SI02	灰釉陶器・碗	ロ～体	－	－	3.4<	釉薬は漬け掛け 東濃窯産（大原２号窯期）	18、23と同一個体の可能性あり。	23	15
31	Ａ－０５	SI02カマド	Ａ区住居跡６	SI02	土師器・坏	体～底	－	(5.6)	2.7<	ロクロ　底部回転糸切り		23	15
32	Ａ－０６	SI02カマド，SI03埋土	Ａ区住居跡６	SI02	土師器・坏	ロ～底	(14.5)	6.0	5.6	ロクロ　底部回転糸切り　底部付近外面ヘラナデ	遺構間接合（住居跡６・住居跡５）	23	15
33	Ａ－０７	SI02NO.1・NO.2，SI02床面直上	Ａ区住居跡６	SI02	土師器・甕	ロ～底	13.7	(7.8)	11.4	粘土紐成形、ロクロ調整		23	15
34	Ａ－０８	SI02床面直上，SI02NO.1，SI03埋土，SI06カマド付近	Ａ区住居跡６	SI02	土師器・甕	ロ～底	23.0	(11.3)	22.4	口縁部ヨコナデ　体部外面ヘラケズリ、内 面ヘラナデ 底部網代痕　赤色顔料付着	遺構間接合（住居跡６・住居跡５・住居跡２）	23	15
35	Ａ－３９	SK03埋土上部	土坑(SK03)	SK03	土師器・坏	体～底	－	(5.6)	1.2<	ロクロ　底部回転糸切り		23	15
36	Ａ－４１	SK03埋土上部	土坑(SK03)	SK03	土師器・坏	ロ～体	－	－	3.6<	ロクロ　胎土が赤みがかっている		23	15
37	Ａ－４０	SK05埋土一括	土坑(SK05)	SK05	土師器・高台坏	体～底	－	(7.6)	1.7<	ロクロ　付け高台　内面黒色処理の上、ヘラミガキ		23	15
38	Ａ－３６	SD02東辺部埋土一括	方形周溝(SD02)	SD02	土師器・坏	体～底	－	(6.6)	1.1<	ロクロ　底部回転糸切り		23	15
39	Ａ－３７	SD02東辺部埋土一括（東辺ベルト内）	方形周溝(SD02)	SD02	土師器・高台坏	底（高台）	－	(7.8)	1.7<	ロクロ		23	15
40	Ａ－３８	SD04埋土一括	方形周溝(SD04)	SD04	土師器・甕	体～底	－	8.0	3.8<	体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		23	15
41	Ａ－３２	SD01埋土一括	溝跡１	SD01	土師器・坏	ロ～体	(15.0)	－	3.6<	ロクロ		23	15
42	Ａ－３５	SD01埋土一括	溝跡１	SD01	土師器・坏	底	－	(4.6)	1.1<	ロクロ　底部回転糸切り		23	15
43	Ａ－３４	SD01底面～壁面黒色土	溝跡１	SD01	縄文土器	体	－	－	－	単節ＲＬ		23	15
44	Ａ－３３	SD01底面～壁面黒色土	溝跡１	SD01	縄文土器	体	－	－	－	無節ＲＬ		23	15
45	Ａ－４３	SX01黒褐色土	遺構外	遺構外	縄文土器	ロ～頸	－	－	9.0<	刺突痕あり		23	15
46	Ａ－４２	SX01黒褐色土	遺構外	遺構外	縄文土器	頸	－	－	－	ミガキ　単節ＲＬ		23	15

第５表　A区　出土鉄製品一覧

掲載番号	仮No.	新遺構名	出土遺構	地点	層位	器種	残存部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版番号	写真図版番号
51	A－24	A区住居跡1	SI4	No.6		刀子	ほぼ完形	18.2	2.8	2.0	51.7	錆落とし前･木質あり	24	16
52	A－23	A区住居跡1	SI4	No.5		刀子	ほぼ完形	20.4	3.0	2.0	49.8	錆落とし前･木質あり	24	16
53	A－25	A区住居跡1	SI4	No.3		穂摘み具	完形	2.0	10.3	0.7	10.9	穿孔部に木質あり	24	16
54	A－21	A区住居跡1	SI4	P1　No.4		穂摘み具	左端部欠損	1.7	7.2	0.8	7.4	穿孔部に木質あり	24	16
55	A－18	A区住居跡1	SI4	No.2		棒状(角)製品	上部欠損	12.7	0.9	0.5	8.4		24	16
56	A－22	A区住居跡1	SI4	No.1		棒状製品	完形	13.7	1.1	0.9	12.9		24	16
57	A－11	A区住居跡4	SI1	No.3		棒状製品	不明	6.1	1.6	1.4	13.7		24	16
58	A－ 4	A区住居跡4	SI1	No.1	埋土	紡錘車	ほぼ完形	23.2	1.0	0.5	65.2	円形部分半径3.0cm、厚0.3cm。内、a:0.6g　b:4.08g	24	16
59	A－2b	A区住居跡4	SI1	No.2b		銛？	先端部欠損	20.1	1.9	1.0	139.6		25	16
60	A－2a	A区住居跡4	SI1	No.2a		銛？	完形	25.7	2.2	1.4	172.1		25	16
61	A－ 1	A区住居跡5	SI3	No.1		短刀	完形	31.2	3.4	0.7	142.4	顔料付着	25	17
62	A－ 3	A区住居跡5	SI3	No.4		袋状鉄斧	完形	15.8	6.4	4.2	646.2		25	17
63	A－ 6	A区住居跡5	SI3	No.2		刀子	両端部欠損	8.9	1.6	0.5	10.7		26	17
64	A－ 8	A区住居跡5	SI3	No.3		刀子	上端部欠損	15.4	1.9	0.7	22.1		26	17
65	A－ 9	A区住居跡5	SI3	No.3		板状鉄片	不明	4.6	1.5	0.5	4.0		26	17
66	A－14	A区住居跡5	SI3	かまど付近		板状鉄片	不明	2.6	7.8	1.6	18.9		26	17
67	A－17	A区住居跡5	SI3	かまど付近	埋土上部	鉄滓	不明					実測省略. 写真掲載.		17
68	A－ 5	A区住居跡6	SI2	No.2		釘	ほぼ完形	10.1	6.2	0.7	30.6	L字形。	26	17
69	A－ 7	A区住居跡6	SI2	No.1		棒状製品	不明	8.9	2.1	1.0	31.3		26	18
70	A－12	A区住居跡6	SI2	北壁際	床上10cm	刀子	上部欠損	8.3	1.3	0.4	5.1		26	18
71	A－26	方形周溝	SD5		埋土	鉄鍋	底部破片	2.9	4.2	0.5	27.7	器高<2.4>	26	18
72	A－19	溝跡1	SD1		埋土	棒状製品(S字)	上部欠損	3.6	0.8	0.4	1.6		26	18
73	A－20	調査区内	表採			釘	完形	5.5	1.3	0.9	5.9		26	18
74	A－13a	調査区内	一括	検出面		釘	完形	2.8	1.5	0.5	2.2		26	18
75	A－13b	調査区内	一括	検出面		棒状製品	完形	4.0	0.6	0.5	1.9		26	18
76	A－10	調査区北半部	北半検出面	検出面		刀子？	不明	2.8	1.7	0.4	4.1		26	18

第6表 A区 住居跡5出土棒状礫一覧

袋No.	個別番号	新遺構名	登録遺構	位置・層位	日付	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質・産地	備考
1	1	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	110.81	9.2	3.5	2.3	KO	
1	2	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	141.45	11.45	3.5	2.9	KO	
1	3	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	87.54	10.8	3.45	1.75	KO	
1	4	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	154.93	11.25	3.35	2.25	SGK	
1	5	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	115.19	9.3	3.6	2.8	KO	
1	6	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	111.16	9.5	3.8	3.05	KO	
1	7	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	146.55	10.85	3.7	2.75	AO3	
1	8	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	81.15	8.9	3.45	1.95	SEK	
1	9	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	66.38	(6.1)	3.75	2.2		
1	10	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	77.9	10.5	3.35	1.9	SEK	
1	11	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	154.1	11	3.65	3	KO	
1	12	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	154.53	(14.8)	3.9	2.5	KO	
1	13	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	108.69	9.45	2.85	2.75	SEK	
1	14	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	154.65	13.45	3.5	(3.05)		
1	15	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	134.3	11.45	3.3	3.05		残破片 12.58g
2	1	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	167.38	12.05	3.7	3.4	DO	
2	2	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	141.03	10	3.7	2.6	KO	
2	3	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	109.69	10	3.8	2.45	DO	
2	4	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	183.11	9.1	4.65	3	AO3	
2	5	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	125.54	11.8	3.75	2.3	KO	
2	6	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	123.96	10.4	3.85	2.3	HK	
2	7	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	111.69	9.45	3.65	2.3	KK	
2	8	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	119.24	10.15	3.65	2.4	DO	
2	9	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	165.14	(12)	3.4	2.35	KO	
2	10	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	147.76	10.7	3.45	2.65	KK	
2	11	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	201.78	13.75	3.9	2.75	AO3	残破片 2.59g
3	1	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	90.35	9.1	3.6	2	KO	
3	2	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	79.26	9.3	3.1	2.2	KO	
3	3	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	93.72	9.2	3.1	2.65	KO	
3	4	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	161.89	10.85	3.5	2.55	KO	
3	5	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	133.49	11.3	3.55	2.5	SEK	
3	6	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	138.28	10.1	3.2	2.4	KK	
3	7	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	133.84	9.5	3.05	2.9	AO3	
3	8	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	118.23	11.6	4.35	1.75	KO	
3	9	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	161.14	10.75	4.6	2.4	HK	
3	10	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	140.4	11	3.65	2.95	AO3	
3	11	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	89.14	8.6	3.15	2.1	AO3	
3	12	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	73.54	(6.65)	3.45	2.85	KO	
3	13	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	33.77	(7.05)	(3.75)	(1.3)		
3	14	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	44.76	(8.15)	4.3	(2.15)		残破片 27.94g
4	1	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	108.42	8.5	3.5	2.15	SEK	
4	2	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	128.12	9.3	3.05	2.9	AO3	
4	3	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	116.47	10.05	3.15	2.35	KK	
4	4	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	97.02	10	3.95	1.65	KK	
4	5	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	143.71	11.35	4.05	1.55	SEK	
4	6	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	211.46	11.2	3.9	3.35	KK	
4	7	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	200.68	15.2	3.25	3.05	KO	
4	8	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	159	9.65	3.35	3.65	KK	
4	9	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	169.82	10.5	4.65	2.9	SEK	
4	10	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	103.53	12.15	3.35	2.15	KK	
4	11	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	122.15	10.15	3.9	2.75	JK	
4	12	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	171	14.6	3.95	1.55	KK	
4	13	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	140.15	11.8	4.15	2.35	AO3	
4	14	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	188.7	11.3	4.45	2.6	AO3	
4	15	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	136.82	9.7	3.85	2.5	KO	
4	16	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	111.4	9.65	3.55	(2.35)	KK	
4	17	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	34.9	(7.85)	(3.05)	(1.15)	KO	
4	18	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	30.43	(4.7)	2.25	(2.05)		
4	19	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 14	19.41	(6.45)	(3.15)	(1.45)		残破片 15.2g
5	1	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	181.32	12.45	5.05	2.55	AO3	
5	2	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	139.58	10.9	4.4	2.4	KO	
5	3	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	187.61	10.55	4.95	2.9	KO	
5	4	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	140.05	14.05	3.9	2.45	SGK	
5	5	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	174.85	12.05	3.6	3.55	DO	
5	6	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	102.67	10.85	3.75	2.6	GKO	
5	7	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	111.61	9.7	2.9	2.65	DO	
5	8	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	177.97	12.45	4.35	2.15	SGK	
5	9	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	142.22	12.45	4	1.9	AO3	
5	10	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	131.34	9.8	3.85	2.6	AO3	
5	11	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	122.12	10.65	3.6	2.15	AO3	
5	12	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	103.35	10.8	3.2	2.05	AO3	
5	13	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	207.48	11.05	(3.7)	3.7	AO3	
5	14	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	168.47	11.3	5.1	2.7	SGK	
5	15	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	128.71	11.65	3.4	2.85	KO	
5	16	A区住居跡5	A-SI 3	南西部床面集中レキ	04 06 11	97.12	(10.5)	3.6	2		

3　B区上位面の調査

（1）竪穴住居跡

住居跡１（第27図、写真図版19）

【位置・検出状況】　Ｂ１区南西部、ＩB20ｄ～21ｅグリッド付近に位置する。B-Ⅳ層上面において、周囲より若干暗く、焼土ブロック・炭化物等が希薄に分布する不整形な範囲として検出された。

【規模・形状】　平面形は3.9×3.5ｍの概ね隅丸方形を呈する。床面までの残存深は最大８㎝である。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土はB-Ⅲ層相当の暗褐色シルトである。B-Ⅳ層類似のブロックを多く含むため黄色味が強く、埋土と壁面・床面の識別は困難だった。全体が床面近くまで削平を受け、さらに耕作による溝状・土坑状の攪乱が床面を部分的に破壊していた。

【壁・柱穴・周溝・床面など】　床面中央は概ね平坦で硬化が認められるが、部分的に攪乱による凹凸をもつ。外周側に緩やかに高まって上端へと連続するため、壁面の明瞭な立ち上がりは認められない。北壁沿いには壁溝状の細長い掘り込みが検出されている。住居内部からは７基の柱穴状ピットが検出され、うち６基（ｐｐ２～６）は住居中央部を横断するように東西方向に列状に並んでいる。ｐｐ５には拳大の礫が充填されていた。これらのピットのうち明らかに住居跡に帰属するものを抽出することはできなかった。

【カマド・炉跡】　床面からは計３箇所の焼土を検出した。三者のうち最大の規模を持つのは北東隅に位置する焼土（炉１）であり、平面形が90×60㎝の楕円形を呈する。中央～北部が攪乱を受けており、本来の燃焼面と思われる硬化面は南部に残存するのみである。断面観察から中央部が皿状にくぼんだ燃焼部を持っていたものと推測され、当住居跡に伴うカマドの痕跡である可能性が高い。A区の住居跡と同様、煙道部は確認されなかった。住居内出土の僅かな遺物はこの付近に集中しており、周辺の床面には焼土ブロック・焼粘土塊及び被熱した角礫片が広がっていた。

南東部に位置する焼土（炉２）は、平面形が長さ54㎝・幅28㎝の雪ダルマ形を呈する。硬化面が認められないのは上部を削平されているためであろう。一方、南西隅の焼土（炉３）は径32㎝の円形を呈し、環状に形成された硬化部の中央が椀状に窪んでいる。両者とも、A区住居跡の床面に見られる炉跡に類似する。

【重　　複】　南壁東部で土坑２と重複する。床面で検出されたものであるが、互いの埋土は類似しており、同時（住居に付属）の可能性が高い。詳細後述［→（２）土坑　土坑２］。

【出土遺物】（第28図、写真図版23）　北東部焼土（カマド？）周辺から、土師器の小形甕片（101・102）、内面黒色処理の土師器坏小片、回転糸切痕を持つ土師器坏底部小片が出土している。

【遺構の時期】　埋土および出土遺物から、平安時代（10世紀初頭）に属するものと考えられる。

（2）土　　坑

土坑１（第27図、写真図版20）

【位置・検出状況】　Ｂ１区南西部、ＩB20ｅグリッドに位置する。B-Ⅳ層上面において、焼土ブロック・炭化物を含み、根攪乱と重複する不整形な範囲として検出された。

【規模・形状】　平面形は径80㎝程度の円～楕円形を呈するものと思われるが、精査段階で東半部を掘りすぎたため本来の形状は不明となった。開口部から底面までの深さは18㎝である。底面は中央部がやや窪み、いったん広がって内弯しながら立ち上がる。南壁が急な立ち上がりであるのに対し、北壁側開口部は若干広がって緩い傾斜となっている。

【埋土と堆積状況】　底面中央のくぼみには多量の焼土ブロック・炭化物に加え、青みを帯びた黒色ブロックが埋積しており、一見、住居跡のカマド煙道部や煙出部に見られる埋土に類似している。この上位を、黄褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土が覆っている。断面観察等から、埋土は開口部が広がる北側上方から流入したものと判断される。

【重　　複】　重複遺構はない。東側に住居跡１が近接している。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　時期を示す出土遺物がなく詳細は不明であるが、埋土の様相が平安時代竪穴住居跡に類似することから当該期に帰属する可能性が高いと判断される。

土坑２（第27図、写真図版20）

【位置・検出状況】　Ｂ１区南西部、ⅠB21ｅグリッドに位置する。住居跡１の埋土を除去した後の床面上において、周囲よりやや暗い範囲として検出された。

【規模・形状】　平面形は120×90㎝の隅丸長方形で、開口部から底面までの深さは17㎝である。四壁は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦に整っている。

【埋土と堆積状況】　底面上には焼土ブロックを含む暗褐色土が流入し、その上を住居跡１埋土類似の土が覆っている。焼土ブロックは、住居跡１の床面上に形成された焼土のいずれかを起源とするものと考えられる。

【重　　複】　南壁側を除く大半が住居跡１の内部と重複する。平面・断面による新旧関係の確認はできていないが、堆積状況から住居跡１に付属の施設である蓋然性が高い。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　住居跡１と同様、平安時代（10世紀初頭）に属するものと判断される。

（３）溝　　跡

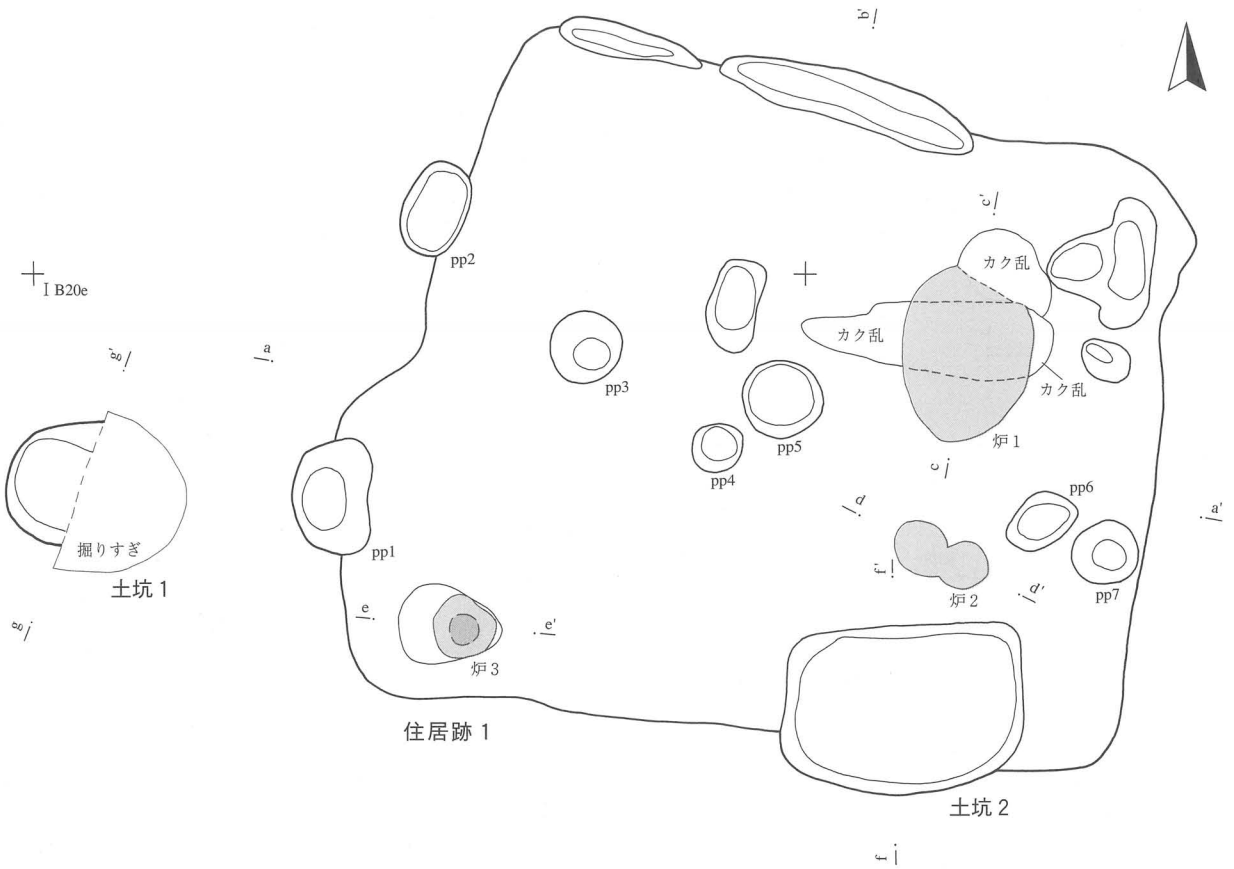
溝跡１（第28図、写真図版20）

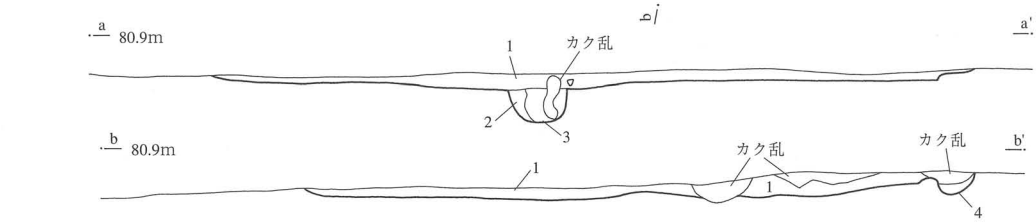
【位置・検出状況】　Ｂ１区東部～Ｂ２区に位置する。B-Ⅲ層上面付近において、Ｂ１区東部を南北方向に縦断する幅３ｍほどの帯状の暗いしみとして検出された。当遺構を当初予定調査範囲（Ｂ１区）の北側に追跡するため、新たに拡張した範囲がＢ２区である。

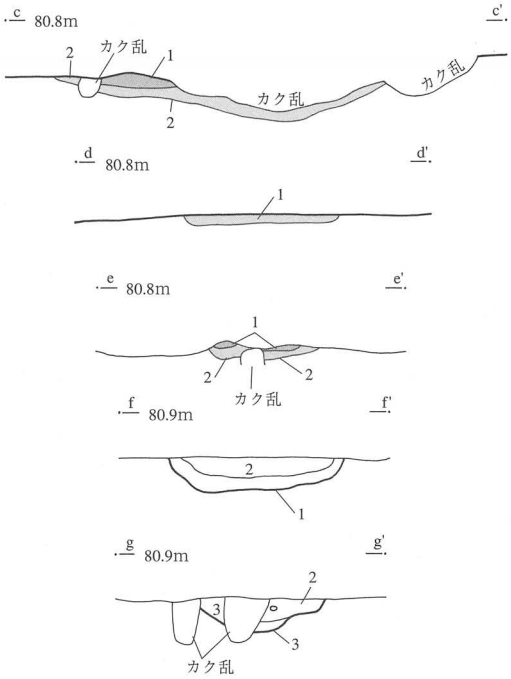
【規模・形状】　Ｂ１区南端（ⅠB22ｆグリッド付近）から北側に向かってほぼ直線的に走行し、Ｂ１区北部でやや西に傾く。そこから再び北側に延びてＢ２区北部（ⅠA23ｘグリッド付近）で屈曲し、走行方向を東向きに変える。両端はそれぞれ調査区外へと続くため全体の形状・規模は不明であるが、調査区内に現れた部分の全長は31ｍを測る。南半部（Ｂ１区側）では検出時の幅が３ｍ程度と広かったが、精査を進めたところ周囲の上面が溝に向かって緩やかに下っているためであることが判明し、結果、開口部の幅は60～80㎝ほどに落ち着いた。北半部（Ｂ２区側）ではこれよりやや広くなり、100～120㎝の幅をもつ。上半部は本来の開口部が崩落したためか緩やかな壁面となっているが、下半部は概ね逆台形の断面形を呈し急角度の壁面を持つ。底面標高は80.2～80.3ｍで、いずれか一方への傾斜は見られない。全体的な形態はA区で検出されたA区溝跡１に類似している。

【埋土と堆積状況】　埋土の主体土はB-Ⅲ層相当の暗褐色シルトで、埋土下部には壁面崩落に伴うと推測されるB-Ⅳ層の黄褐色土ブロックが多量に入る。北半部ではこの層の上面に径20㎝程度の礫が点在する。堆積状況から流水の痕跡は認められず、水路としての機能は想定されない。

【重　　複】　重複遺構はない。







住居跡1　a-a', b-b'
1. 10YR4/4褐色シルト．粘性やや有．締まり密．全体に地山ブロック含み黄味強．
2. 10YR3/4暗褐色シルト．地山ブロックやや多．[柱穴掘り方埋土]
3. 10YR3/4暗褐色シルト．[柱穴柱痕]
4. 10YR4/4褐色シルト．地山ブロックやや多．住居壁際に平行する溝状の掘り込みの埋土．壁溝の可能性あるが、住居中央を切る溝状撹乱とも平行し埋土も似ることから住居に伴う確証なく不明．

炉1　c-c'
1. 5YR5/8シルト（強変焼土）．
2. 5YR4/4シルト（焼土）．
※本来、強変硬化面は上面全面にあったものと思われるが、撹乱により中央～北側では失われている．カマドと思われるが住居全体が削平を受けており、不明である．

炉2　d-d'
1. 5YR4/4シルト（焼土）．
※現地性のもの．平面形ヒョウタン形（だるま形）．

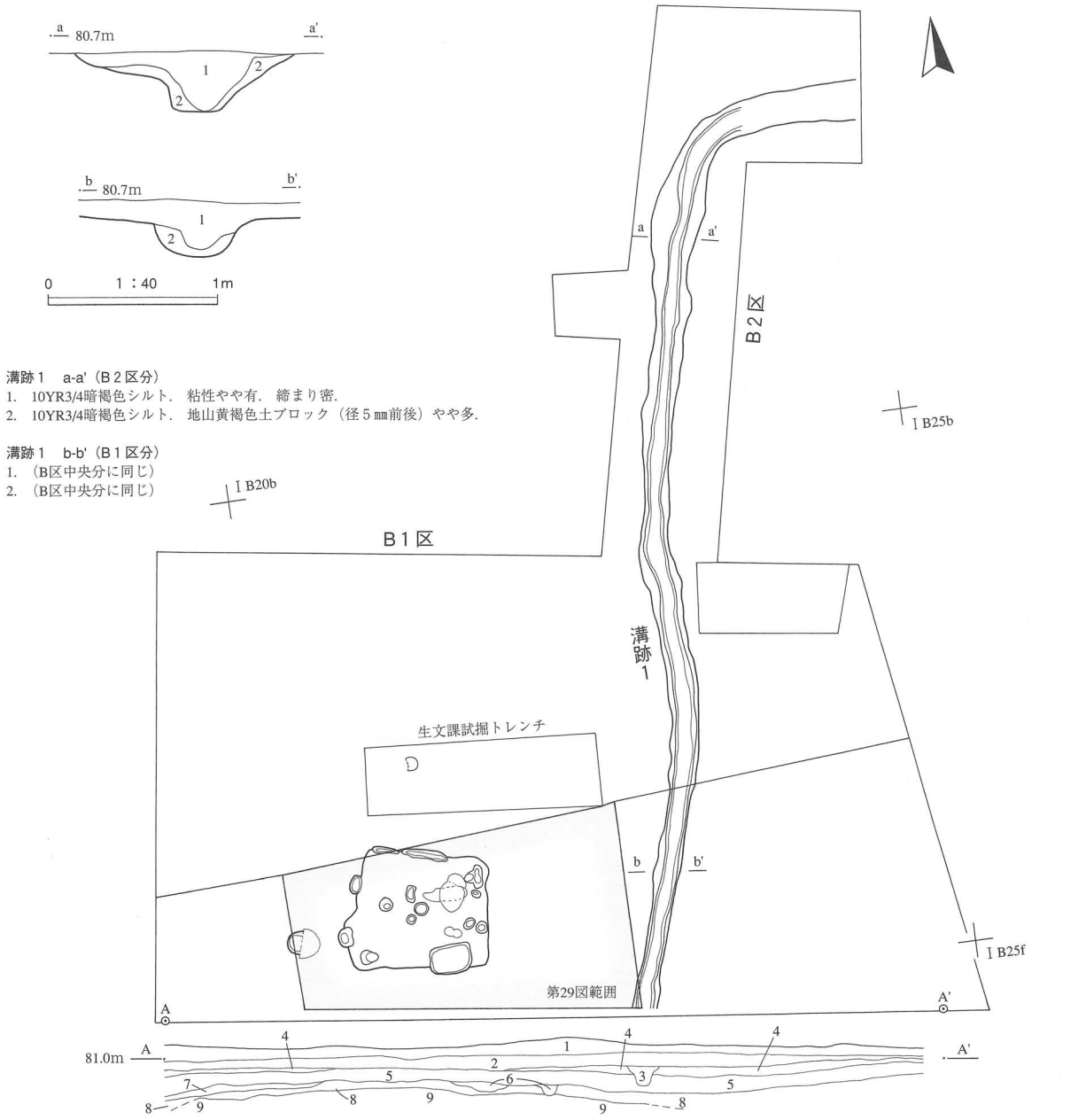
炉3　e-e'
1. 5YR5/8シルト（強変焼土）.ガリガリに硬化．
2. 5YR4/4シルト（焼土）．
※強変焼土は中央が凹んで環状に形成されている．鍛冶炉？

土坑2　f-f'
1. 10YR3/4暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロックやや多．炭粒極微．
2. 10YR3/4暗褐色粘土質シルト．焼土ブロック点在．

土坑1　g-g'
1. 10YR3/4暗褐色シルト・焼土ブロック・炭片・地山ブロックの混合層．（2・3層の混合層．撹乱？）
2. 10YR4/4褐色～10YR3/4暗褐色シルト．地山黄褐色土ブロック多量．
3. 焼土ブロック・炭片の混合層．

その他　0　1：40　2m
断面c・d・e　0　1：20　1m

第27図　B区上位面　住居跡・土坑



第28図　B区上位面　検出遺構・出土遺物

【出土遺物】　土器細片と礫が出土している。
【遺構の時期】　A区溝跡１に類似することからこれらと近い時期に構築されたものと推測される。概ね平安時代～中世と考えたい。

（４）遺構外出土遺物（第28図103～105、写真図版23）

土師器小形甕口縁部片（103）・回転糸切痕をのこす土師器坏底部（104）は、上記遺構検出面から出土したものである。住居跡はじめ上記の平安時代遺構に関連する遺物と考えられる。

105は中国産青磁である。9～10世紀頃の越州窯系の小碗または小杯とみられる。Ｂ１区の東隣に接する区域で表採されたものであり、調査範囲外での発見ではあるがここに報告することとする。

4　B区下位面の調査

（１）調査範囲の設定と調査方法（第28・29図）

①調査範囲の設定

B区において上面が平安時代遺構の検出面となっている黄褐色シルト層（B-Ⅳ層）は、先述のとおり、旧地形を被覆して遺跡周辺の地形を一変させた洪水堆積層である。本調査に先立ち実施された県教育委員会による試掘調査では、この洪水堆積層の下位に、弥生時代後期に相当する遺物の分布と焼土遺構、炭化物が所在することが確認されていた。今回の調査で設定したトレンチでも下位の埋蔵文化財分布面が再確認され、これらの取り扱いについて岩手県教育委員会生涯学習文化課と協議した結果、調査原因であるほ場整備事業の施工設計では、Ｂ１区の中央部を境界に南北別の田区となる計画であり、北側田区の造成は下位面の埋蔵文化財に達しないことから開削せずにそのまま保存することとし、下位面まで掘削の及ぶ南側田区の範囲のみ下位面の調査を行うこととなった。

②調査方法

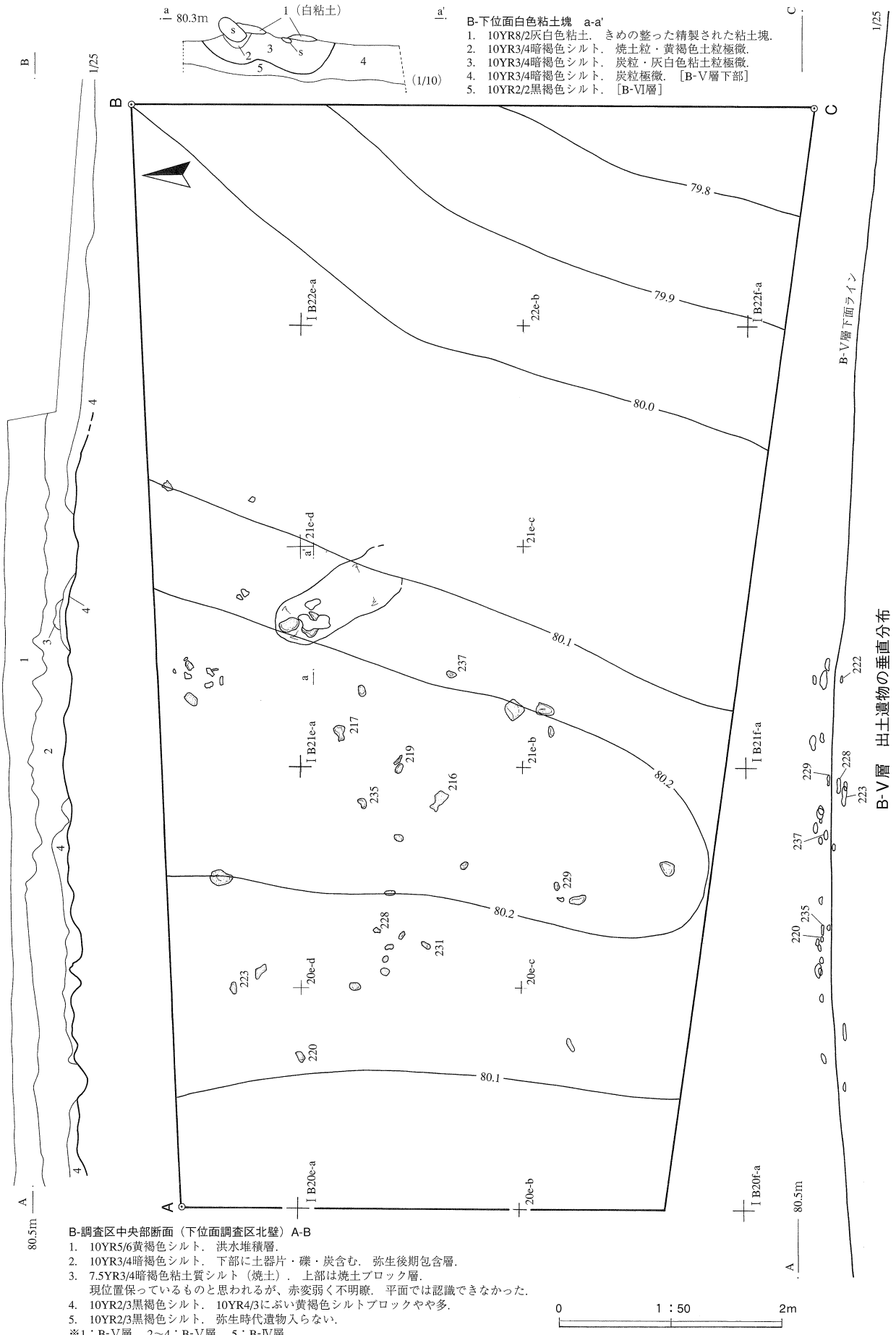
まず、南側田区の一部となる範囲のB-Ⅳ層を除去し、B-Ⅴ層の上面をあらわした。ここで遺構検出を試みたところ、土器片・石器剥片・炭化物等が散発的に出土しはじめたが、掘り込みを伴う遺構のプランは確認できなかった。これらの遺物が仮に遺構内に位置するものであったとしても、遺構そのものの範囲を識別できない可能性が高く、遺物の出土地点の記録はより精密に行う必要があると思われた。そこで、今回の調査で設定した４ｍ四方の小グリッドをさらに２ｍ四方に４分割し、遺物の一括取上げに用いるより小さい区割を設定した。この新たな小区画の呼称は、北西区を「-ａ」、南西区を「-ｂ」、南東区を「-ｃ」、北東区を「-ｄ」とし、従来の小グリッド名の後に連続させて「ⅠB21ｅ-ａ」のように表記することとした。

この小区画を元に、はじめは市松模様状に掘り下げ、遺物の分布が認められる範囲についてさらに面的に広げるようにして精査を進めた。

（２）弥生時代後期の遺物分布域（第29図、写真図版21・22）

①地形と土層堆積状況

洪水堆積層（B-Ⅳ層）被覆以前の調査地点付近の地形は、ⅠB21ｄ-ｂ～ⅠB20ｅ-ｃグリッド付近を頂部とする南北に細長い微高地となっており、これを境に東側及び西側に向かって緩やかに傾斜し低位面へと連続している。この微高地は北上川の流路に平行して形成された自然堤防の一つで、周辺は同様の細長い微高地と低湿地がやや複雑に入り組んだ地形を呈していたものと推測される。一帯の小



第29図　B区下位面　遺物出土状況図

規模な起伏は、後の洪水堆積層に覆われることによって次第に平滑化され段丘状を呈する現況に至ったものと考えられる。

第29図左の断面図A-BはB区下位面調査範囲の北辺における土層堆積状況を示したもので、B-Ⅴ層に相当するのは２～４層である。遺物を包含するのは２層の下部で、その下位に鈍い黄褐色シルトのブロックを含む黒褐色シルト層の４層をはさみ、その下位の黒褐色シルト層（５層＝B-Ⅵ層）へと連続する。２層の下面は凹凸が顕著で、これらは４層上面においては径50㎝前後の小規模で不整形な落ち込みとして斑状に点在するのが認められる。

②遺物出土状況（第９表）

B区下位面の調査で確認されたのは、弥生時代後期に帰属すると思われる土器片と、これらに伴う剥片石器類、礫、焼土・炭化物などである。

出土土器片の総重量は2,488ｇで、全体量の３分の１強を出土したⅠB21ｄ-ｂグリッドをピークに微高地頂部に相当する範囲から集中的に出土している。完形またはそれに近い状況で出土した個体はないが、同一個体と思われる破片は近接した位置から集中して出土しており、遺棄地点の原位置をほぼ保っているものと推測される。土器片が集中するⅠB21ｄ-ｂグリッドに接する調査区北辺断面A-Bでは、被熱変化の度合いが弱い焼土が確認され、付近には焼土ブロック及び炭化物の分布も認められる。

石器類の分布範囲もまた土器片のそれとほぼ重複し、微高地頂部に集中する傾向にある。頁岩を母材とする石核及び剥片は合計1,957ｇ出土した。内訳は石核1,147ｇ、剥片類810ｇである。剥片出土重量のピークは土器と同じくⅠB21ｄ-ｂグリッドにありこれに隣接する区画にかけて濃い分布を示す。石核の分布もこれとほぼ重複するが、重量・個体数とも微高地頂部の西側（ⅠB20ｄ-ｃ～ⅠB20ｅ-ｃグリッド付近）にピークをもち、剥片類のそれとは微妙なずれが看取される。

人為的に持ち込まれた可能性が高い自然礫も42個・9,409ｇ出土している。やはり土器片と同様ⅠB21ｄ-ｂグリッドを中心とした分布である。後掲したのはこれらのうち使用痕跡を残すもの及び使用された可能性があるもの10個である。

このほか、個別の記載は後ろに譲るが、複数の石鏃が近接して出土しており、弥生時代後期土器に共伴した出土例として特徴的といえる。出土地点はⅠB20ｅ-ｄ～ⅠB21ｅ-ａグリッド付近に集中している。特に、他の遺物がB-Ⅴ層の下部において水平方向への広がりを持って出土するのに対し、石鏃は、包含層である２層（第29図左；断面A-B）を掘り下げた後に、４層上面に斑状にのこった落ち込みの中から顔を出す場合が多かった。

第29図右に示したのは、微高地を横断するA-C間におけるB-Ⅴ層下面ラインに、礫石器等の出土標高を投影したものである。およそ80.3ｍ付近に水平な分布が認められる一方、明らかにB-Ⅴ層下面、すなわちB-Ⅵ層上面を上から切り込み、さらに低い位置から出土したものも含まれていることがわかる。石鏃にみられるように、B-Ⅴ層下面の凹部に入り込んだ遺物を含むため、遺物出土標高は上下に幅を持った状況となっている。

③不整形の溝状掘り込みに伴う灰白色粘土塊（第29図、写真図版22）

ⅠB21ｄ-ｂ～ⅠB21ｅ-ａグリッドにおいて、長さ1.3ｍ、幅40㎝ほどの不整形な溝状の掘り込みが検出され、埋土上部から灰白色の粘土塊が出土した。精製された粘土のようにきめが整っており、下位に置かれた拳大の礫を上から覆っていた。粘土塊と礫の下位に堆積した埋土には粘土塊と同様に灰白色を呈する粘土粒と炭化物が含まれる。溝状掘り込みの底面は不整な凹凸が目立ち、プランも南側で不明瞭となるなど、安定した形状の掘り込みを意図したものとは考えづらい。当遺構の機能・性格については不明であるが、検出面や埋土、周囲の遺物出土状況から弥生時代後期に帰属すると考えられる。

（3）出　土　遺　物

①土器（第30図、写真図版23・24）

201～215の計15点を掲載した。

201は甕形土器で、胴上部で張り頸部でややくびれ口縁部にかけて外傾して立ち上がる。最大径は口縁部にもつ。口唇はナデによって平坦な面を形成し、口縁部下はわずかに肥厚する。胴部上半から頸部にかけては、施文の前にヘラケズリ様の縦方向の調整が施されており、下方からナデ上げた工具を口縁部下で止めることにより口縁の肥厚部と頸部との境界が際立たされている。さらに口縁部下にはヘラ状工具先端の角で刺突した横長の列点文が全周し、頸部との区画を強調している。地文に用いられている原体は縄文RLと思われるが、特殊な表出（「撚糸文」様・「附加状縄文」様）を見せているため一見それとは思われない。これについては次章で改めて触れることとする。口縁部及び頸部下端では、同縄文原体を横回転させて施文し、これにより上下を区画された頸部は無紋帯としてのこされている。胴部中央以下では下部ほど施文方向が右下がりになり、１単位が数本の条の束となる表出文様の向きも、胴中央部では右下がり、胴下部ではほぼ垂直方向となっている。よく精製された粘土に粗砂をわずかに含んだ胎土であり、器壁は規模に比して薄く堅緻で焼成も良好である。内面は横～斜めのナデにより調整されているが、外面ほど丁寧ではなく輪積痕をよく残している。これによれば、積み上げられた粘土紐の太さは1.2～1.5cm程度と細いものであることがわかる。口縁部の肥厚部や張り出した胴上部ではススの付着が顕著で、また内面にも胴部中央以下にコゲが付着することから、煮沸具として利用されたことは明らかである。一対の補修孔が認められるが、一方が穿孔途中の状態で放棄されている。

202もまた甕形土器で、各種の調整や地文施文方法、ス・コゲの状況や補修孔をもつことなど、201との共通点は多い。器形は201に比して小振り・細身で、胴上部の張りは控えめである。最も異なる点は、口縁部から頸部に施された沈線文である。口縁部と頸部の境界が横長の列点文によって区画される点は同じだが、この刺突列の上位に沈線による連続山形文が全周し、さらに山形文の頂部を区画するように横走沈線が刻まれている。言い換えれば、上を横走沈線、下を列点文に区画された連続山形文が、口縁部下に全周しているのである。また、頸部無文帯の一部には、極めて細く弱い沈線により、曲線主体の意匠不明な文様が描かれている。202のほかにも、209・210など頸部付近に沈線による文様帯をもつものが認められ、直線・曲線の組み合わせによる自由な沈線文が用いられていることが理解される。

211～215は底部資料である。201・202など口縁や胴部が大きく張る土器の底部も含まれていると思われるが、底径は８～６cmと小さい。これらの土器が胴下部から底部にかけて急激にすぼまり、小さい底部をもつものであることを示していると思われる。

このほか、頸部がやや強くすぼまって壺形に近い形態をとるもの（208）、口唇面に刻みをもつもの（207）、底面に地文の施文が認められるもの（211・215）などがあり、該期土器のバラエティを示している。

②石器（第31～34図、写真図版25・26）

石鏃およびそれに類すると思われる石器（216～222）

216～219は刃部と基部の境界が明瞭な分銅形の石鏃である。216・217は、両面加工によりほぼ全周縁を整形され、刃部と基部の間に打ち欠きと敲打によって作り出された抉りをもつ。216・217はほぼ同規模の基部を有するが、216の刃部が縦長の長方形～楕円形であるのに対し、217は下端が直線的な半円形を呈し著しく短い刃部となっている。本来216と同様の形状であった217が、折損等によって刃

部下半を失い、その後再調整を受けて現形状に至った可能性がある。218・219は全長が10cmに満たない小形のもので、刃部の上端に摘み状の小規模な基部をもつ。刃部下端や基部両側縁付近にわずかに細部加工剥離が認められることから、目的的な整形加工を受けたものであることは明らかであるが、全体の加工痕跡は極めて少なく素材の原形から大きく変化していないものと思われる。未成品や粗製品、あるいは本来的に216・217とは性格を異にする石器であった可能性がある。

220・221は、216・217と同様に周縁を両面剥離で整形された板状の石器である。長方形に近い形状で一端を欠損している。221は両側縁の中央部が敲打による整形を受けていることから、216・217のような石鏃の基部であった可能性が高いと思われる。222は218・219に形態が類似する石片だが、細部加工が認められない。素材として保持されていたものか。

以上は、いずれも板状に剥離するやや目の粗い頁岩を素材としている。

石鏃および未成品？（223・224）

223は有茎の凹基鏃である。幅広で下端が尖らない長方形の茎部が特徴的である。また、先端部には一単位の幅が１㎜強程の極めて細かい細部加工剥離が集中している。加工具の細さ・鋭利さを示すものと思われる。この個体は、側縁の一部と脚部（かえし）の一方を欠損しているが、側縁の欠損は裏面（図右面）の火ハネによって生じたものであり、また、脚部を失わせた剥離も側縁欠損部から発したものであることから、両者は同一原因により同時的に生じた欠損であると考えられる。周囲において同一素材の石核・剥片類がまとまって出土していることから、製作途中あるいはその直後の段階に位置づけられる遺物といえよう。224は石匙の摘みに似た突起をもつ石器であるが、細部加工は突起部以外に認められず周縁に刃部の形成も無いことから石匙とは考えられない。223の茎部によく似た突起を持つ点や、大きさが同程度であることなどから、石鏃の未成品である可能性をもつものとしてここに掲載した。

石材はいずれも緻密な頁岩である。

石核（225～232）

調査範囲からは先述のとおり緻密な頁岩を母材とする合計1,957ｇの石核・剥片類が出土している。これらのうちから石核を抜き出しここに示した。石核の剥離面を観察すると、まず、母岩の一端を打撃して最初の剥離面を形成した後、順次、剥離面を打点として表裏両面に剥片の剥取を進めているものが多い。産出されるのは小形でやや厚みのある横長の剥片が中心である。

母岩とされているのは硬質で緻密な頁岩で、原形を残す個体がなく不確定ではあるが径10～15cmほどの大きさのものが選択・採用されているようである。

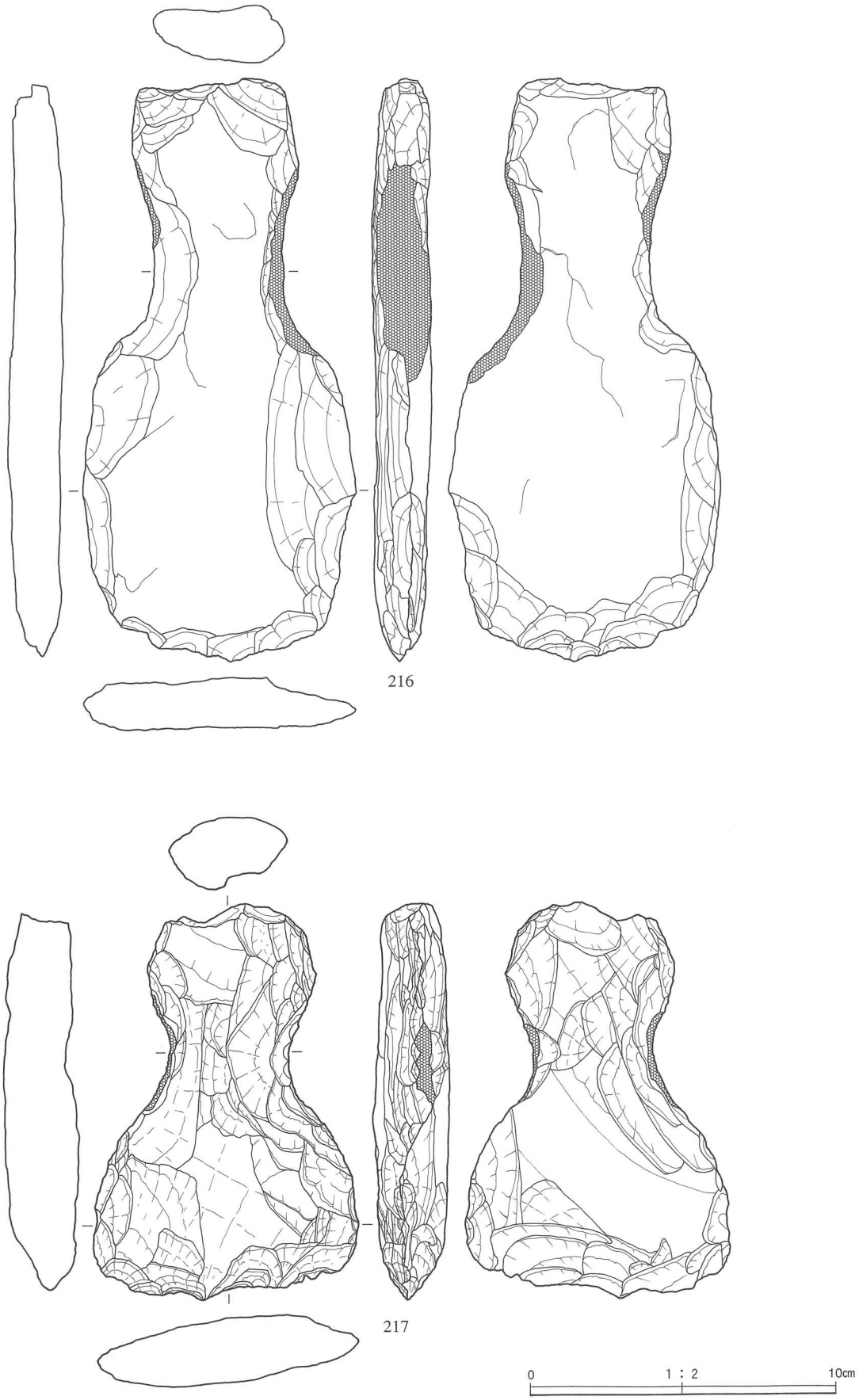
磨敲器およびそれに類する礫（233～242）

調査範囲からは合計42個・９kg強の礫が出土している。これらのうち人為的作用の痕跡をのこす石器、および形態等からそれに類すると思われる礫、計10点を掲載した。石器としたものの多くに共通して認められるのは、礫表面の角張った部位に選択的に集中している敲打痕である（233～238）。長軸両端や表裏面中央部ではなく、面と面の変換点に生じた突端部を対象物に打ちつけることにより生じた使用痕と考えられる。周囲の遺物出土状況等から、石器製作のハンマーとして用いられた可能性を指摘しておきたい。また、使用痕は確認できないが、240・241のような均整のとれた楕円形礫もまた、石器製作に用いる意図のもとに持ち込まれた可能性があろう。

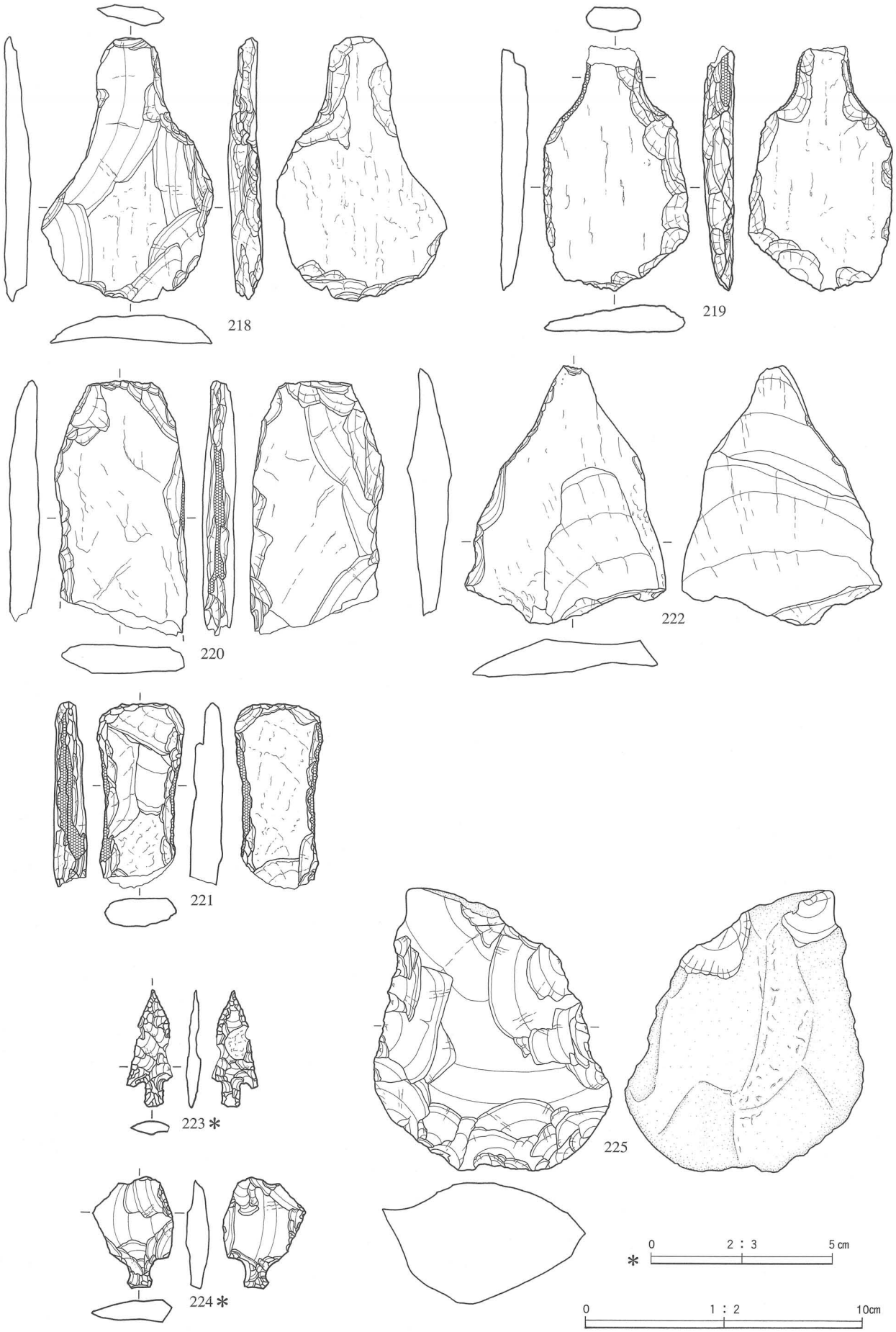
このほか、楕円形礫の表裏中央に凹部が形成されたいわゆる凹石も出土している（242・243）。

用いられる母材としては、安山岩・デイサイトなどの径10cm前後の河床礫である。

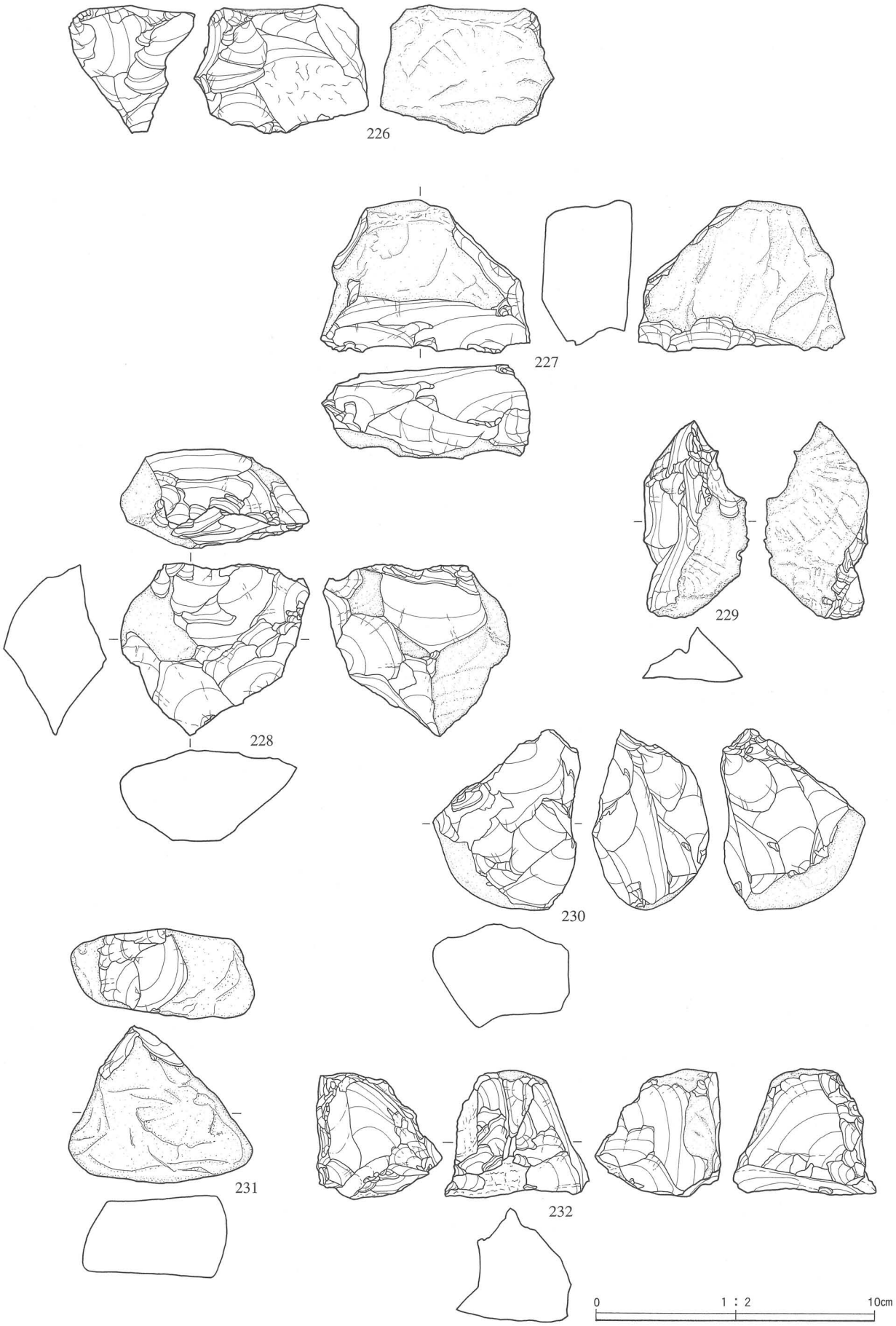
第30図　B区下位面　出土土器



第31図　B区下位面　出土石器（1）



第32図　B区下位面　出土石器（2）



第33図　B区下位面　出土石器（3）

第34図　B区下位面　出土石器（4）

第７表　B区　出土土器一覧

掲載番号	仮No.	出土地点（遺構名）	層位	器種	部位	観察事項・備考	図版番号	写真図版番号
101	Ｂ－１６	B-SI01No.1	埋土	土師器小形甕			28	23
102	Ｂ－１７	B-SI01北東部焼土付近	埋土	土師器小形甕			28	23
103	Ｂ－１９	Ｂ区上位面一括	Ｂ－Ⅱ～Ｂ－Ⅲ層				28	23
104	Ｂ－１８	Ｂ区上位面一括	Ｂ－Ⅱ～Ｂ－Ⅲ層				28	23
105	Ｂ－１５	Ｂ区東隣調査区外	表採	青磁小椀		越州窯系　９～10Ｃ	28	23
201	Ｂ－２０	21ｄ-b，21ｅ-a，南半部下位面一括	Ｂ－Ⅴ層	甕形土器	口～胴下		30	23
202	Ｂ－０５	21ｄ-c，21ｅ-c，21ｅ-d，南半部下位面一括	Ｂ－Ⅴ層	甕形土器	口～胴		30	24
203	Ｂ－０２	20ｄ-c，20ｅ-a，20ｅ-d	Ｂ－Ⅴ層	甕形土器	口～胴		30	24
204	Ｂ－０１	20ｄ-c，20ｅ-a，20ｅ-d，22ｄ-b	Ｂ－Ⅴ層	甕形土器	口～胴		30	24
205	Ｂ－０６	21ｅ-a	Ｂ－Ⅴ層	甕形土器	口		30	24
206	Ｂ－１０	22ｅ-b	Ｂ－Ⅴ層	甕形土器	口		30	24
207	Ｂ－１２	南半部下位面一括	Ｂ－Ⅴ層	甕形土器	口		30	24
208	Ｂ－０９	22ｅ-b	Ｂ－Ⅴ層	壺形土器？	頸～胴		30	24
209	Ｂ－０８	21ｅ-a，22ｅ-b	Ｂ－Ⅴ層	甕または壺形土器	胴上		30	24
210	Ｂ－１１	22ｅ-b	Ｂ－Ⅴ層	甕または壺形土器	胴上		30	24
211	Ｂ－０３	20ｅ-c，20ｅ-d，南半部下位面一括	Ｂ－Ⅴ層	甕または壺形土器	胴下～底		30	24
212	Ｂ－１４	南半部下位面一括	Ｂ－Ⅴ層	甕または壺形土器	底		30	24
213	Ｂ－０４	21ｄ-c，	Ｂ－Ⅴ層	甕または壺形土器	底		30	24
214	Ｂ－１３	南半部下位面一括	Ｂ－Ⅴ層	甕または壺形土器	底		30	24
215	Ｂ－０７	21ｅ-a，21ｅ-b	Ｂ－Ⅴ層	甕または壺形土器	底		30	24

第８表　B区　出土石器一覧

掲載番号	仮No.	グリッド	細区	取上No.	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	観察事項・備考	図版番号	写真図版番号
216	Ｂ－S01	20e	d	16	Ｂ－Ⅴ	石鍬（打製石斧）	19.5	9.0	2.0	421	KK		31	25
217	Ｂ－S02	21e	a	20	Ｂ－Ⅴ	石鍬（打製石斧）	13.2	8.8	2.5	297	KK		31	25
218	Ｂ－S03	20e	d		Ｂ－Ⅴ	石鍬（打製石斧）	9.6	6.2	1.2	58	KK		32	25
219	Ｂ－S04	21e	a	6	Ｂ－Ⅴ	石鍬（打製石斧）	8.9	5.2	1.1	53	KK		32	25
220	Ｂ－S05	20e	a	13	Ｂ－Ⅴ	石鍬（打製石斧）？	9.2	4.8	1.2	71	KK		32	25
221	Ｂ－S06	20e	d		Ｂ－Ⅴ	石鍬（打製石斧）？	6.7	3.2	1.2	33	KK		32	25
222	Ｂ－S07	21d	c	21	Ｂ－Ⅴ	石鍬（打製石斧）？	10.4	7.2	1.6	82	KO	未成品・粗製品か	32	25
223	Ｂ－S08	21e	b		Ｂ－Ⅴ	石鏃	3.2	1.2	0.3	0.9	KO		32	25
224	Ｂ－S09	20e	d		Ｂ－Ⅴ	石鏃未成品？	3.1	2.2	0.6	3	KO	茎部作出	32	25
225	Ｂ－S10	20d	c	1	Ｂ－Ⅴ	石核	10.2	9.6	4.4	348	KO		32	26
226	Ｂ－S14	21e	b		Ｂ－Ⅴ	石核	4.0	6.2	4.5	106	KO		33	26
227	Ｂ－S15	20d	b		Ｂ－Ⅴ	石核	5.5	7.5	3.4	168	KO		33	26
228	Ｂ－S13	20e	d	2	Ｂ－Ⅴ	石核	6.2	6.7	3.3	124	KO		33	26
229	Ｂ－S11	20e	c	4	Ｂ－Ⅴ	石核	7.2	3.8	2.0	39	KO		33	26
230	Ｂ－S16	20d	c		Ｂ－Ⅴ	石核	6.5	5.1	4.2	131	KO		33	26
231	Ｂ－S12	20e	d	3	Ｂ－Ⅴ	石核	5.7	6.6	3.0	135	KO		33	26
232	Ｂ－S17	20d	c		Ｂ－Ⅴ	石核	4.6	5.1	4.6	96	KO		33	26
233	Ｂ－S23	21e	d		Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	18.0	6.3	2.1	251	GKO	端部に剥離	34	26
234	Ｂ－S24	21d	b		Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	10.1	6.3	2.2	204	DO	端部に剥離	34	26
235	Ｂ－S19	20e	d	12	Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	9.7	7.7	4.6	497	AO3	ハンマー？	34	26
236	Ｂ－S27	21d	b		Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	10.5	6.9	5.9	611	SEK	ハンマー？端部にツブレ	34	26
237	Ｂ－S21	21e	a	19	Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	10.7	58.0	5.8	448	AO3	ハンマー？端部に剥離	34	26
238	Ｂ－S18	21e	b		Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	8.4	5.2	3.4	202	SGK	ハンマー？	34	26
239	Ｂ－S22	21d	b		Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	10.7	7.5	4.8	507	AO3	ハンマー？凹石？	34	26
240	Ｂ－S26	20e	b		Ｂ－Ⅴ	礫	7.6	4.9	3.6	185	AO3	ハンマー？	34	26
241	Ｂ－S25	20e	d	15	Ｂ－Ⅴ	礫	7.7	5.7	3.2	209	DO	ハンマー？	34	26
242	Ｂ－S20	21d	b		Ｂ－Ⅴ	敲打痕ある礫	5.8	6.0	3.7	173	AO3	ハンマー？凹石？	34	26

第９表　B区下位面　出土遺物グリッド別重量分布

①B区下位面出土土器重量分布（g）

ＩB	20				21				22			
d	a		d		a		d		a		d	
	b	23	c	345	b	891	c	232	b		c	
e	a	115	d	247	a	317	d	83	a		d	
	b		c	43	b	151	c	27	b		c	
f	a		d		a	14	d		a		d	
	b		c		b		c		b		c	

②B区下位面出土剥片重量分布

ＩB	20				21				22			
d	a		d		a		d		a		d	
	b	7	c	34	b	249	c	73	b		c	
e	a	40	d	134	a	60	d	61	a		d	
	b	63	c	31	b	58	c		b		c	
f	a		d		a		d		a		d	
	b		c		b		c		b		c	

③B区下位面出土礫重量分布

ＩB	20				21				22			
d	a		d		a		d		a		d	
	b		c	628	b	2660	c	121	b		c	
e	a	280	d	1427	a	1022	d	281	a		d	
	b	185	c	1945	b	860	c		b		c	
f	a		d		a		d		a		d	
	b		c		b		c		b		c	

④B区下位面出土礫個体数分布

ＩB	20				21				22			
d	a		d		a		d		a		d	
	b		c	1	b	10	c	4	b		c	
e	a	4	d	8	a	7	d	2	a		d	
	b		c	2	b	4	c		b		c	
f	a		d		a		d		a		d	
	b		c		b		c		b		c	

5　C　　区

（1）土　　坑

土坑は計16基検出された。内訳は縄文時代の土坑が６基、縄文時代の可能性のあるもの３基、時期不明のものが７基である。

土坑１（第35図、写真図版27）

【位置・検出状況】　ⅡＢ３ｑ～３ｒグリッドに位置する。C-Ⅳ層においてC-Ⅲ層相当の不鮮明な円形プランを検出した。

【規模・形状】　開口部径197×187cm、検出面からの深さは45cm。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　埋土は黒褐色シルトを主体とする。全ての層で炭化物を含む。３層では礫を多く含む。自然堆積によるものと判断される。２層でほぼ完形の台付鉢（301）が出土している。

【重　　複】　陥し穴状遺構２と陥し穴状遺構23が重複する。陥し穴状遺構２の真上、陥し穴状遺構23の北西隅に土坑１は位置する。陥し穴状遺構23はC-Ⅴ層上面で検出されたものであり、かつ本遺構完掘後に陥し穴状遺構２が検出されていることなどから、本遺構が陥し穴状遺構２、陥し穴状遺構23を切っており、当該遺構間では一番新しいものと考えられる。

【出土遺物】　（第51図301～312・第53図361～364・第54図401、写真図版42～46）

縄文土器（301～312）、石器剥片（365）、石核（361～364）、円盤状石製品（401）、礫（366～372）が出土している。

301は台付鉢である。口縁部内面に沈線、頸部外面に羊歯状文、高台接合部に刺突がある。高台接合部と体部の縄文施文部の間にヘラで磨いたような削り跡がある。内面にミガキによる調整もある。302は深鉢である。口縁部～体部にかけて残存する。摩耗が著しい。長石粒子を多く含んでいる。器面に文様が認められないことから、粗製のものと考えられる。303は壷の体部片である。磨り消しの施された文様と沈線が残っており、その下に単節LR横回転の縄文が施文される。内面にミガキ痕がある。304は鉢である。口縁部～体部にかけて残存する。口縁部に山形の突起があり、その下に羊歯状文が施される。305は壷または浅鉢の体部破片である。雲形文の可能性がある文様及び沈線が施文されている。306は深鉢である。縄文のみが施文された粗製のものと考えられる。全体に施文した後、口縁部のみを調整しているようである。307は深鉢体部である。縄文のみが施文された粗製のものと考えられる。308は浅鉢か壷の体部破片である。ｘ字文と考えられる文様、沈線、磨り消しによって構成されている。内面にミガキが施されている。309は浅鉢か壷の体部破片である。雲形文あるいは大腿骨文の可能性がある文様、沈線が施文されている。ミガキの痕跡はあるが、他のものに比べて磨き方は雑である。単節LR横回転によって施文される。310は深鉢である。縄文のみが施文された粗製のものと考えられる。311は鉢である。口縁部に山形の小突起があり、その下に羊歯状文が施される。口縁部内面にも沈線が見られる。312は壷体部の破片である。文様として大腿骨文、沈線が施文されている。内面にはミガキが施されている。

361～364は石核である。全て奥羽山脈産の頁岩を素材としている。これらはいずれも剥片の一部が接合しており、製品を作ることを意図して使用された石材と考えられる。365は石器剥片である。奥羽山脈産の頁岩を素材としている。366～372は礫である。素材としている礫は北上山地産のホルンフェルス及び奥羽山脈産のデイサイトである。367・369・371・372については、焼けた痕跡があり、近

くで火を使っていたことが想定される。

401は円盤状石製品である。形状はほぼ円形を呈する。素材としている礫は奥羽山脈産のデイサイトである。土坑２で出土した円盤状石製品と比べると大きさ・厚さとも小ぶりである。

【遺構の時期】　出土遺物から縄文時代晩期中葉に属すると考えられる。

土坑２（第35図、写真図版27）

【位置・検出状況】　ⅡＢ３ｒ～３ｓに位置する。C-Ⅲ層で遺物・礫等がやや密に分布する様子はあったものの、プランとしてはっきり認識できなかった。そのため、C-Ⅳ～Ⅴ層まで掘り下げるために、南半分を重機で掘り下げたところ、多くの遺物が出土し始めたことから、重機での掘り下げを中止し、改めて精査したところ、C-Ⅲ層相当の円形プランを確認した。

【規模・形状】　開口部径200×185㎝、検出面からの深さ50㎝。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　埋土は黒褐色シルトを主体とする。上部に土器片を含む。埋土上半には炭化物、下半には地山ブロックをそれぞれ含む傾向がある。自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　（第51図313～323・第52図324～327・第53図373～375・第54図402～405、写真図版42・43・46）

縄文土器（313～327）、削器（373、374）、石器剥片（376～378）、石核（375）、円盤状石製品（402～404）、亀形土製品（405）が出土している。

313は深鉢の破片である。植物繊維が混じっており、縄文時代前期のものと考えられる。ただし、１層からの出土であること、他の出土している遺物の時期が縄文時代晩期中葉のものが多いことを考慮すると、流れ込みによって入った可能性がある。314は深鉢の体部である。内部におこげの跡がある。破片の上部に輪積み痕を残している。315は鉢の体部である。文様帯の部分がないので、詳しい時期は不明である。内面にはミガキをかけているが、摩耗などによってだいぶすり減っている。316・319は鉢と考えられる体部の破片である。317・318は深鉢である。317は体部、318は口縁部を残す。長石や石英を多く含んでいる。単節LR横回転の縄文が施文されているのみの粗製のものである。接合しないが同一個体の可能性がある。320は深鉢の底部である。内面におこげの跡がある。底部には木の葉痕などの痕跡は認められない。321は鉢である。体部に単節RL横回転の縄文が施されているのみである。口縁部が外反している。322は鉢と考えられるものである。口縁部に突起及び４条の沈線が見られる。このうち、上から１～２列目及び３～４列目の間の隆帯の部分には刺突状の刻み目がある。323は椀若しくは壷である。体部破片の一部で内外面ともに磨きがかかっている。文様がないので、具体的な時期の特定は困難である。324は壷の頸部である。地文原体等は不明であるが、表面及び内面の一部に赤色顔料が付着している。325は台付鉢の底部及び高台部である。台部と鉢底部のつなぎ目のところに沈線が入っている。なお、本遺構ではこの他に台付鉢の高台部が２点出土している。326は深鉢である。単節RL斜回転及び横回転の縄文のみが施文されている粗製のものである。327は深鉢である。口縁部のみの残存であるが、326や317・318のように、口縁部に文様がなく、形状も類似していることから、縄文のみが施文された粗製のものと考えられる。

373、374は削器である。ともに埋土中から出土している。373は直線の部分、弧の部分双方に刃部が作られているが、弧の部分は二次調整の際に粗い調整を行って刃部を作成している。さらに、裏面に削器として使用するには必要以上の剥離面があり、最終的には縦型の石匙を作ることを考えていた

可能性がある。374は片側のみに刃部がある。素材の礫は奥羽山脈産の頁岩を使用している。375は石核、376～378は石器剥片である。素材の礫は奥羽山脈産の頁岩を使用している。

402～404は円盤状石製品である。402・403はほぼ円形を、404は楕円形を呈する。土坑１の円盤状石製品よりも大きさ・厚さともに一回り大きい。周囲を打ち欠いて円盤状に仕上げている。402は深く入り込んだ打ち欠きが片面に集中している。素材の礫は全て奥羽山脈産のデイサイトを使用している。

405は亀形土製品である。形態はほぼ楕円形であり、正面の中央には正中線がある。２ヶ所に穿孔があるが、中実である。４対の足を模した切り込みがあり、体部には沈線が入っている。

【その他】　底面に焼土の痕跡がある。斑状に入っており、現地性ではないと考えられる。

なお、断面図を作成し、掘り上げる経過において、東側に遺構が広がることが明らかになったため、一部空断面になっている（断面図ａの部分）。

【遺構の時期】　出土遺物から縄文時代晩期中葉に属すると考えられる。

土坑３（第35図、写真図版28）

【位置・検出状況】　ⅡＢ４ｎグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の隅丸方形状の円形プランとして検出された。

【規模・形状】　開口部130×125㎝、検出面からの深さ10㎝。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトを主体とする。炭化物粒子を少量含む。２層で地山ブロックをやや多く含む。一部攪乱が入るが、自然堆積と判断される。

【重　　複】　近現代の柱穴と重複する。

【出土遺物】　（第52図328、写真図版42）

縄文土器が出土している。鉢の可能性が高い。施文方向は単節RL横回転である。器壁が薄く、ミガキが施されている。

【遺構の時期】　出土した土器から、縄文時代の遺構と考えられる。土器が小破片のため、詳細な時期については不明である。

土坑４（第35図、写真図版28）

【位置・検出状況】　ⅡＢ５ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の円形のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部90×87㎝、検出面からの深さ38㎝。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトを主体とする。２～３層には地山ブロックを少量含む。上面に移地性の焼土、１層底面に礫がある。自然堆積と判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　（第52図329・第54図379、写真図版42・46）

縄文土器（329）が埋土中から、石核（379）が１層から出土している。

縄文土器は口縁部のみの残存であるが、326や317・318のように、口縁部に文様がなく、形状も類似しており、縄文のみが施文された粗製の深鉢と考えられる。

石核は奥羽山脈産の頁岩を素材としている。

【遺構の時期】　出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

土坑５（第36図、写真図版28）

【位置・検出状況】　ⅡＢ５ｔ～５ｕグリッドに位置する。C-Ⅳ層でC-Ⅲ層相当の円形のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部111×106cm、検出面からの深さ42cm。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトを主体とする。埋土上部に炭化物粒子（径１mm以下）をわずかに含む。一部に攪乱が入るが、自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　（第52図330、写真図版42・46）

縄文土器片（330）、石器剥片（380）が出土している。

縄文土器は鉢の体部と考えられる。器壁が薄く、植物繊維は含まれていない。内面は磨いている。摩耗が著しい。

石器剥片は奥羽山脈産の頁岩を素材としている。

【遺構の時期】　出土遺物から、縄文時代に属するものと考えられる。詳細な時期については判断できない。

土坑６（第36図、写真図版29）

【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｏ～６ｐグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の円形プランとして検出した。

【規模・形状】　開口部151×132cm、検出面からの深さ26cm。平面形は円形、断面形は不整方形である。土坑内に２基、柱穴が抉られるようにある。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトを主体とするが、一部に暗褐色及び褐色シルトを含む。埋土上部に炭化物粒子をわずかに含む。自然堆積と判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　（第52図331～333・写真図版42）

縄文土器が出土している。

331は深鉢の胴部である。内面に著しいこげの跡が認められる。また、外面上部にもこげの跡が残っている。施文原体は単節RL斜方向が主体を占めるが、下部に単節RL横回転の施文がある。装飾や文様帯がないので、詳細な時期については不明であるが、縄文時代のものであることは確かである。332は鉢である。口縁部に簡略化された突起状の高まりと１～２条の沈線があるのみである。植物繊維は胎土中に含まれていない。333は深鉢である。326や317、318のように、口縁部に文様がなく、形状も類似していることから、縄文のみが施文された粗製のものと考えられる。

土坑６内柱穴状土坑１

【検出状況】　土坑６断面観察時に柱穴状土坑の存在を確認した。

【規模・形状】　開口部45×43cm、検出面からの深さ35cm。平面形は円形を呈する。土坑６を抉るようにある。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルト～暗褐色シルトを主体とする。自然堆積と判断される。土坑６断面の６～８層が柱穴状土坑の埋土と考えられる。

【出土遺物】　なし。

土坑６内柱穴状土坑２

【検出状況】　土坑６完掘後に柱穴状土坑の存在を確認した。

【規模・形状】　開口部50×40㎝、検出面からの深さ30㎝。平面形は円形を呈する。土坑６を抉るようにある。

【埋土と堆積状況】　褐色シルトブロックを少量含んだ暗褐色シルトを主体とする。

【出土遺物】　なし。

【その他】　平面図へのセクションポイント記入を落としてしまったため、断面図のみを示している。

【遺構の時期】　出土遺物から、縄文時代の遺構と考えられる。

土坑７（第36図、写真図版29）

【位置・検出状況】　ⅡＢ５ｏグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の楕円形プランとして検出した。なお、大部分は生文課トレンチにより削平を受けており、完全に削平された部分、残りはしたが削平を受けている部分、トレンチによって削平を受けなかった部分がある。また、断面図については、調査員のミスにより、一部カラ断面になっている。

【規模・形状】　開口部135×（86）㎝、検出面からの深さ15～20㎝。平面形は楕円形、断面形は方形を呈する。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルト及び暗褐色砂質シルトを主体とする。埋土上部では炭化物粒子をわずかに含む。２層で地山ブロックをやや多く含む。自然堆積と判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がⅢ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

土坑８（第36図、写真図版28）

【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｎグリッドに位置する。C-Ⅳ～Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の半円形のプランとして検出した。なお、北側半分は生文課トレンチにより削平されていた。

【規模・形状】　開口部130×（78）㎝、検出面からの深さ17㎝。平面形は半円形、断面形は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトを主体とする。地山ブロックをわずかに含む。自然堆積と判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がⅢ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

土坑９（第37図、写真図版30）

【位置・検出状況】　ⅡＢ５ｔグリッドに位置する。C-Ⅳ～Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の円形プランとして検出した。

【規模・形状】　開口部86×82㎝、検出面からの深さ30㎝。平面形は円形、断面形は半円形を呈する。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトを主体とする。埋土全体に炭化物粒子（径１㎜以下）をわずかに

含んでいる。自然堆積によるものと判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土の特徴から、縄文時代のものと考えられるが、遺物が出土していないので、詳細な時期については不明とせざるを得ない。

土坑10（第37図、写真図版30）
【位置・検出状況】　ⅡＢ５ｔ～６ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層で褐色シルトが斑状に入った暗褐色土のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部130×123㎝、検出面からの深さ77㎝。平面形は円形、断面形は方形を呈する。
【埋土と堆積状況】　黒褐色のシルトと暗褐色のシルト～砂を主体とする。炭化物を微量、小礫をわずかに含む。埋土上半に地山ブロック（褐色シルト）を多く含んでいる。８層に焼土状粒子をわずかに含む。焼土は移動したものであり、土坑南西側にブロック状に入っている。北側にはほとんど含まれない。埋土下半は自然堆積によるものと判断されるが、上半については人為堆積の可能性がある。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土の最上部がC-ⅢまたはC-Ⅳ層相当の土でないことから、縄文時代の遺構ではない。近世以降の遺構と考えられるが、遺物が出土していないので、詳細な時期については不明である。

土坑11（第37図、写真図版30）
【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｋグリッドに位置する。C-Ⅴ層で暗褐色シルトブロックによる円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部122×（66）㎝、検出面からの深さ12㎝。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトを主体とする。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　時期の特定できる遺物が出土しておらず、不明である。

土坑12（第37図、写真図版30）
【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｍグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の不整形のプランを確認した。２本の農業用水のパイプによって攪乱を受けている。
【規模・形状】　開口部180×117㎝、検出面からの深さ25㎝。平面形は不整楕円形、断面は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトの単層である。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　時期の特定できる遺物が出土しておらず、不明である。

土坑13（第38図、写真図版31）

【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｏグリッドに位置する。C-Ⅴ層で暗褐色シルトブロックによる円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部69×66cm、検出面からの深さ11cm。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　暗褐色と褐色のシルトを主体とする。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　住居状遺構２と重複する。重複関係から、住居状遺構２が古く本遺構が新しいと考えられる。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　時期の特定できる遺物が出土しておらず、不明である。

土坑14（第38図、写真図版31）
【位置・検出状況】　ⅡＢ16ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層で暗褐色シルトブロックによる円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部47×40cm、検出面からの深さ10cm。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　暗褐色シルトを主体とする。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　陥し穴状遺構11と重複する。重複関係から、陥し穴状遺構11が古く本遺構が新しいと考えられる。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　時期の特定できる遺物が出土しておらず、不明である。

土坑15（第38図、写真図版31）
【位置・検出状況】　ⅡＢ９ｍグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅲ層相当の円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部73×66cm、深さ20～27cm。平面形は円形、断面形は不整形を呈する。
【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトの単層である。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　時期の特定できる遺物が出土しておらず、不明である。

土坑16（第38図、写真図版31）
【位置・検出状況】　ⅡＢ11ｌグリッドに位置する。C-Ⅴ層で暗褐色シルトブロックによる円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部60×40cm、検出面からの深さ10cm。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　暗褐色と褐色のシルトを主体とする。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　時期の特定できる遺物が出土しておらず、不明である。

（２）陥し穴状遺構（第39～49図、写真図版32～40）

これまでの他遺跡での調査成果から陥し穴としての用途が考えられることから、いわゆる「陥し穴状遺構」と報告されているものである。以下、検出された陥し穴状遺構について詳述する。

なお、規模の計測値は開口部・底部ともに長軸×短軸としている。各陥し穴状遺構の規模・平面形

などの計測値・特徴は第10表　陥し穴状遺構観察表（ｐ88）に示しているので、併せて参照されたい。
①溝状の陥し穴状遺構
　計21基が検出されている。この中には楕円形状の範疇に含まれるもの２基（陥し穴状遺構８と９）を含んでいる。また、瓢箪形をしたものも２基（陥し穴状遺構５と17）含まれている。拡張部分を含めたC区全域に分布する。長軸方向はほぼ傾斜方向に沿っている。いくつか同時期に使われた組のものはあるが、規則性や連続性などの相関関係は原則的に認められない。検出面はC-Ⅴ層、埋土の主体はC-Ⅲ層相当の黒色土で、数次の堆積の間に壁崩落土が狭在する。具体的な構築時期は不明であるが、陥し穴状遺構２が土坑１と重複し、土坑１が新しいことが重複関係で明らかなことから、縄文時代晩期中葉よりは古いことは確かである。また、陥し穴状遺構７が陥し穴状遺構８と重複し、陥し穴状遺構７が新しいことも明らかであるが、両方とも陥し穴状遺構であることから、具体的な時期の特定は難しい。

陥し穴状遺構１（第39図、写真図版32）
【位置・検出状況】　ⅡＢ３ｐグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部345×48㎝、中央部深さ65㎝。平面は溝状、断面はＵ字形を呈する。
【主軸方向】　N-62°-E。
【埋土と堆積状況】　埋土は褐色砂質シルト及び黒褐色～暗褐色シルトを主体とする。自然堆積と判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構２（第39図、写真図版32・46）
【位置・検出状況】　ⅡＢ３ｒグリッドに位置する。土坑１完掘後にC-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部177×41㎝、中央部深さ72㎝。平面は溝状、断面はU字形を呈する。
【主軸方向】　N-85°-E。
【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色シルトを主体とし、その上部にC-Ⅲ層相当の黒褐色シルトが入る。自然堆積と判断される。中央付近に杭状の小穴を２個確認した。
【重　　複】　土坑１と重複する。土坑１検出時には確認できず、精査後に検出されたものであることから、土坑１が新しく、本遺構が古いものと考えられる。
【出土遺物】　石器剥片（381）が出土している。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、時期を決定できる出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。但し、土坑１より古いことは明らかなので、縄文時代晩期中葉より前であることは確実である。

陥し穴状遺構３（第39図、写真図版32）
【位置・検出状況】　ⅡＢ３ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランと

して検出した。
【規模・形状】　開口部幅35㎝、中央部深さ56㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。
【主軸方向】　N-６°-W。
【埋土と堆積状況】　埋土は黒褐色～暗褐色シルトを主体とする。自然堆積と判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。
【その他】　詳細平面図の記録取り忘れがあり、1/40の平面図はない。

陥し穴状遺構４（第39・52図、写真図版32・43）
【位置・検出状況】　ⅡＢ４ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部176×62㎝、中央部深さ95㎝。平面は溝状、断面はU字形を呈する。
【主軸方向】　N-70°-E。
【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色～褐色のシルト及び褐色の砂質シルトを主体とし、最上部に黒褐色シルトが入る。自然堆積によるものと判断されるが、１・４・７層については植物の根として入り込んだ可能性もある。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　縄文土器（334）が出土している。胎土に植物繊維が混じっている。地文原体はRL横回転であることははっきりしているが、摩耗が著しいことから文様の詳しい種類まではっきりしない。
【遺構の時期】　１層から出土した土器からは縄文時代前期前半になるが、前期の遺構になると考えられる円形の陥し穴状遺構の埋土と異なる埋土の様相を呈しており、遺物は流れこみの可能性が高い。このため、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構５（第40図、写真図版33）
【位置・検出状況】　ⅡＢ４ｏグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の両端が広がったひょうたん形状のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部269×65～108㎝、中央部深さ75㎝。平面はひょうたん形、断面は逆台形を呈する。但し、縦断面でとっている。
【主軸方向】　N-79°-W。
【埋土と堆積状況】　埋土は黒褐色～暗褐色のシルトを主体とする。地山は中央部分が高く、両端に向かうにつれて下がっている。東側で崩落があったものの、自然堆積を基本とするものと判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期については不明である。
【その他】　逆茂木状の痕跡が２本見つかったが、掘りすぎ及び担当者が当初２つの土坑と誤認し、陥穴とすぐに認識できなかったことにより、平面にその様子を図化することができなかった。

陥し穴状遺構６（第40図、写真図版33）

【位置・検出状況】　ⅡＢ５ｎグリッドに位置する。C-Ⅴ層においてC-Ⅳ層相当の溝状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部142×65㎝、中央部深さ65㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。

【主軸方向】　N-82°-E。

【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色のシルト～砂質シルトを主体とする。６層の土が堆積後、地山が崩落したが、その後は自然堆積したものと判断される。生文課試掘トレンチにより掘削され、検出面が他の遺構と比べて低い位置にあることから、遺構本来の大きさは、今回検出された規模よりも大きいものと考えられる。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土の構成及び形態が、本遺跡内にある溝状の陥し穴に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構７（第40図、写真図版33）

【位置・検出状況】　ⅡＢ４ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部185㎝以上×48㎝、中央部深さ70㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。

【主軸方向】　N-45°-W。

【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色のシルト～砂質シルトを主体とし、上部及び底面に黒褐色シルトが入る。自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　陥し穴状遺構８と重複する。平面では重複関係ははっきりしなかったが、断面観察から陥し穴状遺構８が古く、本遺構が新しい様子が観察される。上述した規模の開口部を185㎝以上としたのは、このためである。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明である。但し、陥し穴状遺構８よりは新しい。

陥し穴状遺構８（第40図、写真図版34）

【位置・検出状況】　ⅡＢ４ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の楕円形状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部172×94㎝、中央部深さ103㎝。平面は楕円形、断面はV字形を呈する。底面に杭状の穴の痕跡は認められない。

【主軸方向】　N-61°-E。

【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色～褐色のシルト～砂質シルトを主体とし、上部に黒褐色シルト、底面に暗褐色砂が入る。自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　陥し穴状遺構７と重複する。平面では重複関係ははっきりしなかったが、断面観察から、陥し穴状遺構７が新しく、本遺構が古い様子が観察される。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物が

ないことから、詳細な時期は不明である。ただし、陥し穴状遺構７よりは古くなる。

陥し穴状遺構９（第41・54図、写真図版34・46）

【位置・検出状況】　ⅡＢ５ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の楕円形状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部170×108㎝、中央部深さ100㎝。平面は楕円形、断面はV字形を呈する。底面に杭状の穴の痕跡は認められない。

【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色シルトと褐色砂質シルトを主体とし、上部に黒褐色シルト、底面に暗褐色砂質シルトが入る。壁面の崩落等があったものの、自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　なし。

【主軸方向】　N-79°-W

【出土遺物】　石鏃（382）、石器剥片（383）が出土している。石鏃の形状は二等辺三角形を呈し、基部が直線的で中茎（なかご）のない無茎鏃である。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、時期を決定できる出土遺物がないことから、詳細な時期は不明である。

陥し穴状遺構10（第41図、写真図版34）

【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｏグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部186×40㎝、中央部深さ50㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。

【主軸方向】　N-65°-W。

【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色～褐色の砂質シルトを主体とし、上部に黒褐色シルトが入る。自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構11（第41図、写真図版35）

【位置・検出状況】　ⅡB16ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部279×79㎝、中央部深さ73㎝。平面は溝状、断面はU字形を呈する。

【主軸方向】　N-73°-W。

【埋土と堆積状況】　埋土は黒褐色シルト、暗褐色～褐色の砂質シルトを主体とする。自然堆積と判断される。

【重　　複】　土坑14と重複する。重複関係から、土坑14が新しく、本遺構が古い。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期については不明である。

陥し穴状遺構12（第42図、写真図版35）

【位置・検出状況】　ⅡB12ｐグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部312×55㎝、中央部深さ79㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。

【主軸方向】　N-73°-W。

【埋土と堆積状況】　埋土は、暗褐色のシルト～砂質シルトを主体とし、上部及び底面に黒褐色シルトが入る。自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明である。

陥し穴状遺構13（第42図、写真図版35）

【位置・検出状況】　ⅡB12ｓグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部297×56㎝、中央部深さ84㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。

【主軸方向】　N-71°-E。

【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトと暗褐色砂質シルトを主体とし、上部に黒褐色シルトが入る。底面以外の埋土には地山ブロックが含まれている。自然堆積によるものと判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期については不明である。

【その他】　本遺構は、当初調査予定範囲の最東端で検出されたものである。

陥し穴状遺構14（第42図、写真図版35）

【位置・検出状況】　ⅡB15ｍグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部357×55㎝、中央部深さ78㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。

【主軸方向】　N-57°-E。

【埋土と堆積状況】　埋土は、褐色シルト～砂質シルト及び黒褐色～暗褐色シルトを主体とし、最上部に黒色～黒褐色のシルト、底部に暗褐色シルトが入る。堆積は自然堆積によるものと判断される。１～３層には、植物の根によるカクランが入っている。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期については不明である。

陥し穴状遺構15（第43図、写真図版36）

【位置・検出状況】　ⅡB15ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランと

して検出した。

【規模・形状】　開口部340×67㎝、中央部深さ98㎝。平面は溝状、断面はU字形を呈する。

【主軸方向】　N-83°-W。

【埋土と堆積状況】　埋土は黒褐色シルト及び暗褐色～褐色の砂質シルトを主体とし、最上部に黒褐色シルト、底部に黒褐色砂質シルトが入る。自然堆積によるものと判断されるが、一部に植物根によるカクランがある。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期については不明である。

陥し穴状遺構16（第43図、写真図版36）

【位置・検出状況】　ⅡB17mグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランを検出した。

【規模・形状】　開口部356×45㎝、中央部深さ76㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。

【主軸方向】　N-71°-W。

【埋土と堆積状況】　埋土は暗褐色シルト、褐色シルト～砂質シルトを主体とし、最上部に黒～黒褐色シルト、底部に暗褐色シルトが入る。上部褐色砂質シルトより上については若干混じりがあるが、自然堆積を基本とするものと考えられる。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため、縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期については不明である。

陥し穴状遺構17（第44図、写真図版36）

【位置・検出状況】　ⅡB16ｒグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当のひょうたん形をしたプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部341×100～128㎝、深さ110～115㎝。平面はひょうたん形、断面は、西側はV字形、東側はU字形を呈する。

【主軸方向】　N-88°-E。

【埋土と堆積状況】　上部は黒褐色～暗褐色のシルト、下部は褐色砂質シルトを主体とする。自然堆積ではあるが、堆積に際しては、時間的に３段階に分かれる可能性がある。掘り直して再度陥し穴として使用した可能性もある。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構18（第43図、写真図版37）

【位置・検出状況】　ⅡＢ18ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランと

して検出した。
【規模・形状】　開口部309×44㎝、中央部深さ80㎝。平面は溝状、断面はV字形を呈する。
【主軸方向】　N-86°-E。
【埋土と堆積状況】　埋土は黒色～暗褐色のシルトを主体とする。暗褐色シルトでは褐色シルトブロックを含む。自然堆積によるものと判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構19（第44図、写真図版37）
【位置・検出状況】　ⅡB20ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、C-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。なお、北西側は南東側よりも広くなっている。
【規模・形状】　開口部344×48～78㎝、中央部深さ96㎝。平面は溝状を呈するが若干北西側が広がっている。断面はV字形を呈する。
【主軸方向】　N-42°-E。
【埋土と堆積状況】　埋土は黒褐色～褐色の砂質シルトを主体とする。自然堆積によるものと判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構20（第44図、写真図版37）
【位置・検出状況】　ⅡB23ｊグリッドに位置する。C-Ⅴ層においてC-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。本遺構の東側が水路部分にかかることから、東半分のみ精査をし、西半分については平面検出にとどめている。
【規模・形状】　開口部は283×65㎝、中央部深さ87㎝。平面は溝状、断面はU字形を呈する。
【主軸方向】　N-85°-E。
【埋土と堆積状況】　黒褐色シルトと暗褐色～褐色砂質シルトを主体とし、互層で堆積している。自然堆積によるものと判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構21（第44図、写真図版37）
【位置・検出状況】　ⅡB22ｒグリッドに位置する。C-Ⅳ～Ⅴ層においてC-Ⅲ層相当の溝状のプランとして検出した。なお、水路部分に本遺構の東側がかかることから、東半分のみ精査をし、西半分については平面検出にとどめている。

【規模・形状】　開口部は282m×52cm、中央部深さ93cm。平面は溝状。断面はU字形。
【主軸方向】　N-66°-E。
【埋土と堆積状況】　埋土の主体は褐色の粘土～シルトと黒色シルトである。底面付近に褐色砂質シルトがある。自然堆積によるものと判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅲ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

②円形の陥し穴状遺構

計11基が検出されている。当初調査予定範囲内のみに分布し、拡張部分には分布しない。調査区西側の洪水堆積層堆積前の段丘崖から緩斜面の部分にまとまって分布する傾向がある。検出面はC-Ⅴ層、埋土の主体はC-Ⅳ層相当の暗褐色土で、数次の堆積の間に壁崩落土が狭在する。具体的な構築時期は不明であるが、陥し穴状遺構23が土坑１と重複し、土坑１が新しいことは明らかである。また、出土炭化材による放射性炭素年代測定を実施した結果、おおよそ6000年前に陥し穴状遺構は既に存在していた可能性が出てきている。なお、規模・形状の計測値について、括弧書きしているものは、残存部分の数値である。

陥し穴状遺構22（第46・52図、写真図版38・43）

【位置・検出状況】　ⅡＢ３ｑグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不明瞭な円形プランを検出した。
【規模・形状】　開口部幅113cm、底部幅80cm、中央部深さ83cm。平面は円形、断面は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　埋土上部は暗褐色シルト、下部は褐色シルト～砂質シルトを主体とする。２～３層で縄文土器が見つかっている。自然堆積によるものと判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　縄文土器（335）が出土している。胴部の破片であるが、胎土に植物繊維が混じっている。底部が尖底になる可能性がある。地文原体は摩耗が著しく詳細は不明であるが、単節RLの要素があることは確認できる。
【遺構の時期】　出土した土器からは早期～前期前半になるが、陥し穴の性格上、作られたのはそれと同時期かそれよりも前になる。
【その他】　詳細平面図の記録取り忘れがあり、1/40の平面図はない。

陥し穴状遺構23（第46図、写真図版38）

【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｏグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不明瞭な円形プランとして検出した。
【規模・形状】　開口部134×130cm、中央部深さ90cm。平面は円形、断面は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　暗褐色～褐色のシルトを主体とする。掘られてからしばらくは堆積しなかったが、堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　土坑１と重複する。土坑１を精査してC-Ⅳ層を除去した後に確認された遺構であることから、土坑１が新しく本遺構が古いと考えられる。
【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　放射性炭素年代測定や重複関係等から、縄文時代前期の遺構と考えられる。
【その他】　中央付近に杭穴状の穴が１個見つかっている。また、埋土中より炭化物を検出したことから、放射性炭素年代測定（AMS法）を実施している。対象は６層及び８層である。年代は６層出土試料が5,840±40yrBP、８層出土試料が5,890±40yrBPを示している。（附編３参照。）

陥し穴状遺構24（第46・52図、写真図版38・43・46）
【位置・検出状況】　ⅡＢ４ｓグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不明瞭な円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部134×120㎝、中央部深さ115㎝。平面は円形、断面は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　暗褐色と褐色の砂質シルトを主体とし、その上に１層が堆積している。１層には土器片を含んでいる。自然堆積であると判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　縄文土器（336）、石器剥片（384～386）が出土している。縄文土器は胴部の破片である。胎土に植物繊維を含んでいる。
【遺構の時期】　出土した土器からは前期前半になるが、陥し穴の性格上、作られたのはそれと同時期かそれよりも前になる。

陥し穴状遺構25（第47図、写真図版38）
【位置・検出状況】　ⅡＢ３ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不明瞭な円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部140×122㎝、中央部深さ116㎝。平面は円形、断面は不整方形であるが、断面のもとは逆台形と推定される。
【埋土と堆積状況】　暗褐色のシルト～砂質シルトと褐色砂質シルトを主体とする。自然堆積であると判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構26（第47図、写真図版39）
【位置・検出状況】　ⅡＢ４ｕグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不明瞭な円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部143×119㎝、中央部深さ109㎝。平面は円形、断面は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　暗褐色～褐色のシルトを主体とする。堆積状況から、自然堆積であると判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構27（第47図、写真図版39）

【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｐグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不明瞭な円形のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部138×129㎝、中央部深さ120㎝。平面は円形、断面は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　暗褐色シルトと褐色のシルト～砂質シルトを主体とする。自然堆積の様相を呈する。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構28（第48図、写真図版39・46）

【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｓグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不鮮明な円形のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部128×125㎝、中央部深さ106㎝。平面は円形、断面は方形を呈する。

【埋土と堆積状況】　暗褐色シルトと褐色砂質シルトを主体とする。１、２層では少量小礫を含んでいる。５層には砂が入っており、８層の崩落土を含んでいるものと考えられる。堆積は自然堆積と判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　石器剥片（387）が出土している。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、時期を決定できる出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構29（第48図、写真図版39）

【位置・検出状況】　ⅡＢ８ｐグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不鮮明な円形のプランとして検出した。

【規模・形状】　開口部117×117㎝、深さ92㎝。平面は円形、断面は逆台形を呈する。

【埋土と堆積状況】　暗褐色シルト及び褐色砂質シルトを主体とする。自然堆積と判断される。

【重　　複】　なし。

【出土遺物】　なし。

【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構30（第48図、写真図版40）

【位置・検出状況】　ⅡＢ７ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不鮮明な円形のプランとして検出した。なお、円形プランの中央部にC-Ⅲ層相当の土が小円状に入っている。

【規模・形状】　開口部（65）×114㎝、中央部深さ120㎝。平面は円形、断面は不整方形だが、断面はもともと逆台形と推定される。

【埋土と堆積状況】　暗褐色シルト～砂質シルトを主体とする。ほぼ自然堆積と判断される。なお、５層は３層の崩落により堆積した可能性がある。

【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構31（第49図、写真図版40）
【位置・検出状況】　ⅡB８ｕグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不鮮明な円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部124×116㎝、中央部深さ120㎝。平面は円形、断面は逆台形を呈する。
【埋土と堆積状況】　暗褐色及び褐色のシルト～砂質シルトを主体とする。堆積は自然堆積と判断される。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

陥し穴状遺構32（第49図、写真図版40）
【位置・検出状況】　ⅡB９ｔグリッドに位置する。C-Ⅴ層でC-Ⅳ層相当の不鮮明な円形のプランとして検出した。
【規模・形状】　開口部110×109㎝、中央部深さ111㎝。平面は円形、断面は不整方形だが、断面はもともと逆台形と推定される。
【埋土と堆積状況】　暗褐色シルト及び褐色砂質シルトを主体とする。自然堆積と判断される。南側は壁が崩落している可能性がある。
【重　　複】　なし。
【出土遺物】　なし。
【遺構の時期】　埋土がC-Ⅳ層に類似するため縄文時代の遺構である可能性が高いが、出土遺物がないことから、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

（3）その他の遺構

掘立柱建物跡（第50図、写真図版41）
ⅡB７ｌ・８ｌ・７ｍ・８ｍグリッド付近に小屋状の建物跡を構成すると考えられる柱穴群がある。一辺2.4～2.5ｍの１×１間の規模である。埋土は10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色のシルトを主体とし、地山ブロックを混入するものもある。C-Ⅴ層上面で検出され、プランも明瞭である。埋土の特徴から、縄文時代の遺構とは区別される。埋土からは帰属年代を示す遺物は出土していない。時期は近世～近現代のものと考えられる。

住居状遺構１（第50・52図、写真図版41・43）
【位置・検出状況】　ⅡB６ｏグリッドに位置する。C-Ⅴ層で、褐色砂質シルトブロックを多く含んだ黒褐色シルトを主体とする円形状のプランとして検出した。なお、西側は風倒木によって切られている。

【規模・形状】　開口部長軸304×短軸158cm、中央部深さ17cm。平面は円形を呈する。
【埋土と堆積状況】　褐色砂質シルトブロックを多く含んだ黒褐色シルトを主体とする。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　西側を風倒木痕により切られている。
【出土遺物】　土器（337・338）が出土している。337、338ともに口縁部である。337には口縁部に刻み及び２条の沈線が入っている。338は粘土紐を貼り付けた後に刻みを入れている。縄文時代のものと思われるが、時期についてははっきりしない。
【遺構の時期】　埋土中から縄文土器が見つかっているが、縄文時代に帰属すると思われる他遺構の埋土と状況が異なっていることから、新しい時期の遺構の可能性がある。

住居状遺構２（第49・52図、写真図版41・43）
【位置・検出状況】　ⅡＢ６ｏグリッドに位置する。C-Ⅴ層において、褐色シルトブロックを多く含んだ黒褐色シルトによる隅丸方形のプランとして検出した。
【規模・形状】　長軸240cm×短軸160cm、深さ23cm。平面は隅丸方形である。
【埋土と堆積状況】　褐色シルトブロックを多く含んだ黒褐色シルトを主体とする。堆積は自然堆積と考えられる。
【重　　複】　土坑13と重複する。重複関係から、土坑13が新しく本遺構が古いと考えられる。
【出土遺物】　土器（339）が出土している。壷の口縁部と考えられるが、文様帯などの特徴がなく、時期については不明である。
【遺構の時期】　埋土中から土器片が見つかっているが、時期を特定できるような特徴がない。さらに縄文時代に帰属すると思われる他遺構の埋土と状況が異なっていることから、新しい時期の遺構の可能性がある。

（４）遺構外出土遺物

C区の遺構外から出土した遺物には以下のものがある。多くはⅢ層にあたる縄文時代遺物包含層から出土しているが、試掘段階で見つかっているものもある。

縄文土器（第52図、写真図版43）

340～349として登録したものである。

340は深鉢の底部である。胎土には植物繊維が含まれていないことから、少なくとも縄文時代前期前半以降のものである。本遺跡の性格や土坑２で出土した同様の土器（320）などを考慮すると、縄文時代晩期の可能性がある。341は深鉢である。胎土に植物繊維を混ぜていること、地文原体の撚り方などから、縄文時代前期前半（大木１式）頃のものと考えられる。342は注口土器である。口縁部に装飾的な突起があり、さらに体部の縄文には磨り消しがあることなどから、縄文時代晩期中葉（大洞C１式期）のものと考えられる。343、344は注口土器の口縁部分である。口縁部分に施文された文様の特徴（雲形文か）から、縄文時代晩期中葉（大洞C１式期）のものと考えられる。345は深鉢である。口縁及び体部に全く文様は認めらないものの、胎土に植物繊維を混ぜていることから、縄文時代前期前半頃のものと考えられる。346は壷である。口縁部に小さい突起及び切り込みが連続し、直下に２条の沈線が見られる。肩の部分が著しく張り出している。形態などから、縄文時代晩期のものと考えられる。347・348は鉢と考えられる。口縁部に突起及び４条の沈線が見られる。このうち、上から１～２列目及び３～４列目の間の隆帯には刺突状の刻み目がある。いずれも縄文時代晩期中葉（大洞C

2式期）のものと考えられる。349は深鉢の底部である。胎土には植物繊維が含まれていないことから、少なくとも縄文時代前期前半以降のものである。本遺跡の性格や土坑2で出土した同様の土器（320）などを考慮すると、縄文時代晩期の可能性がある。

石器（第54図、写真図版46）

388～390として登録したものである。

388は石器製作の際に生じた剥片である。389は石匙である。形状は縦長で、長軸の両側縁に刃部をもつ。390は石器製作の際の母岩になる石核である。388～390いずれも奥羽山脈で産出された頁岩を使用している。

陶器（第52図、写真図版43）

350として登録したものである。外側に折り返す口縁をもち、段を持つ。形状から擂鉢の口縁部分と考えられる。時期は19世紀、産地は東北地方産のものと考えられる。

第10表　C区　陥し穴状遺構一覧

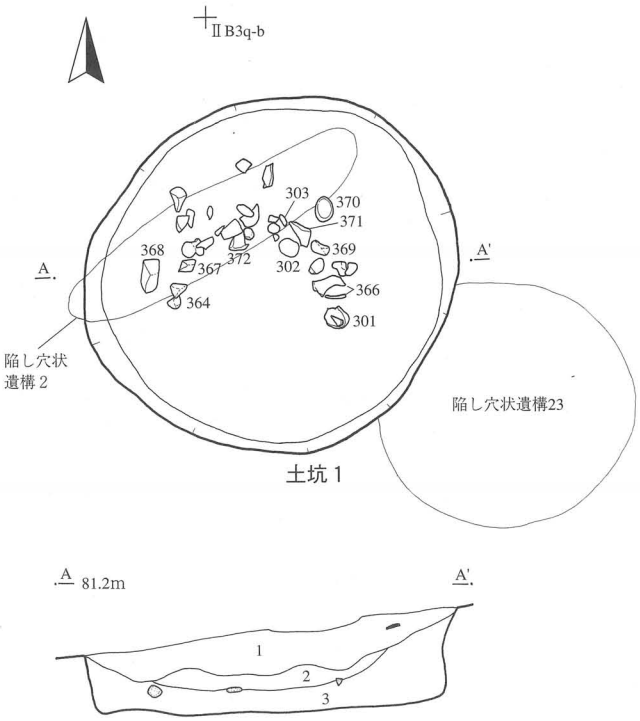
溝状陥し穴

新遺構名	登録遺構	平面形態	断面形態	位置	開口部		底面		深さ(cm)	主軸方向	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	長さ(cm)	幅(cm)			
陥し穴状遺構 1	SK 49	溝状	U字形	ⅡB3p	345	48	325	16	65	N－62°－E	
陥し穴状遺構 2	SK50	溝状	U字形	ⅡB3q	177	41	157	20	72	N－60°－E	石器剥片出土。
陥し穴状遺構 3	SK 48	溝状	V字形	ⅡB3q	－	35	－	8	56	N－6°－W	平面なし。
陥し穴状遺構 4	SK 37	溝状	U字形	ⅡB4t	176	62	161	16	95	N－70°－E	土器出土。
陥し穴状遺構 5	SK 28	溝状（瓢箪）	逆台形(注2)	ⅡB4o	269	65～108	200	－	75	N－79°－W	
陥し穴状遺構 6	SK 6	溝状	V字形	ⅡB5n	142	65	125	16	65	N－82°－E	
陥し穴状遺構 7	SK 12	溝状	V字形	ⅡB4q	185<	48	185	10	70	N－45°－W	SK14より新しい。
陥し穴状遺構 8	SK 14	溝状（楕円形）	V字形	ⅡB4q	172	94	130	21	103	N－61°－E	SK12より古い。
陥し穴状遺構 9	SK 16	溝状（楕円形）	V字形	ⅡB5q	170	108	143	28	100	N－79°－W	石鏃・石器剥片出土。
陥し穴状遺構 10	SK 9	溝状	V字形	ⅡB6o	186	40	190	14	50	N－65°－W	
陥し穴状遺構 11	SK 32	溝状	U字形	ⅡB16q	279	79	258	19	73	N－73°－W	
陥し穴状遺構 12	SK 13	溝状	V字形	ⅡB12p	312	55	294	12	79	N－73°－W	
陥し穴状遺構 13	SK 27	溝状	V字形	ⅡB12s	297	56	292	7	84	N－71°－E	
陥し穴状遺構 14	SK 42	溝状	V字形	ⅡB15m	357	55	345	14	78	N－57°－E	
陥し穴状遺構 15	SK 41	溝状	U字形	ⅡB15q	340	67	311	10	98	N－83°－W	
陥し穴状遺構 16	SK 43	溝状	V字形	ⅡB17m	356	45	315	8	76	N－71°－W	
陥し穴状遺構 17	SK 47	溝状（瓢箪）	西：V字　東U字	ⅡB16r	341	100～128	285	10～15	110～115	N－88°－E	
陥し穴状遺構 18	SK 44	溝状	V字形	ⅡB18t	309	44	314	10	80	N－86°－E	
陥し穴状遺構 19	SK 45	溝状	V字形	ⅡB20t	344	48～78	323	10	96	N－42°－W	
陥し穴状遺構 20	拡SK 2	溝状	U字形	ⅡB23j	283	65	－	20	87	N－85°－E	東半分のみ精査。
陥し穴状遺構 21	拡SK 1	溝状	U字形	ⅡB22r	282	52	－	20	93	N－66°－E	東半分のみ精査。

円形状陥し穴

新遺構名	登録遺構	平面形態	断面形態	位置	開口部		底面		深さ(cm)	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	長さ(cm)	幅(cm)		
陥し穴状遺構 22	SK51	円形	逆台形	ⅡB3q	－	113	－	80	83	平面なし。土器出土。
陥し穴状遺構 23	SK52	円形	逆台形	ⅡB3r	134	130	100	94	90	
陥し穴状遺構 24	SK38	円形	方形	ⅡB4s	134	120	(30)	71	115	土器・石器剥片出土。
陥し穴状遺構 25	SK36	円形	逆台形	ⅡB3t	140	122	(23)	60	116	
陥し穴状遺構 26	SK35	円形	不整方形	ⅡB4u	143	119	(35)	70	109	
陥し穴状遺構 27	SK15	円形	逆台形	ⅡB6p	138	129	66	66	120	
陥し穴状遺構 28	SK18	円形	方形	ⅡB6s	125	128	76	66	106	石器剥片出土。
陥し穴状遺構 29	SK31	円形	逆台形	ⅡB8p	117	117	(25)	20	92	
陥し穴状遺構 30	SK23	円形	不整方形	ⅡB7t	(65)	114	(25)	53	120	
陥し穴状遺構 31	SK25	円形	逆台形	ⅡB8u	124	116	47	64	120	
陥し穴状遺構 32	SK26	円形	不整方形	ⅡB9t	110	109	46	66	111	

（注1）溝状陥し穴の断面形状については、底部の幅のあるものをU字形、ないものをV字形としている。断面形状については、恣意的に分類している部分もある。
（注2）陥し穴状遺構5の断面形態は縦断面でとっているため、他のものと形態が変わっている。
（注3）計測値部分の－については、平面図取り忘れや掘り過ぎ等により、計測できないこと、括弧書きについては、残存値を示している。

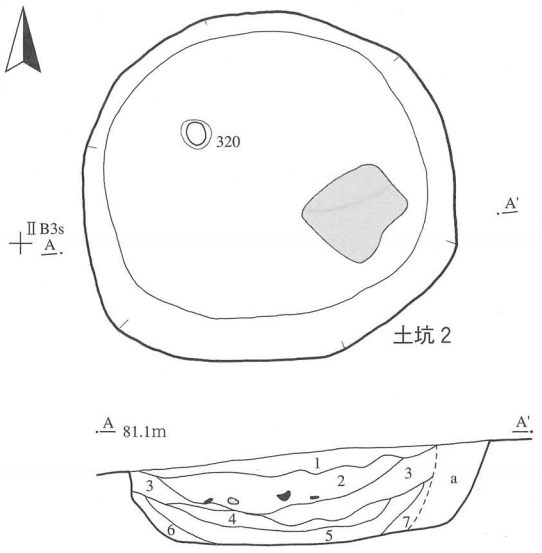


土坑１

1　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。炭化物粒子を少量含む。
　土器片を含む。地山ブロックを少量含む。３層と比べて色調は明るい。

2　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。炭化物粒子を多く含む。
　完形土器（301）はこの層から。

3　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　炭化物を僅かに含むが、３層中ではいちばん少ない。礫を多く含む。



土坑２

1　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　土器片、炭化物粒子（径～１㎜）を僅かに含む。

2　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　炭化物粒子（径１㎝前後）を多く含む。土器片をやや多く含む。

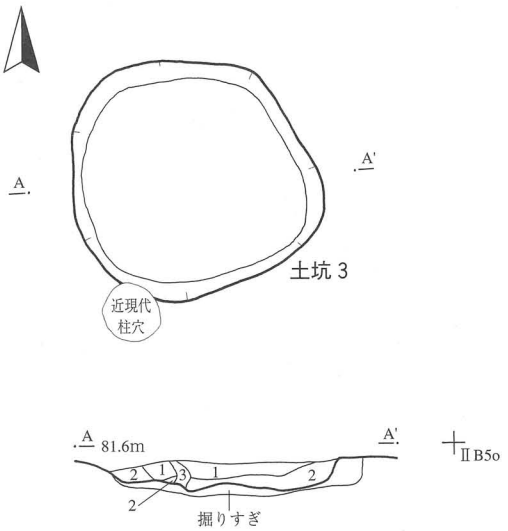
3　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　炭化物粒子（径～１㎜）を僅かに含む。

4　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　地山ブロックをやや多く含む。

5　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　地山ブロックを僅かに含む。

6　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　地山ブロックをやや多く含む。

7　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　※ａの部分は広がったことによって追加された部分。注記なし。

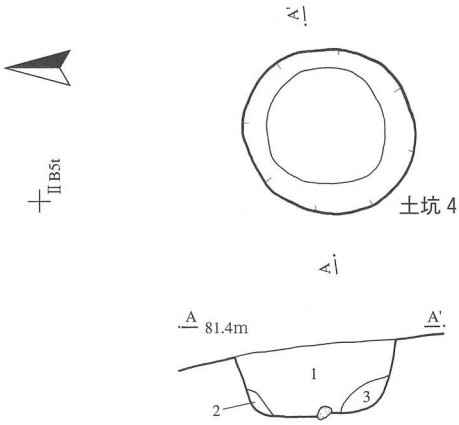


土坑３

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　炭化物粒子（径～１㎜）微量混入。

2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　地山ブロック（径２～３㎜）を20％程度含む。

3　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。根攪乱状に入る。



土坑４

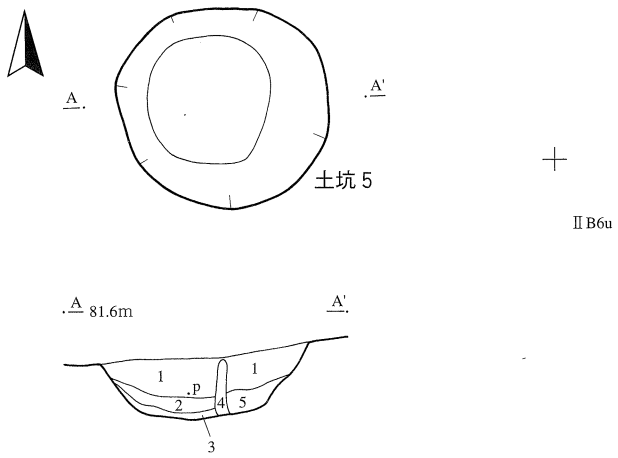
1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性強。炭化物粒子を少量含む。

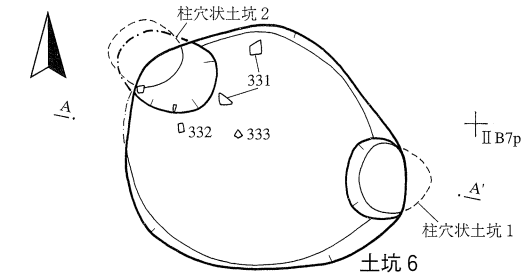
2　10YR3/3-3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　地山ブロックをやや多く含む。

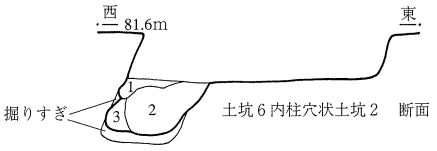
3　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　地山ブロックを少量含む。
　※上面に焼土（現地性ではない。ブロック状に入る。）、炭化物を含む。

0　1：40　2m

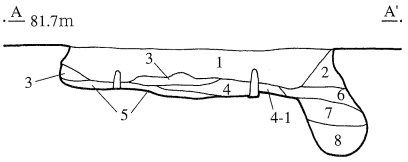
第35図　C区　土坑（１）







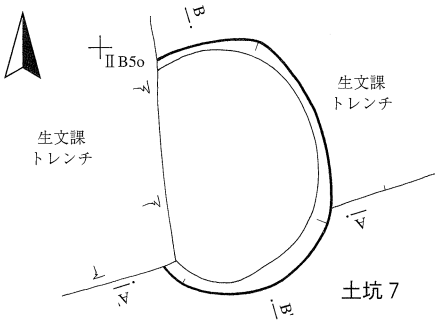
土坑6内柱穴状土坑2　断面

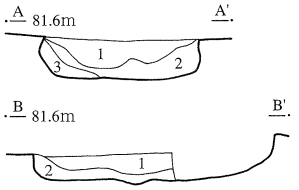


土坑6，土坑6内柱穴状土坑1　断面

土坑5

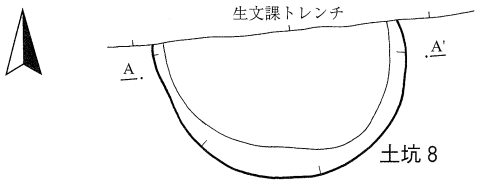
1　10YR2/1　黒色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　炭化物粒子（径～1㎜）を少量含む。地山ブロックを少量含む。
2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
3　10YR2/1　黒色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　地山ブロック（径0.5～2㎝）を少量含む。
4　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性なし。
5　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。地山ブロックを少量含む。

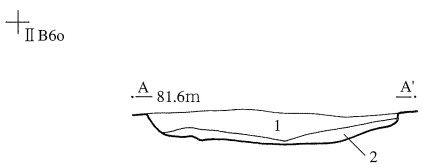




土坑7

1　10YR2/2～2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　炭化物粒子を微量含む。小円礫を僅かに含む。
　地山ブロック（10YR4/4褐色砂質シルト）をやや多く含む。
2　10YR3/3　暗褐色シルト～砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　地山ブロックを少量含む。
3　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。





土坑6・土坑6内柱穴状土坑1

1　10YR2/1　黒色シルト。締まり強。粘性あまりなし。
　炭化物粒子を僅かに含む。10YR3/4暗褐色シルトブロックを少量含む。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　炭化物粒子を僅かに含む。黒褐色シルトブロックを多く含む。
　褐色シルトブロックを少量含む。
3　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　10YR4/6褐色砂質シルトブロックを多量に含む。
4　10YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　一部に黒褐色シルト（植物の根か）を含む。
4-1　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
5　10YR2/1　黒色シルト。締まり強。粘性あり。
　地山ブロックを僅かに含む。
6　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　炭化物粒子を僅かに含む。10YR3/4暗褐色シルトブロックを少量含む。
7　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　黒褐色シルトをまだら状にやや多く含む。
8　7.5YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
　下部を中心にして暗褐色シルトが混じる。
　※1　杭状のものは土質は地山を呈するが、僅かしか残らない。
　※2　6～8層は土坑6内柱穴状土坑1の埋土。

土坑6内柱穴状土坑2

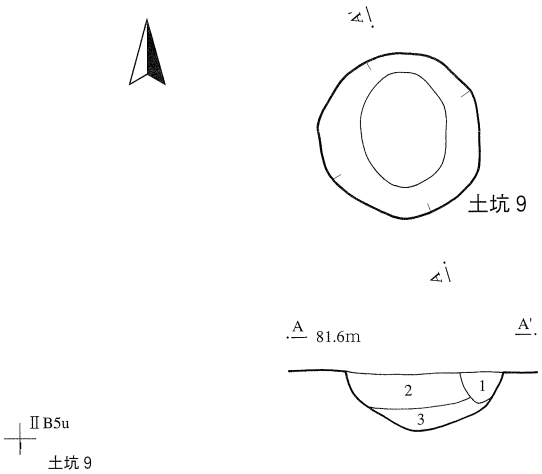
1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
　炭化物粒子（径1～2㎜）を少量含む。
　10YR3/4暗褐色シルトブロック（径1㎝前後）をやや多く含む。
2　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　10YR4/4褐色シルトブロックを多く含む。
3　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
　10YR4/4褐色シルトブロックを少量含む。

土坑8

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　地山ブロックを僅かに含む。両端に地山崩落土あり。
2　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　地山ブロックを僅かに含む。

0　1：40　2m

第36図　C区　土坑（2）

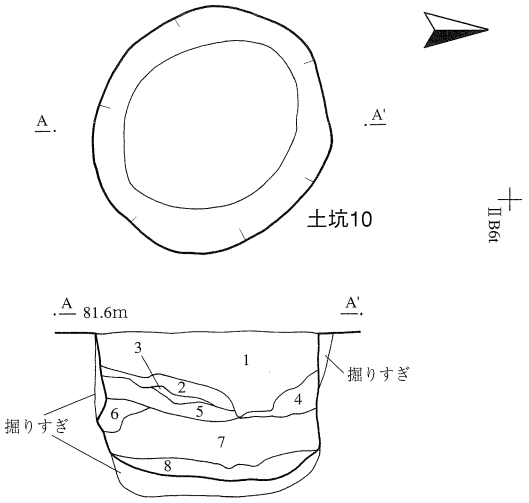


土坑 9

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。炭化物粒子（径～１㎜）を僅かに含む。

2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
炭化物粒子（径～１㎜）を僅かに含む。
焼土状ブロックを僅かに含む。10YR4/4褐色砂質シルトの地山塊を僅かに含む。

3　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。炭化物粒子を僅かに、10YR2/2黒褐色シルトブロックを少量、褐色シルトブロックをやや多く含む。



土坑10

1　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あまりなし。
10YR4/6褐色シルトブロックを多く含む。人為堆積。小礫を僅かに含む。

2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
炭化物粒子を僅かに含む。褐色シルトブロック、小礫を僅かに含む。

3　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。砂が混じる。
褐色シルトブロックを多く含む。

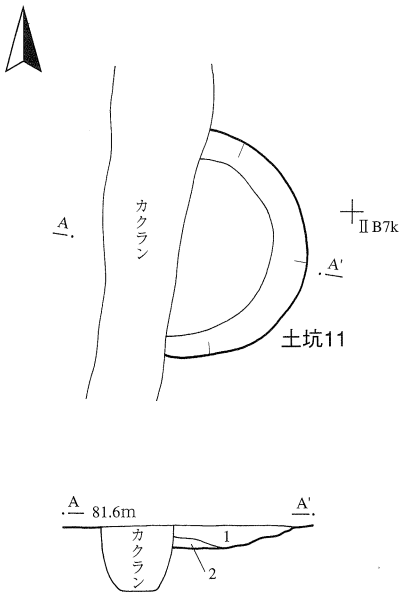
4　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
小礫を僅かに含む。層の上部に褐色シルトブロックをやや多く含む。

5　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性なし。

6　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。

7　10YR3/3　暗褐色砂。締まり弱。粘性なし。小礫をやや多く含む。
黒褐色～褐色シルトを少量含む。

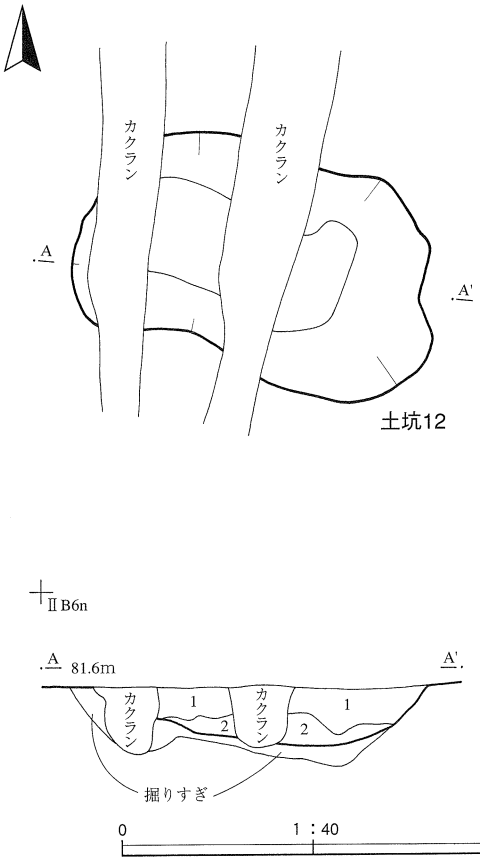
8　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
焼土状粒子を僅かに含む。暗褐色シルトブロック少量含む。
※８層に堆積する焼土は移動したものである。土坑の南西側に面的にブロック状に入っている。北側にはほとんど含まれない。



土坑11

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
地山ブロックを僅かに含む。

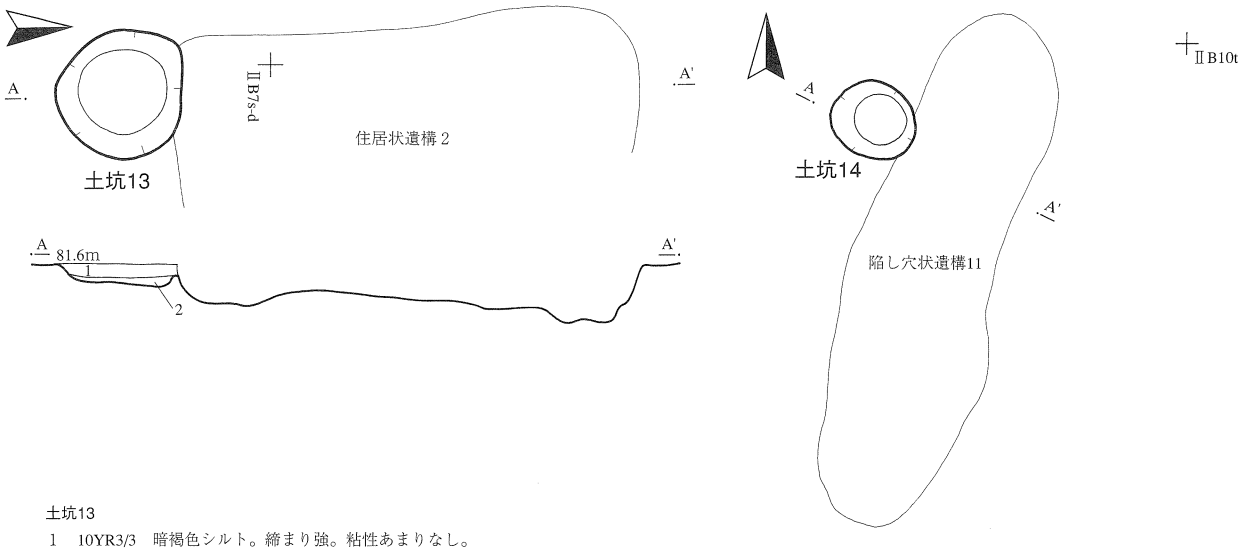
2　10YR3/3　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。



土坑12

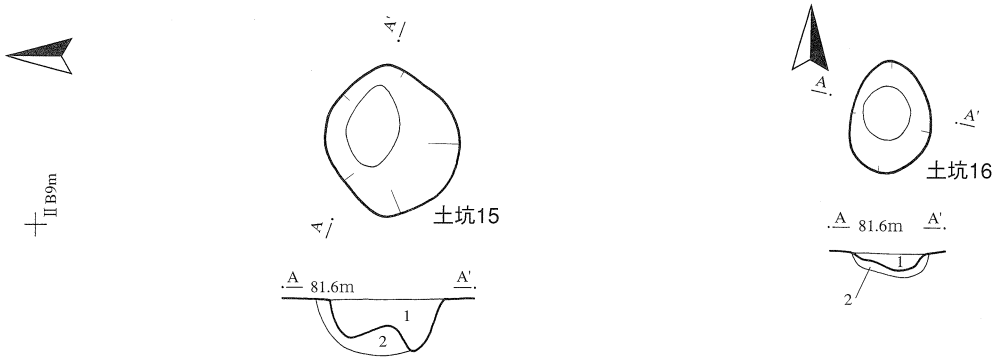
1・2　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
10YR4/4褐色シルトの地山ブロックを１・２の層の境界付近に僅かに含む。

第37図　C区　土坑（３）



土坑13
1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性あまりなし。
2　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あまりなし。
10YR3/4暗褐色シルトブロックをやや多く含む。

土坑14
1　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
褐色シルトブロックをやや多く含む。



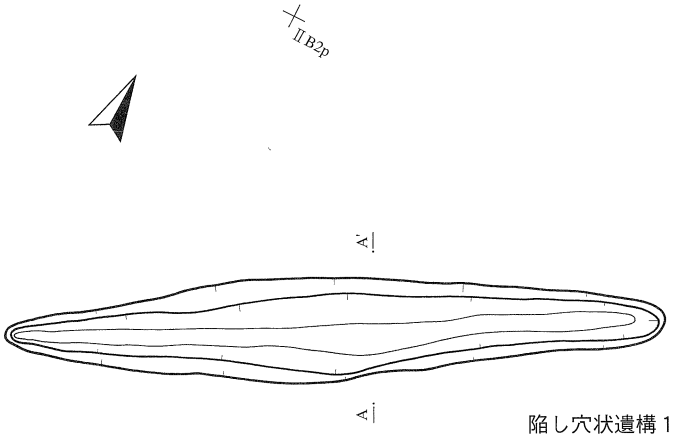
土坑15
1　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
地山暗褐色砂がブロック状に混じる。
2　10YR3/3　暗褐色砂。締まりなし。粘性なし。
※2層部分は掘りすぎ。

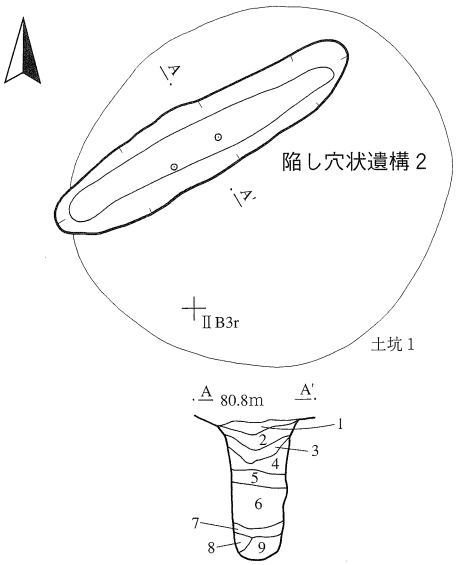
ⅡB12n

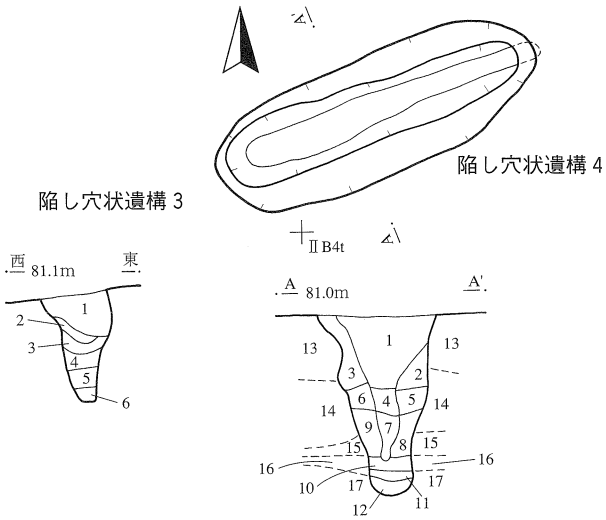
土坑16
1　10YR3/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あまりなし。
2　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり強。粘性あまりなし。
※2層部分は掘りすぎ。

0　1：40　2m

第38図　C区　土坑（4）







陷し穴状遺構 1

1　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　褐色シルトブロックをやや多く含む。
2　7.5YR4/4　褐色砂～砂質シルト。締まり強。粘性あまりなし。
　1層の土が僅かに混じる。
3　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
4　10YR3/3-3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
5　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
6　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
7　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
8　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
9　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
10　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
11　10YR3/4　暗褐色砂。締まり強。粘性なし。
12　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
13　11層と同じ。
14　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　※10～14層は地山。

陷し穴状遺構 2

1　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　褐色シルトブロック塊をやや多く含む。。
3　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロックを少量含む。
4　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロック塊を少量含む。
5　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　4層と違って混じりものはなし。
6　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　暗褐色シルト塊が僅かに入る。
7　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
　褐色シルト塊を少量含む。
8　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　褐色シルトブロックをやや多く含む。
9　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
　暗褐色シルトブロックを少量含む。

陷し穴状遺構 3

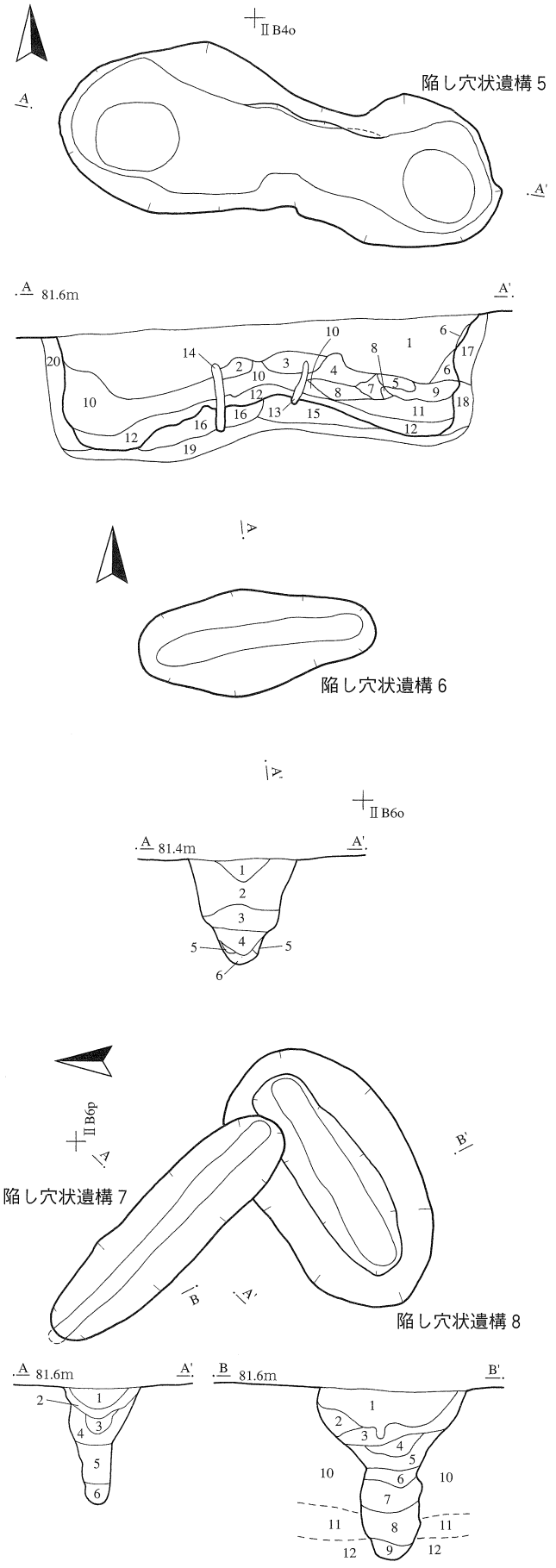
1　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロック、暗褐色シルトブロックをやや多く含む。
2　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
3　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　褐色シルトブロックを僅かに含む。
4　10YR4/4　褐色シルト～砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
5　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
6　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　褐色シルトブロックを少量含む。
　※平面図取り忘れ。

陷し穴状遺構 4

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロックを少量含む。
3　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　褐色シルトブロックを少量含む。
4　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
5　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
6　10YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
7　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
8　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
9　10YR4/4-4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
10　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まり弱。粘性あり。
11　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
12　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
13　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
14　10YR4/6　褐色砂～砂質シルト。締まり強。粘性あり。
15　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
16　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
17　10YR4/4-4/6　褐色砂質シルト。
　※13～17層は地山。

0　1：40　2m

第39図　C区　陷し穴状遺構（1）



陥し穴状遺構5

1 10YR2/2 黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
地山ブロックを少量含む。
2 10YR2/3-3/3 黒褐色～暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
10YR2/3と3/3が混じり気味に入る。
3 10YR2/3-3/3 黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
地山塊が混じる。10YR2/3と3/3が混じり気味に入る。
4 10YR4/4-4/6 褐色砂質シルト。締まり強。粘性なし。
黒褐色シルトが少量混じる。
5 10YR3/4-4/4 暗褐色～褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
6 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
10YR3/3暗褐色シルトが混合する。
7 10YR2/2 黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。根攪乱か。
8 10YR4/4 褐色シルト。締まり強。粘性あり。
9 10YR2/3 黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
地山ブロックを少量含む。
10 10YR3/4 暗褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
東側に10YR4/6褐色細砂、西側に10YR2/2黒褐色シルトが混じる。
11 10YR3/4 暗褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
10YR4/4褐色砂質シルトブロックをやや多く含む。
12 10YR2/2-2/3 黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
13 10YR2/2 黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。逆茂木痕か。
14 10YR2/2 黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
地山ブロックを少量混じる。攪乱か。
15 10YR4/6 褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
16 10YR4/4 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
17 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まり強。粘性なし。
18 10YR4/6 褐色シルト。締まり強。粘性あり。
19 10YR4/4 褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
20 10YR4/6 褐色砂～シルト。締まり強。粘性ややあり。
※16～20層は地山。

陥し穴状遺構6

1 10YR3/3 暗褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
2 10YR3/4 暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
北側に地山崩落土（10YR3/4暗褐色砂）あり。炭化物粒子を僅かに含む。
3 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
小礫を僅かに含む。
4 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
5 10YR3/4 暗褐色砂。締まりなし。粘性なし。地山崩落土。
6 10YR2/3 黒褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あまりなし。

陥し穴状遺構7

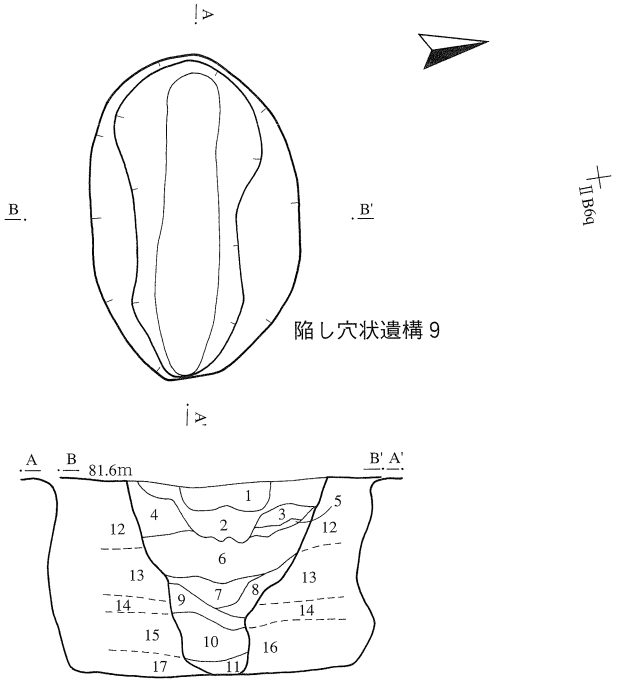
1 10YR2/3 黒褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
2 10YR3/3 暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
3 10YR3/3 暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
4 10YR3/4 暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
5 10YR3/4 暗褐色砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
6 10YR2/3 黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。

陥し穴状遺構8

1 10YR2/3 黒褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
10YR4/6褐色砂質シルト塊を僅かに含む。
2 10YR3/4 暗褐色シルト。締まり強。粘性あまりなし。
褐色砂質シルトブロックを少量含む。
3 10YR3/4 暗褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
黒褐色シルトブロックを少量含む。
4 10YR2/3 黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
5 10YR4/4 褐色シルト。締まり強。粘性あまりなし。
7.5YR4/4褐色砂質シルトブロックを少量含む。
6 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
7 10YR3/4 暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
褐色シルトブロックやや多く含む。
8 10YR4/6 褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
9 10YR3/3 暗褐色砂。締まり弱。粘性なし。
10 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まり強。粘性なし。
11 10YR4/6 褐色砂。締まり強。粘性なし。
12 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
※10～12層は地山。

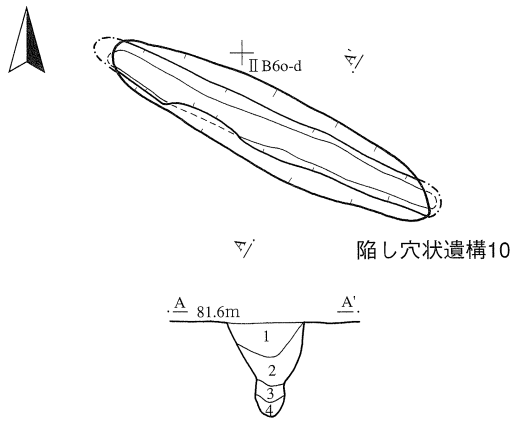
0 1：40 2m

第40図 C区 陥し穴状遺構（2）



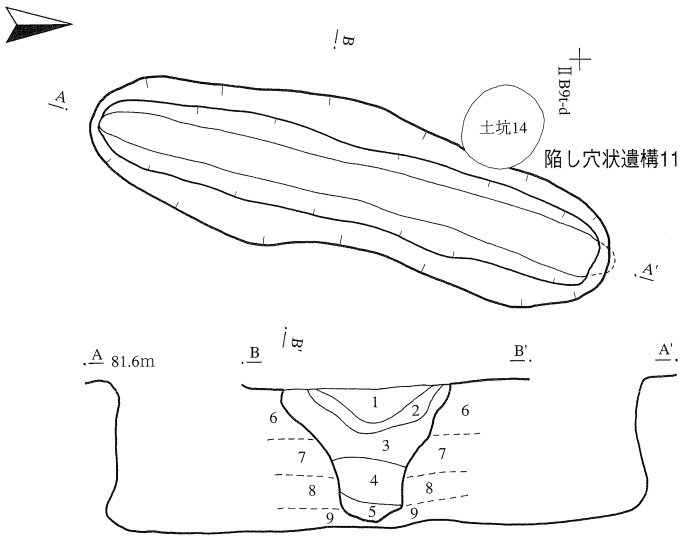
陷し穴状遺構 9

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　10YR3/4暗褐色シルトブロック（径１㎜前後）を少量含む。
2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
3　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
4　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
5　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
6　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
7　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　南側に一部砂層混じりの部分あり。
8　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
9　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
10　10YR4/6　褐色砂。締まり弱。粘性なし。
11　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり弱。粘性あまりなし。
12　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
13　10YR4/6　褐色砂。締まりやや強。粘性なし。
14　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
15　10YR4/6　褐色砂。締まりやや強。粘性なし。
16　10YR4/6　褐色砂。締まりやや強。粘性なし。礫を含む。
　15層と比べて砂の粒子が粗い。
17　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　※12～17層は地山。



陷し穴状遺構10

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　僅かに地山ブロックを含む。
2　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性なし。
　僅かに炭化物粒子を含む。
3　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性なし。
　地山（10YR4/6褐色砂質シルト）ブロックをやや多く含む。
4　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。

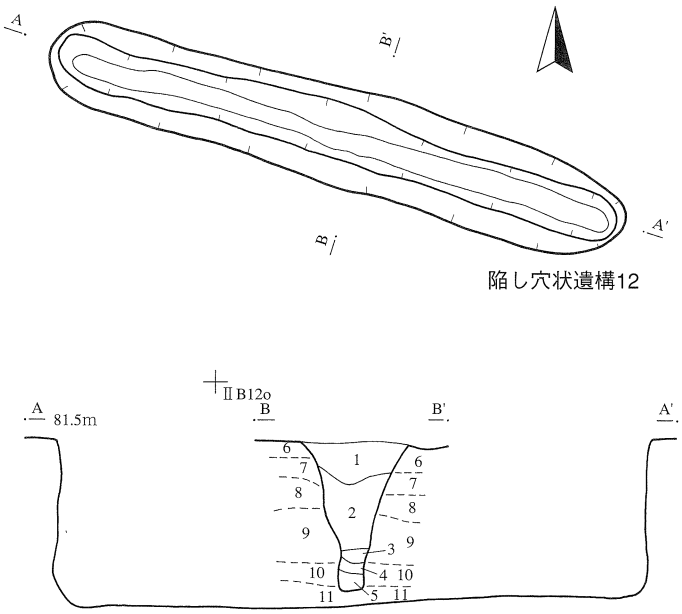


陷し穴状遺構11

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　根撹乱に伴う褐色砂質シルトブロックを含む。
2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　根撹乱に伴う褐色砂質シルトブロックを含む。
3　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
4　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
5　10YR2/3　黒褐色砂質シルト。締まり弱。粘性あまりなし。
6　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
7　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　９層より砂っけが強い。
8　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
9　10YR4/4　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
　※６～９層は地山。

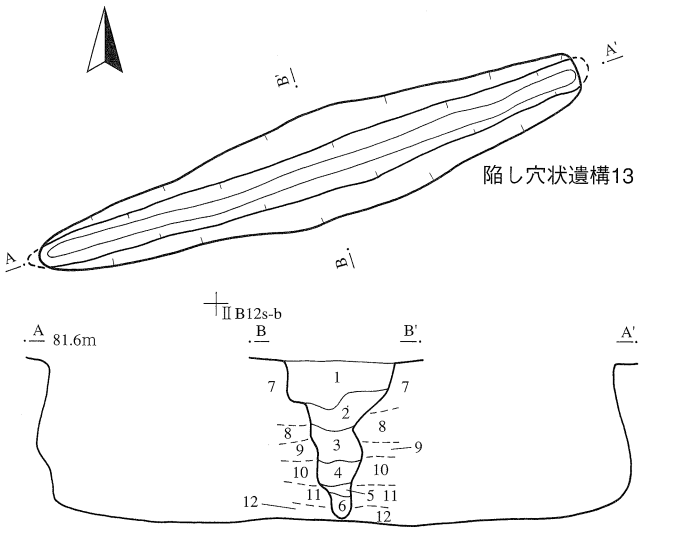
0　1：40　2m

第41図　C区　陷し穴状遺構（３）



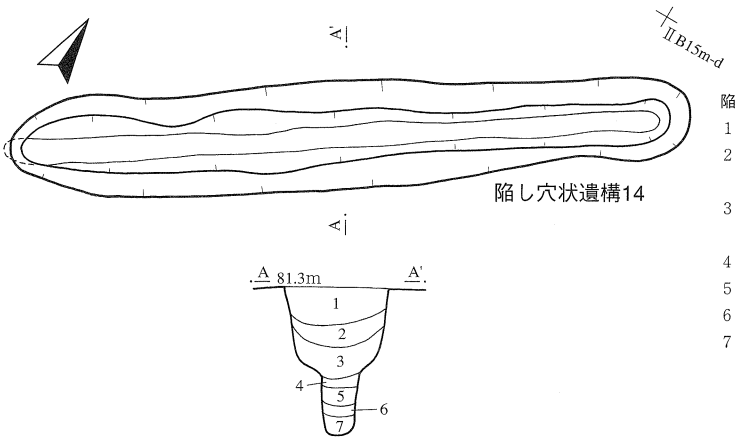
陷し穴状遺構12

1 10YR2/2 黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
10YR4/4褐色シルト～砂質シルトブロックをやや多く含む。
2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
10YR4/6褐色砂質シルトブロックを多く含む。
3 10YR3/3 暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
10YR4/6褐色砂質シルトブロックが主体になる。
4 10YR4/4 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
5 10YR2/3 黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
10YR4/4褐色砂質シルトブロックを少量含む。
6 10YR4/4 褐色砂。締まり強。粘性なし。
7 10YR4/4 褐色シルト。締まり強。粘性あり。
8 10YR4/4 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
9 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
10 10YR4/6 褐色砂。締まり弱。粘性なし。
11 10YR4/6 褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性なし。
※6～11層は地山。



陷し穴状遺構13

1 10YR2/2 黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
暗褐色シルトブロックを僅かに含む。
2 10YR2/3 黒褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
褐色砂質シルトブロックを少量含む。
3 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
褐色砂及び砂質シルトブロックをやや多く含む。
4 10YR2/3 黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
褐色シルトブロックを少量含む。
5 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
地山ブロックを少量含む。
6 10YR2/3-3/3 黒褐色～暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
7 10YR4/4 褐色細砂。
8 10YR4/6 褐色シルト。
9 10YR4/6 褐色砂質シルト。
10 10YR4/4 褐色細砂。
11 10YR4/6 褐色シルト。
12 10YR4/4 褐色粗砂。
※7～12層は地山。

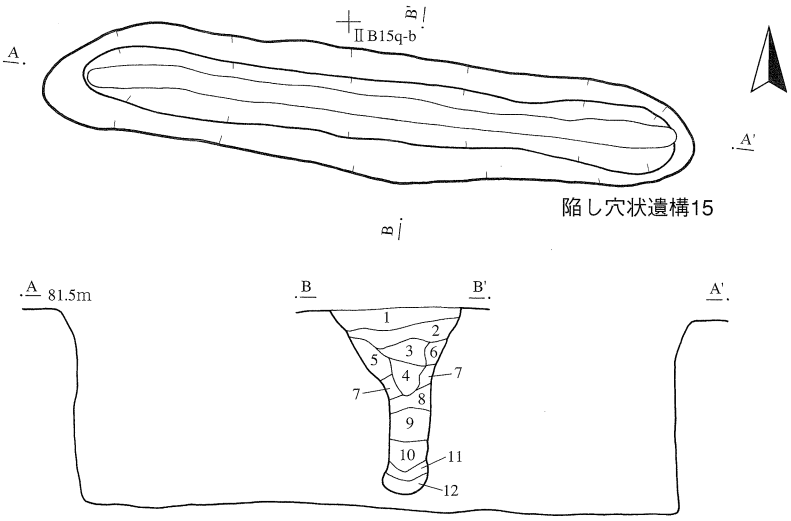


陷し穴状遺構14

1 10YR2/1-2/2 黒色～黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
2 10YR3/3-3/4 暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
中央部に根攪乱あり。
3 7.5YR4/4 褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
中央上部に根攪乱あり。
4 10YR2/3 黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
5 7.5YR4/4 褐色シルト。締まり強。粘性あり。
6 10YR4/6 褐色シルト。締まり強。粘性あり。
7 10YR3/3-4/6 暗褐色シルト。締まり弱。粘性あり。

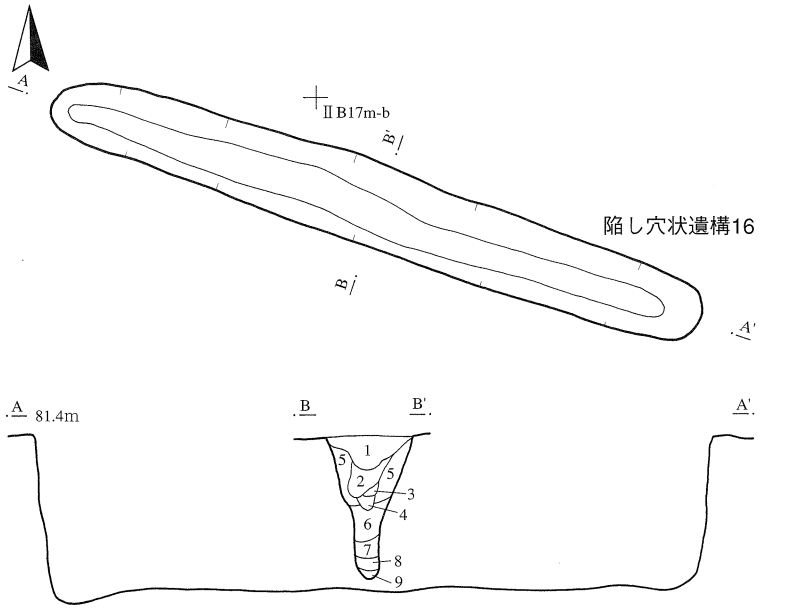
0 1：40 2m

第42図 C区 陷し穴状遺構（4）



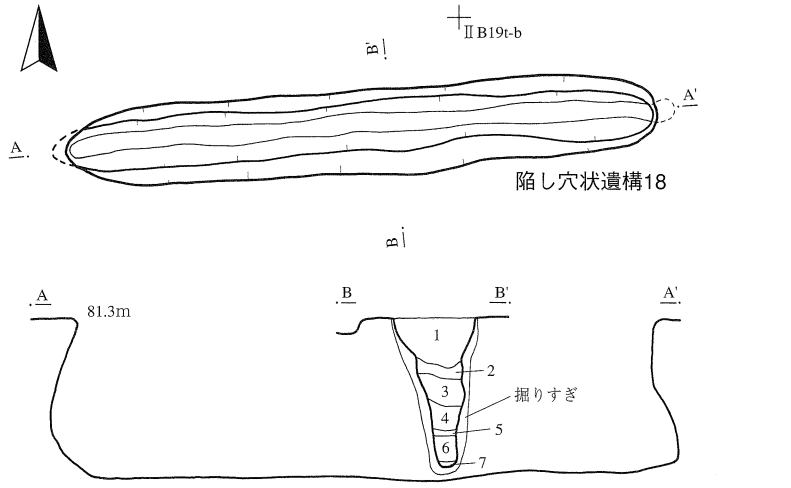
陷し穴状遺構15

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
3　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。暗褐色シルトが混じる。
4　10YR3/3　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。褐色砂少量混じる。
5　7.5YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
6　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
7　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
8　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
9　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性ややあり。北側に根攪乱状に暗褐色シルトが入る。
10　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性ややあり。
11　10YR4/4-4/6　褐色細砂。締まり弱。粘性あまりなし。
12　10YR2/3　黒褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。



陷し穴状遺構16

1　10YR2/1-2/2　黒色～黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。壁寄りに地山ブロックを少量含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。根攪乱に伴う褐色砂質シルトブロック（5㎝程度）をやや多く含む。
3　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
4　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
5　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
6　7.5YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。暗褐色シルトを少量含む。
7　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。褐色シルトブロック（径～2㎝）少量含む。
8　10YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
9　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。

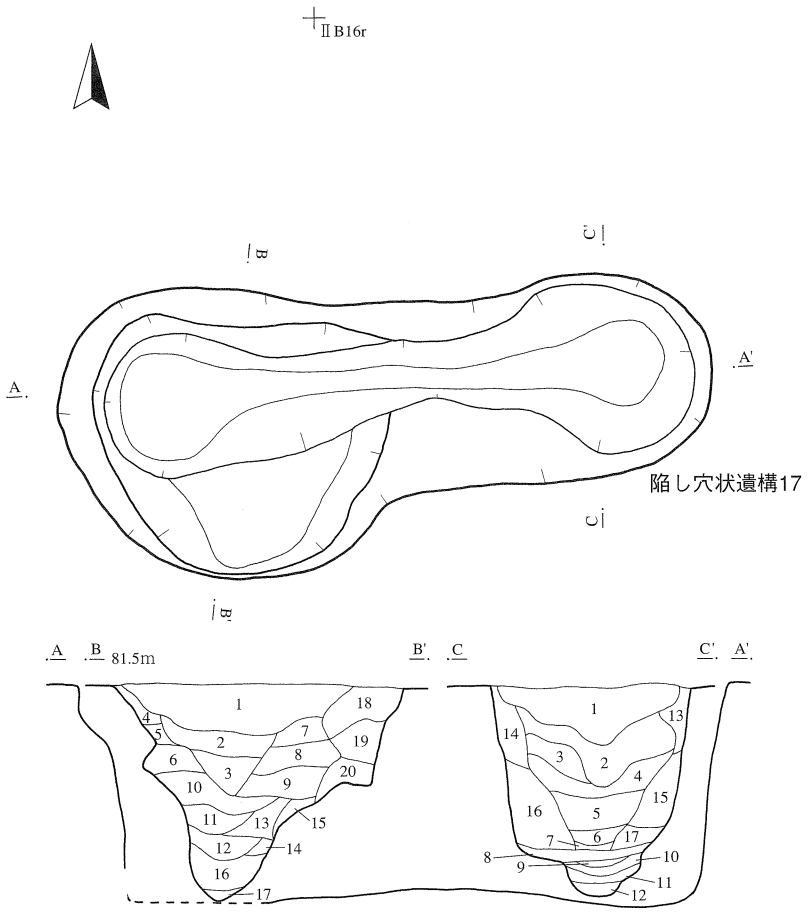


陷し穴状遺構18

1　10YR2/1-2/2　黒色～黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。褐色シルトブロック（径5㎜前後）を僅かに含む。
2　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
3　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。褐色シルトブロックを少量含む。
4　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
5　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
6　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり弱。粘性あり。褐色シルトブロック（径1～5㎜前後）を多く含む。
7　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。

0　1：40　2m

第43図　C区　陷し穴状遺構（5）



陷し穴状遺構17　B-B'

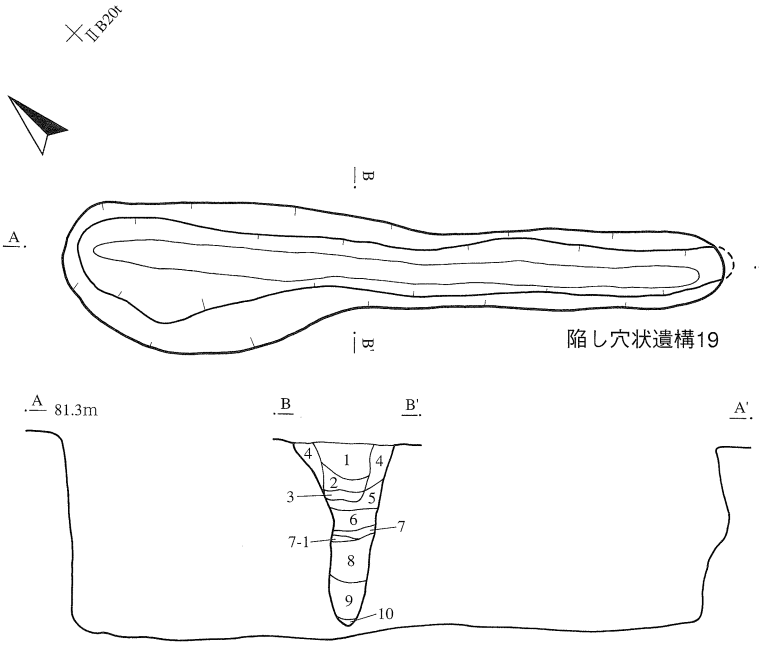
1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
僅かに褐色土ブロックが入る。
3　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
褐色土ブロック、暗褐色土ブロックを僅かに含む。
4　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
暗褐色土ブロックをやや多く含む。
5　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
褐色土ブロックを僅かに含む。
6　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
褐色土ブロックを僅かに含む。
7　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
褐色土ブロックを僅かに含む。
8　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
褐色土ブロックを僅かに含む。暗褐色土ブロックをやや多く含む。
9　10YR3/3　暗褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
褐色土塊を僅かに含む。
10　10YR4/4-4/6　褐色シルト～砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
北側下部に暗褐色土が入る。中央部分に根状の黒褐色～暗褐色土が入る。
11　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
北側上部に褐色砂、南側下部に黒褐色～暗褐色土が入る。
12　10YR4/4　褐色砂～砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
埋没の際の崩落土か。
13　10YR2/3　黒褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
褐色土ブロック、塊をやや多く含む。暗褐色土ブロックをやや多く含む。
14　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性ややあり。15層と一連か。
15　10YR4/4-4/6　褐色砂～砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
地山崩落土。
16　10YR4/4-4/6　褐色砂～砂質シルト。締まりやや弱。粘性あまりなし。
砂っ気強い。
17　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
18　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
19　10YR3/3-3/4　暗褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
褐色土塊を少量含む。
20　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
褐色土ブロックを僅かに含む。

陷し穴状遺構17　C-C'

1　10YR1/2-2/2　黒色～黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
暗褐色土ブロック、褐色土ブロックを少量ずつ含む。
3　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
褐色土ブロックをやや多く含む。黒褐色土ブロックを僅かに含む。
4　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性ややあり。
中央部に黒褐色シルトブロックをやや多く含む（植物の根か）。
暗褐色シルトを少量含む。
5　10YR4/6　褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
中央部に黒褐色シルトブロックをやや多く含む。
暗褐色シルトを少量含む。
6　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
7　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
8　10YR1/2-2/2　黒色～黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
9　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まり弱。粘性あまりなし。
砂っ気強い。
10　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
北側下部に暗褐色土が入る。中央部分に根状の黒褐色～暗褐色土が入る
11　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あまりなし。砂っ気強い。
12　10YR2/2　黒褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
13　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あまりなし。
14　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
15　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あまりなし。砂っ気強い。
16　10YR4/6　褐色砂～砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
下部に８層の土が僅かに入る。
17　10YR4/6　褐色砂。締まり弱。粘性なし。

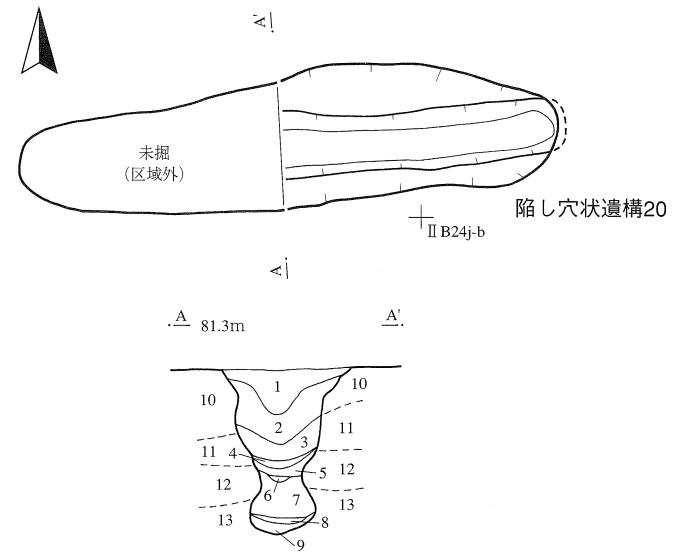
0　1：40　2m

第44図　C区　陷し穴状遺構（６）



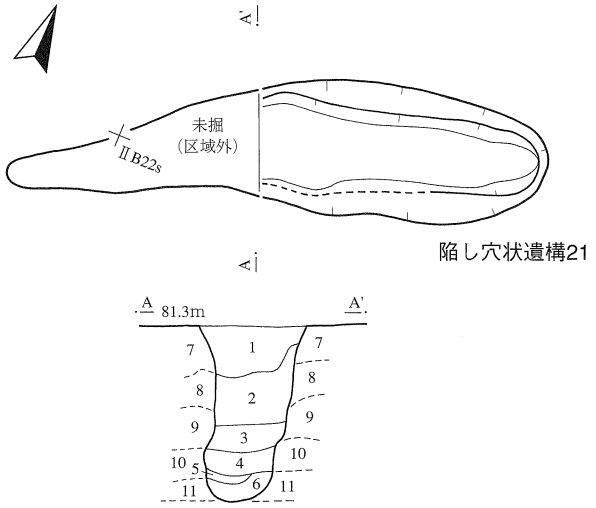
陷し穴状遺構19

1　10YR2/1-2/2　黒色～黒褐色シルト。締まりやや強。
　粘性あり。
2　7.5YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　褐色砂質シルトブロック（径～５㎜）をやや多く含む。
3　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　地山ブロック（径～２㎜）をやや多く含む。
4　10YR3/3　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
5　7.5YR3/4　暗褐色砂。締まり弱。粘性なし。
6　10YR2/2　黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
　厚さ１㎜の褐色砂質シルトの薄い層あり。
　暗褐色シルトを少量含む。
7　10YR3/2　黒褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
7-1　10YR2/2　黒褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
8　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
　褐色砂質シルトブロック（径～２㎝）を少量含む。
9　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まり強。
　粘性あり。
　褐色砂質シルトブロック（径～２㎝）を少量含む。
10　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まりやや弱。
　粘性あり。



陷し穴状遺構20

1　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
2　10YR3/3-3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。
　粘性あり。根攪乱あり。
3　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　根攪乱あり。
4　10YR2/2-2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
5　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
6　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
7　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性ややあり。
8　10YR2/3　黒褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
9　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。
　粘性あまりなし。砂の比率高い。13層に比べて暗い。
10　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
11　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
12　10YR4/4　褐色粘土。締まり強。粘性あり。
13　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　９層に比べて明るい。
　※10～13層は地山。

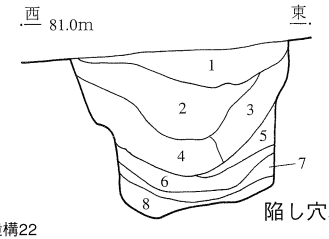


陷し穴状遺構21

1　10YR2/1　黒色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　両側に根攪乱あり。
2　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　両側に根攪乱が著しく入る。
3　7.5YR4/4　褐色粘土。締まり強。粘性あり。
　南側に根攪乱が入る。
4　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あまりなし。
5　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり弱。粘性あり。
6　10YR4/6　褐色細砂～砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
7　10YR3/3-3/4　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
8　10YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
9　10YR4/4-4/6　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性ややあり。
10　10YR4/6　褐色シルトと砂の互層。締まり強。粘性あり。
11　10YR4/4　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
　※７～11層は地山。

0　1：40　2m

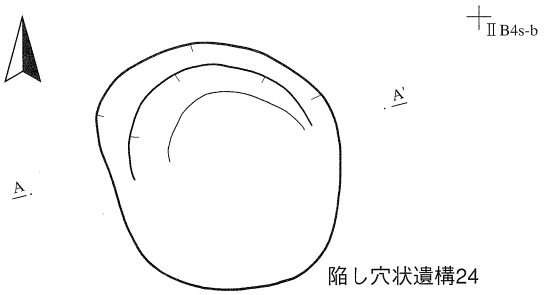
第45図　C区　陷し穴状遺構（７）



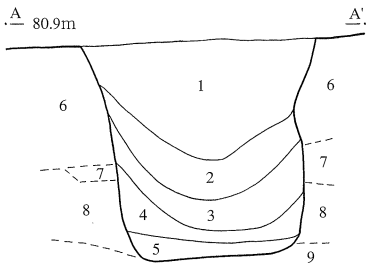
陷し穴状遺構22

陷し穴状遺構22

1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
2　10YR3/3-3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロック（径～２㎝）少量含む。
3　7.5YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
4　7.5YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　下層寄りは若干暗褐色に近い色を呈する。
　暗褐色シルトブロックを僅かに含む。
5　7.5YR4/4　褐色シルト～砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　暗褐色シルトブロックを僅かに含む。
6　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
　４、５層と比べて若干色調が暗い。下部に土器片入る。
7　10YR4/4-4/6　褐色砂質シルト～シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　暗褐色シルトブロックを少量含む。
8　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
　僅かに褐色土ブロックを含む。
　※平面図取り忘れ。

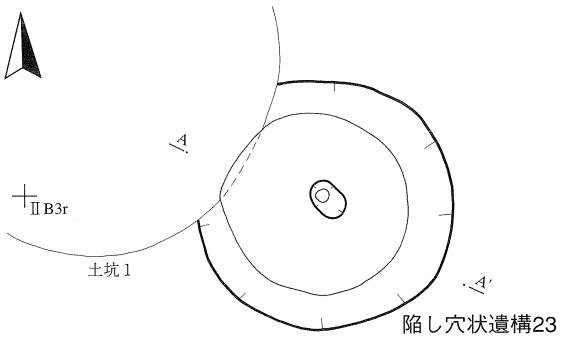


陷し穴状遺構24

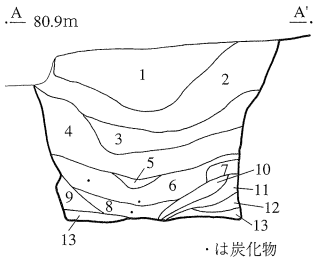


陷し穴状遺構24

1　10YR2/3　黒褐色シルト～砂質シルト。締まり強。粘性あり。
　暗褐色シルトをやや多く含む。土器片を含む。
2　10YR3/4　暗褐色シルト～砂質シルト。締まり強。粘性あり。
　砂質シルトとシルトは互層を形成している。褐色シルトを多く含む。
3　10YR4/4　褐色シルト～砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
　シルトを主体とする。暗褐色砂～シルトを少量含む。
4　10YR4/4-4/6　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
5　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり弱。粘性あり。
6　10YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
7　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
8　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
　４層よりも砂っ気が強い。７層と比べてシルト分が多い。
9　10YR4/4　褐色粗砂。締まりなし。粘性なし。
　※６～９層は地山。



陷し穴状遺構23

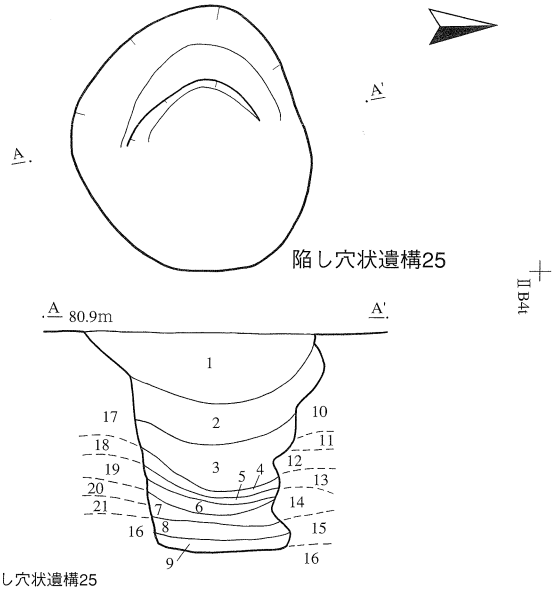


陷し穴状遺構23

1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
3　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
　褐色シルトブロック僅かに含む。
4　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
5　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。砂っ気が強い。
6　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロック主体。炭化物を微量含む。炭化物サンプル採取。
7　10YR4/6　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　暗褐色シルトを少量含む。
8　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　炭化物を微量含む。炭化物サンプル採取。
9　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
10　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロックをやや多く含む。
11　10YR4/6　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
12　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
13　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。

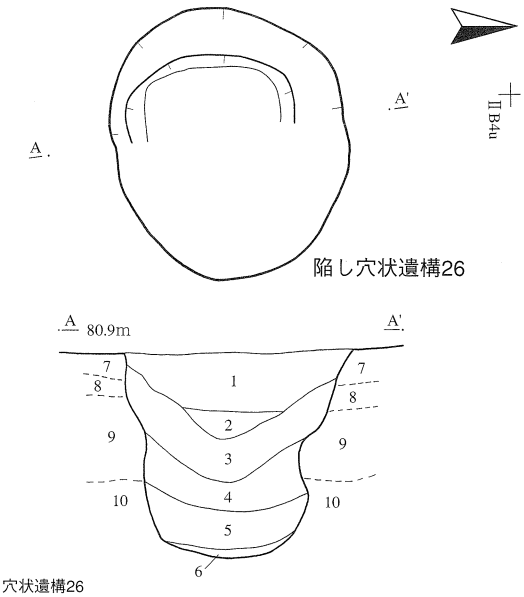
0　1：40　2m

第46図　C区　陷し穴状遺構（８）



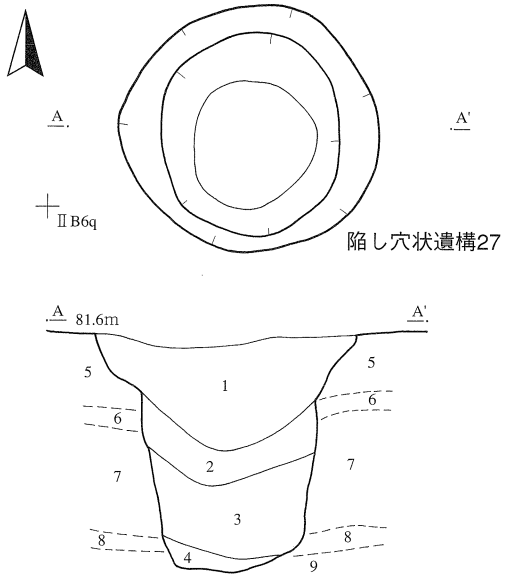
陷し穴状遺構25

1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
3　7.5YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
4　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
5　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
6　10YR3/3-3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
7　7.5YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
8　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
9　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
10　10YR4/4-4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
11　10YR4/4　褐色砂。締まりやや強。粘性なし。
12　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
13　11層と同じ。
14　12層と同じ。
15　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
16　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
砂っ気が15層に比べて強い。
17　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
18　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。砂っ気が強い。
19　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
20　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
21　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
※10～21層は地山。



陷し穴状遺構26

1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
1層の土が少量入る。
3　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
褐色シルトブロックを少量含む。
4　10YR4/4　褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
5　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
10YR4/4シルトと互層を形成する（3回分）。
6　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
7　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まり強。粘性なし。砂っ気強い。
8　10YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
9　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。一部に砂が入る。
10　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。砂っ気強い。
※7～10層は地山。

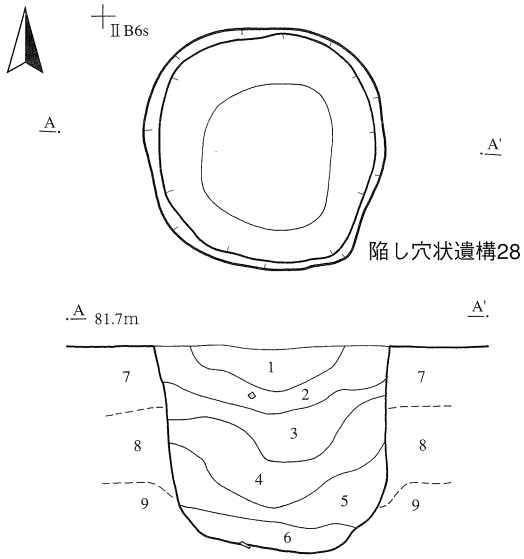


陷し穴状遺構27

1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
小～中の礫を少量含む。
2　7.5YR4/4　褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
3　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まり弱。粘性あり。
2層に比べて褐色がかる。
4　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
褐色シルトブロックを少量含む。
5　10YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
6　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
7　10YR4/6　褐色細砂。締まりやや弱。粘性なし。
東側に一部粗砂が混じる。
8　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
9　10YR4/4　褐色粗砂。締まりなし。粘性なし。
※5～9層は地山。

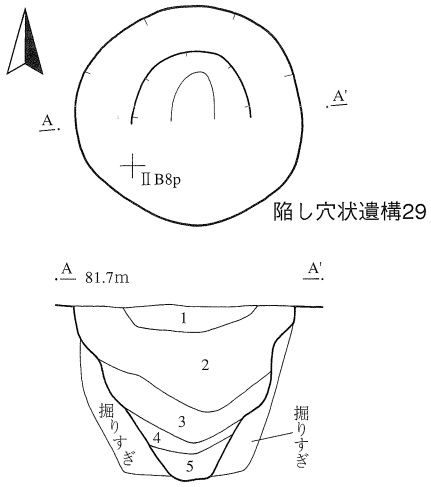
0　1：40　2m

第47図　C区　陷し穴状遺構（9）



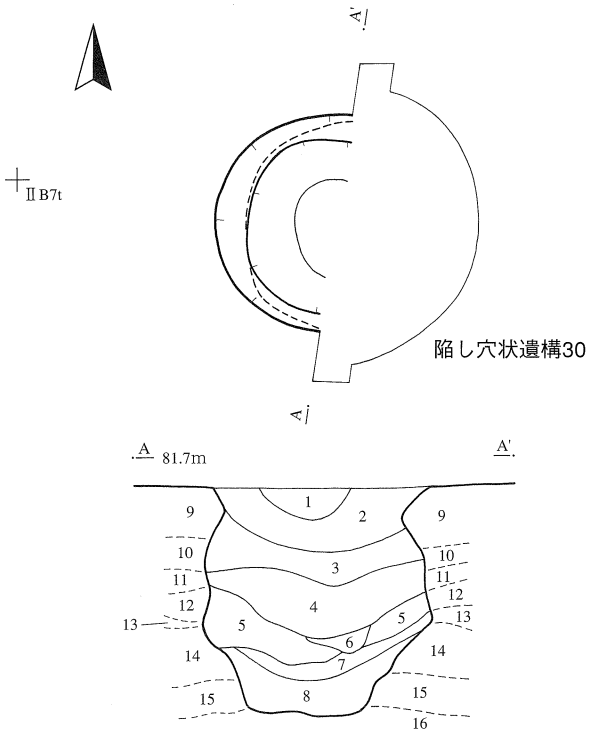
陥し穴状遺構28

1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。小礫を少量含む。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロック、小礫を少量含む。
3　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
4　10YR4/4　褐色シルト～砂質シルト。締まりやや弱。粘性あり。
5　10YR4/4-4/6　褐色砂～砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
　8層の崩落土を含む。
6　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
7　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。
8　10YR4/6　褐色細砂。締まりやや強。粘性なし。
9　10YR4/6　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
　※7～9層は地山。



陥し穴状遺構29

1　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
3　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性なし。
　4層より砂の入りが多い。
4　7.5YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
5　7.5YR4/4　褐色シルト。締まり強。粘性あり。

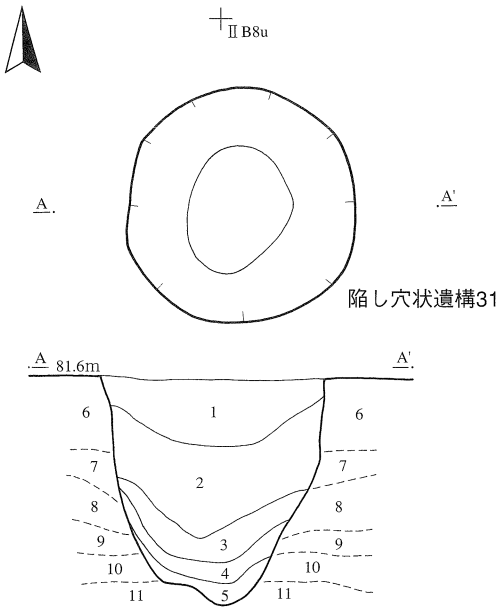


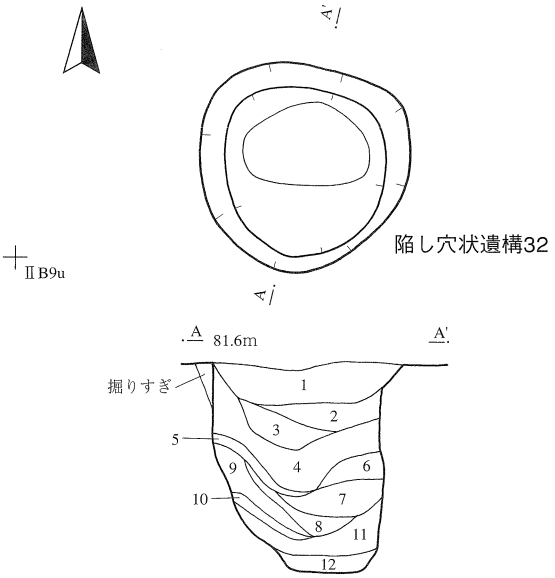
陥し穴状遺構30

1　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
2　10YR3/4　暗褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
3　10YR3/4　暗褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。
　北側に褐色シルト（地山崩落土）部分あり。
4　10YR3/4　暗褐色シルト～砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
5　10YR4/4　褐色細砂。締まり弱。粘性なし。
6　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性ややあり。
7　10YR3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
8　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり強。粘性なし。
9　10YR4/4-4/6　褐色シルト。粘性あり。
10　10YR4/6　褐色細砂。粘性あまりなし。
11　10YR4/4　褐色粗砂。粘性あまりなし。
12　10YR4/6　褐色細砂。締まり弱。粘性なし。
13　10YR4/4　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
14　10YR4/4　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
　13層に比べて粒子は細かい。
15　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
16　10YR4/4　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
　13層と同じくらいの砂の粗さか。
　※9～16層は地山。

0　1：40　2m

第48図　C区　陥し穴状遺構（10）



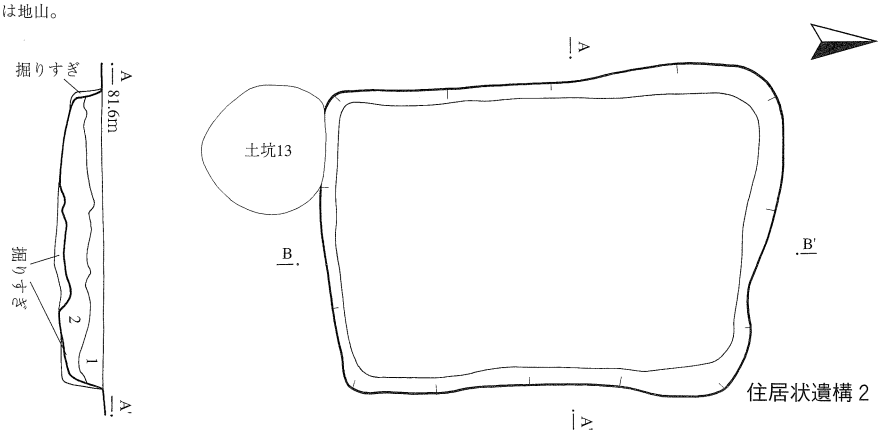


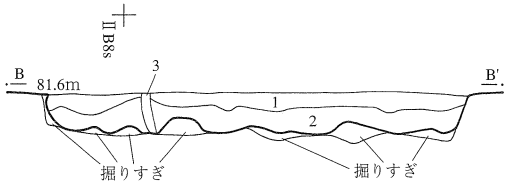
陷し穴状遺構31

1　10YR3/3-3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性ややあり。小礫を少量含む。
　褐色シルトブロックを少量含む。
2　7.5YR4/4　褐色シルト。締まりやや弱。粘性あり。
3　10YR4/4-4/6　褐色シルト～砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
　４層と比べて若干色調が暗い。
4　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
　３層と比べて若干色調が明るい。
5　10YR3/3-3/4　暗褐色砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
　砂が少量混じっている。
6　10YR4/6　褐色シルト。締まり強。粘性あり。
7　10YR4/6　褐色細砂。締まりやや強。粘性なし。
8　10YR4/4　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
9　10YR4/6　褐色細砂。締まりやや弱。粘性あまりなし。
10　10YR4/4　褐色粗砂。締まり弱。粘性なし。
11　10YR4/6　褐色細砂。締まり弱。粘性なし。
　※６～11層は地山。

陷し穴状遺構32

1　10YR3/3　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　褐色シルトブロックを僅かに含む。
2　10YR3/3-3/4　暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
3　7.5YR4/4　褐色砂質シルト。締まり強。粘性あり。
4　7.5YR4/4　褐色砂～砂質シルト。締まりやや強。粘性あまりなし。
5　10YR3/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
　褐色シルトブロックを少量含む。
6　10YR4/4　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
7　10YR4/6　褐色細砂～砂質シルト。締まりやや弱。粘性あまりなし。
8　10YR4/6　褐色砂質シルト。締まり弱。粘性ややあり。
9　10YR4/4　褐色砂。締まり弱。粘性あまりなし。地山崩落層か。
10　7.5YR4/4　褐色砂～砂質シルト。締まり強。粘性あり。地山崩落層か。
11　10YR4/4-4/6　褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。
12　10YR3/4-4/4　暗褐色～褐色砂質シルト。締まりやや強。粘性あり。



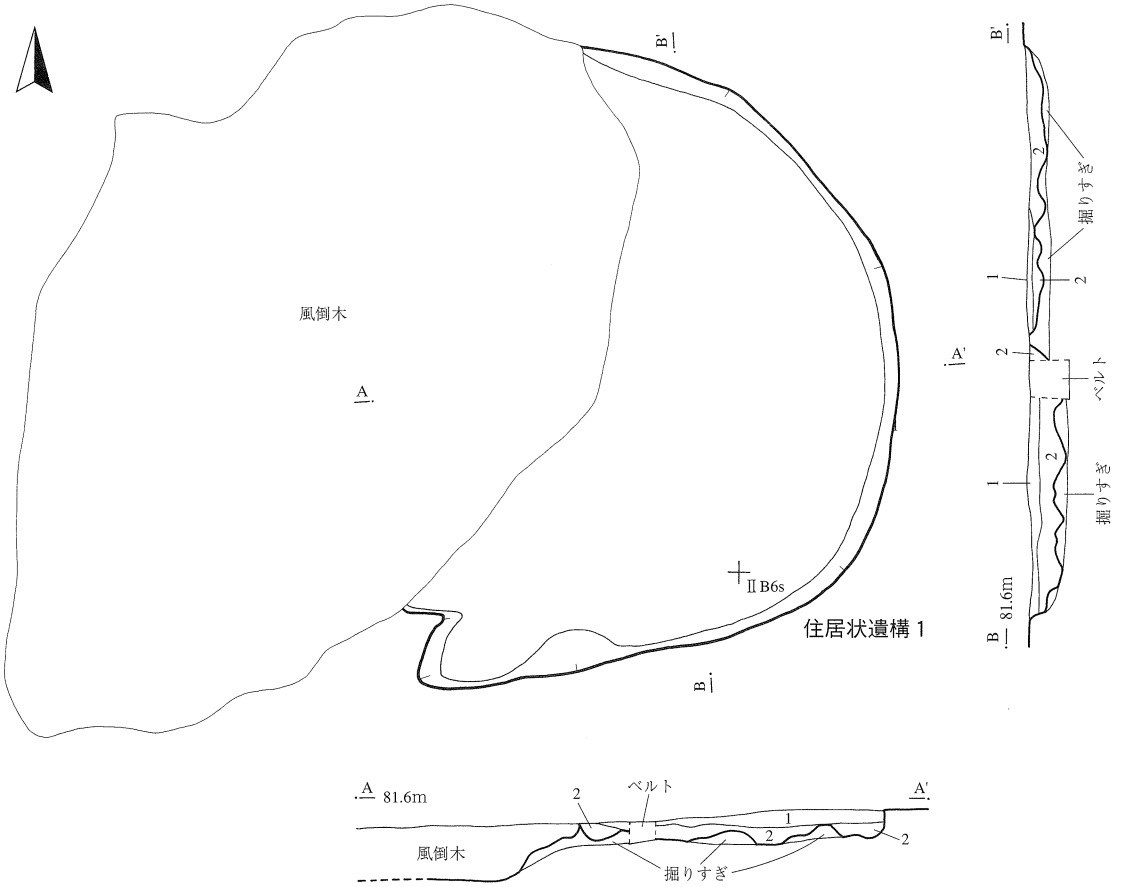


住居状遺構２

1　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　10YR4/6の褐色シルト粒子～ブロックを多く含む。
　炭化物粒子を僅かに含む。
2　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　10YR4/6褐色シルトブロックを主体とする。
3　10YR2/2　黒褐色シルト。締まりやや強。粘性あり。植物根か。

0　1：40　2m

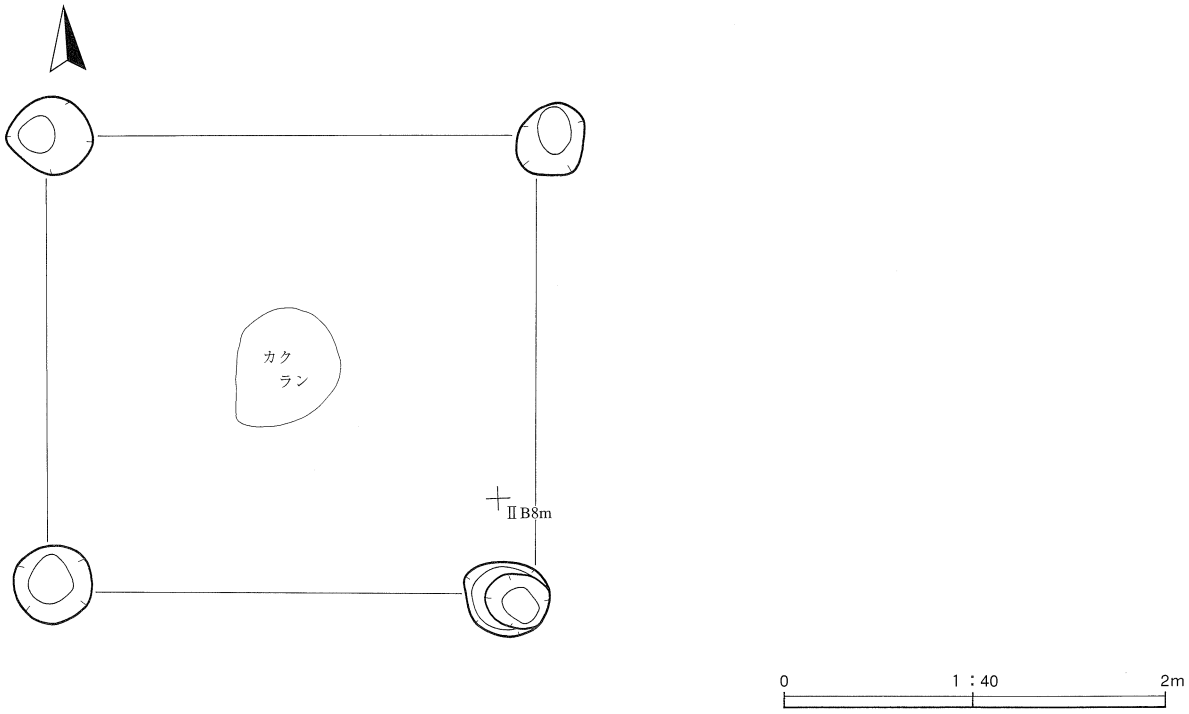
第49図　C区　陷し穴状遺構（11）・住居状遺構（１）



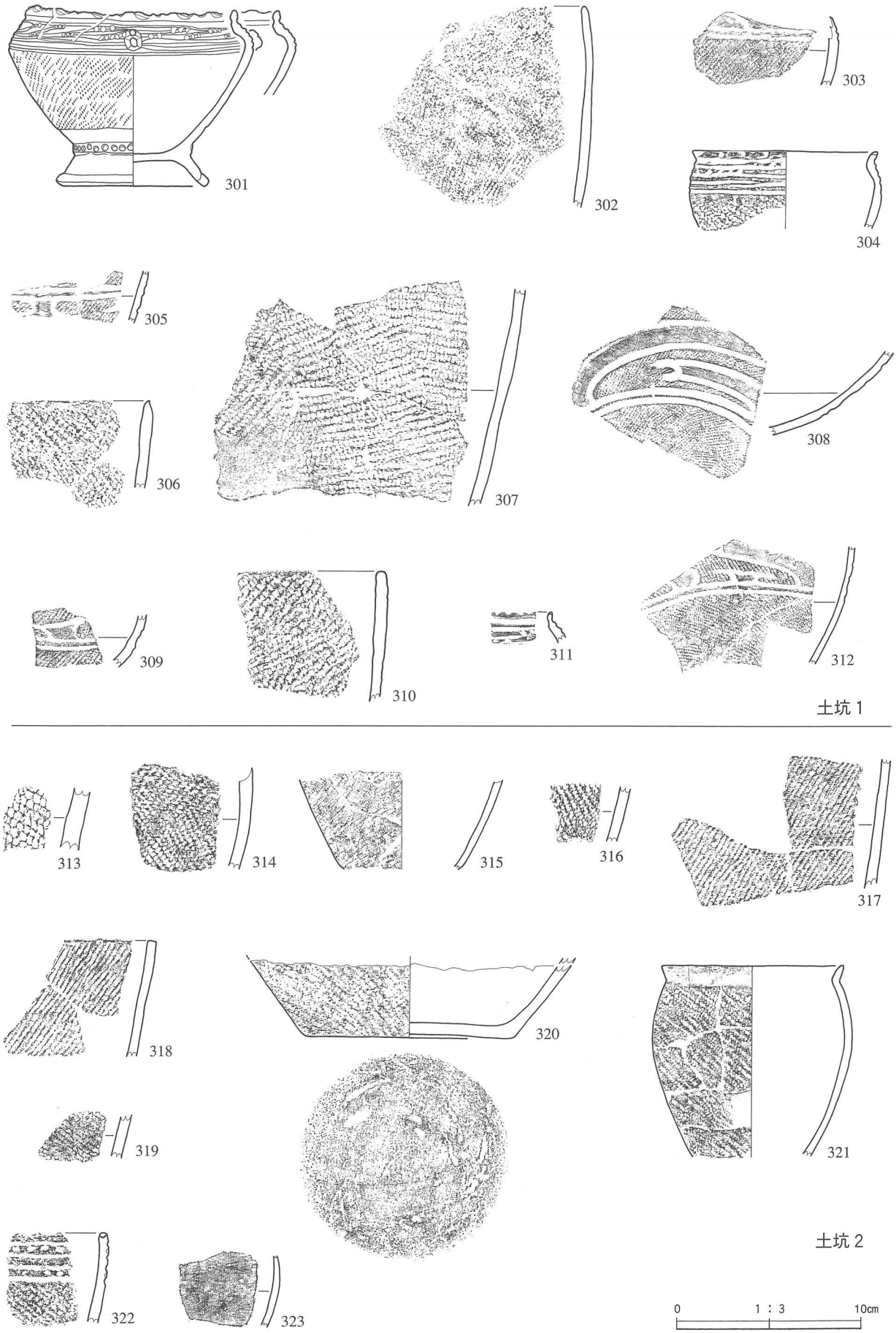
住居状遺構１

1　10YR2/3　黒褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　　褐色砂質シルト（地山ブロック）（径５-20㎜）少量含む。

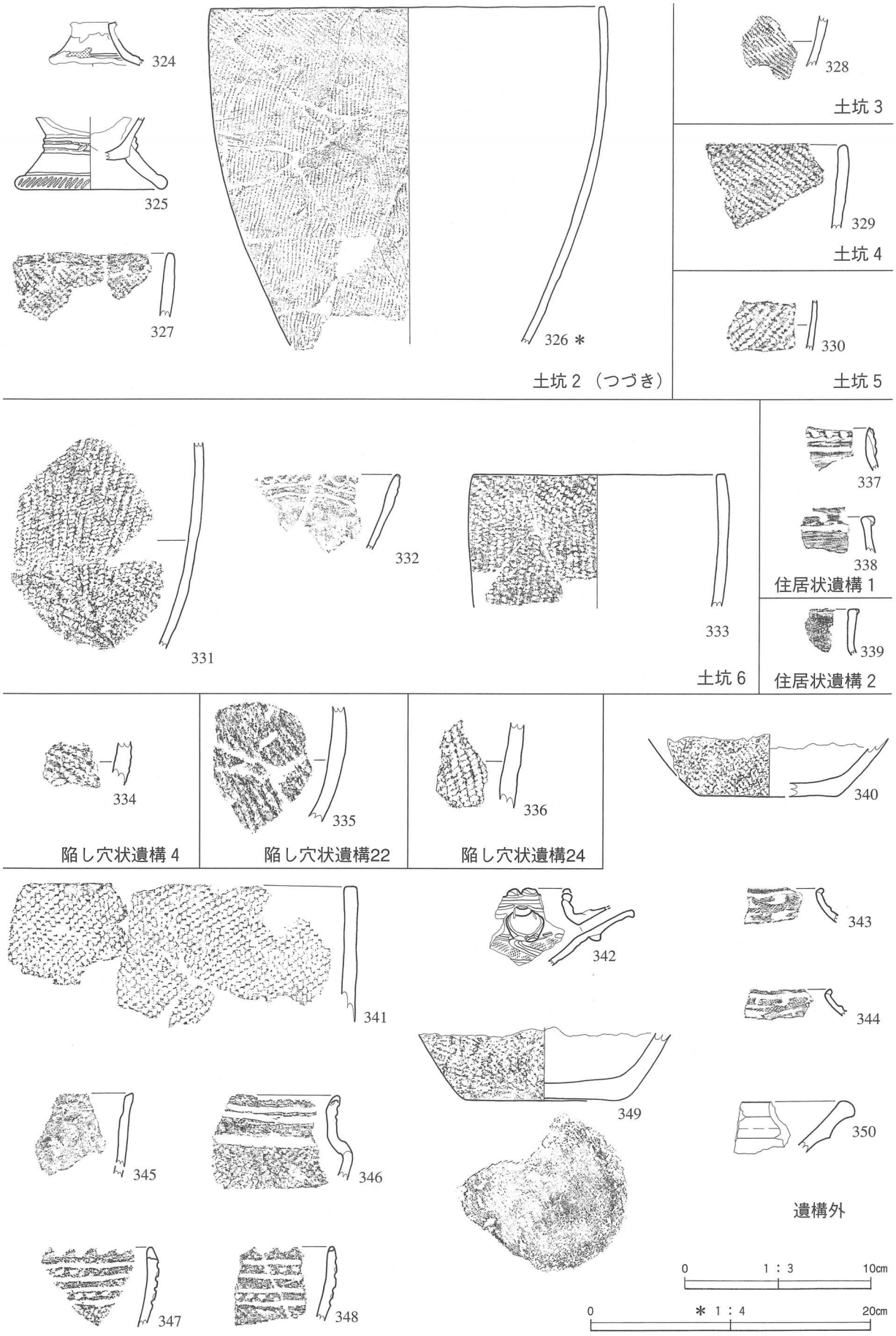
2　10YR2/3-3/3　黒褐色～暗褐色シルト。締まり強。粘性あり。
　　地山ブロック（径～３㎝）多量に含む。



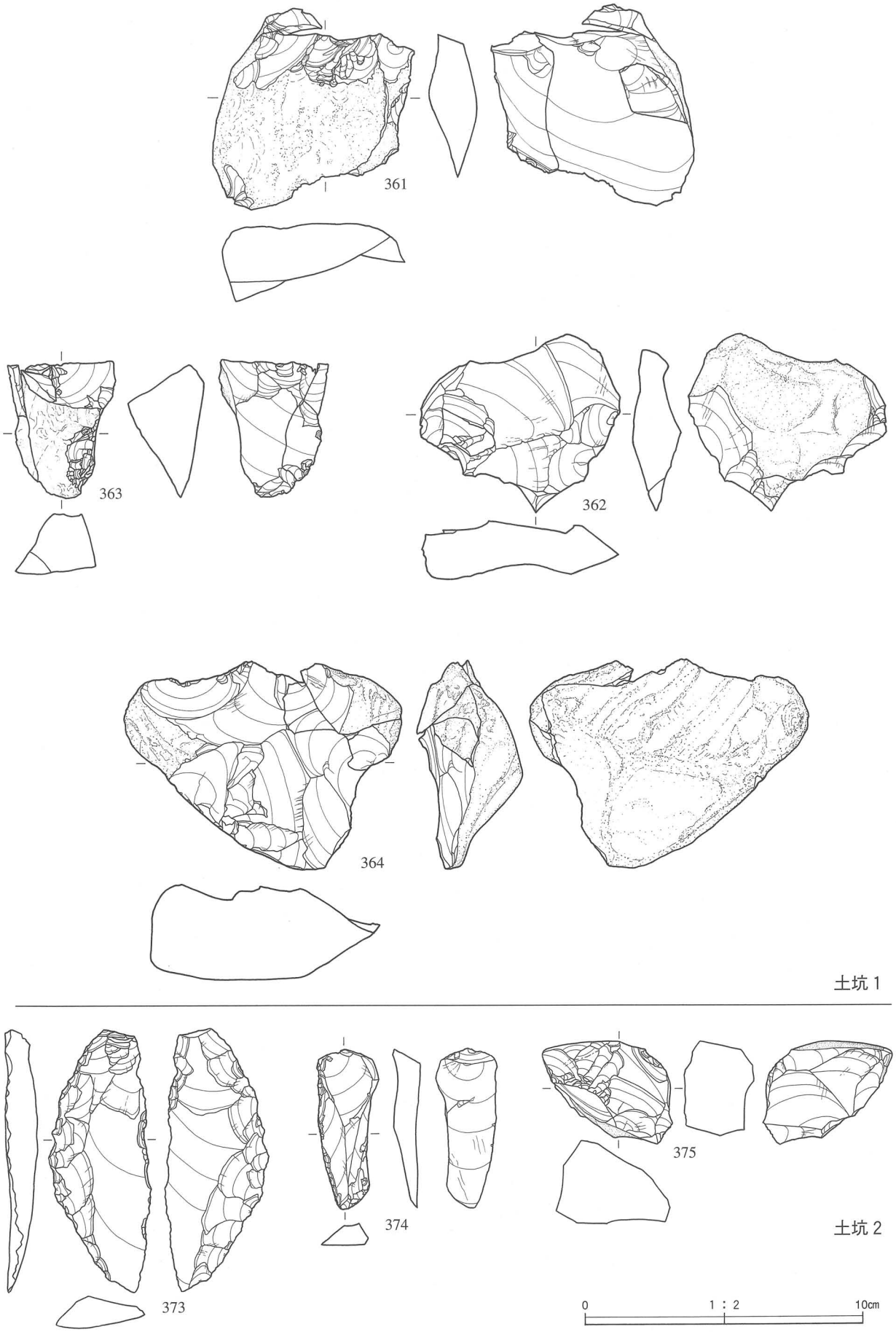
第50図　C区　住居状遺構（２）・掘立柱建物跡



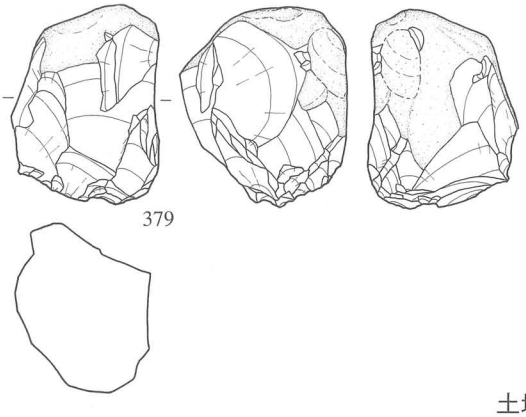
第51図　C区　出土土器（１）



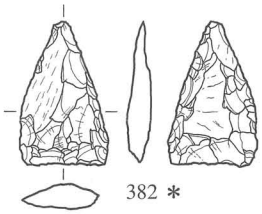
第52図　C区　出土土器（2）



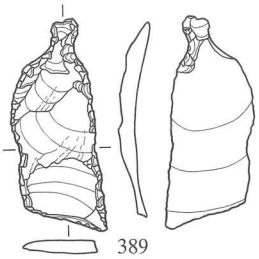
第53図　C区　出土石器（1）



土坑 4

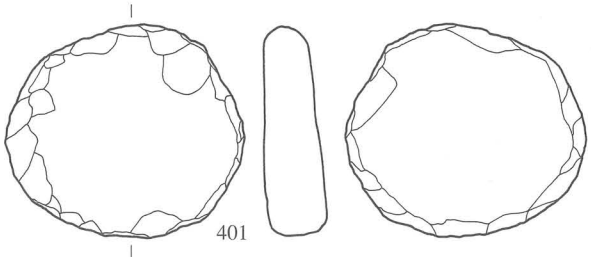


陥し穴状遺構 9

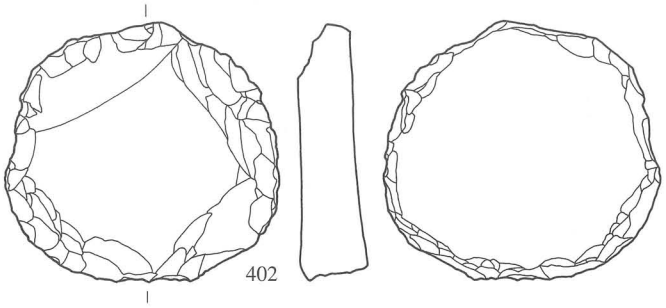


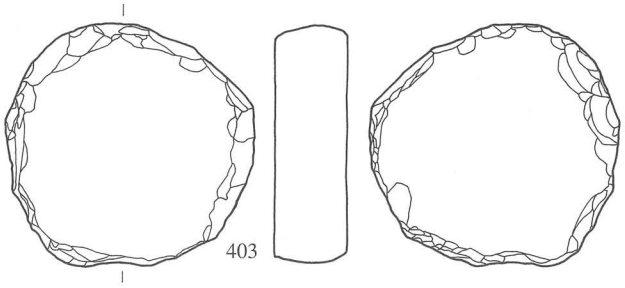
遺構外

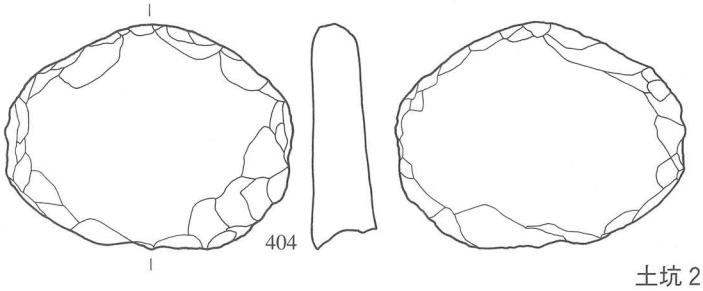
石製品



土坑 1

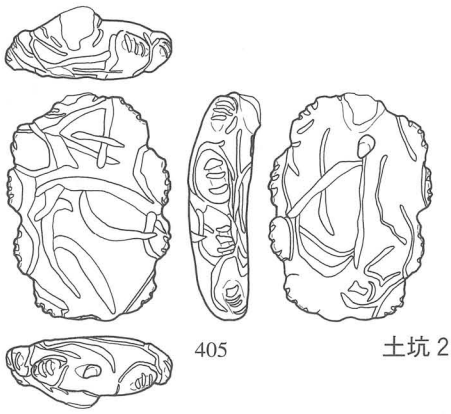






土坑 2

土製品



土坑 2

0 ＊ 2：3 10cm

0 1：2 10cm

第54図　C区　出土石器（2）、石製品、土製品

第11表　C区　出土土器観察表（1）

掲載番号	仮No.	新遺構名	登録遺構	層位等	器種	残存部位	文様	地紋原体	内面調整	胎土	時期	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	図版番号	写真図版番号
301	C−70	土坑1	SK40	2層　P1	台付鉢	ほぼ完形	口縁部内面に沈線、頸部に羊歯状文、高台接合部に刺突	単節LR横回転	ミガキ		晩期(大洞C1)	11.0	7.8	9.8	口縁部に刻みあり。	51	42
302	C−52	土坑1	SK40	2層　P2	深鉢	口縁・体部		単節LR横回転		長石を多く含む。金雲母、石英を少量含む。					摩耗著しい。粗製。	51	42
303	C−51	土坑1	SK40	2層　P3	壷	体部	沈線、磨消	単節LR横回転	ミガキ		晩期					51	42
304	C−48	土坑1	SK40	3層	鉢	口縁・体部	羊歯状文、沈線	単節RL横回転	ミガキ		晩期(大洞C1)	(9.7)	−	4.2<	口縁部に刻みあり。	51	42
305	C−41	土坑1	SK40	埋土	壷か鉢	体部	雲形文？、沈線	単節LR横回転	ミガキ		晩期					51	42
306	C−43	土坑1	SK40	埋土	深鉢	口縁		単節RL横回転		長石を多く含む					粗製。	51	42
307	C− 4	土坑1	SK40	1層	深鉢	体部		単節LR横回転、単節LR斜回転		長石、石英を多く含む。金雲母を少量含む。					粗製。	51	42
308	C−56	土坑1	SK40	1層	浅鉢か壷	体部	x字文？、沈線	単節LR横回転	ミガキ		晩期(大洞C1?)					51	42
309	C−57	土坑1	SK40	1層	浅鉢か壷	体部	大腿骨文？、沈線	単節LR横回転	ミガキ		晩期					51	42
310	C−44	土坑1	SK40	埋土	深鉢	口縁		単節LR横回転		長石を多く含む					粗製。	51	42
311	C−45	土坑1	SK40	埋土	鉢	口縁	羊歯状文、沈線			内面頸部に沈線。	晩期(大洞C1)				口縁部に刻みあり。	51	42
312	C−53	土坑1	SK40	埋土、1,3層	壷	体部	大腿骨文、沈線	単節RL横回転	ミガキ		晩期(大洞C1)					51	42
313	C−22	土坑2	SK39	1層	深鉢	体部		単節RL横回転		長石を多く含む。植物繊維が混じる。	前期前半				粗製。流れ込みによるものか。	51	42
314	C−18	土坑2	SK39	2層	深鉢	体部		上部単節LR横回転、下部単節RL横回転							粗製。内面に焦げ跡あり。上部は輪積み痕残。	51	42
315	C−28	土坑2	SK39	2層、埋土	鉢	体部		単節LR横回転	ミガキ		晩期	−	−	4.8<		51	42
316	C−24	土坑2	SK39	3層	深鉢	体部		単節RL横回転		長石を多く含む						51	42
317	C− 5	土坑2	SK39	4層	深鉢	体部		単節LR横回転		長石、石英を多く含む。金雲母を少量含む。					318と同一個体の可能性あり	51	42
318	C− 8	土坑2	SK39	4層	深鉢	口縁		単節LR横回転		長石、石英を多く含む。金雲母を少量含む。					317と同一個体の可能性あり	51	42
319	C−23	土坑2	SK39	6層	鉢	体部		単節RL横回転		長石、石英をやや多く含む。					摩耗著しい	51	42
320	C−71	土坑2	SK39	No.1	深鉢	底部		単節RL横回転		長石、石英を多く含む。	晩期？	−	11.4	4.4<	粗製。	51	42
321	C− 2	土坑2	SK39	埋土	鉢	口縁・体部		単節RL横回転		長石、石英を多く含む。金雲母少量含む。		(9.8)	−	10.2<		51	42
322	C−26	土坑2	SK39	埋土	鉢	口縁	沈線、刺突文	単節RL横回転			晩期(大洞C2)				口縁に山型突起。	51	42
323	C−27	土坑2	SK39	埋土	椀?、壷?	体部	無文、研磨		ミガキ						器壁薄い。摩耗している。	51	42
324	C−29	土坑2	SK39	埋土	壷	頸部	沈線				晩期	−	−	2.4<	内外面に一部赤色顔料あり	52	42
325	C−30	土坑2	SK39	埋土	台付鉢	底部・高台部	沈線、刺突文	単節LR横回転			晩期	−	(7.6)	3.9<	摩耗著しい。同遺構に高台部破片他に2点あ	52	42
326	C− 1	土坑2	SK39	埋土、2〜4層	深鉢	口縁・体部		体部単節RL斜回転、口縁部単節RL横回転				(28.0)	−	24.6<	粗製。	52	42
327	C−17	土坑2	SK39	埋土、5層	深鉢	口縁		単節RL横回転		長石を多く含む。					粗製。	52	42
328	C−16	土坑3	SK30	2層	鉢	体部		単節RL横回転	ミガキ							52	42
329	C−11	土坑4	SK34	埋土	深鉢	口縁		単節RL横回転		長石を多く含む。金雲母を少量含む。					粗製。	52	42
330	C−13	土坑5	SK21	1層	鉢	体部		単節LR横回転							器壁薄い。摩耗著しい。	52	42
331	C−36	土坑6	SK11	No.2、No.1	深鉢	体部		単節RL横回転、斜回転		長石を多く含む。内面に焦げ跡。					粗製。	52	42
332	C−32	土坑6	SK11	No.4、1, 3層	浅鉢	口縁	磨消	沈線のみ			晩期？					52	42

第12表　C区　出土土器観察表（2）

掲載番号	仮No.	新遺構名	登録遺構	層位等	器種	残存部位	文様	地紋原体	内面調整	胎土	時期	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	図版番号	写真図版番号
333	C－10	土坑6	SK11	埋土、黒色土上面西側、No.3	深鉢	口縁～体部		口縁部単節RL横回転、体部単節RL斜回転		長石を多く含む。		(13.4)	－	7.2<	粗製。	52	42
334	C－14	陥穴状遺構4	SK37	1層	深鉢	体部		単節RL横回転		植物繊維が混じる。	前期前半					52	43
335	C－ 3	陥穴状遺構22	SK51	2～3層	深鉢	体部		単節RL横回転		植物繊維が混じる。	早期～前期					52	43
336	C－12	陥穴状遺構24	SK38	埋土	深鉢	体部		単節RL斜回転		植物繊維が混じる。	前期前半					52	43
337	C－39	性格不明遺構1	SX02	検出面	壷？	口縁	沈線		ミガキ						口縁部に刻みあり。	52	43
338	C－40	性格不明遺構1	SX02	検出面	壷？	口縁			ミガキ						外面にミガキ痕あり。口縁に粘土紐貼り付けの上、刻み	52	43
339	C－38	性格不明遺構2	SX01	埋土	壷？	口縁				石英を多く含む。						52	43
340	C－68	ⅡB2u	ⅡB2u		深鉢	底部		単節RL横回転		長石を多く含む	晩期？	－	(7.4)	3.3<	粗製。	52	43
341	C－65	ⅡB3o	ⅡB3o	検出面	深鉢	口縁・体部		単節LR横回転		長石、石英を多く含む。植物繊維が混じる。	前期前半					52	43
342	C－67	ⅡB3t	ⅡB3t	検出面	注口土器	注口部	磨消	単節LR横回転	ミガキ		晩期（大洞C1）	－	－	3.5<		52	43
343	C－62	ⅡB3t	ⅡB3t	黒色土上面暗褐色土	注口土器	口縁	雲形文？、磨消				晩期（大洞C1）					52	43
344	C－63	ⅡB3t	ⅡB3t	黒色土上面暗褐色土	注口土器	口縁	雲形文？、磨消				晩期（大洞C1）					52	43
345	C－60	ⅡB4r	ⅡB4r	黒色土上面暗褐色土	鉢	口縁	無文			植物繊維が混じる。	前期前半？					52	43
346	C－58	一括	一括	黒色土中	深鉢	口縁・頸部	沈線	単節LR横回転?		長石を多く含む。	晩期				口縁に突起。刻みあり。	52	43
347	C－59	一括	一括	黒色土中		口縁	沈線、刺突文				晩期（大洞C2）				口縁に山型突起。摩耗している。	52	43
348	C－61	一括	一括	黒色土中表土除去時		口縁	沈線、刺突文	単節RL横回転			晩期（大洞C2）				口縁に山型突起。摩耗している。	52	43
349	C－69	南西高位T一括	南西高位T一括		深鉢	底部		単節RL横回転		長石を多く含む	晩期？	－	(8.4)	4.0<	粗製。	52	43

第13表　C区　出土陶磁器観察表

掲載番号	仮No.	出土地点	層位等	器種	器形	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産地	時期	備考	図版番号	写真図版番号
350	C－72	一括	南西高位T一括	陶器	擂鉢	口縁	－	－	－	東北在地産	19C	鉄釉	52	43

第14表　C区　出土石器・礫観察表

掲載番号	仮No.	新遺構名	登録遺構	層位等	器種	材質・産出地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版番号	写真図版番号
361	C−122	土坑1	SK40	埋土	石核	KO	6.7	7.6	2.8	95.5		53	44
362	C−123	土坑1	SK40	埋土	石核	KO	6.5	7.2	2.1	79.4		53	44
363	C−124	土坑1	SK40	埋土	石核	KO	5.0	3.8	2.7	42.0	写真は裏面掲載	53	44
364	C−125	土坑1	SK40	埋土、2層、S16	石核	KO	7.6	10.0	3.8	214.3		53	44
365	C−134	土坑1	SK40	1層	石器剥片	KO				4.0			44
366	C−132	土坑1	SK40	3層　S1	礫	HK				938.7			44
367	C−130	土坑1	SK40	3層　S15	礫	DO				2,440.4	焼けている		44
368	C−131	土坑1	SK40	3層　S18	礫	HK				2,299.1			45
369	C−129	土坑1	SK40	3層　S4	礫	DO				1,810.2	焼けている		45
370	C−133	土坑1	SK40	3層　S5	礫	DO				690.2			45
371	C−126	土坑1	SK40	3層　S6	礫	DO				790.7	焼けている		45
372	C−128	土坑1	SK40	3層　S8	礫	DO				1,577.5	焼けている		46
373	C−102	土坑2	SK39	埋土	削器	KO	9.5	3.8	1.2	30.1		53	46
374	C−110	土坑2	SK39	埋土	削器	KO	5.8	2.3	1.0	13.6		53	46
375	C−108	土坑2	SK39	埋土	石核	KO	3.7	4.7	3.0	53.8		53	46
376	C−114	土坑2	SK39	2層	石器剥片	KO				12.1			46
377	C−115	土坑2	SK39	4層	石器剥片	KO				8.6			46
378	C−109	土坑2	SK39	埋土	石器剥片	KO				7.6			46
379	C−118	土坑4	SK34	1層	石核	KO	5.3	3.9	4.4	95.4		54	46
380	C−120	土坑5	SK21	1層	石器剥片	GZO				1.9			46
381	C−117	陥穴状遺構2	SK50	埋土	石器剥片	KO				20.4			46
382	C−103	陥穴状遺構9	SK16	黒色土中	石鏃	KO	2.9	1.7	0.5	2.2		54	46
383	C−119	陥穴状遺構9	SK16	黒色土中	石器剥片	KO				9.2			46
384	C−111	陥穴状遺構24	SK38	埋土	石器剥片	KO				2.0			46
385	C−112	陥穴状遺構24	SK38	埋土	石器剥片	KO				4.7			46
386	C−116	陥穴状遺構24	SK38	埋土	石器剥片	KO				6.6			46
387	C−113	陥穴状遺構28	SK18	1層	石器剥片	KO				22.3			46
388	C−105	ⅡB3t	ⅡB3t	黒色土中検出時	石器剥片	KO				22.3			46
389	C−101	一括	一括	黒色土中	石匙	KO	5.7	2.4	0.9	6.9		54	46
390	C−107	南西高位T	南西高位T	一括	石核	KO				35.4			46

第15表　C区　出土石製品観察表

掲載番号	仮No.	新遺構名	登録遺構	層位等	器種	材質・産出地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版番号	写真図版番号
401	C－301	土坑1	SK40	2層	円盤状石製品	DO	5.6	6.3	1.7	89.9		54	43
402	C－303	土坑2	SK39	3層	円盤状石製品	DO	6.9	7.2	1.8	110.0		54	43
403	C－304	土坑2	SK39	3層	円盤状石製品	DO	6.4	6.6	2.0	136.6		54	43
404	C－302	土坑2	SK39	5層	円盤状石製品	DO	6.0	7.6	1.7	102.5		54	43

第16表　C区　出土土製品観察表

掲載番号	仮No.	新遺構名	登録遺構	層位等	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	図版番号	写真図版番号
405	C－201	土坑2	SK39	4層	亀形土製品	6.0	4.3	1.9	晩期。正中線、左右4対の足を模した切り込みあり。胴部沈線。 穿孔2ヶ所あり。中実。	54	43

Ⅴ 考　　察

1 A　　区

（1）遺構について

ここではA区で検出された遺構について若干のまとめを行いたい。

まず竪穴住居跡について。検出数は計６棟である。規模に着目すると長辺の長さには5.5～3.3mと大きな開きがあり、床面積も最大25㎡近くのものから10㎡足らずのものがあるなどばらつきが目立つ。カマドは半数の３棟で東壁南部に設置されているが、北壁東部にもつものが２棟、南壁東部が１棟とやはり統一性を欠いている。

その一方、５棟の竪穴住居跡においてカマドとは別に床面中央部に炉が設けられていることは、本遺跡の集落を特徴づける注目すべき共通点といえよう。炉跡の燃焼部は中央部の明褐色強変焼土とその外周の赤褐色弱変焼土で同心円状に形成されている場合が多く、このことは炉壁を持った屋内炉であったことを暗に示しているものと思われる。また、住居跡２・４・５の炉跡には、燃焼部焼土の一端に小さな赤変部が瘤状に付属して、平面形が雪ダルマ形を呈している。これは、部分的に炉壁の外に火熱が及ぶ構造であったことを示している。これらの事実を満たす形態としては、送風口をもち炉壁が立ち上がる小規模な鍛冶炉が想定される。

精査では鍛冶作業を実証する遺物等は確認されなかったが、多量の鉄製品の出土が際立っている本集落において、各戸が鉄製品の軽微な加工や修繕のための屋内鍛冶炉を有していたとしても何ら不自然ではない。内陸部の該期遺跡で多量の鉄製品をもつ集落はそう多くない。多量の鉄製品の出土や後述の灰釉陶器の搬入にもみられるように、本遺跡の特殊性は、人的・物的流通において利がある立地にその根本が求められよう。

さて、複数の竪穴住居が集まる居住域であった時期を経て、その後、当区は方形周溝や溝が配置される区域へと変化している（注１）。方形周溝はA区の西縁部に位置しており、５区画が複合した形態となっている。周溝堆積土の断面を観察すると２～３度の「掘り返し」の痕跡が看取されることから、これらが一度に作られたものではなく幾度かの掘削により区画を増設したものであることは明らかであろう。しかし、今回の調査では、これらの新旧関係を確認・復元することはできなかった。

水沢市仙人東遺跡では、まず核となる１基の方形周溝が造られたのち、その１辺を借用するようにして新たな区画が増設されていく過程が復元されている（（財）岩手県埋文センター　1996）。本遺跡でも西側に開口するコ字状の溝が東に向かって連結し（区画①～③）、さらに①～③の南辺を借用して区画④・⑤が増設されたものと考えるのが妥当であろう。ただし、②・③は区画内部の面積が他に比して小さく、独立した区画として機能したとは考えづらい。②と③は本来１つの区画であったものが、後の再区画により分断された可能性が高いと思われる。

方形周溝の性格については埋葬施設と考えるのが一般的となっており、区画①の中央部に位置したであろう地点から出土した人骨は被葬者のものである可能性が高い。検出された埋葬部（主体部）は掘り込みの底面付近が辛うじて残存したものであり、本来の掘り込み面は検出面よりも相当程度高いはずである。周溝から掘り上げられた土砂が区画内部にマウンド状に盛り上げられ、その上面が掘り込み面とされたならば、現検出面にのこされた掘り込みがわずかであったことも理解できる。他の区

画で埋葬部の掘り込みが検出されなかった理由もここに求められるかも知れない。

さてA区では、上記の遺構の検出面であるA-Ⅳ層の下位に、縄文時代～弥生時代の遺物包含層が存在することが確認されている。B区下位面（弥生時代後期）・C区遺構検出面（縄文時代晩期）から連続する面であり、洪水堆積層のA-Ⅳ層に厚く被覆されている。A-Ⅳ層の下位の堆積層は、方形周溝や溝跡の壁面、竪穴住居跡の床面などで部分的に露出していたため、縄文時代晩期の土器片等、下位面の遺物が古代の遺構埋土にも散見された。この包含層は、調査原因であるほ場整備の計画標高と照らし合わせた結果、掘削を免れることが確認されたため、発掘調査は行わず現状保存されている。

（注１）時間的な断絶も想定されるので、竪穴住居の居住者による連続的な土地利用の上での変化を意味するものではない。

（村上）

（２）灰釉陶器について

A区からは灰釉陶器が３点出土している。住居跡４・５・６から各１点である。いずれも碗の破片であり、口縁から体部の残存である。胎土の色調は灰白色を呈し、密度は非常に緻密である。口縁から体部の途中までに波状の白色に近い光沢があった。

灰釉陶器は９世紀のはじめに愛知県の猿投窯で創出されたものである。施釉方法は、平安時代初期段階では刷毛塗りによって内面全面または内外面全面に釉薬を塗っていたが、平安時代後期に入ると口縁のみを釉薬に浸して施釉する漬け掛けに変わってゆく。大西遺跡出土の灰釉陶器は内外面に施釉されているが、全体にまで及んでいないこと、波状の痕跡があることなどから漬け掛けによるものと見られる。

次に産地についてであるが、３点とも胎土が白く、非常に緻密で、長石などの混じり物がない。釉薬は白く薄い銀化したような光沢で見えることから、本遺跡で出土している灰釉陶器はすべて東濃窯・大原２号窯期のものであり、３点とも同一個体の可能性があると見られる。東濃窯は現在の岐阜県多治見・土岐・可児・中津川の各市周辺に点在する灰釉陶器窯跡群の総称であり、大原２号窯は多治見市に所在する。東濃窯は東山道沿いにあるため、本遺跡で出土した灰釉陶器も東山道を経由して入ってきた可能性がある（注２）。

岩手県における東濃窯大原２号窯期の類例は、平泉町本町Ⅱ遺跡の７号竪穴住居跡から出土した（四耳？）壷片（（財）岩手県埋文センター　2002）、江刺市宮地Ⅱ遺跡のSX412焼土跡から出土した高台付の碗（江刺市教委　2004）がある。

ただし、本遺跡の場合、灰釉陶器をもつ一方、当時一般的に使用していただろうと考えられる須恵器が見つかっていない。一方、周辺で調査された稲荷遺跡や貝の淵Ⅰ遺跡などでは須恵器と土師器がセットで見つかっており、周辺遺跡とは様相を異にしている。

（注２）愛知県陶磁資料館主任学芸員　井上喜久男氏のご教示による。

（戸根）

（３）鉄製品について

A区からは前述の灰釉陶器のほかに26点もの鉄製品が出土している。主要なものとしては、刀子が６点、穂摘具・銛が各２点、短刀・紡錘車・袋状鉄斧・鍋が各１点出土している。

刀子は６点出土しているが、うち２点（51・52）には木質も残存している。52については割れ口の様子から鞘に入っていた様子も窺える。

銛については、２本が１組になった状態で出土した。岩手県内における出土事例としては、久慈市

中長内遺跡RA516竪穴住居跡（久慈市教委ほか　1995）と西根町子飼沢山遺跡５号住居跡（福島大学行政社会学部考古学研究室　2000）、盛岡市堰根遺跡出土例がある。中長内・子飼沢山例はいずれも２個体を組み合わせた状態で出土しており、本遺跡出土の銛も本来２個体を組み合わせていた可能性が高い。

短刀については、柄の部分に一部赤色塗料の塗布があった。岩手県立博物館へこの顔料の成分分析を依頼したところ、酸化第二鉄（ベンガラ）という結果が出た。赤色塗料の塗布という点では、住居跡６で出土している土師器甕（34）にも赤色塗料の塗布が認められ、やはり酸化第二鉄（ベンガラ）との分析結果が出ている。

出土した鉄製品の組成を見ると、農具あり、漁撈具あり、とバラエティに富んでいる。しかも、これらのものがまとまって出土している。鉄製品が良好な状態で出土し、かつ一般的な同時期の集落遺跡から出土することが少ないことを考えると、大西遺跡で今回出土した鉄製品は、当時の集落における鉄製品の使用状況を示す一例になると思われる。

（戸根）

２　Ｂ　　区

（１）下位面出土の弥生土器について

B区の下位面で出土した土器は、弥生時代後期のいわゆる天王山式及びそれに後続する時期に位置づけられるものである。甕形土器をみると、口縁部が肥厚して複合口縁状を呈し、口縁部下端には列点文が全周し頸部との境界を区画、頸部は無紋帯となり胴部には「頸部や底部近くで条の末端が交叉状を示す（小田野　1987）」附加条縄文・撚糸文のような地文が施文されている。連続山形文をはじめとする沈線文による加飾もいくつかの個体に認められ、該期の土器の特徴とされる要素が認められる。ここで、これらの土器に特徴的な地文について少し詳しく観察してみたい。

以下に、201の甕形土器にみられる地文の特徴を抽出してみよう（第55図ａ）。

ａ．条の上端を結んだライン（施文単位の上辺）に対し、条の流れは約45°の傾きをもつ。

ｂ．頸部下端では、条の上端が鈎状（U字状）に表出される箇所が認められる。条を折り返した側の「閉端」を回転させた痕跡であることを示す。

ｃ．条は一段の縄Lの圧痕で、節が細長く０段多条の可能性が高い。

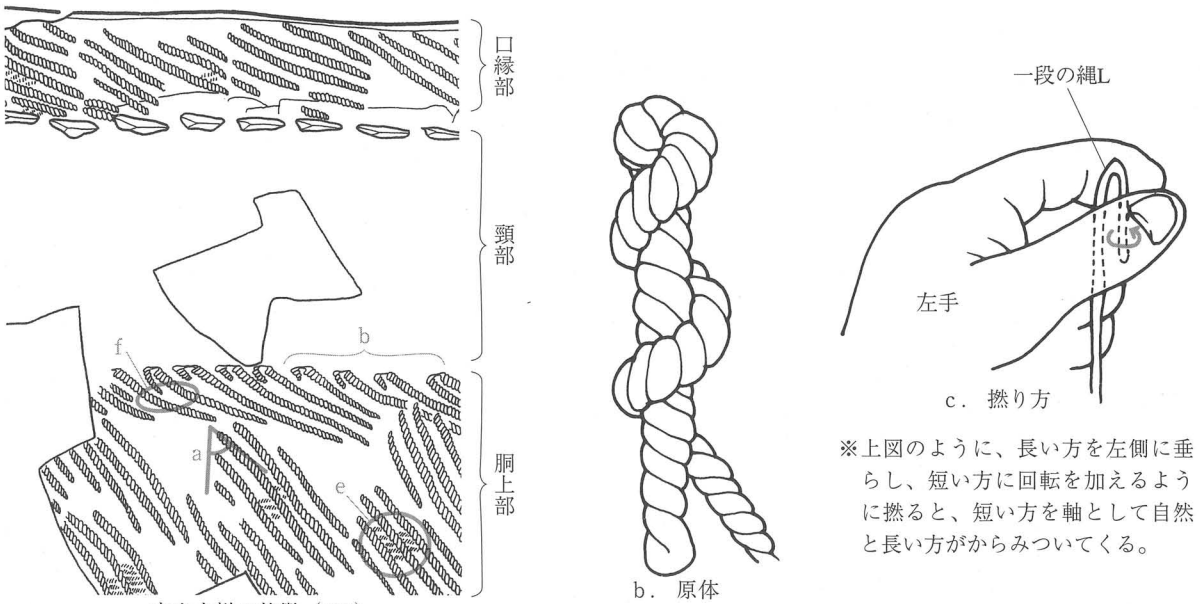
ｄ．平行して表出される条の間にほぼ等間隔の隙間が生じており、撚糸文や附加条によるものに似る。

ｅ．条と条の間に、条の流れと交叉する方向に走行する無節の条が見える箇所がある。特に胴部上半に集中する。

ｆ．条は上端から中程までは直線的に整然と平行するが、中央付近で「く」の字状に弱く折れ、下半部は毛筆の「はらい」のように流れて、条同士の間隔にも乱れが生じている。

ａ～ｃは、この原体が条同士を撚り合わせた「縄文」であることを示している。ｃから想定されるのは０段多条の縄文RLで、ｂは閉端を上にして頸部下端に沿って横回転させた結果と思われる。しかしｄは、「一段の縄L」を何らかの軸に巻き付けた原体である可能性を示唆し、さらにｅは、その軸が何らかの繊維の束であることを示している。

そこで、ｅの無節の条を細かく観察すると、一段の縄Lを横回転させることで表出される無節縄文であることがわかった。つまり「一段の縄L」を折り返してさらに正の撚りを加えた「単節縄文」の



a．表出文様の特徴（201）　b．原体　c．撚り方

第55図　大西遺跡B区出土弥生土器の地文

原体であることには相違ないが、一方の条を軸として他方が巻き付いた状態のものであることが判明したのである（第55図ｂ）。この原体を横回転で施文した場合、巻き付いている方の条は「一段の縄L」の側面圧痕列を右下がりに表出し、器壁の張り出しに伴い強く押圧される胴上部などに限り、軸となった「一段の縄L」の回転文である右上がりの無節縄文が、前者の条の隙間に交叉方向に表出されるのである。この一見複雑な原体は、第55図ｃのように片手で撚り合わせることにより容易に作ることができる。「閉端」側に近いほど撚りが強く、表出される条の間隔は整っているが、逆に閉端から離れるほど撚りは弱まり、さらに軸からはみ出して余った部分は回転方向と平行するように引きずられることとなる。条が中央で屈曲し下半部が流れるｆの現象はこのように理解することができた。

「頸部や底部近くで条の末端が交叉状を示す」という該期土器の特徴も、頸部無文帯や底部の下端に沿わせて施文するため水平方向に原体を回転させる必要がある部位と、胴部中央の広い面に効率的に施文するため斜回転で施文された部分が重複した結果生じたものと解釈することができるだろう。

（村上）

（２）弥生時代後期土器に伴う石器について

今回調査を行ったB区下位面の範囲は極めて限定的であったが、その狭い区域の中に集中して石鍬の出土がみられたことは特記に値するだろう。出土状況に着目すると、これらの石鍬のうちいくつかは遺物包含層の下面が斑状に落ち込んだところから出土している。この種の石器が土掘り具として用いられ、柄から外れた個体が地中にのこされた可能性もあろう。基部と刃部の区別が明瞭な撥形・分銅形の大形石鍬（打製石斧）の出土は、縄文時代後晩期から弥生時代にかけての農耕・栽培と関連づけて議論されることが多い。本遺跡では何らの栽培痕跡も確認されていないが、北上川によって形成された自然堤防と後背湿地が入り組む本遺跡付近において、何らかの栽培活動が行われた可能性は十分あったと考えたい。

このほか、煮沸痕跡を残す土器の出土範囲と重複して複数の石核と剥片、敲打痕をもつ礫石器が出土したことは、調査地点が石器製作の場としても利用されていたことを示し、日常的な生活空間の一部であったことを示唆している。火ハネによって欠損した石鏃の出土は炉の周囲における石器製作を

想像させ、付近に住居跡が存在する可能性を強く示唆している。

北上川流域では近年、厚い洪水堆積層の下位に縄文時代晩期～弥生時代の生活面が検出される例が急増している。今後、同様の立地における該期遺跡の調査例が蓄積されることにより、該期の人間活動がより詳細に復元されることを期待したい。

（村上）

3　C　　区

（1）陥し穴状遺構について

陥し穴状遺構は計32基確認された。形態は円形、溝状の２種類に大別されるが、溝状は溝状と楕円形状に細分される。ここでは溝状と楕円形状、円形の３つに細分して、陥し穴状遺構について述べることにする。

一般的に陥し穴状遺構からは遺物が出土しないことが多い。従って、新旧関係や年代を把握するには遺構間の切り合いや自然科学分析などに頼らざるを得ない場合が多い。大西遺跡の陥し穴状遺構についても、単独存在のため、時期を判断することが困難な陥し穴状遺構が多かったが、新旧関係や年代把握するのに使用できる陥し穴状遺構があること、さらにいくつの傾向が認められるので、ここで記述する。

①陥し穴状遺構の帰属時期及び形状の変化

大西遺跡で確認された陥し穴状遺構のうち、重複関係や自然科学分析によって帰属時期や形状の変化について分析可能な遺構は４基ある。

ａ遺構間の重複関係にみる陥し穴状遺構の新旧関係

遺構間で重複関係を捉えることができる陥し穴状遺構は溝状の陥し穴状遺構２と７、楕円形状の陥し穴状遺構８、円形の陥し穴状遺構23の４つである。

陥し穴状遺構２は縄文時代晩期の土坑である土坑１と重複関係がある。重複関係は、深さ45cmある土坑１の底面で陥し穴状遺構２の平面を確認している。土坑１検出の段階では陥し穴状遺構２は検出できず、土坑１完掘後に陥し穴状遺構２を確認していること、陥し穴状遺構２上部の土坑１埋土中に礫などの遺物があることなどから、新旧関係は土坑１が新しく、陥し穴状遺構２が古いことは明白である。さらに、土坑１からは縄文時代晩期中葉の土器が出土しており、このことから、溝状の陥し穴状遺構が形成された時期は縄文時代晩期中葉より前であるといえよう。

陥し穴状遺構７と陥し穴状遺構８は、相互に重複関係がある。陥し穴状遺構７は溝状の陥し穴状遺構、陥し穴状遺構８は楕円形の陥し穴状遺構である。平面検出の段階で重複関係が認められたものの、埋土が非常に類似しており、新旧関係を把握することはできなかった。そこで陥し穴状遺構７を長軸方向に縦に半裁したところ、断面の観察で陥し穴状遺構７の埋土が陥し穴状遺構８の埋土を壊している様子が観察された。このことは、溝状の陥し穴状遺構が新しく、楕円形の陥し穴状遺構が古いことを示すといえよう。陥し穴状遺構８に火山灰や杭跡は認められなかった。

最後に陥し穴状遺構23について述べる。陥し穴状遺構23も陥し穴状遺構２と同様に土坑１と重複関係がある。土坑１の検出面がC-Ⅳ層であったことから、土坑１完掘後、C-Ⅴ層まで検出面を下げたところ、C-Ⅴ層の上面で陥し穴状遺構23の平面を確認した。検出された平面の形状から土坑１と重複関係が認められる可能性が出てきたことから、半裁し断面を観察したところ、陥し穴状遺構23が土坑１の下にもぐり込んでいる様子が確認された。このことから、新旧関係は土坑１が新しく、陥し穴状遺

構23が古いこと、円形陥し穴状遺構の形成時期は縄文時代晩期中葉より前であることが明らかになった。

以上のことから、本遺跡における陥し穴状遺構の構築年代の下限は、まず縄文時代晩期中葉であるということができる。

b円形陥し穴状遺構の年代

陥し穴状遺構23では埋土下部の６層及び８層から炭化物が見つかったことから、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、６層出土試料が5,840±40yrBP、８層出土試料が5,890±40yrBPという値が算出された。このことは、縄文時代前期にはすでに陥し穴状遺構23は埋まり始めていたと考えられる。同じ円形陥し穴と考えられる陥し穴状遺構22からは尖底になると見られる繊維の混じった縄文土器（335）も見つかっており、円形陥し穴は縄文時代前期にはすでにあったものと考えられる。

②遺構の分布及び軸方向について

陥し穴状遺構を形態別に見ると、次のような傾向が認められる。

a溝状の陥し穴状遺構

調査区全域に分布する。東西方向に長軸をもつものが多く、これは地形の傾斜方向にほぼ合致する。長軸方向が一致するため、同時使用の可能性があるものも見受けられるが（陥し穴状遺構10と陥し穴状遺構７、陥し穴状遺構１と陥し穴状遺構２など）、調査区域内における配置の規則性は認められない。開口部長は1.5～3.5m、開口部幅は0.4～0.7mのものが主体を占める。ただし、ひょうたん形に近い形をした陥し穴状遺構５や17の場合、開口部幅はかなり広がり、１m前後になることもある。

b楕円形状の陥し穴状遺構

調査区東側に分布する。断面形状はV字形を呈している。開口部長はいずれも1.7m前後、幅、深さは１m前後である。杭状の穴や火山灰が入っている様子は認められない。２基のみであるので、一概に言えない部分はあるが、２基はほぼ並んで位置し、長軸方向もほぼ一致することから、同時使用の可能性がある。

c円形状の陥し穴状遺構

調査区西側に分布する。断面形状は方形あるいは逆台形を呈する。開口部の径は1.2m前後を測るものがほとんどである。洪水堆積層である黄褐色土堆積前の段丘崖から斜面にかけて、基数はまちまちだが、ほぼ並行に並ぶ様子が見られる。

③陥し穴の埋土について

大西遺跡で確認された陥し穴状遺構を、埋土の観点から見ていくことにする。

最上層の埋土は、円形陥し穴の場合、暗褐色シルトを主体とする。一方、楕円形陥し穴及び溝状陥し穴については、黒褐色シルトを主体とする。最上層以下の埋土を見ても、円形陥し穴の場合、黒褐色シルトが入ることはない。一方、溝状及び楕円形陥し穴の場合、堆積過程はほぼ同じだが、最下層の土質に違いが見られる。溝状陥し穴の場合、最下層が黒褐色土である傾向が強いが、楕円形の場合、黒褐色にならないようである。

④まとめ

田村壮一氏の研究によると縄文時代前期初頭以前に円形が現れ、中期末から後期初頭の溝状を経て（注３）、晩期中葉から平安時代まで楕円形が存在したと指摘している（田村　1987）（注４）。

今回の大西遺跡の場合、縄文時代前期に円形の陥し穴状遺構が現れ、溝状の陥し穴は縄文時代晩期中葉以前に出現することが明らかになった。これは田村氏の指摘している大きな流れから外れてはいない。

しかし、楕円形については検討の余地が残されよう。大西遺跡の場合、１例のみであるが、楕円形の陥し穴状遺構が溝状の陥し穴状遺構に切られている様子が観察されているものがある（陥し穴状遺構７と８）。どちらも遺物が出土しておらず、具体的な時期については不明である。

灰白色の火山灰が入っていない例としては、札幌市S239遺跡やS255遺跡で、埋土中から縄文時代中期土器片が出土している例がある（札幌市教委　1975、札幌市教委　1979）。

一方、底面に十和田ａとみられる火山灰が入る例としては、胆沢町宮沢原下遺跡の例がある（（財）岩手県埋文センター　2005）。

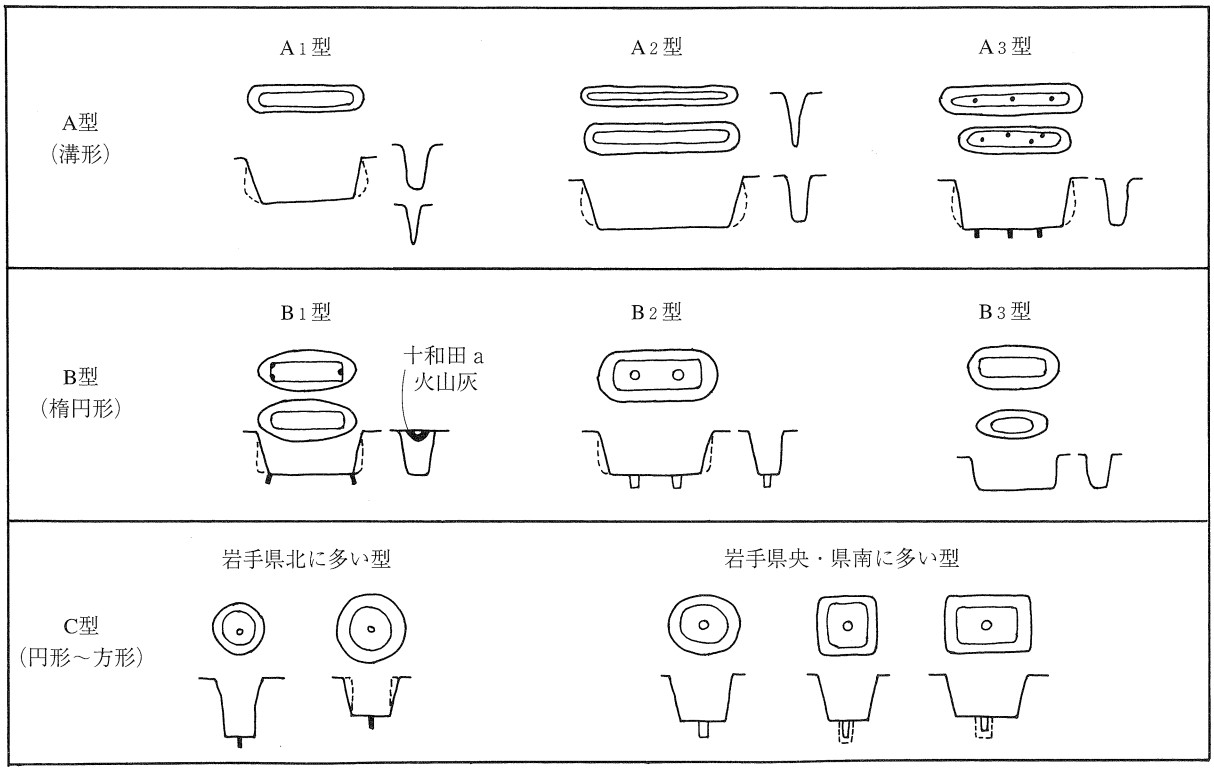
以上のことから、おおよその形態変遷は田村氏の述べているとおりであるが、楕円形の陥し穴状遺構については、十和田ａ火山灰の有無や構築方法によって時期が大きく変わる可能性があると思われる。

陥し穴状遺構の場合、田村氏も地域的相違や年代について相互の関係を今後より検討しなくてはならないと述べられているが、まさにその通りであり、陥し穴状遺構の年代を推定する場合には、形態ばかりでなく、埋土など複数の視点から検討すべきであろう。

（戸根）

（注３）溝状陥し穴については後期初頭以降にも残っていた可能性を留保している。

（注４）晩期中葉から平安時代まで楕円形が存在したというのは、杭状の穴の痕跡があるB１型のみであり、灰白色火山灰が入っていない楕円形の陥し穴については縄文時代のものであるという捉え方にとどまっている。



第56図　陥し穴状遺構の形態分類模式図（田村　1987を一部改変）

（２）亀形土製品について

土坑２で１点出土している。平面形態はほぼ楕円形で、正中線が認められる。左右４対の足を模した切り込みがあり、胴部には両面に沈線が入っている。顔面は突起状に表現している。２ヶ所に穿孔

があるものの、中実のものである。

日下和寿の報告によると、亀形土製品は岩手県内では22遺跡で60個体分出土しており、縄文時代後期～晩期にかけて出土する傾向があることが指摘されている（日下　1998）。調査の濃密の影響は多分にあるが、石鳥谷町周辺では、稗貫川沿いに所在する小田遺跡（大迫町亀ヶ森）や、大西遺跡の約３㎞南東にある安堵屋敷遺跡（石鳥谷町八重畑字五大堂）をはじめとした６遺跡で13個体が出土している。一概に言うことはできないものの、岩手県内で出土している亀形土製品の約1/4を占めており、集中する傾向がある。

（戸根）

Ⅵ まとめ

今回の調査では、広い遺跡範囲のうちの３地点を対象とし、その結果、それぞれの調査区で時期の異なる遺構・遺物が検出された。

はじめて大西遺跡周辺の土地が利用され、人の気配が感じられることが確実になるのは縄文時代前期のことである。この頃はC区のエリアを狩り場として使用している。狩り場としての利用は縄文時代後期まで続くことになる。

縄文時代晩期になるとC区西側からB区にかけての範囲で人々が生活をし始めるようになる。土器、石器、石製品、土製品、焼けた礫などがまとまって土坑から出土している。土坑は不要品を廃棄するために使用したのだろうか。今回の調査では竪穴住居跡は見つからなかったものの、付近に集落跡が存在した可能性が高いと考えて良さそうである。

大西遺跡周辺での人々の生活は弥生時代まで続くが、その後大西遺跡周辺での人の生活痕跡はぷっつりと途切れてしまう。北上川の洪水等によって地形が劇的に変化したからである。A～B区で確認された約１ｍにも及ぶ洪水堆積層は、古墳時代以降洪水等によって本遺跡周辺が生活するのに適さなかったことを如実に示している。

洪水等の発生が減少して地盤が安定し、再び大西遺跡周辺で人が暮らし始めるのは平安時代に入ってからである。しかし、大西遺跡の集落は当時の一般的な集落とは少し様相が違うようである。多くの鉄製品や現在の岐阜県で生産された灰釉陶器をもつ一方、当時一般的に使用していた須恵器をもっていないのである。周辺で調査された稲荷遺跡や貝の淵Ⅰ遺跡などでは須恵器と土師器がセットで見つかっている。北上川を挟んだ対岸には官衙・駅家の可能性を指摘されている方八丁遺跡がある。大西遺跡の集落は方八丁遺跡と関係があるのだろうか。今後の検討課題である。

さて、北上川は、洪水などによって付近の地形を度々変えてきた。今回の調査ではそれがA区～B区にて確認された洪水堆積層という形で示されている。しかしながら、度々洪水に襲われながらも、人々が断続的にこの付近の土地を利用してきたことが今回の調査では明らかになった。

このように、大西遺跡周辺の人々は良きに付け悪しきに付け、北上川とともに暮らしてきたと言えるだろう。

（戸根）

引用・参照文献

Ⅱ　岩手県　　1976　『北上山系開発地域土地分類基本調査　花巻』
岩手県教育委員会　1982　『東北新幹線関係発掘調査報告書Ⅴ』
岩手県教育委員会　2001　『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成12年度）』岩手県文化財調査報告書第112集
岩手県花巻地方振興局花巻農村整備事務所・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002
『稲荷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第408集
※以下、筆者・発行元は「(財)岩手県埋文センター」、シリーズ名は「文振埋文報告書第　集」と記載する。
岩手県花巻地方振興局土木部・(財)岩手県埋文センター　2003 a
『宮野目方八丁遺跡発掘調査報告書』文振埋文報告書第404集
岩手県花巻地方振興局土木部・(財)岩手県埋文センター　2003 b
『貝の淵Ⅰ遺跡発掘調査報告書』文振埋文報告書第428集
岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室・(財)岩手県埋文センター　2004 a
『高畑遺跡発掘調査報告書』文振埋文報告書第439集
岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室・(財)岩手県埋文センター　2004 b
『宿遺跡発掘調査報告書』文振埋文報告書第440集
(財)岩手県埋文センター　2005　『平成16年度発掘調査報告書』文振埋文報告書第469集

Ⅴ　今村啓爾　　1983　「陥穴（おとしあな）」『縄文文化の研究　2生業』雄山閣
小田野哲憲　　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第5号
田村壮一　　1987　「陥し穴状遺構の形態と時期について―岩手県北地方を中心として―」
『紀要』Ⅶ　(財)岩手県埋文センター
弥生時代研究会編　1990　『「天王山式期をめぐって」の検討会　記録集』
玉川英喜　　1990　「岩手県内における円形周溝と方形周溝」『紀要』Ⅹ　(財)岩手県埋文センター
斎藤邦雄　　1993　「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』第5号
福島県立博物館　1993　『企画展　東北からの弥生文化』
藤尾慎一郎　　1993　「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集
坂本真弓・杉野森淳子　1997　「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第2号　青森県埋蔵文化財調査センター
日下和寿　　1998　「岩手県内の動植物形土製品の集成」『東北民俗学研究』第6号　東北学院大学民俗学OB会
福島大学行政社会学部考古学研究室　2000　「西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡発掘調査概要」
『岩手考古学』第12号　岩手考古学会
齊藤孝正　　2000-6　『日本の美術No.409　越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』　至文堂
石川日出志　　2005　「岩手の弥生文化研究の諸問題」『第34回岩手考古学会研究大会発表資料』　岩手考古学会

札幌市教育委員会　1975　『S238遺跡、S239遺跡』札幌市文化財調査報告書Ⅸ
札幌市教育委員会　1979　『S255遺跡』札幌市文化財調査報告書ⅩⅨ
一戸町教育委員会　1984　『上野遺跡』一戸町文化財調査報告書第7集
滝沢村教育委員会　1986　『湯舟沢遺跡（第1分冊）』滝沢村教育委員会文化財調査報告書第2集
久慈市教育委員会・建設省三陸国道工事事務所　1995
『中長内遺跡　国道45号久慈バイパス関連発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
(財)岩手県埋文センター　1996　『沢田・仙人東遺跡発掘調査報告書』文振埋文報告書第230集
岩手県一関地方振興局一関農村整備事務所・(財)岩手県埋文センター　2002
『本町Ⅱ遺跡第二次発掘調査報告書』文振埋文報告書第410集
江刺市教育委員会　2004　『宮地Ⅱ遺跡発掘調査報告書（E・F地区）』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第21集
(財)岩手県埋文センター　2005　「宮沢原下遺跡現地説明会資料」

附　　編

1　大西遺跡の炭化種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

は　じ　め　に

大西遺跡は、岩手県稗貫郡石鳥谷町に所在し、北上川が形成した沖積段丘古期面の段丘崖縁辺付近に立地している。本遺跡の発掘調査の結果、縄文時代の土坑や平安時代の住居跡や溝状遺構などが確認されている。

本報告では、平安時代の住居跡（A区住居跡１）内から検出された炭化種実遺体の同定を行い、当時の植物利用を検証する。

（1）　試　　料

試料は、住居跡（A区住居跡１）内のほぼ中央部の焼土直上より、密集して検出された炭化種実遺体数百点である。試料は、土壌毎取上げられと考えられ、濡れた泥が付着した状態であった。

（2）　分　析　方　法

試料を常温で３昼夜乾燥させる。その後、肉眼及び双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の表面に付着する泥を除去する。種実遺体の形態的特徴を、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較して種類を同定して重量を求め、1/2個以上残存する完形個体の個数を数える。分析後の種実遺体等は、種類毎にビンおよびタッパーに入れ、乾燥剤を入れて保管する。

（3）　結　　果

結果を表１に示す。種実遺体は、トチノキ（Aesculus turbinata Blumeトチノキ科トチノキ属）の種子に同定された。この他に、炭化材が約4.8ｇ検出された。トチノキの種子は、1/2個以上残存する完形個体47個と、破片個体が多量に確認され、全重量は251.1ｇを量る。以下に、種実の形態的特徴等を記す。

表１　種実同定結果

試料名	分類群	学　名	部位	状態	重量（g）	備　考
A区住居跡１	トチノキ	Aesculus turbinata Blume	種子	炭化	251.1	完形固体47個を含む
	炭化材			炭化	4.8	

注）重量には付着する土の重量も含まれる。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）トチノキ科トチノキ属

完形及び破片の種子が検出された。全個体とも炭化し、黒色を呈す。偏球体で径20～30㎜程度。種皮は薄く硬く、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、流理状の微細な網目模様があり光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種子内に残存する胚は木質で粗面。破片個体は、種皮、胚共に不規則に割れている。

（4）考　　察

平安時代の住居跡（A区住居跡１）内から検出された種実遺体は、すべてトチノキの種子であった。トチノキは、種子はアク抜きを必要とするが、食用・長期保存が可能で収量も多く、古くから里山で保護されてきた有用植物である。また、トチノキは、河川沿いなどの適湿の地に自生する落葉高木であり、現存植生図や潜在自然植生図によれば、現在の遺跡周辺の山地にも普通にみられる（宮脇編著，1989）。したがって、本遺跡の立地やトチノキの植生等を考慮すると、遺跡周辺で入手可能な可食植物であったと考えられる。

ところで、トチノキの種子の観察結果では、完形個体や直接の可食部である胚が残存する個体（例えば、図版１-３ａ・３ｂ，４ａ・４ｂなど）が多数認められた。このことから、利用前の状況が窺われ、発掘調査所見によれば焼失住居の可能性が示唆されることから、植物質食糧資源として貯蔵されていたものが被熱・炭化したと推測される。

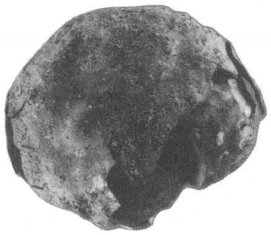
引用文献

石川茂雄　1994　原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会　328p.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000　日本植物種子図鑑.東北大学出版会　642p.
宮脇昭編　1989　日本植生誌　東北　至文堂　605p.

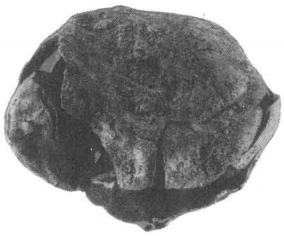
図版１　種実遺体

3 a

3 b



4 a



4 b

2cm　1cm　5mm
(1,2)　(3,4)　(5)

1　トチノキ種子（A区住居跡１）　　2　トチノキ種子（A区住居跡１）
3　トチノキ種子（A区住居跡１）　　4　トチノキ種子（A区住居跡１）
5　トチノキ種子（A区住居跡１）

2　大西遺跡出土土器および小刀残存赤色系色材料の自然科学的調査結果

岩手県立博物館　赤　沼　英　男

（1）　は　じ　め　に

平成16年度に行われた岩手県石鳥谷町大西遺跡の発掘調査によって、茎部に赤色系色材料が残存した小刀と、口縁、胴部から底部にいたる部位、および底部に赤色系色材料が残存した土師器（甕）が検出された。小刀と土師器に同じ組成の赤色系色材料が使用された可能性がある。赤色系色材料の発色剤を明らかにし、小刀と土師器それぞれの発色剤の形状と組成を比較することを目的として、自然科学的調査を行った。以下に調査結果を報告する。

（2）　調　査　資　料

調査資料は岩手県石鳥谷町大西遺跡から出土した小刀（No.１）、土師器（No.２：甕）の２点である。調査資料の概要を表１に示す。

（3）　調　査　方　法

カッターナイフを使い、それぞれの資料から赤色系色材料を少量摘出した。摘出した試料をエポキシ樹脂で包埋処理し、エメリー紙で荒研磨、ダイヤモンドペーストで仕上げ研磨した。このようにして得られた研磨面をEPMAで分析した。

（4）　調　査　結　果

No.１から摘出した試料には、粘土状物質の中に直径１μm以下の金属光沢を呈する微細粒子（IO）が観察される。EPMAによる分析の結果、鉄（Fe）と酸素（O）を主成分とする。赤色という色調を考慮すると、発色剤は酸化第二鉄（ベンガラ）とみることができる（図１）。

No.２の口縁（Sa１）、胴部から底部（Sa２）にいたる部位、および底部（Sa３）から摘出した試料にも、No.１同様、直径１μm以下の金属光沢を呈する微細粒子（IO）が認められる。EPMAによる分析によってFe、Oを主成分とすることが確かめられた。赤色の発色剤はNo.１同様酸化第二鉄と判定される。なお、Sa１およびSa２からは、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）、およびマグネシウム（Mg）が検出されているが、これは周囲の粘土状物質による影響と思われる（図２）。

摘出した試料の自然科学的調査の結果、No.１、No.２ともに赤色の発色剤は酸化第二鉄で、粒子形状もほぼ同じである。No.１およびNo.２には同一の赤色系色材料が用いられた可能性が高い。なお、小刀、土師器ともに下地調整材料の使用はみられなかった。

表１　調査資料の概要

No.	資料名	検出遺構
1	小刀	A区住居跡５
2	土師器（甕）	A区住居跡６

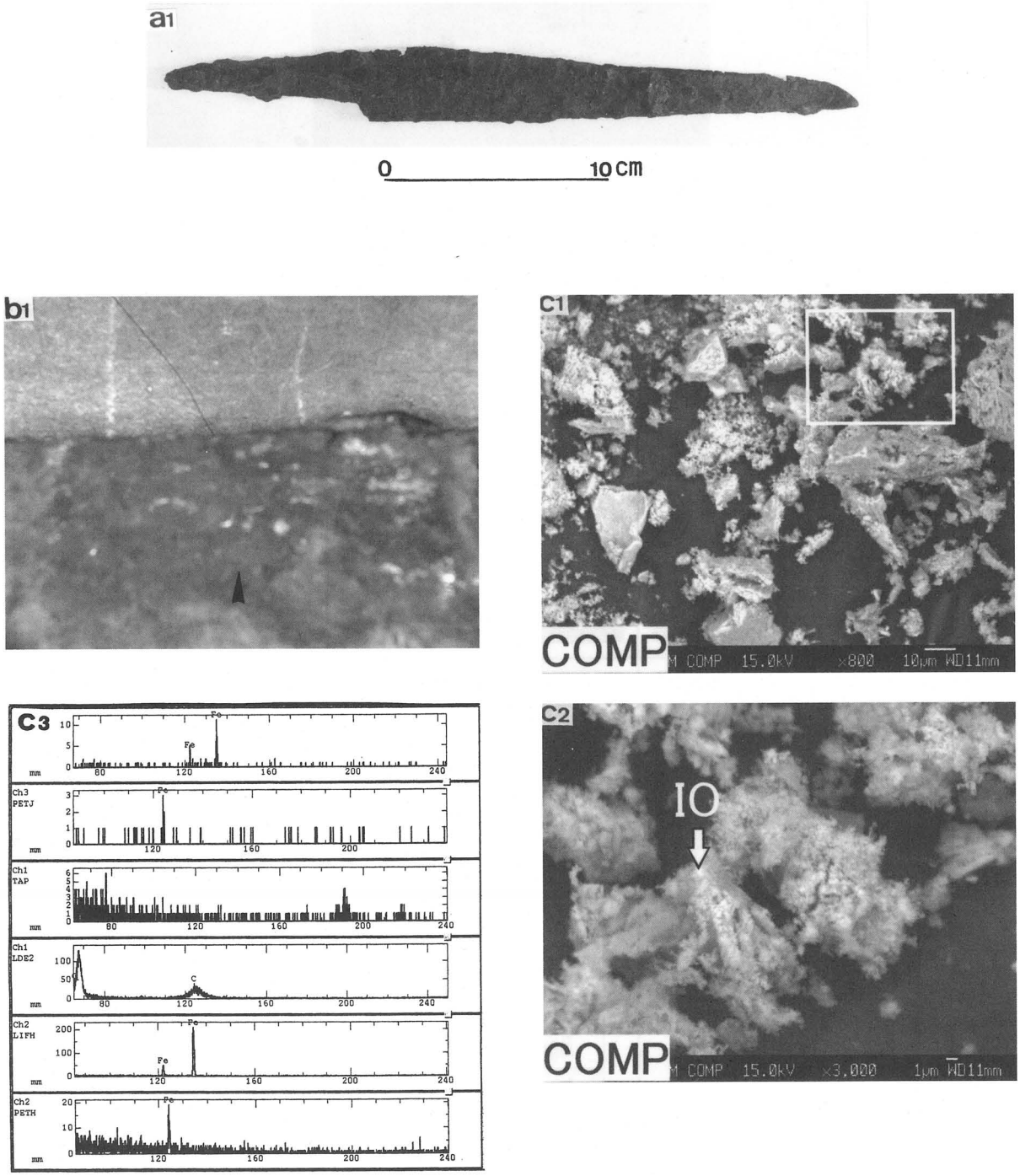
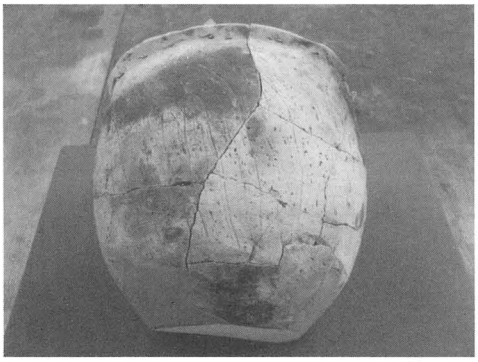


図１　No. 1の外観と摘出した赤色顔料のEPMAによる分析結果

ａ１：外観。
ｂ１：赤色顔料残存部分の拡大写真、矢印は試料摘出位置。
ｃ１-ｃ３：赤色顔料のEPMAによる組成像（COMP）と定性チャート。
ｃ２はｃ１の枠内部を拡大。
ＩＯは酸化鉄粒子。



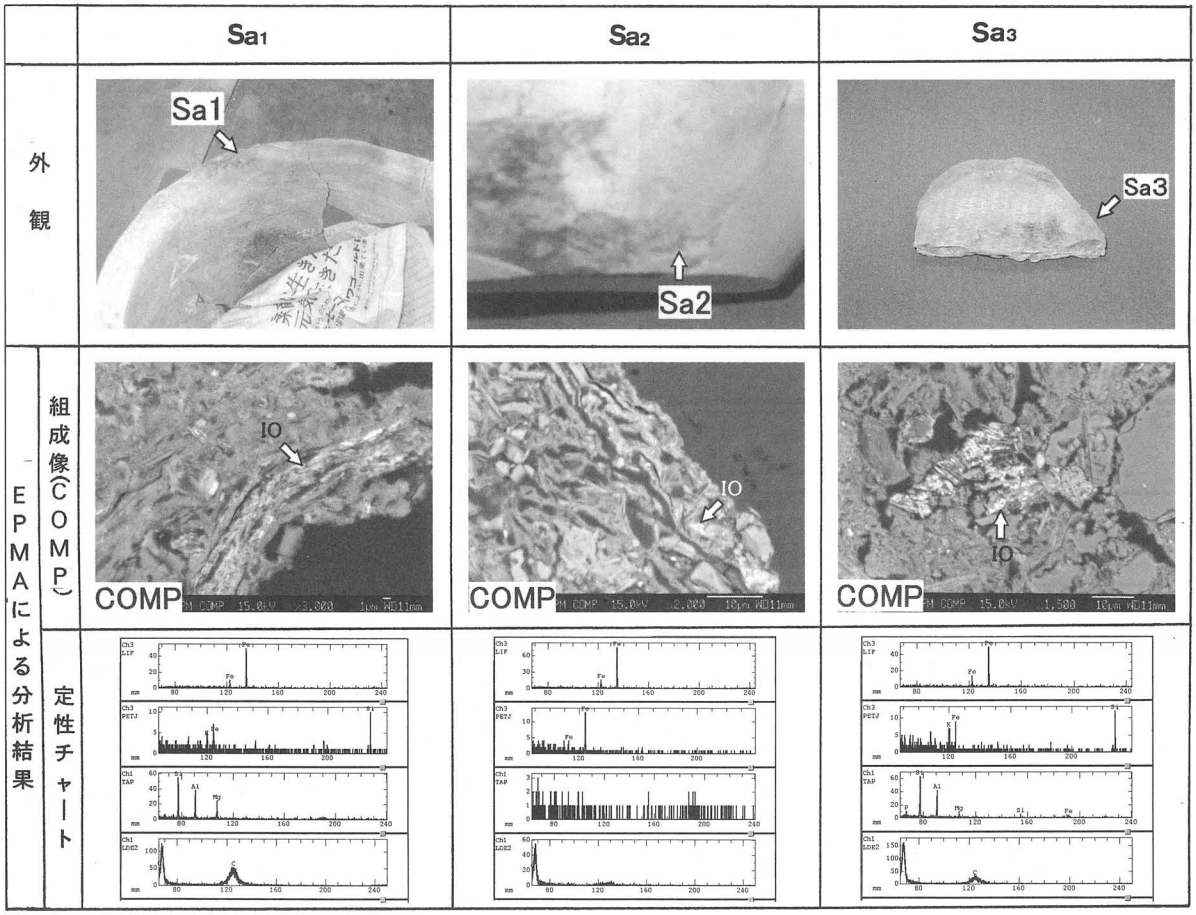


図２　No. 2の外観と摘出した赤色顔料のEPMAによる分析結果
外観の矢印は試料摘出。ＩＯは酸化鉄粒子。

3　放射性炭素年代測定の結果

IAA：加速器分析研究所

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
2）BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
3）付記した誤差は、標準偏差（1σ）に相当する年代で、次のように算出しています。
複数回（通常は4回）の測定値についてχ^2検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としています。
4）δ^{13}Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもあります。
δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000$　（1）

$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}] \times 1000$（2）

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$
$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = ^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAAでは加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、Δ^{14}Cは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値です。（1）式の^{14}C濃度を、δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算します。

$^{14}A_N = ^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）
または
$= ^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - ^{14}A_R)/^{14}A_R] \times 1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、Δ^{14}Cとの関係は次のようになります。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$ (‰)

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$ (%)

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}C$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算されます。

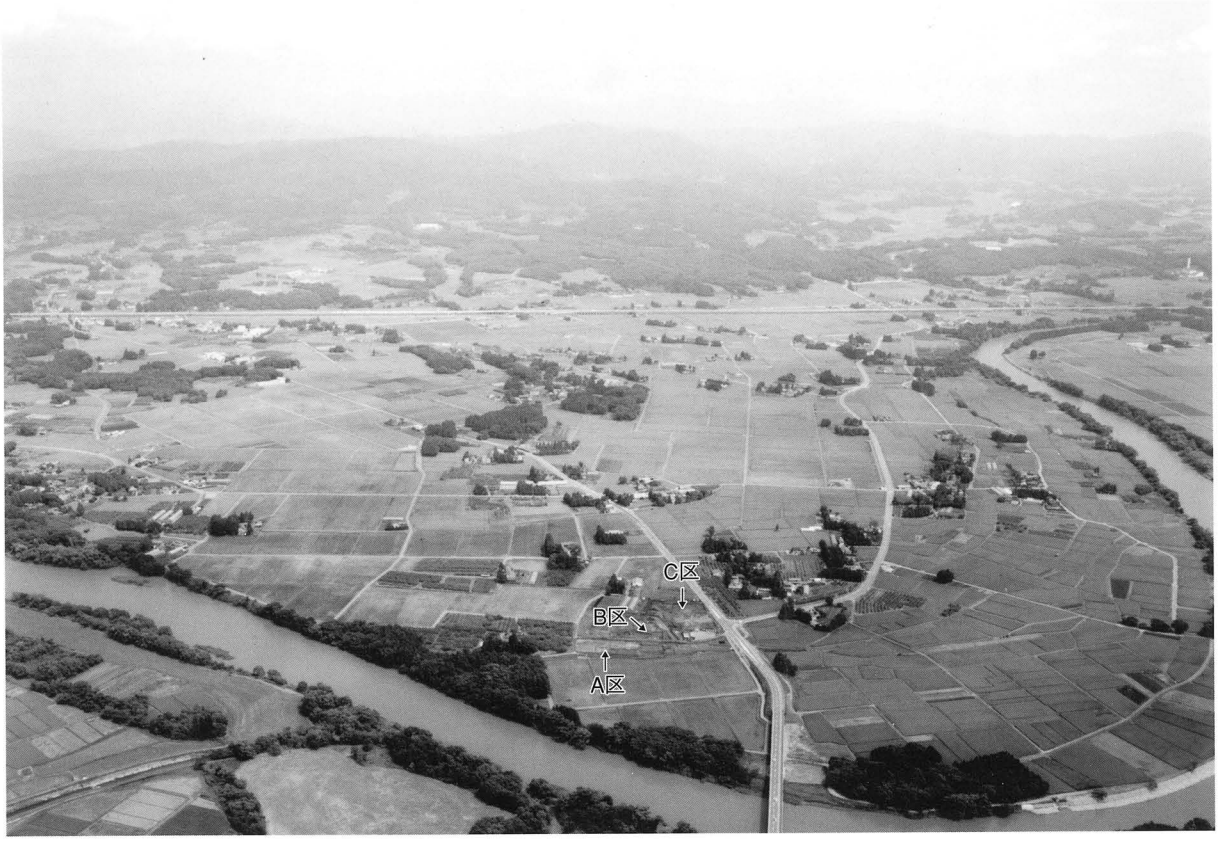
$T = -8033 \times 1n\ [\ \Delta^{14}C/1000 + 1]$

$= -8033 \times 1n\ (pMC/100)$

IAA

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-40988	試料採取場所 ： 岩手県稗貫郡石鳥谷町大西遺跡 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号):ON040809　C区陥し穴状遺構23　8層	Libby Age (yrBP)　：　5,890±40 $\delta^{13}C$(‰)、(加速器)＝−26.45±0.85 $\Delta^{14}C$(‰)　＝−519.7± 2.3 pMC(%)　＝　48.03±0.23
#655-1	(参考)　$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$(‰)　＝−521.1± 2.2 pMC(%)　＝　47.89±0.22 Age (yrBP)　：　5,910±40
IAAA-40989	試料採取場所 ： 岩手県稗貫郡石鳥谷町大西遺跡 試料形態 ： 炭化物 試料名(番号):ON040809　C区陥し穴状遺構23　6層	Libby Age (yrBP)　：　5,890±40 $\delta^{13}C$(‰)、(加速器)＝−25.64±0.94 $\Delta^{14}C$(‰)　＝−516.4± 2.4 pMC(%)　＝　48.36±0.24
#655-2	(参考)　$\delta^{13}C$の補正無し	$\delta^{14}C$(‰)　＝−517.0± 2.2 pMC(%)　＝　48.30±0.22 Age (yrBP)　：　5,850±40

写 真 図 版



遺跡全景（西上空から）

遺跡全景（南上空から）

写真図版１　空中写真（１）

A区・B区（左が北）

C区（上が北）

写真図版２　空中写真（２）

A１区（南東から）

B１区（東から）

写真図版３　調査着手時の状況（１）

C区（北から）

C区　東側拡張区（南西から）

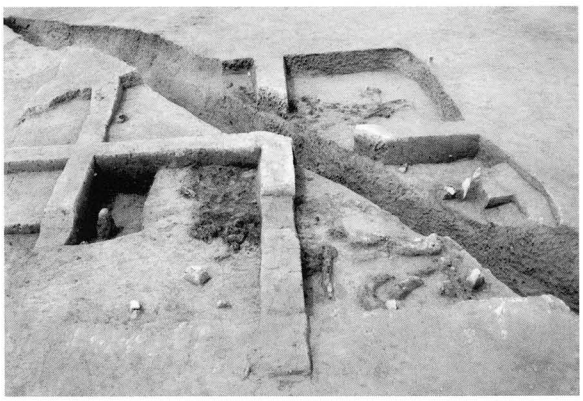
写真図版４　調査着手時の状況（２）

B１区（南から）

C区（北から）

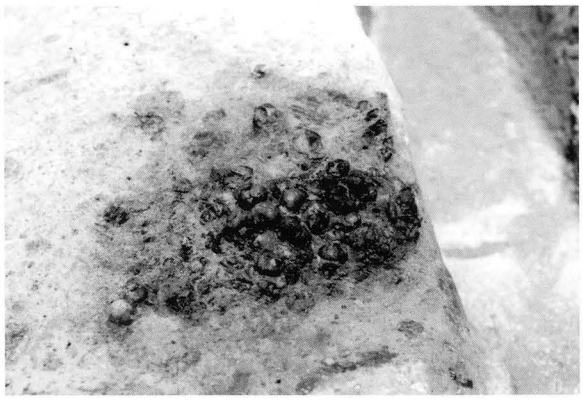
写真図版５　基本層序

全景（西から）



炭化材出土状況（南から）

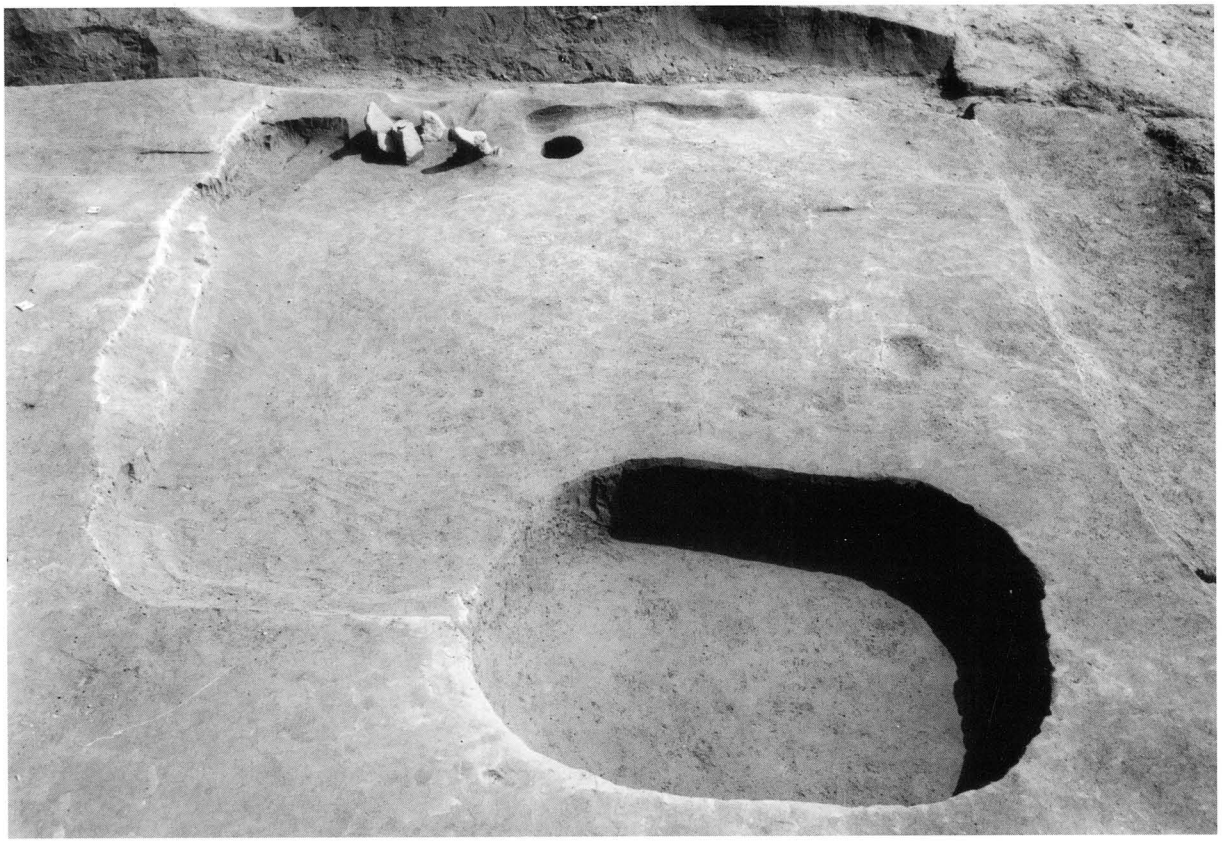
カマド　近影（西から）



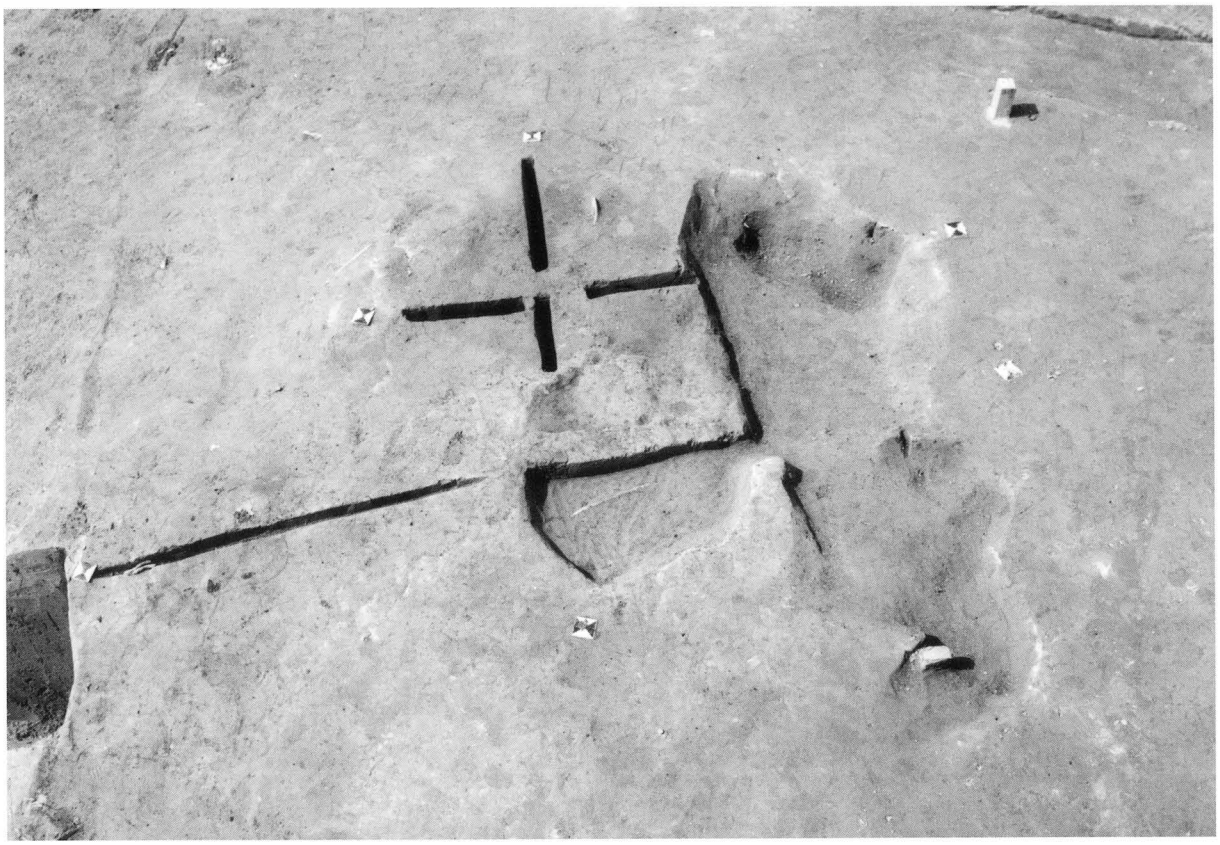
炭化トチ出土状況（南から）

西壁側土坑断面・刀子出土状況

写真図版６　A区　住居跡１



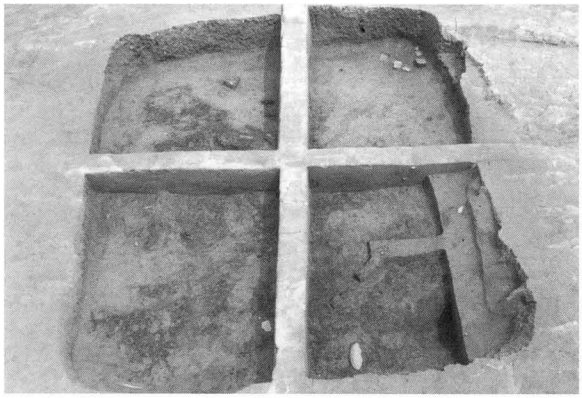
住居跡２　全景（北から）



住居跡３　全景（南から）

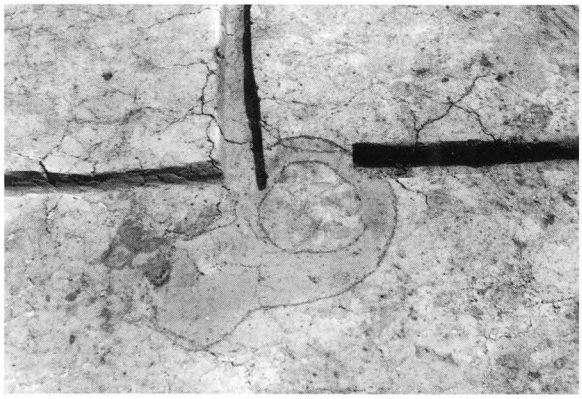
写真図版７　A区　住居跡２・３

住居跡４　全景（北から）

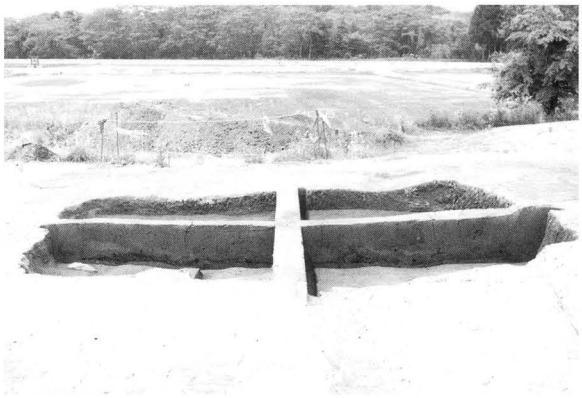


炭化材出土状況（南から）

鉄製品（銛？）出土状況

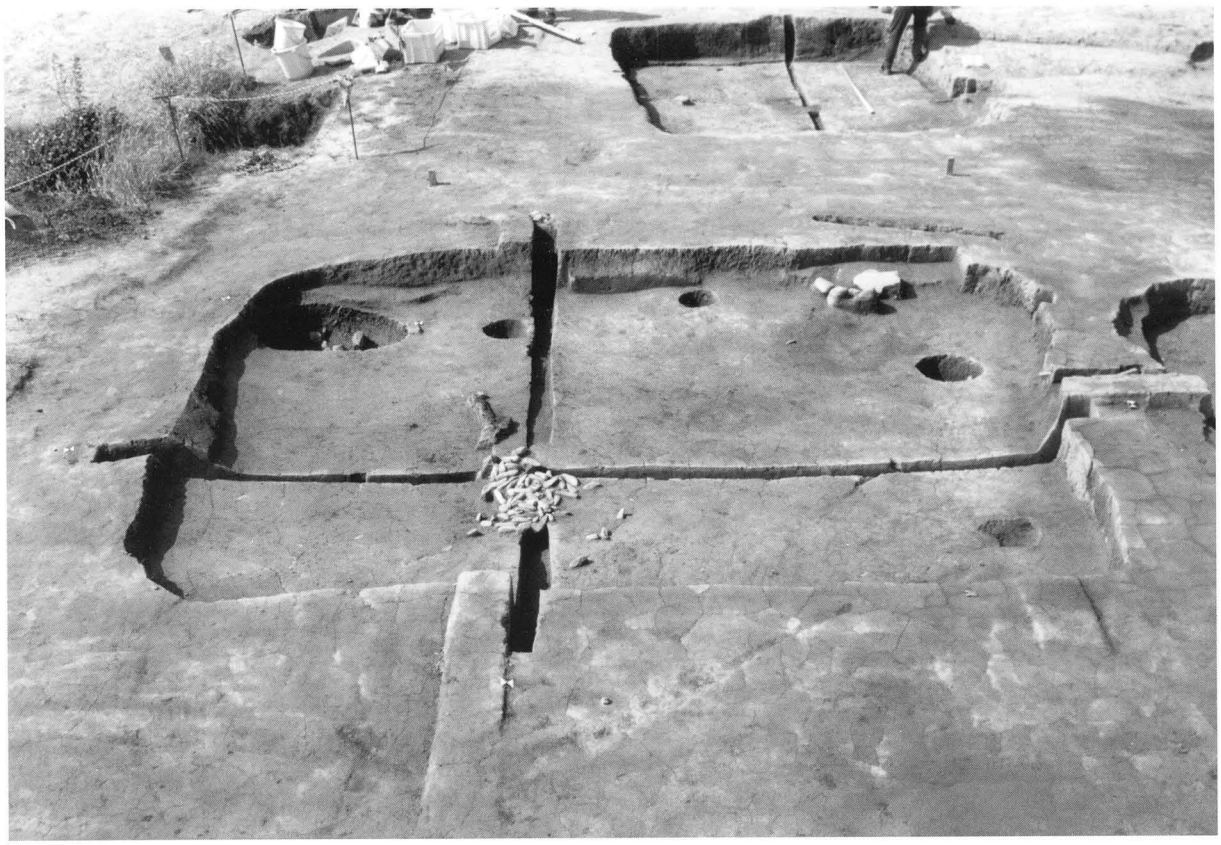


炉跡（西から）



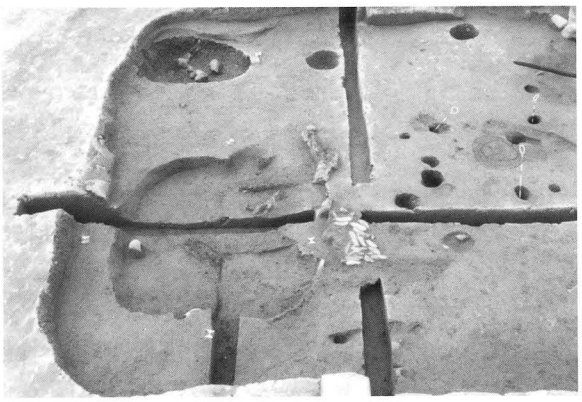
埋土断面（東から）

写真図版８　A区　住居跡４



住居跡５　全景（南から）

カマド　近影（南から）

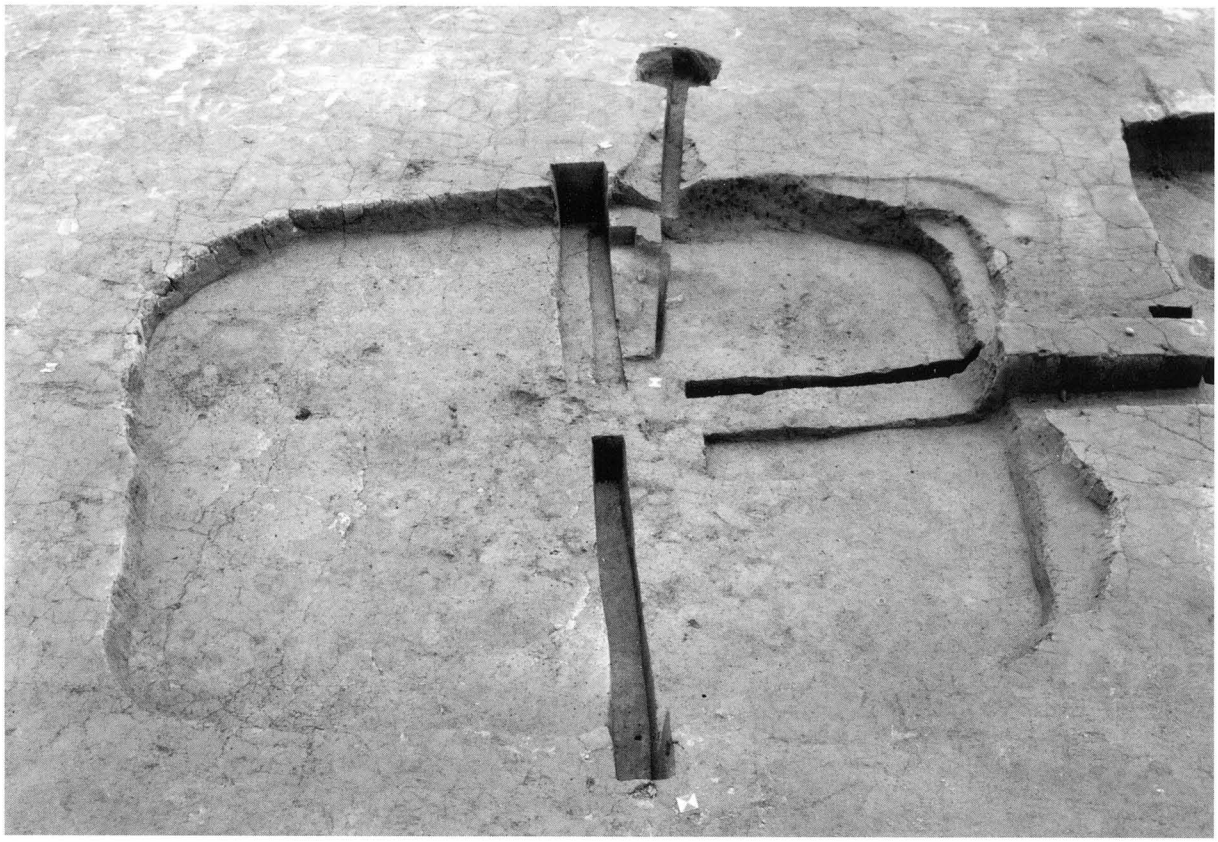


西半部の状況（土坑・棒状礫の集合）

炉跡と周囲の小ピット（東から）

棒状礫出土状況（近影・南から）

写真図版９　A区　住居跡５



住居跡６　全景（北から）

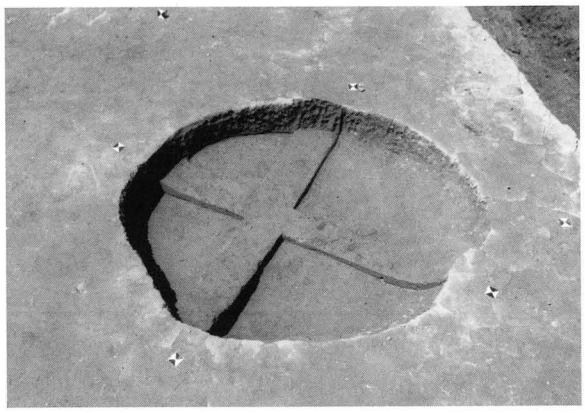
埋土断面（南から）

遺物出土状況（北から）

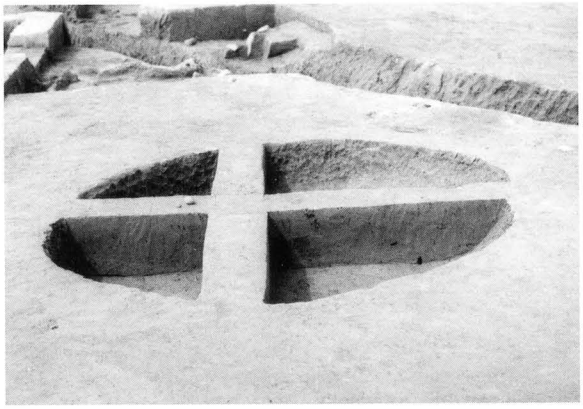
古期（南壁）カマド断面（北西から）

新期（東壁）カマド燃焼部（西から）

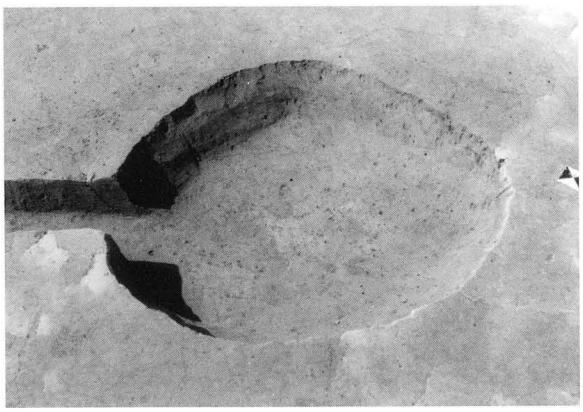
写真図版10　A区　住居跡６



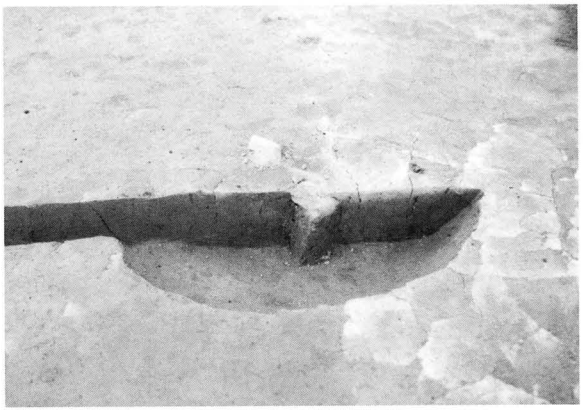
土坑１（南から）



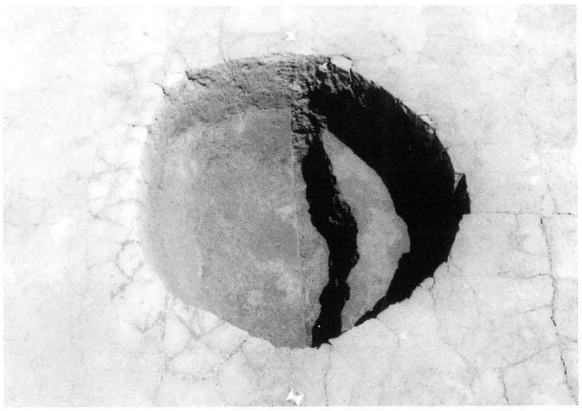
土坑１　断面（南から）



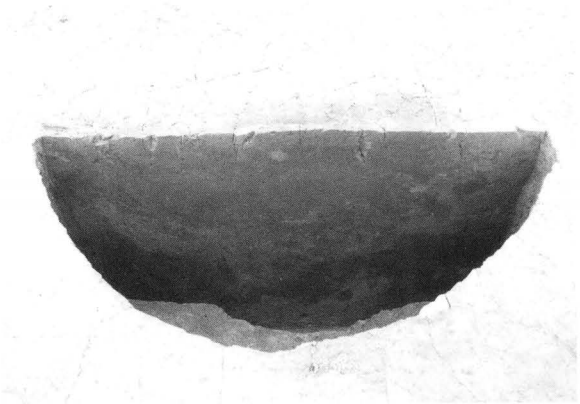
土坑２（南から）



土坑２　断面（南から）



土坑３（南から）



土坑３　断面（東から）

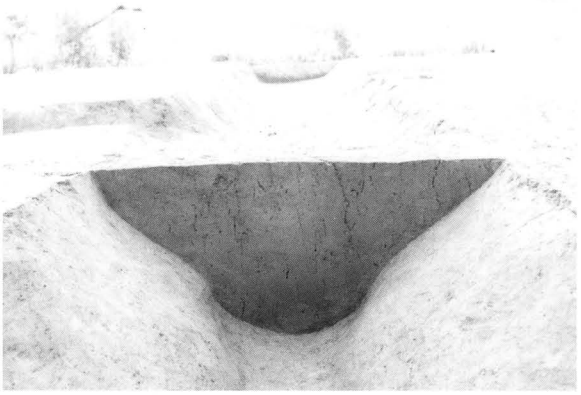
土坑４（南から）

土坑４　断面（南から）

写真図版11　A区　土坑

方形周溝　近影（北東から）

断面（d-d'）



断面（e-e'）

断面（c-c'）

人骨（頭骨）出土状況

写真図版12　A区　方形周溝

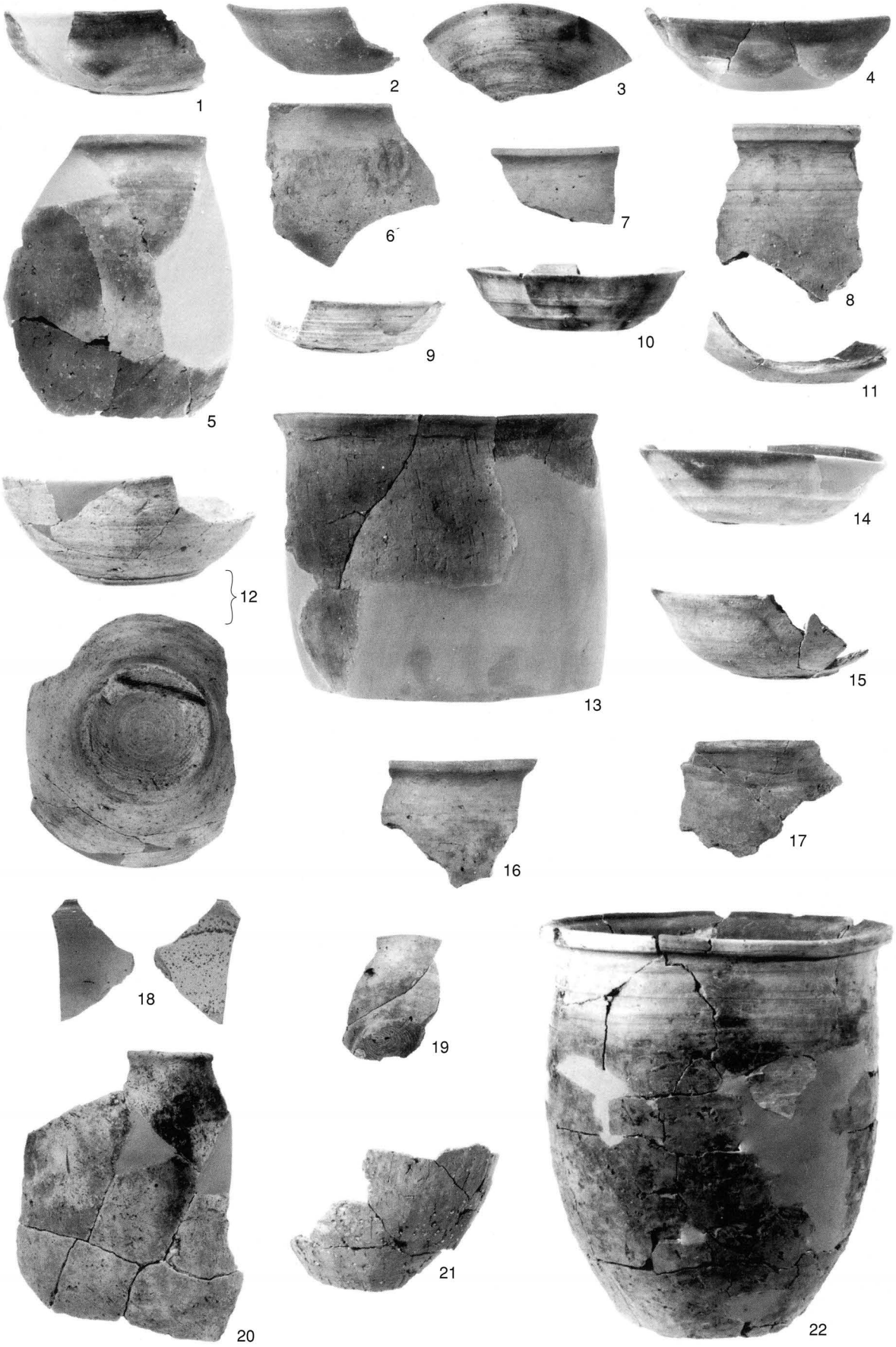
溝跡１（南東から）

Ａ２区　（東側拡張区）分（南東から）

断面（b-b'）

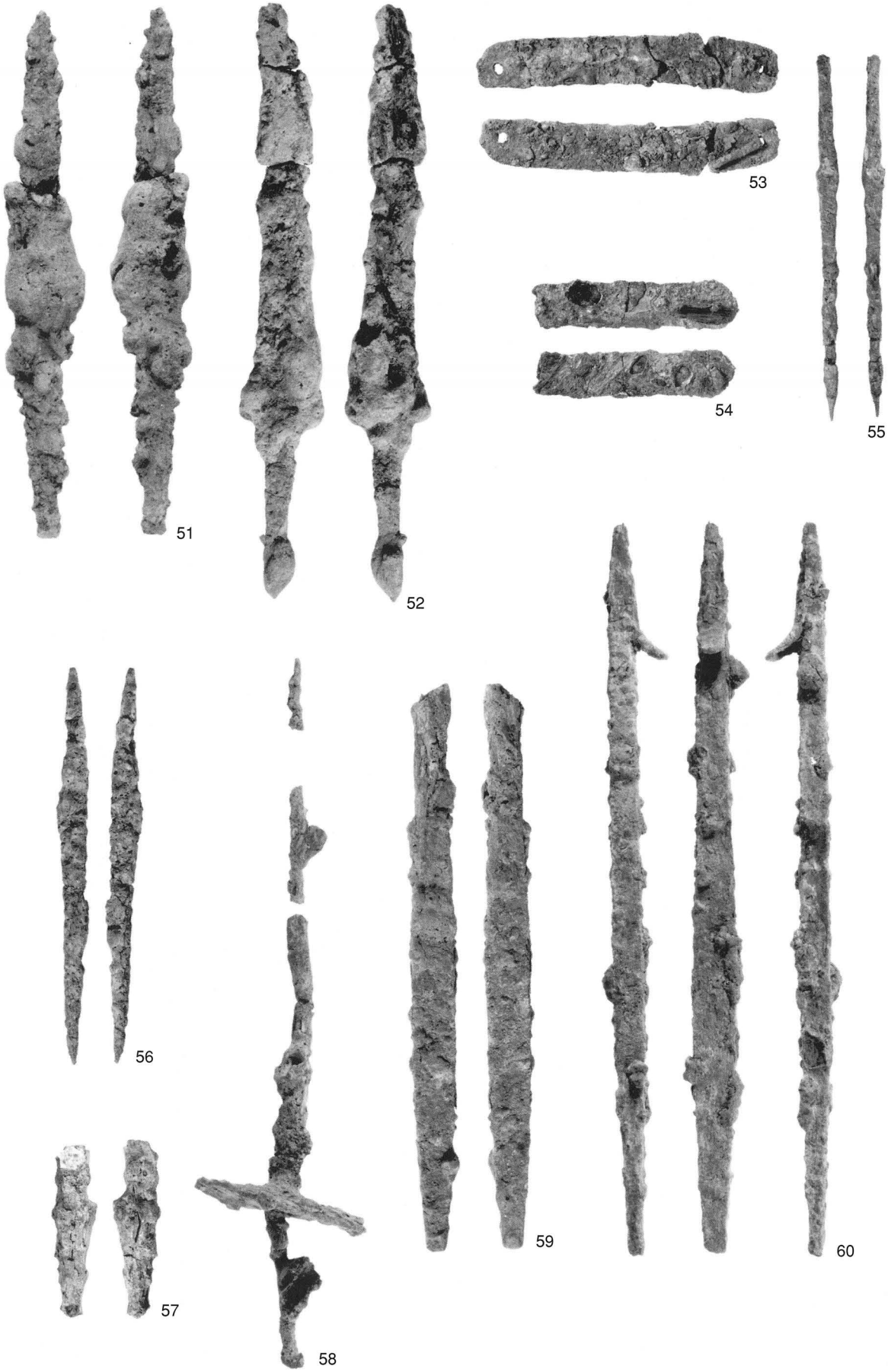
断面（c-c'）

写真図版13　A区　溝跡



写真図版14　A区　出土土器（1）

写真図版15　A区　出土土器（2）



写真図版16　A区　出土鉄製品（1）

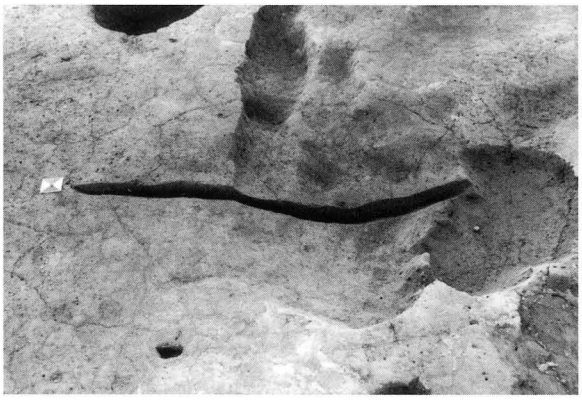
写真図版17　A区　出土鉄製品（2）

A区　出土鉄製品（３）

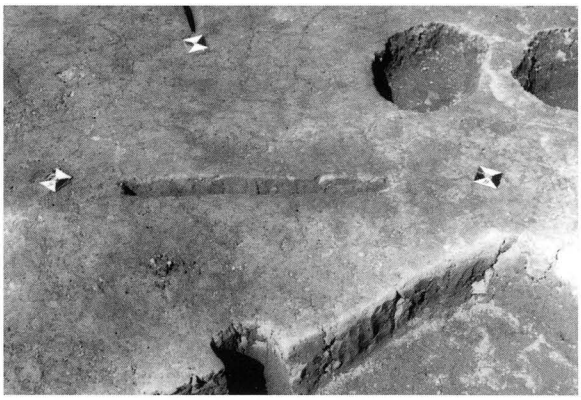
住居跡５出土棒状礫

写真図版18　A区　出土鉄製品（３）・住居跡５出土棒状礫

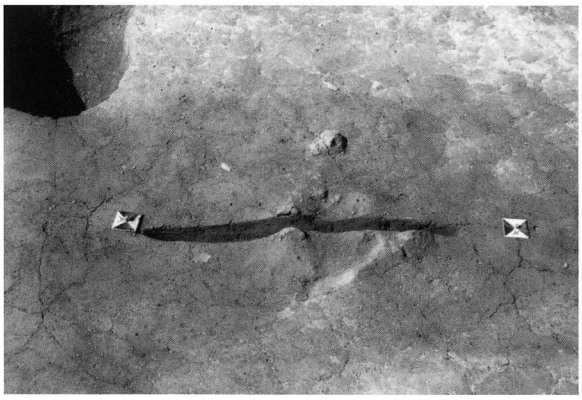
住居跡１　全景（南から）



炉１（カマド？）



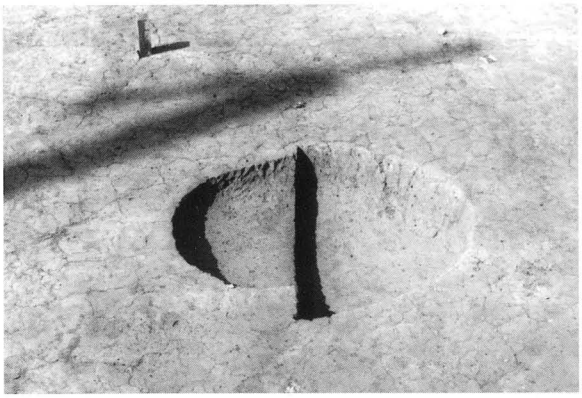
炉２



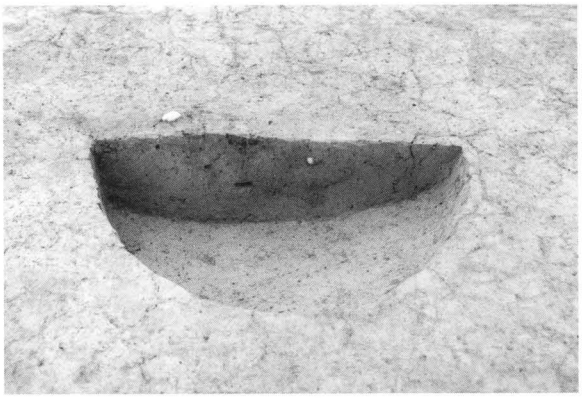
炉３

礫充填ピット（pp５）

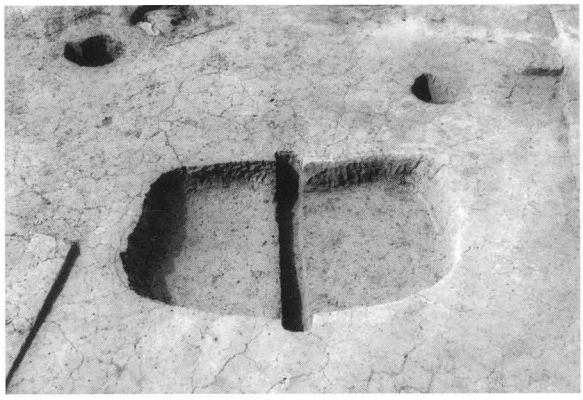
写真図版19　B区上位面　住居跡１



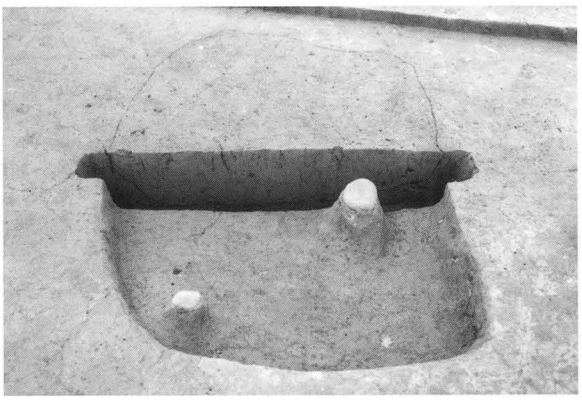
土坑１（南から）



土坑１　断面（東から）



土坑２（南から）



土坑２　断面（東から）

溝跡１（北から）

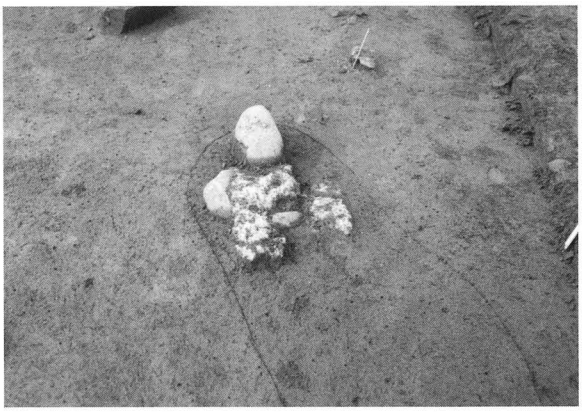
写真図版20　B区上位面　土坑・溝跡

B区上位面　終了全景（南西から）

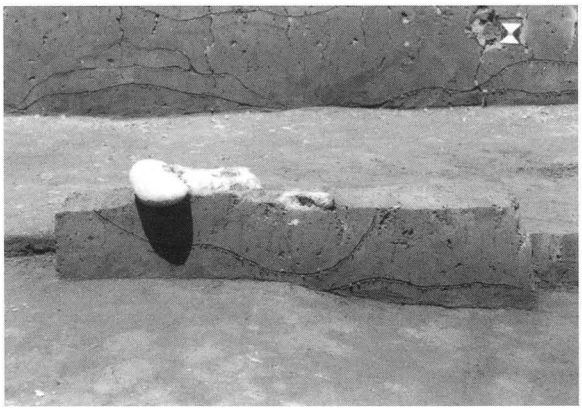
B区下位面　遺物出土状況（西から）

写真図版21　B区上位面　全景・下位面（1）

B区下位面　遺物出土状況（南から）



灰白色粘土塊　出土状況（南から）



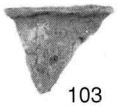
同上断面（南から）

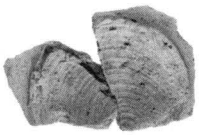
B区下位面　終了全景（西から）

写真図版22　B区下位面（2）

101

102


103

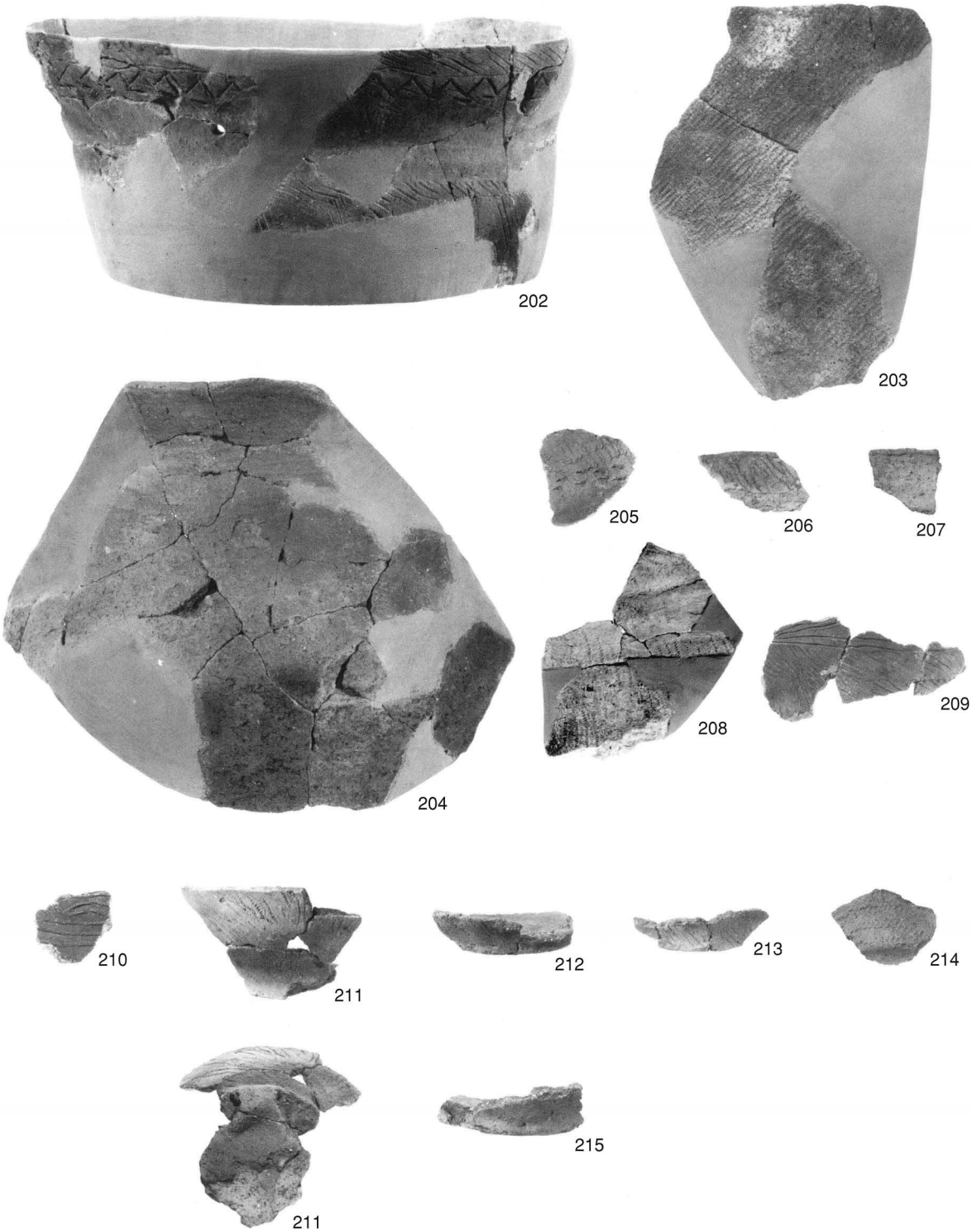

104

105

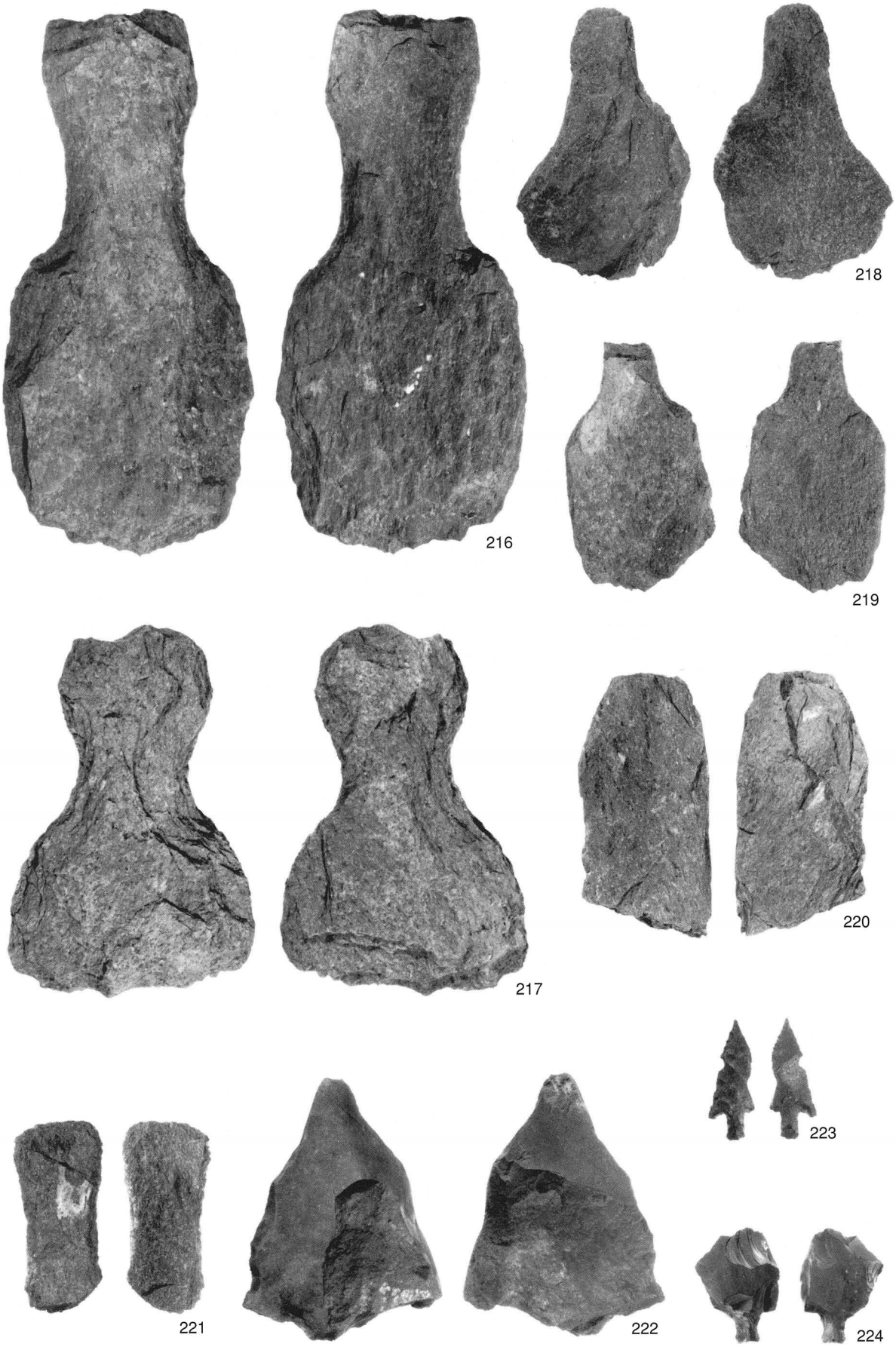
201

201

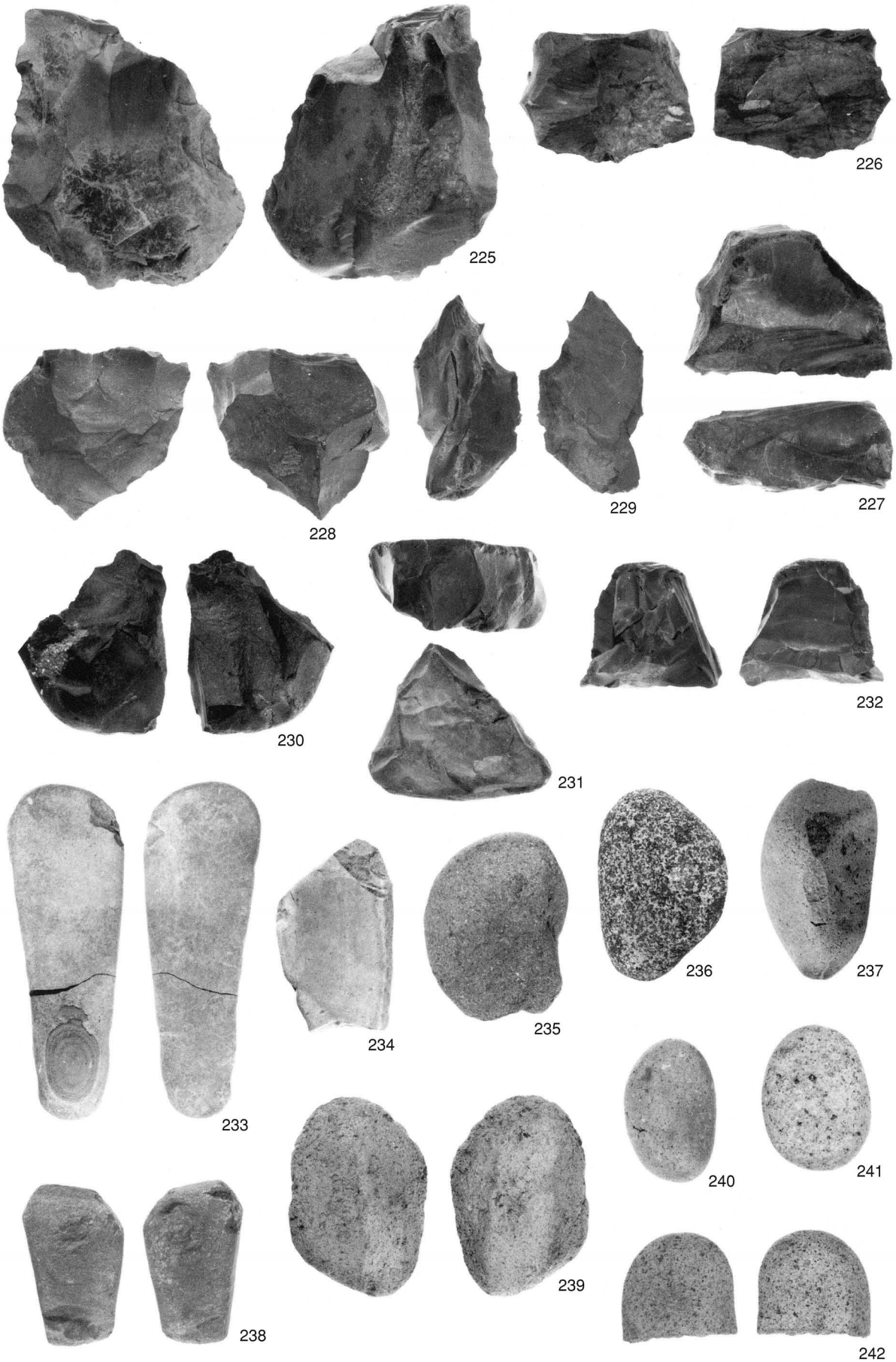
写真図版23　B区上位面　出土遺物・B区下位面　出土土器（1）



写真図版24　B区下位面　出土土器（2）

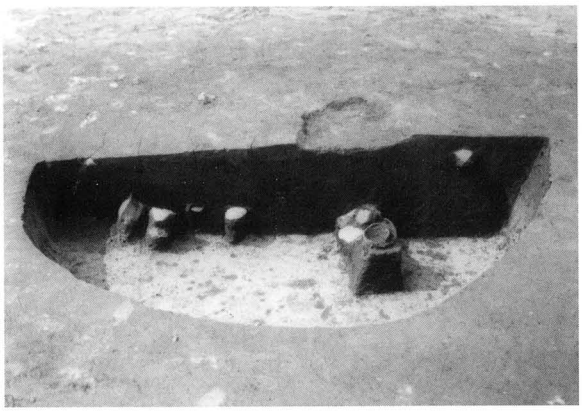


写真図版25　B区下位面　出土石器（1）



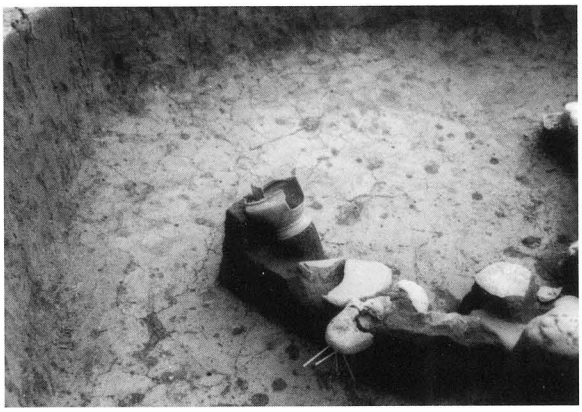
写真図版26　B区下位面　出土石器（2）

土坑１（南から）

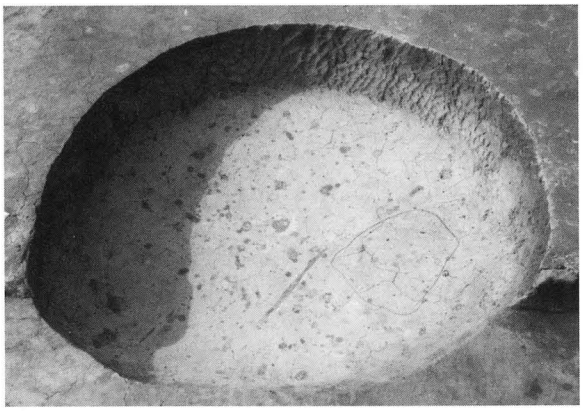


土坑１　断面（南から）

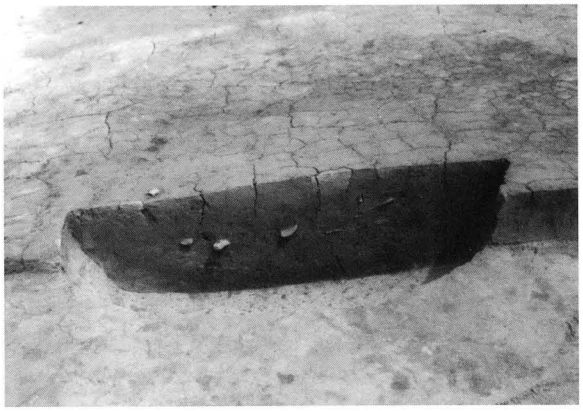
土坑１　遺物出土状況（南から）



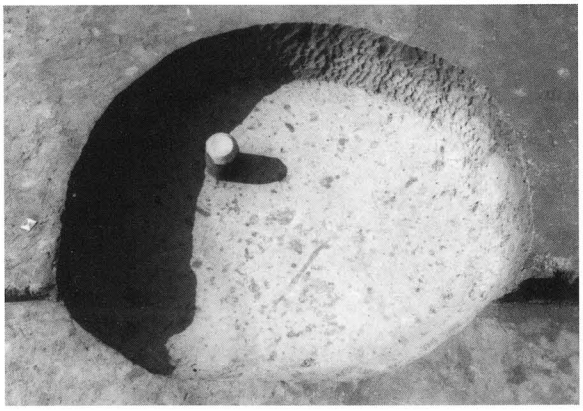
完形土器（301）出土状況（北西から）



土坑２（南から）



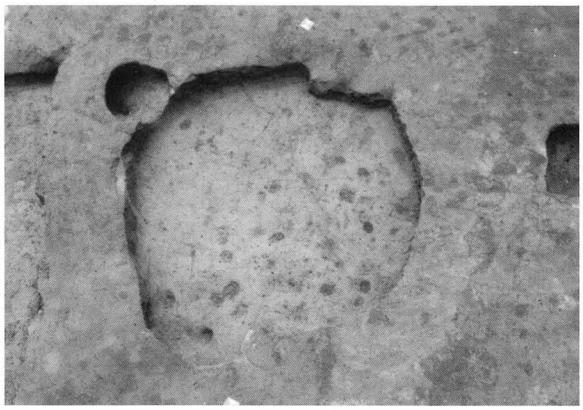
土坑２　断面（南から）



土坑２　遺物出土状況（南から）

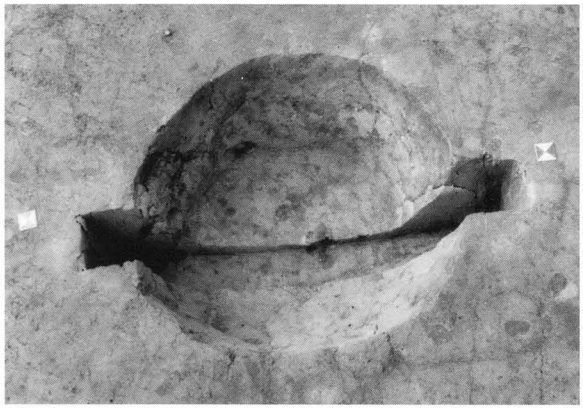
作業風景

写真図版27　C区　土坑（１）



土坑３（東から）

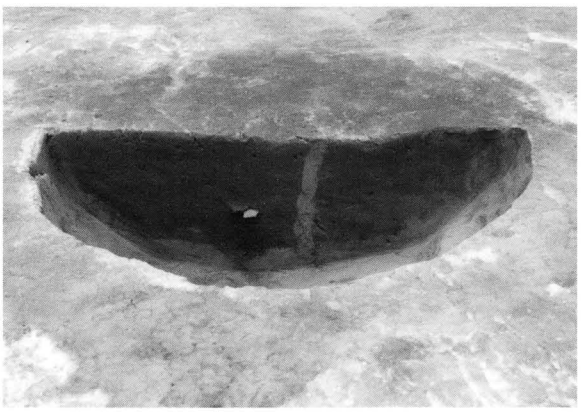
土坑３　断面（南から）



土坑４（南から）

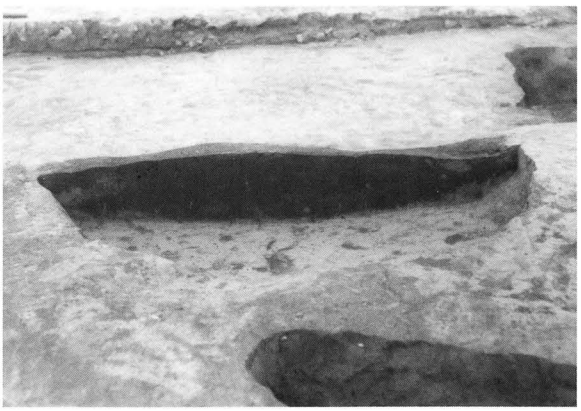
土坑４　断面（南から）

土坑５（南から）



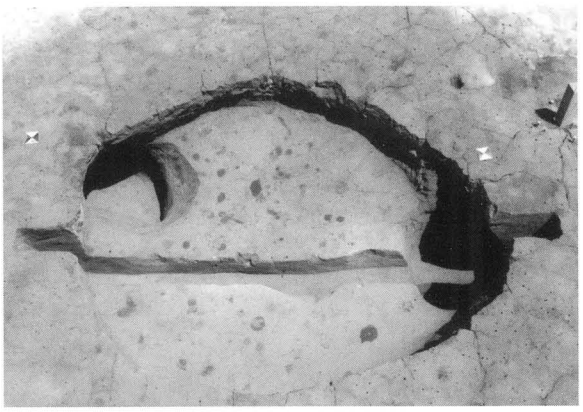
土坑５　断面（南から）

土坑８（北から）

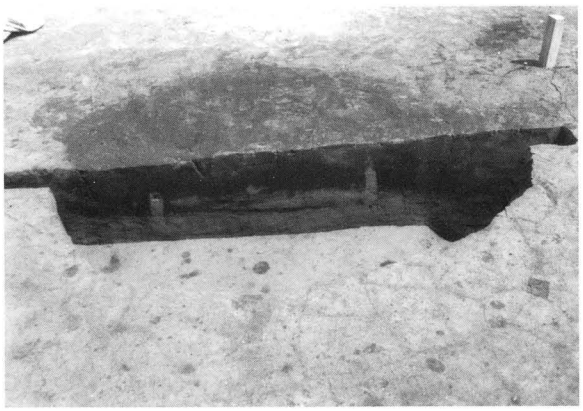


土坑８　断面（南から）

写真図版28　C区　土坑（２）



土坑６（南から）

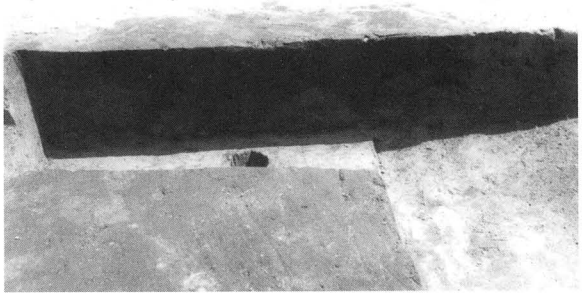


土坑６　断面（南から）

土坑６　遺物出土状況（南から）

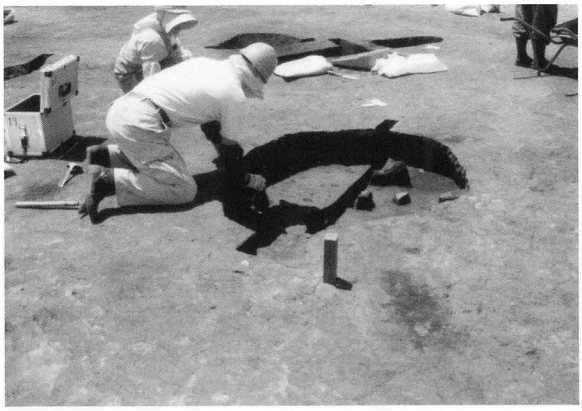
土坑６内柱穴状土坑２　断面（南から）

土坑７（南から）



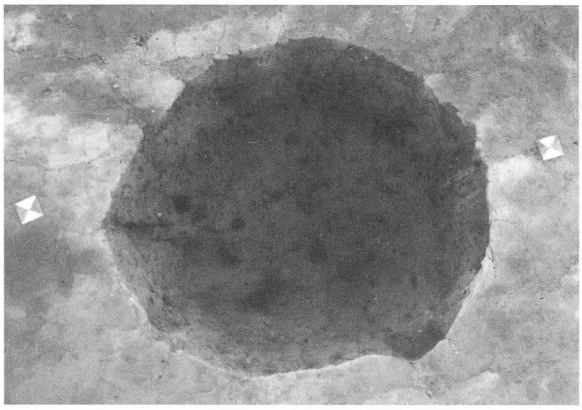
土坑７　断面（北から）

土坑７　断面（西から）

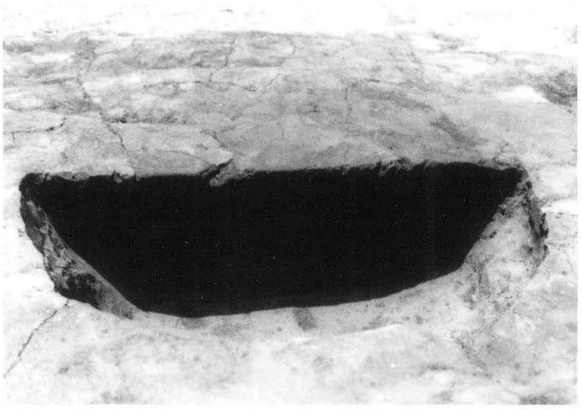


作業風景

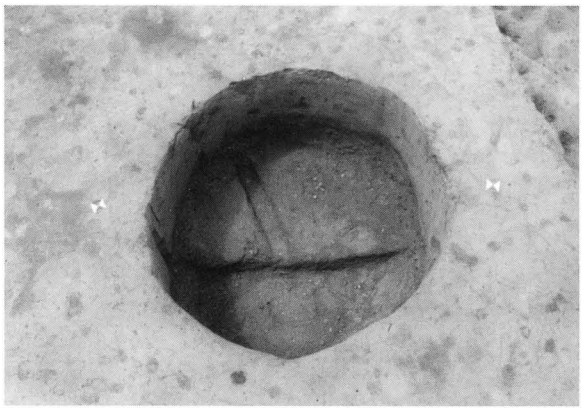
写真図版29　C区　土坑（３）



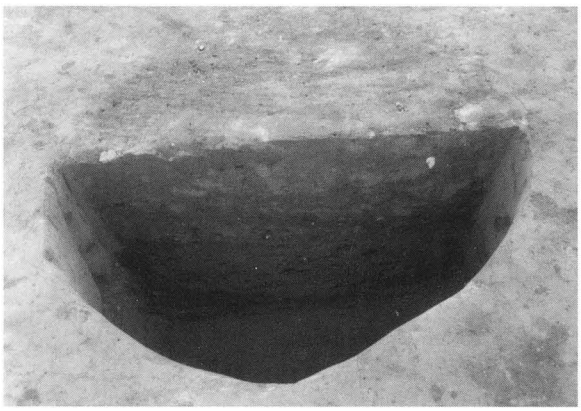
土坑９（東から）



土坑９　断面（東から）



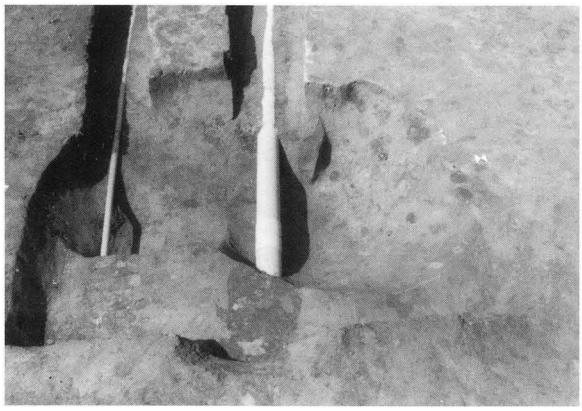
土坑10（東から）



土坑10　断面（東から）

土坑11（南から）

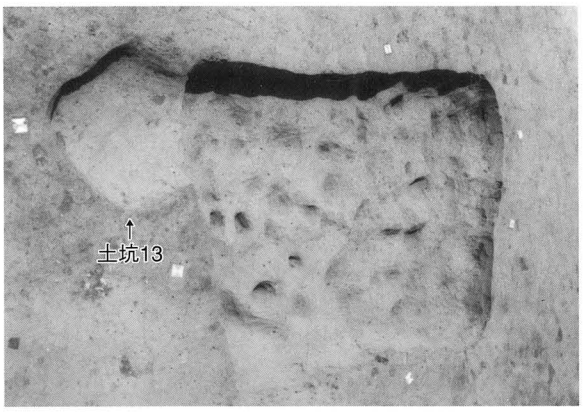
土坑11　断面（南から）



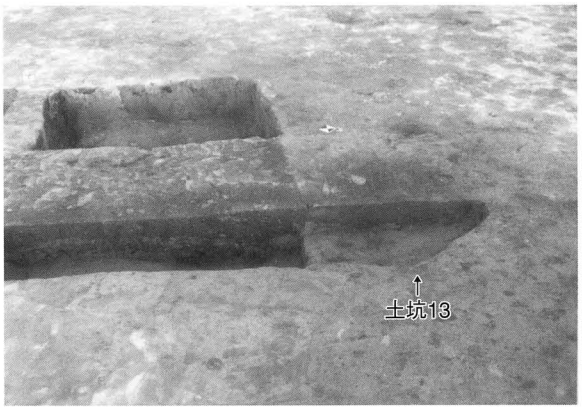
土坑12（南から）

土坑12　断面（南から）

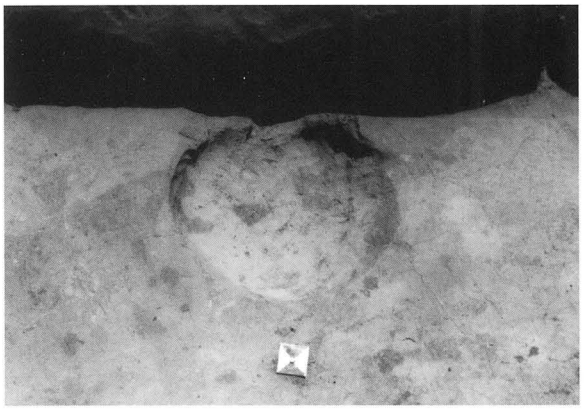
写真図版30　C区　土坑（４）



土坑13（東から）

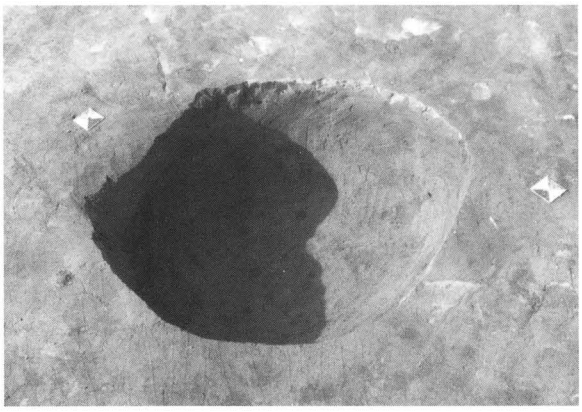


土坑13　断面（西から）

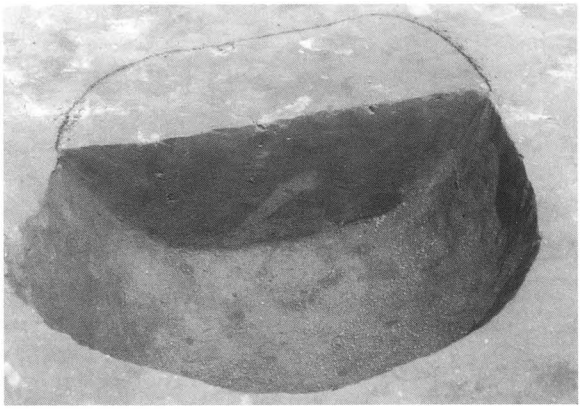


土坑14（西から）

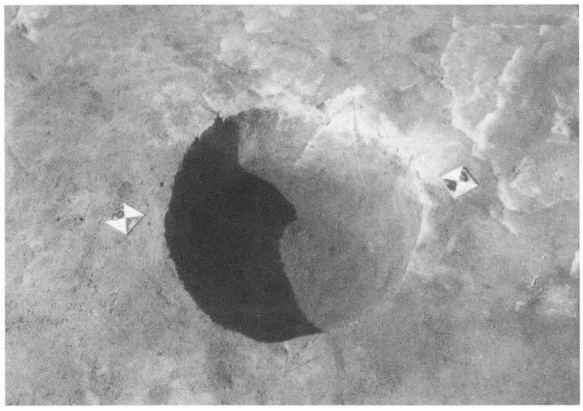
土坑14　断面（北東から）



土坑15（南から）



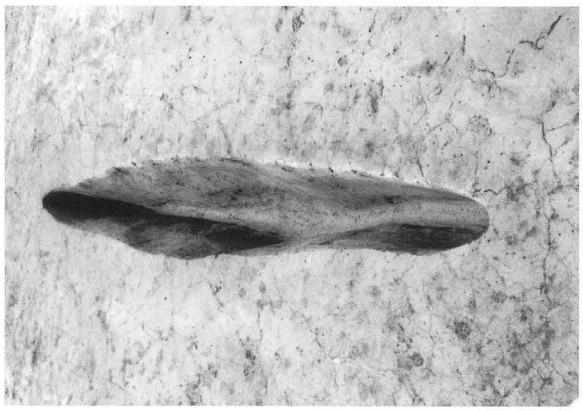
土坑15　断面（南から）



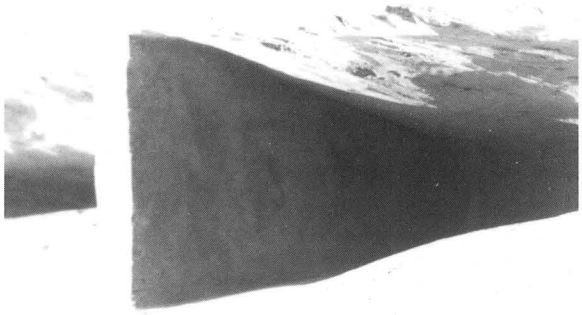
土坑16（南から）

土坑16　断面（南から）

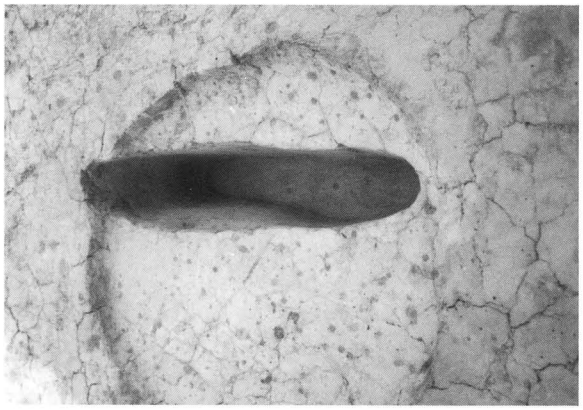
写真図版31　C区　土坑（5）



陥し穴状遺構１

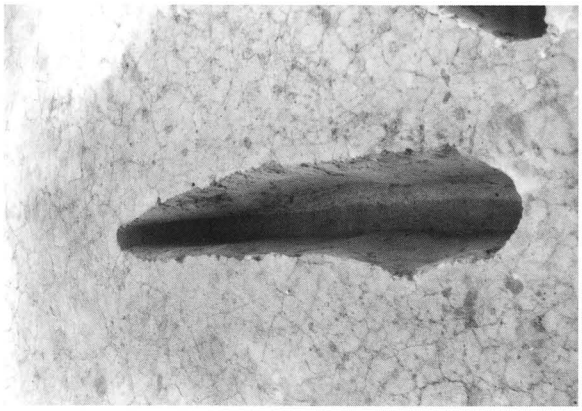


陥し穴状遺構１　断面（東から）

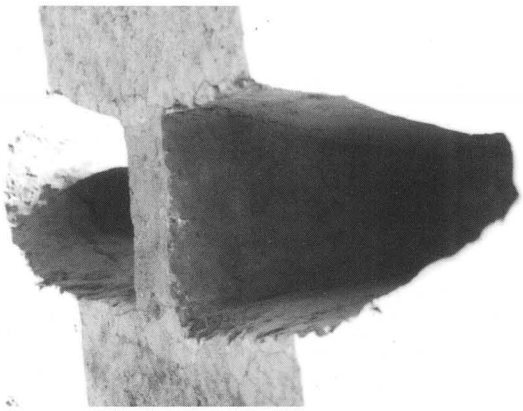


陥し穴状遺構２

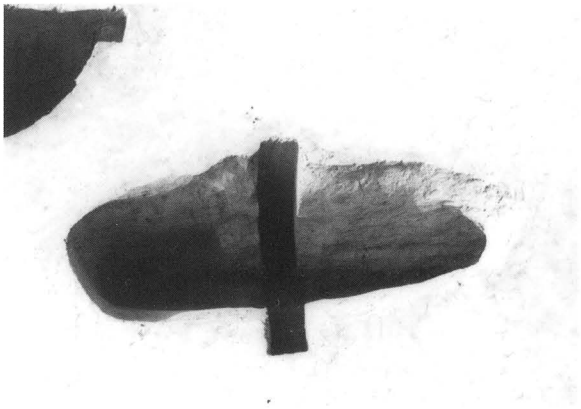
陥し穴状遺構２　断面（南西から）



陥し穴状遺構３



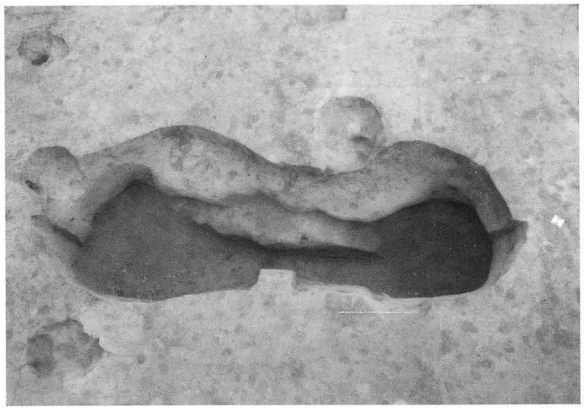
陥し穴状遺構３　断面（南から）



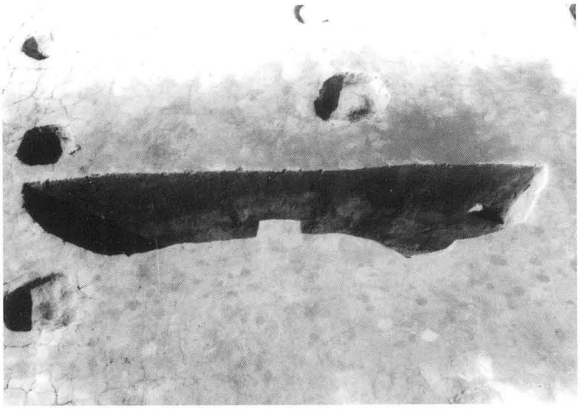
陥し穴状遺構４

陥し穴状遺構４　断面（北東から）

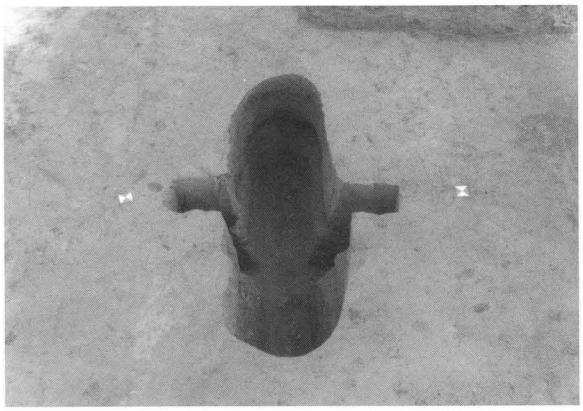
写真図版32　C区　陥し穴状遺構（１）



陥し穴状遺構５（南から）



陥し穴状遺構５　断面（南から）

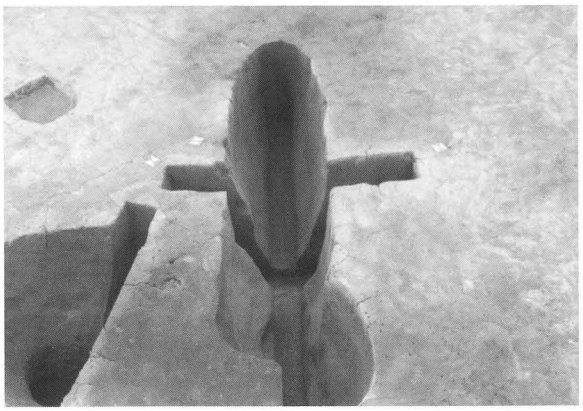


陥し穴状遺構６（西から）

陥し穴状遺構６　断面（１）（東から）

陥し穴状遺構６　断面（２）（西から）

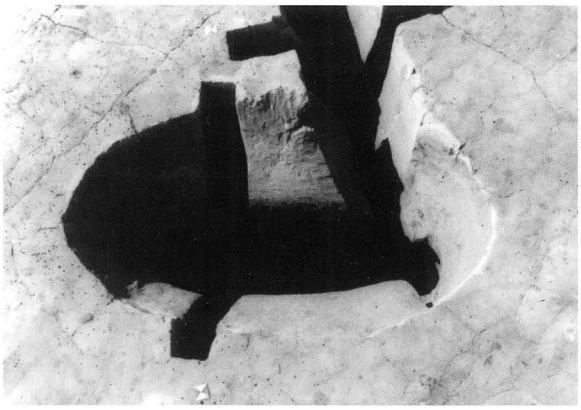
作業風景



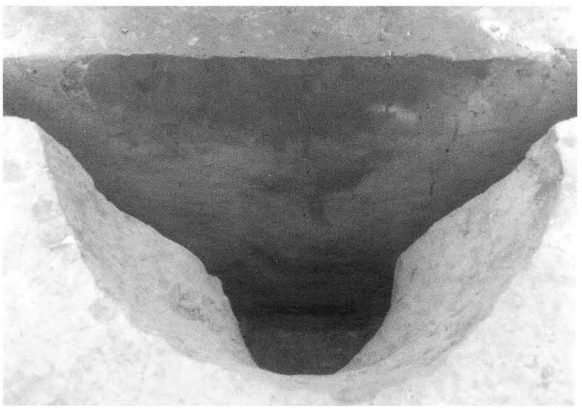
陥し穴状遺構７（南東から）

陥し穴状遺構７　断面（南東から）

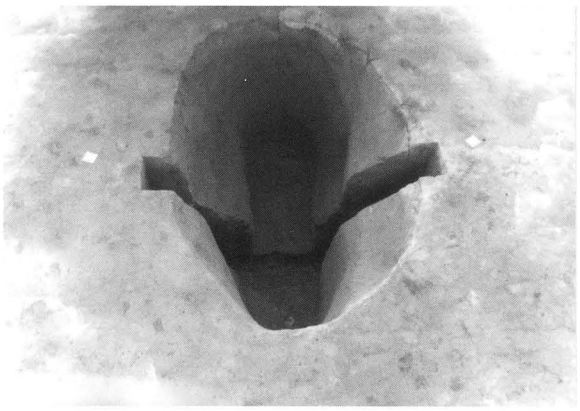
写真図版33　C区　陥し穴状遺構（２）



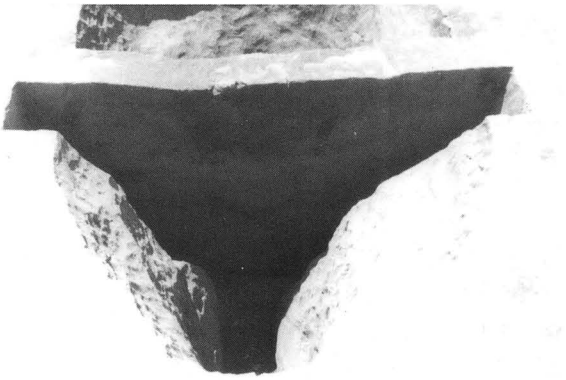
陥し穴状遺構８（南東から）



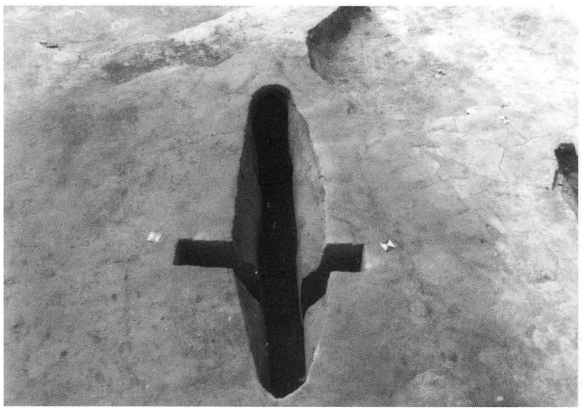
陥し穴状遺構８　断面（南西から）



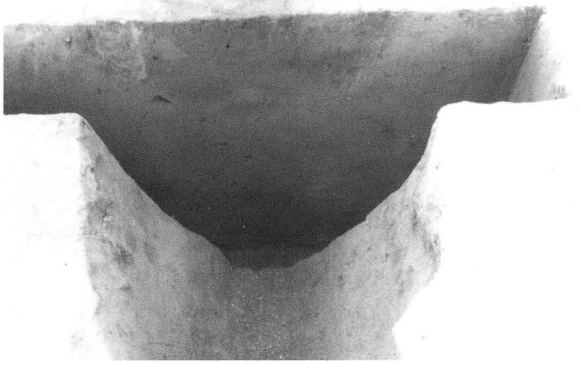
陥し穴状遺構９（東から）



陥し穴状遺構９　断面（東から）



陥し穴状遺構10（南東から）

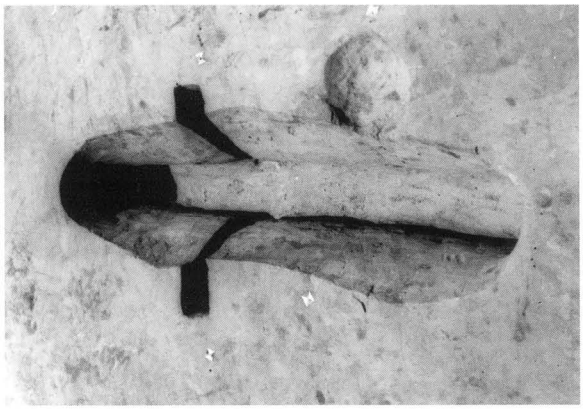


陥し穴状遺構10　断面（南東から）

現地説明会の様子

現地説明会の様子

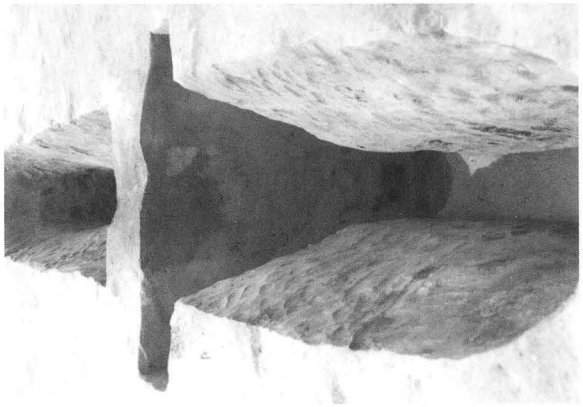
写真図版34　C区　陥し穴状遺構（３）



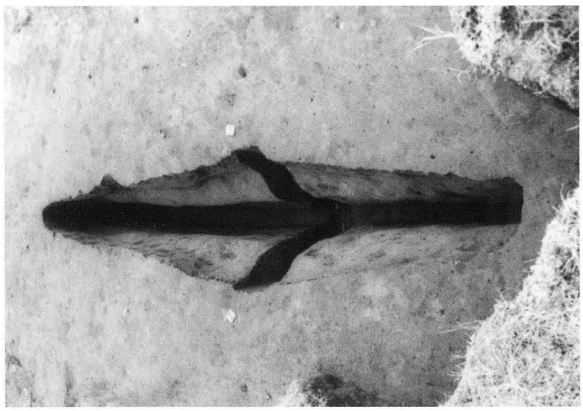
陥し穴状遺構11

陥し穴状遺構11　断面（南から）

陥し穴状遺構12

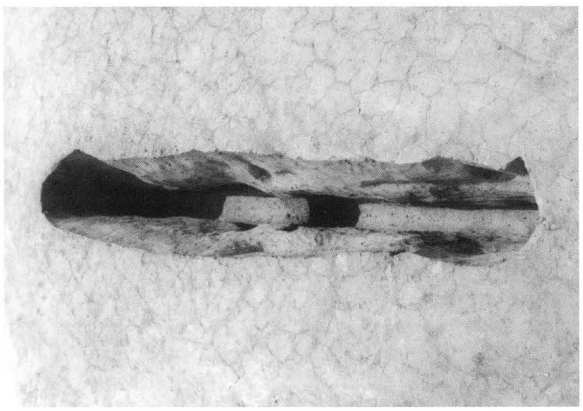


陥し穴状遺構12　断面（東から）

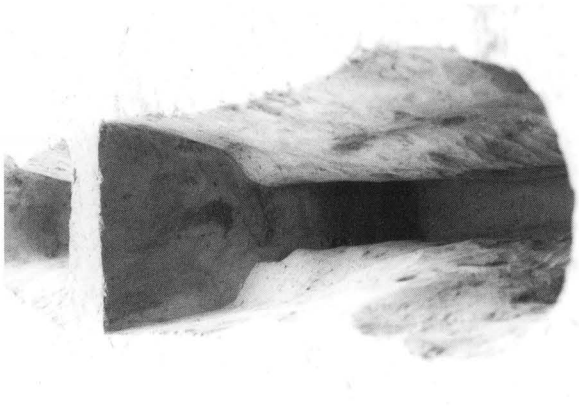


陥し穴状遺構13

陥し穴状遺構13　断面（北東から）

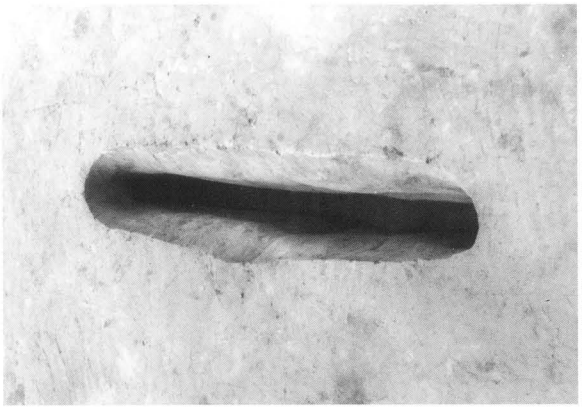


陥し穴状遺構14

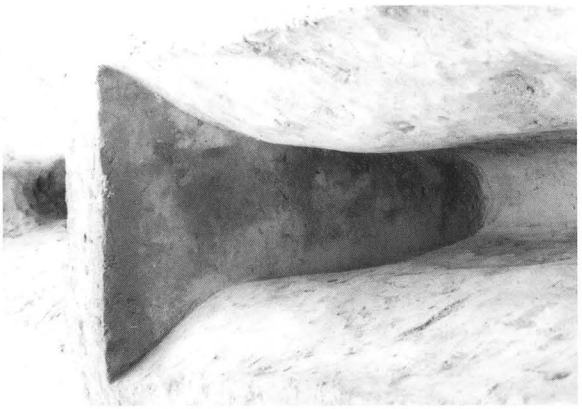


陥し穴状遺構14　断面（北東から）

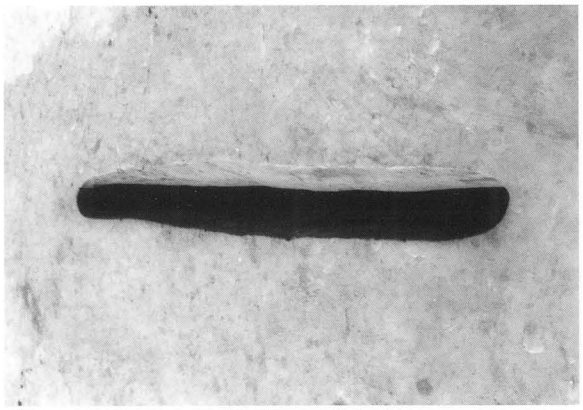
写真図版35　C区　陥し穴状遺構（４）



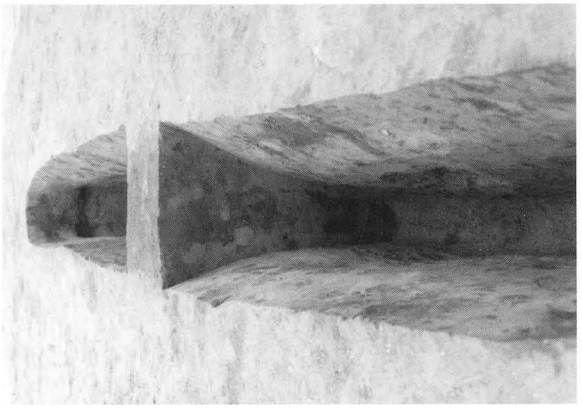
陥し穴状遺構15



陥し穴状遺構15　断面（東から）



陥し穴状遺構16



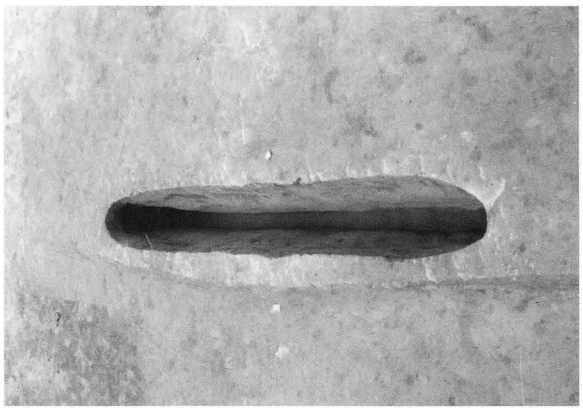
陥し穴状遺構16　断面（東から）

陥し穴状遺構17（西から）

陥し穴状遺構17　断面（東から）

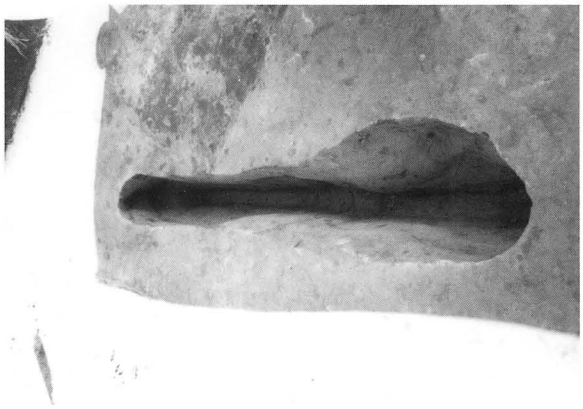
陥し穴状遺構17　断面（西から）

写真図版36　C区　陥し穴状遺構（5）

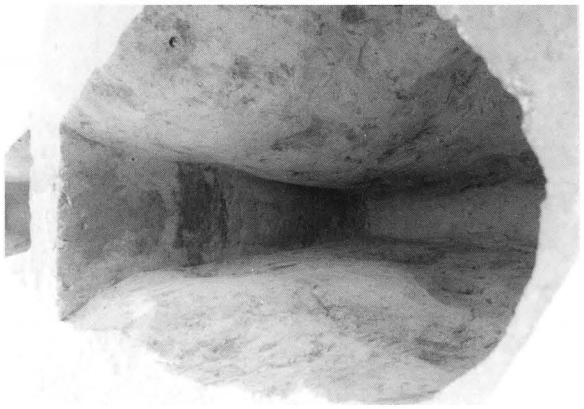


陥し穴状遺構18

陥し穴状遺構18　断面（東から）

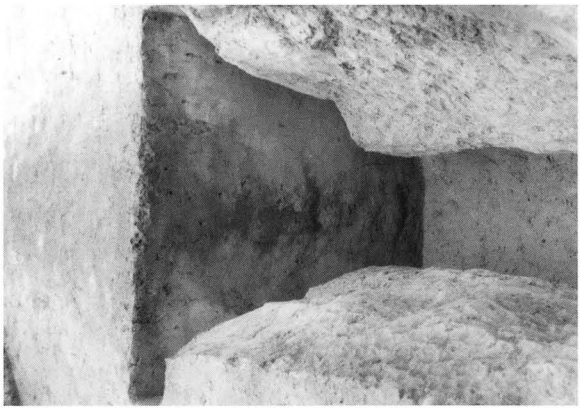


陥し穴状遺構19



陥し穴状遺構19　断面（北西から）

陥し穴状遺構20

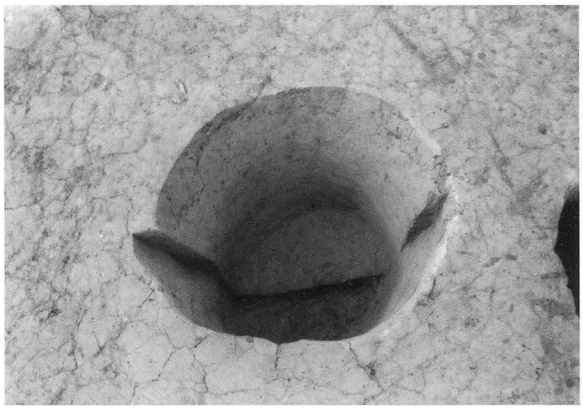


陥し穴状遺構20　断面（東から）

陥し穴状遺構21

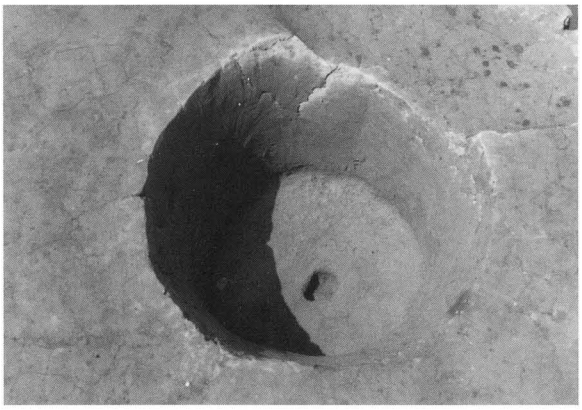
陥し穴状遺構21　断面（東から）

写真図版37　C区　陥し穴状遺構（６）



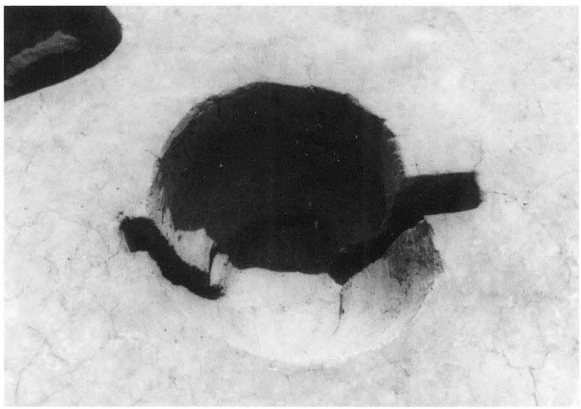
陥し穴状遺構22（南から）

陥し穴状遺構22　断面（南から）



陥し穴状遺構23（東から）

陥し穴状遺構23　断面（南西から）



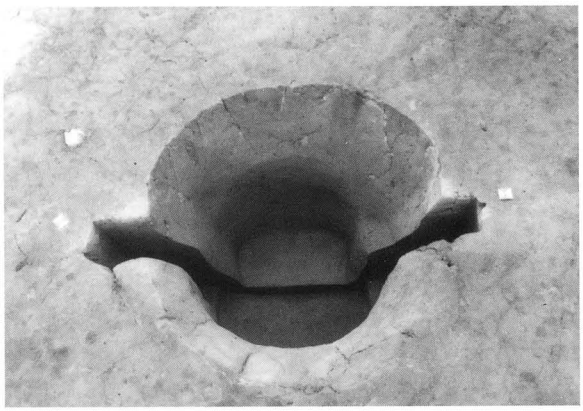
陥し穴状遺構24（南から）

陥し穴状遺構24　断面（南から）

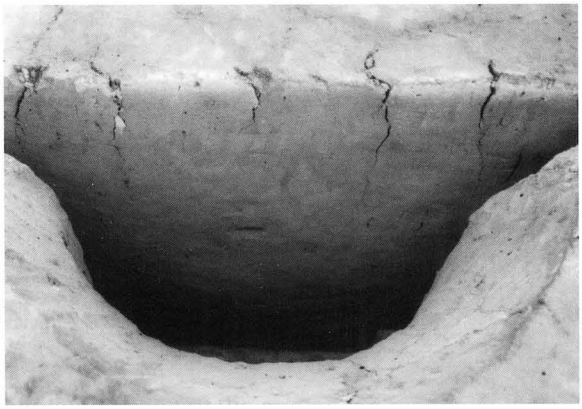
陥し穴状遺構25（東から）

陥し穴状遺構25　断面（東から）

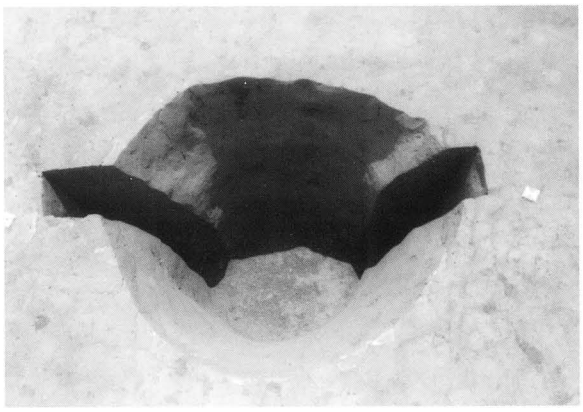
写真図版38　C区　陥し穴状遺構（7）



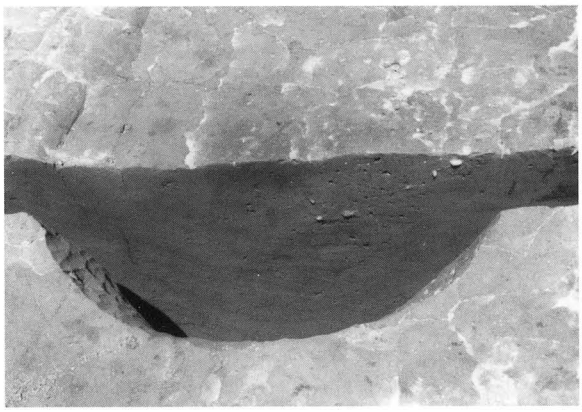
陥し穴状遺構26（東から）



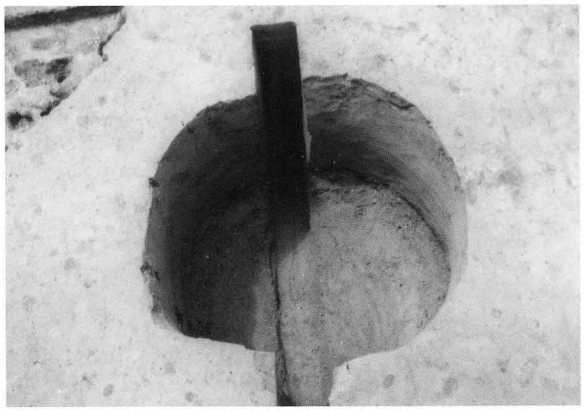
陥し穴状遺構26　断面（東から）



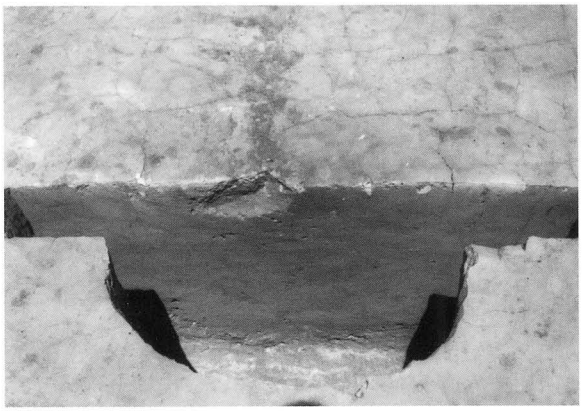
陥し穴状遺構27（北から）



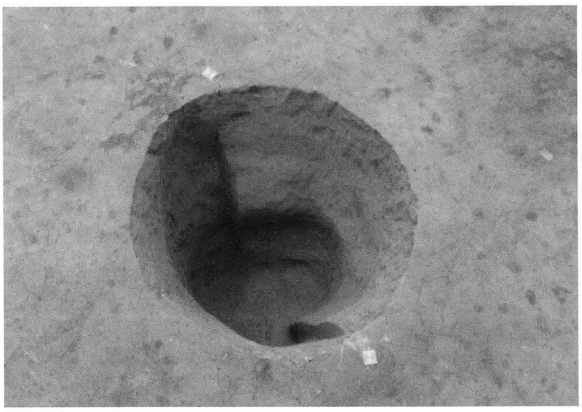
陥し穴状遺構27　断面（南から）



陥し穴状遺構28（東から）



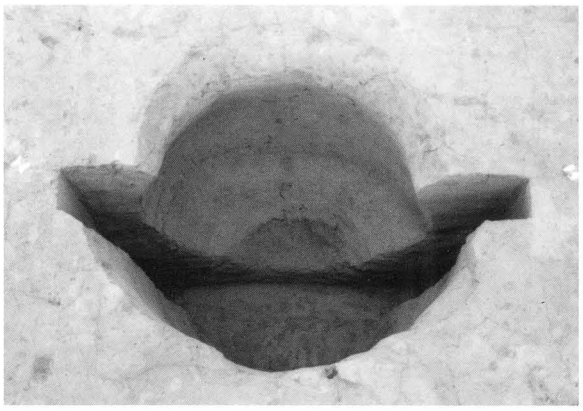
陥し穴状遺構28　断面（南から）



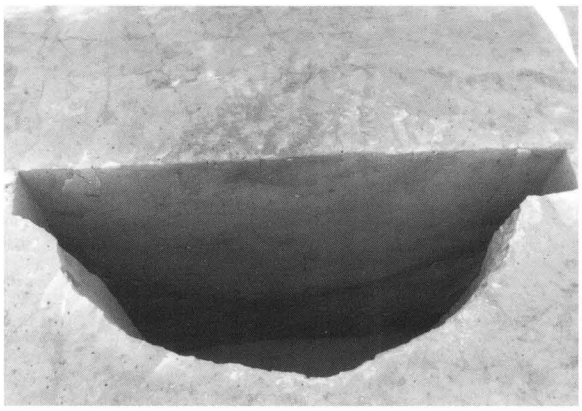
陥し穴状遺構29（東から）

陥し穴状遺構29　断面（南から）

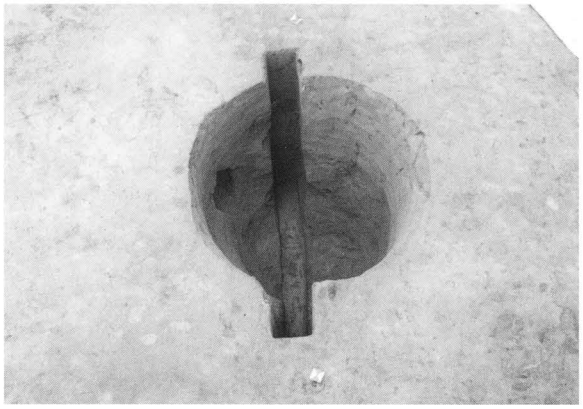
写真図版39　C区　陥し穴状遺構（８）



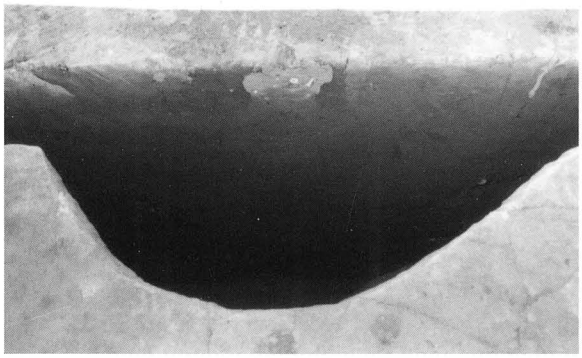
陥し穴状遺構30（東から）



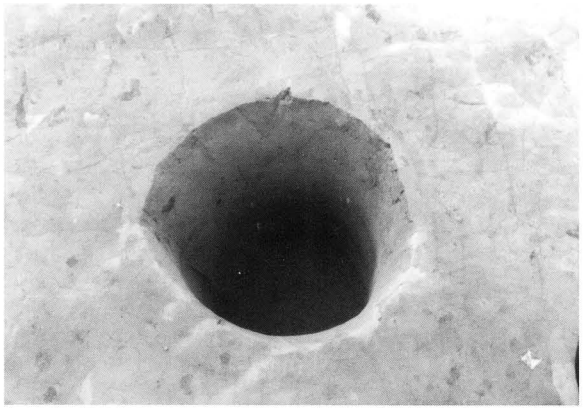
陥し穴状遺構30　断面（東から）



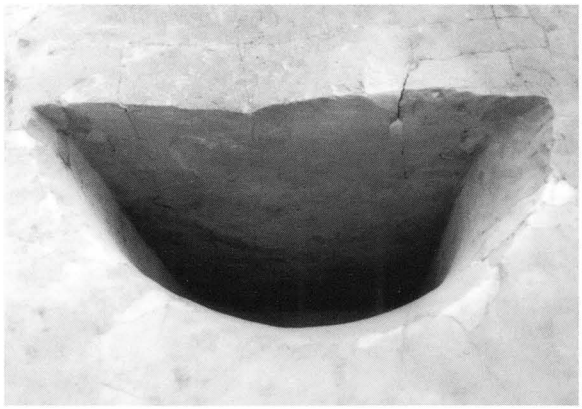
陥し穴状遺構31（東から）



陥し穴状遺構31　断面（南から）



陥し穴状遺構32（東から）



陥し穴状遺構32　断面（東から）

拡張区北側田面試掘状況

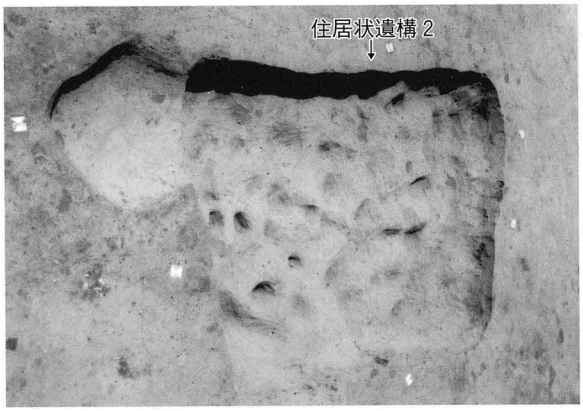
拡張区南側田面試掘状況

写真図版40　C区　陥し穴状遺構（9）

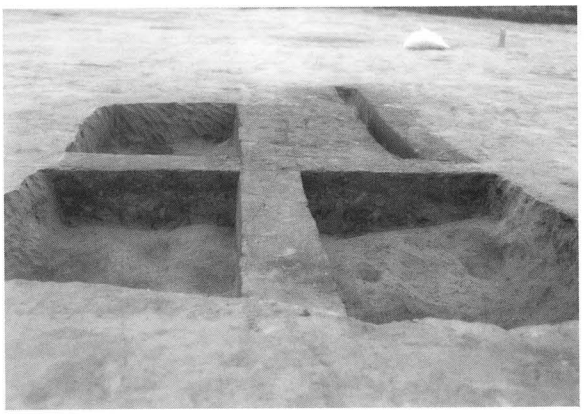
住居状遺構１（東から）

住居状遺構１　断面（北から）

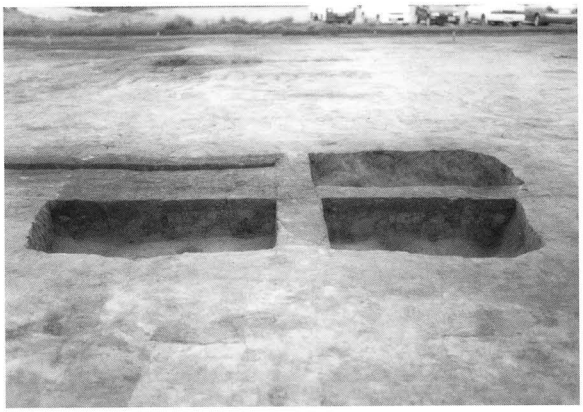
住居状遺構１　断面（東から）



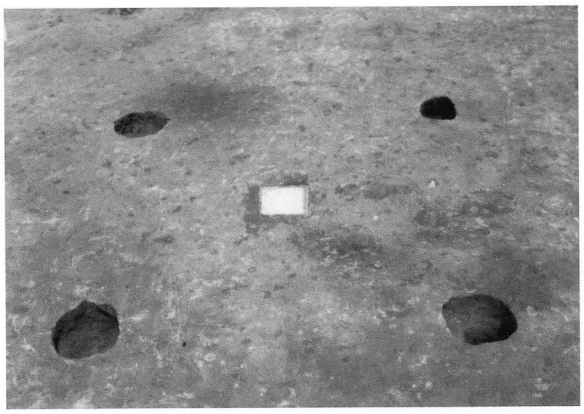
住居状遺構２（東から）



住居状遺構２　断面（北から）



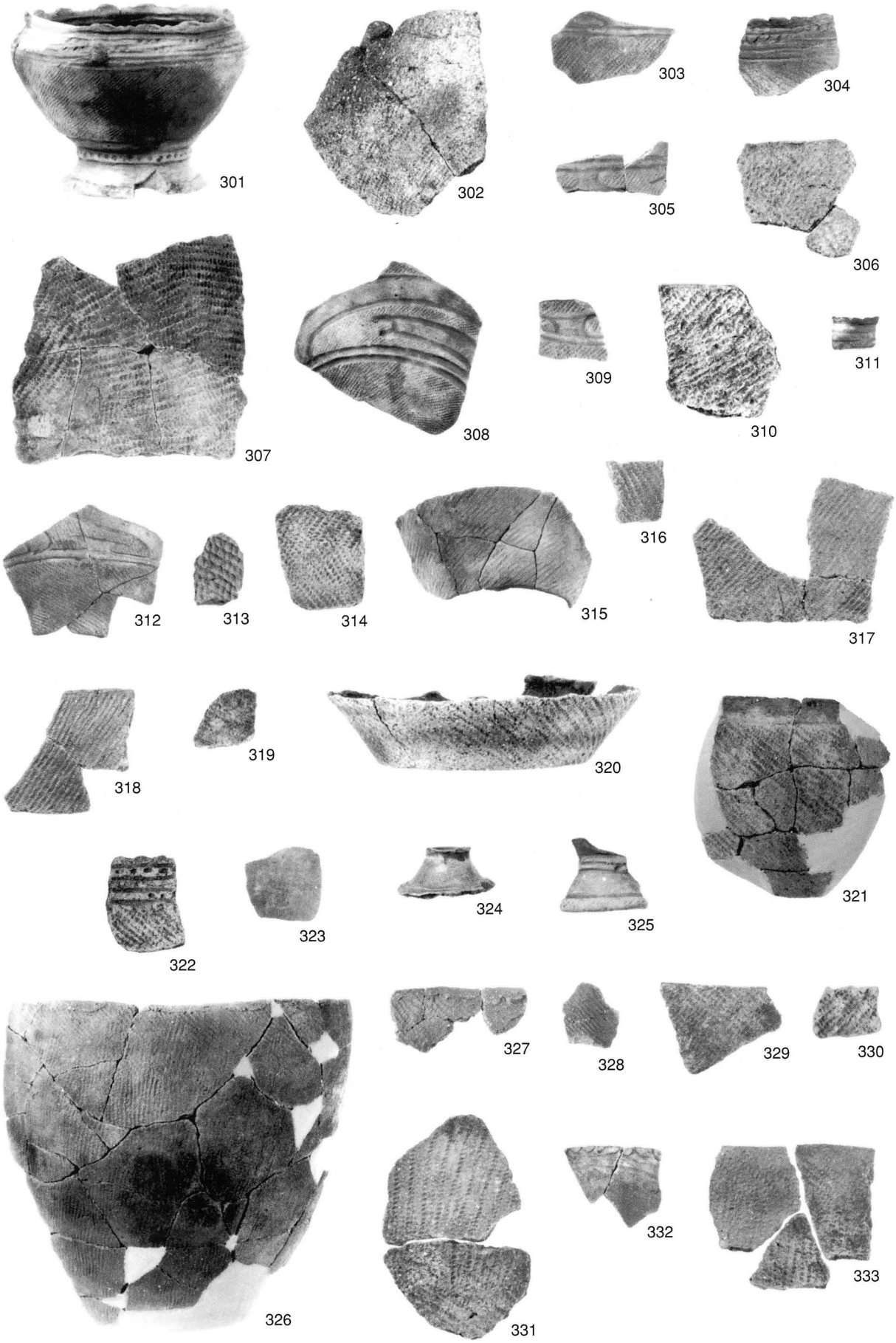
住居状遺構２　断面（東から）



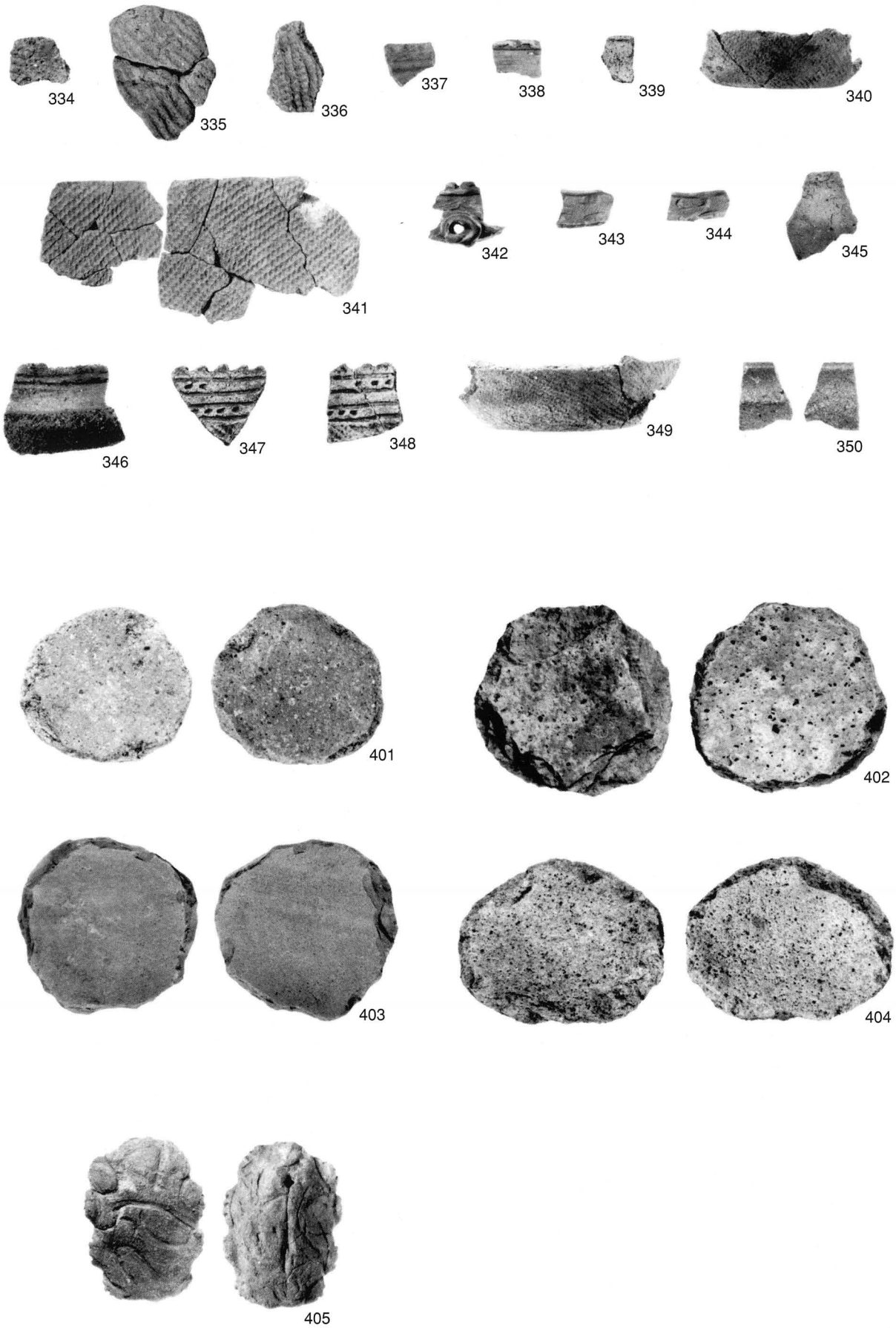
掘立柱建物跡（南から）

八重畑小学校校外学習の様子

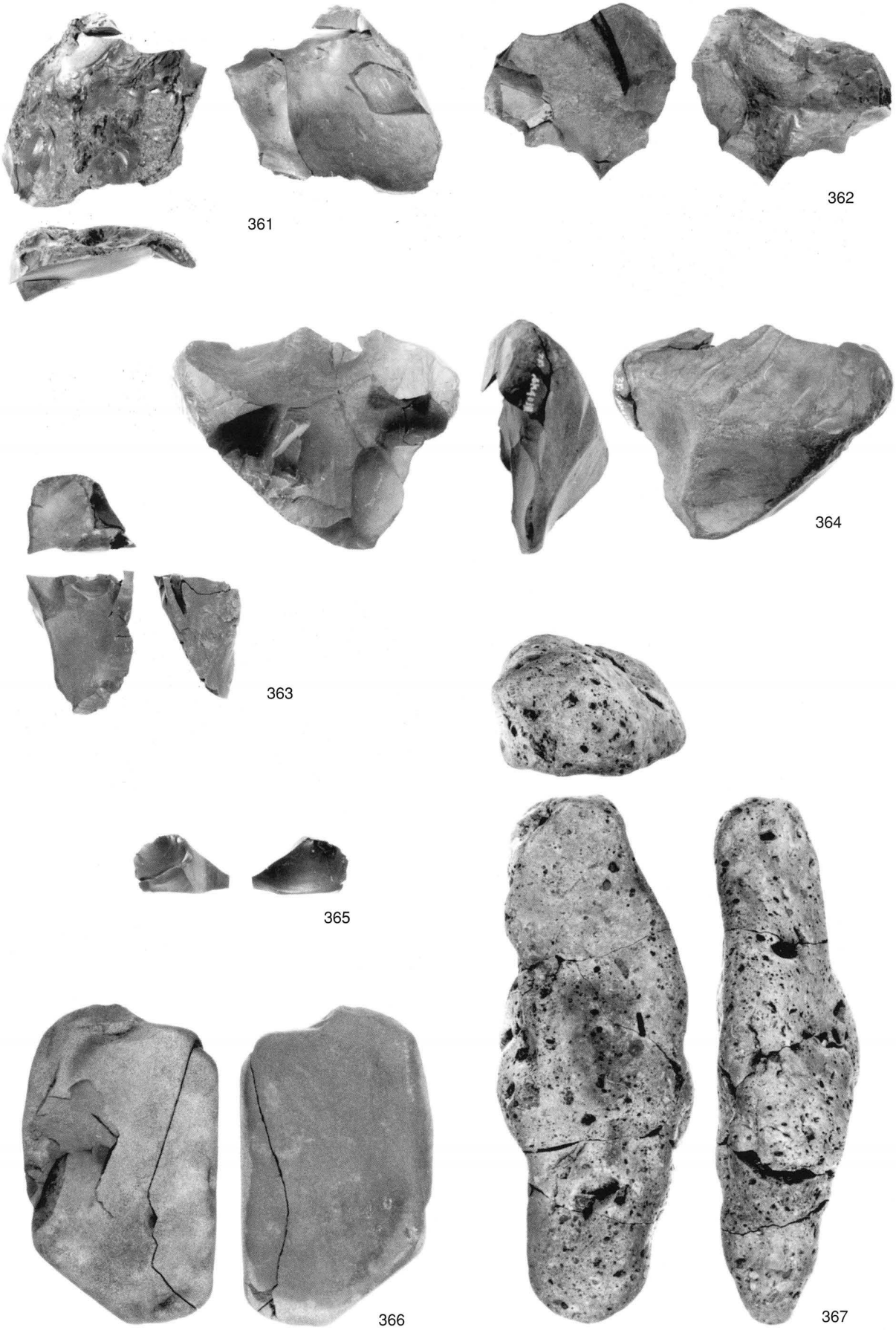
写真図版41　C区　その他の遺構



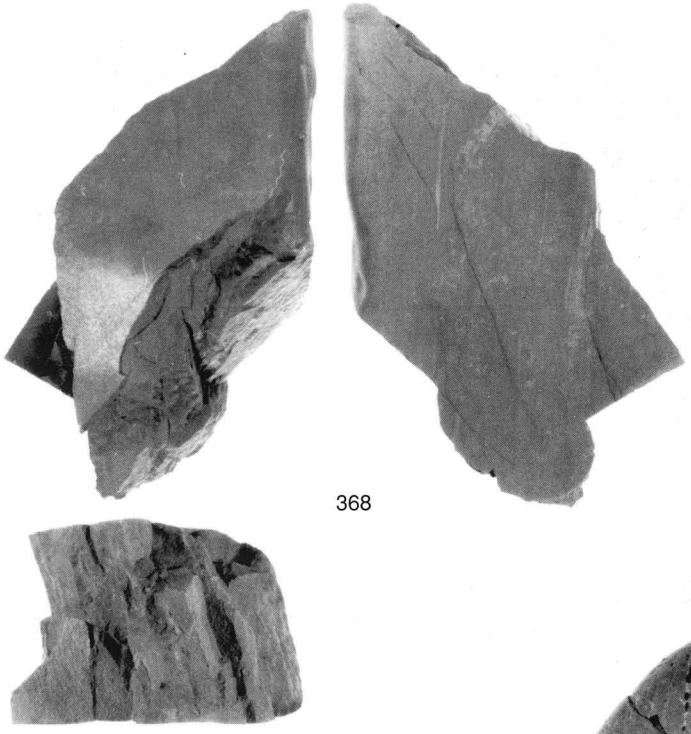
写真図版42　C区　出土土器（1）



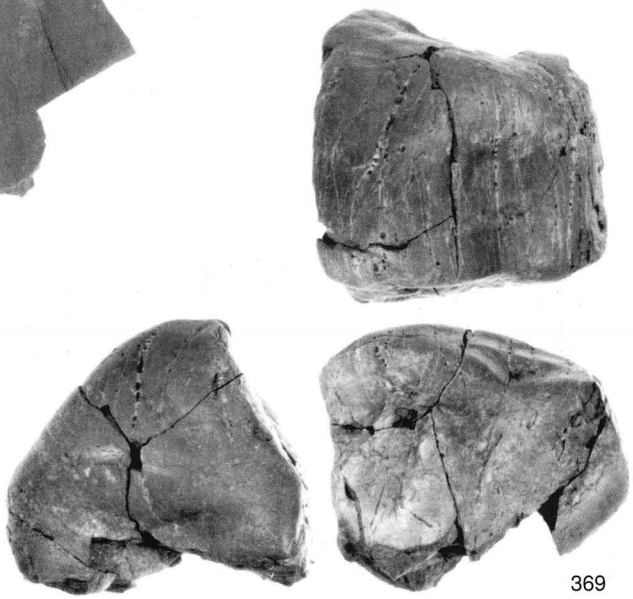
写真図版43　C区　出土土器（2）、石製品、土製品



写真図版44　C区　出土石器・礫（1）

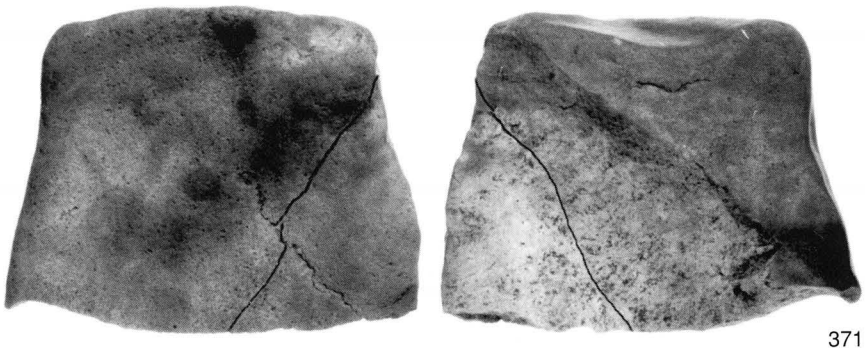


368



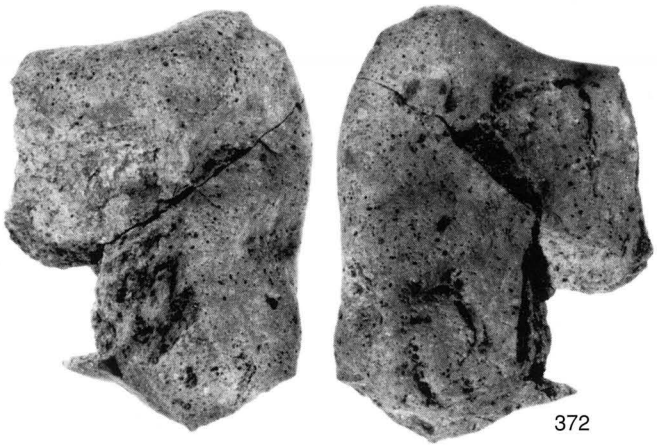
369

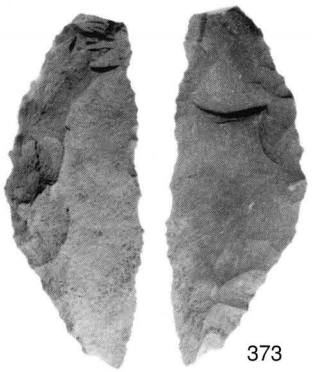
370

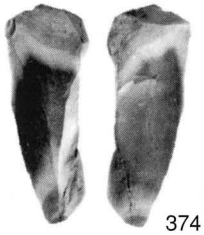


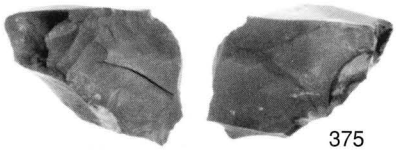
371

写真図版45　C区　出土石器・礫（2）

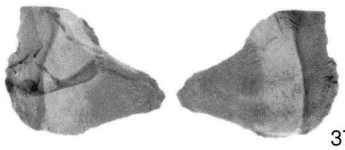

372


373


374

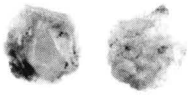

375

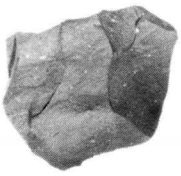
376

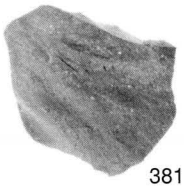

377

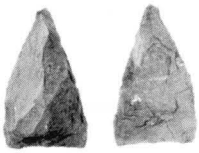
378

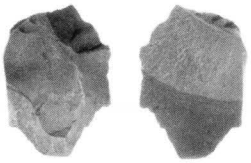
379

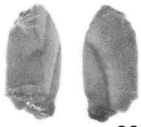

380

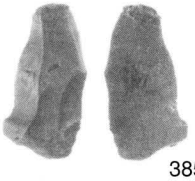


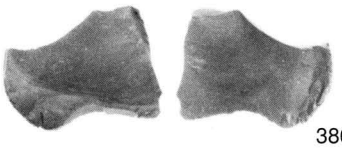

381

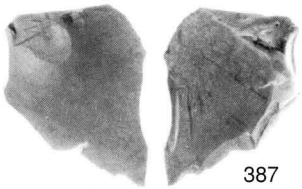

382

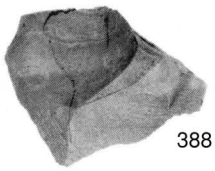

383

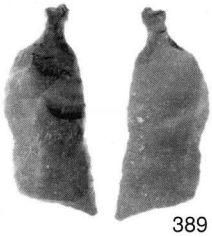

384


385


386


387


388


389

390

写真図版46　C区　出土石器・礫（3）

報告書抄録

ふりがな	おおにしいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大西遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業（八重畑地区）関連調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第479集
編著者名	戸根貴之 ・ 村上 拓
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL（019）638－9001
発行年月日	2006年２月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
大西遺跡（おおにしいせき）	岩手県（いわてけん） 稗貫郡（ひえぬきぐん） 石鳥谷町（いしどりやちょう） 字八重畑（あざやえはた） 15地割21-1 ほか	03342	ME06-2345	39度 26分 32秒	141度 09分 00秒	2004.04.09 ～ 2004.08.18	5,300㎡	経営体育成基盤整備事業（八重畑地区）に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大西遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡７棟 溝跡１条 方形周溝５基 土坑６基	土師器（坏・甕） 灰釉陶器（碗） 鉄製品（鈷、斧短刀など） 青磁小碗（越州窯系）	・竪穴住居跡に伴う鉄製品が多数出土している。 ・東濃窯産灰釉陶器碗が出土している。 ・越州窯系の小碗を表採している。
	遺物包含層	弥生時代		弥生土器（後期） 石器（鍬状石器、石鏃など）	・弥生時代から平安時代までの間に、洪水堆積による著しい地形変化が明瞭に確認される。
	集落跡・狩場跡	縄文時代（前～中、晩期）	土坑６基 陥し穴状遺構32基	縄文土器（晩期） 石器（石匙など） 円盤状石製品 亀形土製品	・縄文時代の陥し穴状遺構がまとまって確認されている。
		時期不明	土坑10基 住居状遺構２基 掘立柱建物跡１棟		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第479集

大西遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（八重畑地区）関連調査

印　刷　平成18年２月16日
発　行　平成18年２月22日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019)638－9001
ＦＡＸ　(019)638－8563

印　刷　株式会社　阿部印刷
〒020-0873　岩手県盛岡市松尾町2-2
電　話　(019)624－2242

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006